

I・S～迷い込んだイレ  
ギュラー～

S—MIST

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この作品は『インフィニット・ストラトス　く迷い込んだイレギュラーく』の作中でぼかされたえっちなシーンを書き出したものです。

そういうのに耐性が無い人は素直にブラウザバックをお願いします。

# 目次

第01話	東、初めての夜	1
第02話	東の休日前夜	12
第03話	東、南の島で	22
第04話	楯無の初めて	33
第05話	楯無とアリーナで	44
第06話	東と楯無と3人で……	58
第07話	シャルロットの初めて	73
第08話	簪のおねだり	86
第09話	調教される更識姉妹	100
第10話	メモメモにされちやった東さ	100

第11話	貴族の主従はエロかった(第108話時点)	116
第12話	カロード、1人目	130
第13話	カロード、2人目	147
第14話	カロード、3人目	165
第15話	とある日の雌犬ども	186
第16話	更識家当主(仮)のお仕事(第153話以降)	213
第17話	本音の初めて(第153話以降)	237
第18話	ラウラの初めて(第155話以降)	253
		270

第19話	義兄と義妹“達”	(第156話以降)	285
第20話	薙原晶の性活	(第171話以降)	304
第21話	義兄と義妹“達”	その2	325
(番外編第09話以降)			
第22話	悪の女幹部を躰けちやおう!!		351
第23話	薙原晶の性活	その2 (第192話以降)	374
第24話	悪の女幹部を躰けちやおう!!		396
その2			

## 第01話 東、初めての夜

彼との初めて？

言つても良いけど、誰にも言つたらダメだよ。

流石にちよつと恥ずかしい話だから。

そうだね。私の初めては――。

「いや、私はね、いっくんに嘘をつこうとした事に怒ってるんじゃないよ？ ただ、その理由を知りたいなあゝつて。ホラ、私つて科学者だから知りたがり屋さんなんだ。私の知的好奇心、満たしてくれるよね？」

あの時私東は、リビングのソファで彼雄原にしな垂れるように寄りかかりながら、そんな事を言つた。

着ていたのは白くて薄いバスローブだけ。

その下には何も着ていなかった。

一枚脱げば、生まれたままの私になる。

後から思えば誘惑以外の何ものでも無いけど、あの時は全然そんな事……少し

は思っていたかもしれない。

ただ、気づけばあんな事をしていた。

どうしてだろうね？

これでも身持ちは固いと思っていたんだけど。

でも驚いたのが、その後の彼。

思っていたよりも、ずっと情熱的だった。

「んんっ!!」

いきなり唇を塞がれた。勿論、彼の唇で。

そして長い、長い口付けの間に、両腕で抱きしめられる。

「プハッ、な、薙原。どうし——んんっ」

途中、一度唇が離れたけど、またすぐに塞がれる。

普段の冷静な彼からは想像出来ないような、私を味わい尽くすような、情熱的なキス。

そうして彼は言ったの。

「これから、お前を抱く。嫌って言っても良い。抵抗しても良い。でも止めない。俺は、

お前が欲しい」

何とも元傭兵らしい、一方的な言葉だった。

でもあんなにストレートに求められるなんて、悪い気はしなかった。

だから、無言で頷いた。

すると彼の右手が私のお尻を、左手が胸を揉み始めた。優しく、ゆつくりと、それでいて力強く。

でも、敏感な部分には触れてこなかった。

男の人って、もつとこう……がつつくものだって聞いてたけど、彼は違うのかな？

何となくそんな考えが脳裏を過ぎった時、私はソファに押し倒され、バスローブの前が肌蹴させられた。

優しくない手付きだった。

彼の目に、私が映る。私の目に、彼が映る。

どこか、何かを抑えているように見えた。

そして彼の言葉。

「……抵抗、しないのか？」

これで気づいた。

『嫌って言っても良い。抵抗しても良い』『抵抗しないのか？』、どの言葉も、自分が悪役になる為の台詞。

後で私に、悪人に犯されただけという免罪符を用意する為の言葉。

心に火が灯った。

ふぎけるな。

私は誰にでも身体を許すような女じゃない。

私は私の意志で抱かれる。

だから、そんな免罪符なんて用意させてやらない。

逃げ道なんて用意させてやらない。

君は、私のものだ。

11機のISを前に、躊躇無く私を助けに来てくれた君は、誰にも渡さない。

私のものだ。

そう思った時、自然と身体が動いていた。

両脚で彼の腰を引き寄せ、更に首に腕を回し引き寄せ、唇を食る。

動物が自分のものにマーキングするように。

彼が私の男だと分かるように。

そうしたら私のアソコに、硬いモノが当たったわ。

ズボンの上からでも分かる位に、硬くて大きいモノが。

でも彼は、それをすぐに使おうとしなかった。

キスしたまま両手で胸を揉みしだいて、おつきくなつた先端を愛撫してきたの。



勿論、それだけじゃなかったわ。

一度身体を離れた彼は、私のアソコを、腰ががくがく震えちゃうくらいトロトロになるまで丹念に弄って、空いている片方の手は変わらず胸を、そしてもう片方の胸を赤ちゃんみたいに吸って舐めて甘噛みしてきたの。

気持ち良かったわ。

でもされてばかりっていうのも悪いから、彼のモノをズボンから出して、扱いてみたの。

こうすると男の人は喜ぶって、どこかのサイトで見た事があったから。

そしたらビクンビクンって動いて、凄く気持ち良さそうだったわ。

だからそのまま扱いてあげようと思ったんだけど、

「このままお前の手でも良いけど、やっぱり腔なかが良いな」

って言って、仰向けの私に脚を開かせたわ。

恥ずかしかったけど、不思議と抵抗感は無かったのよね。

そして彼の分身が入ってきたわ。

硬くて、熱くて、他の男なんて知らないけど、私の腔なかをゴリゴリ擦ってくる大きいものが。

「あっ……はああ……あっ……」

でも何故か痛みは無く、気持ち良かったわ。

初めては痛いつて聞いてたんだけど、彼が丹念に弄ってくれたお蔭かしら？  
膣内の彼を感じながら、思考の片隅でそんな事を思っていると、

「——っあん」

突然襲ってきた耐え難い快感に、自分のものとは思えないような、甘い声が漏れていた。

何、今のは？ 私の、声？

気づけば、彼の分身は全て私の膣なかに。

そして彼が僅かに腰を動かして、一番奥をノックする。

「っあん!!」

また、まただ。

声が抑えられない。

どうして？

恥ずかしくて、思わず口を押さえてしまう。

でも彼は、それを許してくれなかった。

「恥ずかしがらなくて良い。お前の感じてる声、存分に聞かせてくれ」

そう言われながら奥を突かれた私は、すぐに耐え切れなくなつて……. . . . .それどこ

ろか、この制御出来ない快感が怖くて、彼に抱きついてしまったわ。

両腕で首を抱え、両脚で腰を引き寄せて、ね。

そしたら密着した分もつと快感が強くなって、後は悪循環。いえ、この場合は良循環というべきかしら？

まあ、とにかくそのまま気持ち良くして貰ったんだけど、彼ったらその後酷いのよ。

イツて敏感になっている私の膣なかを、全然衰えてない硬くて熱いもので、ゴリゴリと擦り始めたの。

私が「敏感になってるから止めて」って言っても、止めてくれないの。

酷いでしょ？

休ませてくれても良いじゃない。

それどころかもつと硬くして、何度も何度も奥を突き上げるの。

幾らダメって言っても全然止めてくれなくて、敏感になってる乳首も弄んで。

仕舞いにはキスで唇を塞いで何も言わせてくれなくて。

私初めてだったんだからね。

なのに酷いと思わない？

もつと優しくしてくれても良かったと思うんだけど。

えっ？ 思わない？ 何で？

酷いと言いながら、口元がニヤけている？

そ、そんな事無いよ。

自慢なんて、これつつつっぽつつつちもしてないよ。

本当だからね？

それじゃつ、話を戻すね。

物凄く気持ち良くして貰って、何回イカされたか分からない位イカされた後、2人でシャワーを浴びに行つたの。

勿論、お姫様だつこで。

羨ましい？

ふふん、私の特権だよ。

そこで彼つたらね、今度は私を後ろから責めてきたの。

抱きしめられて、胸を揉まれながら、硬くて熱くて太くて反り返つたものが、ゆつくりと私の膣を掻き分けて入ってくるの。

でも彼つたら意地悪なのよ。

挿入するだけしておいて、

「今度は自分で動いてみて」

なんて言うのよ。

あんなに私をよがり狂わせて、何度も何度もイかせて、気持ち良さを教え込んだ後に、ちよつとしか動いてくれないの。

私がいかなない程度にしか小突いてくれないのよ。

酷いでしょう？

だからつい言っちゃったわ。「お願い。意地悪しないで」って。涙目で。

そしたら彼ね、何をしてきたと思う？

私のお尻を両手で掴んで動かないようにして、自分の分身で奥をグリグリって刺激してきたの。

もう、意識が飛んじやうくらい気持ち良かったわ。

しかもその後は大きなピストン運動。

抜ける直前まで引いた後に、奥まで一気に突き入れてくるの。

硬いのが膣をグリグリ擦って、また何度も何度もイかせられたわ。

でも、これだけじゃ終わらなかつたのよね。

彼つたら本当に絶倫なの。

終わつた後、疲れきって動けない私の身体を洗ってくれたんだけど………

彼つたら、私を膝の上に乗せて、その態勢でまた挿入してきたのよ。  
そんな状態で身体を洗われたらどうなると思う？

身体は疲れきってて動けないから、もうされるがまま。

彼が私の身体を洗っている間、ずっと敏感になつている腔なを、反り返つてる彼の分身で擦られ続けるの。

もう堪らなかつたわ。

勿論、良い意味でね。

で、最後はどうなつたのかと言うと……秘密つて言つたら怒る？

何、もつたいぶらずに教えろつて？

はいはい。今教えてあげるよ。

ん？ 勝ち誇つたような顔が気に食わない？

ふふん。知らないなあ。羨ましいと思うなら、早く良い相手を見つけるといいよ。最も、彼クラスになるとそうはいないと思うけどね。

いいから早くしろつて？ せっかちさんだなあ。まあいいや。最後だけどね、いつの間にか気を失っていた私が、次に目覚めたのは自室のベッドの中だったんだ。

勿論身体は綺麗に拭かれていたし、髪も痛まないように綺麗に纏められていた。

その辺りの気遣いは嬉しかったな。大事にされてるっていう感じがして。

でも何より嬉しかったのが、私を抱き抱えるようにして、彼が隣で眠っていた事だね。全身で「お前は俺の女だ」って自己主張されてる感じが、凄く良かった。

とまあ、彼との初めてはこんな感じ。

羨ましい？　ねえ、ちーちゃん羨ましい？

ガンツ!!

いったあああああ。ちーちゃんゲンコツは痛いよ。

何、東のクセに生意気だつて？

そんな風に言うつて事は、羨ましいんだね。

でもあげない。

だからちーちゃん。彼に手を出したら、ダメだよ。

## 第02話 束の休日前夜

最近、私は金曜日束の夜が待ち遠しくて仕方がなかった。

理由？ 決まってるじゃない。普段は寮にいる彼が帰ってくるから。

そしてたっぷり愛してくれるから。

今だって、何回時計を見たか分からない。

もうそろそろ帰ってくる頃なんだけど……もしかして、あの泥棒猫に捕まったのかしら？

彼つてドライなように見えて人が良いから、物理的な被害を被らない限りは、あんな女の言う事でも聞いてあげちやうのよね。

全く、使われている分際で身の程を弁えなさい。

今度どうでも良くて、それでいて面倒な仕事でも押し付けてあげようかしら。

普段以上に黒い思考でそんな事を考えていると、自宅のセンサーが、敷地内に入った彼を捉えた。

やっとな帰ってきた。



遅い!! 私を待たせるなんてどういふつもりなの?

そう言つて困らせてあげようと思つて玄関まで出迎えたけど、口から出てきたのは違  
う言葉だったわ。

「お帰り。待つてたよ、晶」

「ただいま、待たせて悪かつたな」

まあ、本人がこう言つてるなら許してあげる。

「何か変わった事はあつた?」

「いや、生徒会の仕事を少し手伝つたくらいで特には」

あの泥棒猫!!

よりにもよつて金曜日に手伝わせるなんて、狙つたとしか思えないわね。

「ふうくん。そうなんだ。あの女の手伝いをしてたんだ」

ダメと分かつていても、機嫌が悪くなるのを止められない。

「そう怒らないでくれ。必要だつたんだよ」

「どうだか。どうせデレデレ鼻の下伸ばしてたから、こんな時間になつたんでしょ」

私は、怒つてますと言わんばかりに胸の下で腕を組んで、顔を背けた。

すると、ちよつと困つたような声。

「そんなに怒らないでくれ、俺だつて早く帰つて来たかつたんだ」

「本当?」

チラリと横目で様子を伺うと、彼はスツと近付いてきて、私を抱き寄せた。

「勿論。早くお前を抱きたくて仕方が無かった」

相変わらずストレートな求め方。

でも、それが良い。

欲しいなら欲しいと言ってくれた方が、私も良い。

そのまま唇を塞がれ、両手が身体を優しく撫で回していく。

お尻も、胸も、全部。服も肌蹴られていく。

ボタンが1つ1つ外され、ブラのホックも外され、スカートも下ろされ、サイドストツ

パアのショーツも外されて。

「は、恥ずかしいよ」

私と彼以外には誰もいない家だけど、それでもやつぱり玄関で、大事なところを隠す物が全部外されるっていうのは恥ずかしい。

思わず、下と胸を手で隠してしまう。

だけど彼は、そんな事すら許してくれない。

両手を掴んで広げさせて、おつきくなったアレを、お腹に押し当ててくるの。

私をこれからよがり狂わせる、硬くて、おつきくて、熱くて、振り返った男根を。

「あああ……もうおつききくなってるの？ そんなに私の膣なかに入りたいの？」

「ああ、すぐにでも入れたい」

「でもダメ。今日は先に……先に、お口でしてあげる」

凄く恥ずかしかったけど、言っちゃったわ。

本当はすぐにも入れて欲しかったけど、一度挿入されちゃったら後はもう彼のペー  
スだから、その前に何かしてあげたいと思ったの。

「へえ？ じゃあ頼むよ」

「は、初めてなんだから、あんまり期待しないでよね」

「無理だな。お前がしてくれるっていうだけで、もうはち切れそうだよ」

しゃがんだ私の前に、彼の反り返った男根が突き出される。

やつぱり、おつきい。これが膣に入って、私を狂わせるのね。

そう思いながら恐る恐る手で触ると、ピクンって動いたわ。

続けて擦って、先っぽをチロチロ舐めてあげると、凄い気持ち良さそうな顔してた。

だから思い切って啜くわえて、口全体で、アイスをしやぶるみたいにしてみたの。

「ああ、良いよ東。最高だ」

喜んでくれるのが嬉しくて、ピクンピクンしてる男根を、いつの間にか夢中になつて  
しゃぶってたわ。

「つ、一回目、このまま口で良いか?」

答える代わりに、唾くわえていたものを丁寧に舐めてあげたの。

そうしたら、口の中に熱くてネバネバしたものが沢山出てきたけど、全部飲んじやつた。

不思議と、嫌な感じはしなかったのよね。

むしろ嬉しかったくらい。

だつて彼、すつごい気持ち良さそうな顔してるんだもん。

このまま二回目もって思ったら、「今度は俺の番だ」つて言つて私を立たせたの。

そして気持ち良いお豆を舐めて、吸つて、膣に指を入れて擦つてきたわ。

「つあん、あ、んんつ、ダ、ダメ」

「本当に?」

意地悪な彼は膣を指で弄りながら、そんな事を聞いてくる。

私のアソコが、もうトロトロ口になつて知つて知つてクセに。

貴方が欲しくてヒクヒクしてるって知つてクセに。

だから、

「ヤダ、指じゃやなの。貴方の、おっきいのでして欲しいの」

正直に言つちやつたわ。

そしたら彼、私を壁に寄りかからせて、片足を持ち上げながらズブズブって入れてきたの。

硬くて、熱くて、逞しいものを、ゆっくりと馴染ませるように、一番奥まで。

後は、膣全体をゴリゴリ擦るように大きなピストン。

「んっ、はあああ、アンツ、イイ、イイのっ!!」

子宮の入り口をノックされる度に、快感が身体中を駆け抜けていく。

余りにも気持ち良過ぎて、怖くなって抱きついたら、しっかりと抱き返してくれた。

そのおかげで密着が強くなって、もっと気持ち良いの。

お互い何も言わず唇を貪って、ゴリゴリ膣を擦られて、奥を何度もノックされて、あっという間にイカされちゃったわ。

でも、

「あっ・・・凄い。晶の、二気なまま」

膣内に、反り返ったままのものがあるの。

それで、休まず突いてくるの。

「あんっ、あっ、まっ、待つて・・・待つて、んんっ、はあ、アンツ、続きはベッドで、ね」

突き上げられる快感に悶えながら、何とかそう言うとき、挿入したまま私を抱き抱え

たわ。

どこかのWebサイトで見た、駅弁スタイルっていう体位で。

「分かった。じゃあ一緒に行こうか」

「んっ、アンツ!! ま、待って、このたい、アンっ!! ふ、深い、深い、アンツ、ンンツ、あんっ」

逞しい男根が歩く度に膣内をゴリゴリって擦って、子宮の入り口を乱暴にノックするの。

何回も、何回も。

おかげで寝室に行くまでに、もう2回くらいイカされちゃったわ。

そして優しくベッドに下ろされた後は、正常位で。

でも酷いのよ。

また奥まで突いて気持ち良くしてくれると思ったら、今度は浅い所を擦るだけ。我慢なんて出来なかったわ。

だから、おねだりしちゃった。

「やあ、突いて、奥までついて、ねえっ、お願い、意地悪しないで」

そう言いながら抱きついて、両脚で彼の腰を引き寄せたの。

そしたら突き入れた男根で、今度は子宮の入り口をグリグリしてくれたの。

こう、腰で円を描くように。

「あつ、イイ、ソレ、イイの!!」

どンドン押し上げられていくのが、すぐに分かったわ。

そして絶頂させられた後は、間髪入れず大きなピストン。

もうずっと挿入されっぱなしのアソコは、ちよつと動かれただけでもイツちやうくらしい敏感なのに、狙い済ましたかのように大きく動くの。堪らなかつたわ。

しかも突かれながらオツパイ揉まれて、乳首は指でコリコリされて、吸われて甘噛されて。たっぷり情熱的なキスまでされて。

身体中、どこも気持ち良いの。

そしてまた何度も何度も気持ち良くしてくれた後に彼、「上になって動いてみてくれないか」って言つて、膣に入っている男根を引き抜いたの。そして、ベッドで大の字になつたのよ。

目の前に私をよがらせていたものが、天井に向かってそそり立っていたわ。

「なあ東。頼むよ」

気付けば彼を跨いで、膣なかに導いていたわ。

ズブ、ズブズブって大きいのが入ってくるの。膣をゴリゴリ擦りながら入ってくるの。

しかも凄い奥まで。

「っあん、ああ………いい、深い、深いわ」

「ならばは、自分で動いてごらん。気持ち良いところに当たるように、動かしてみるんだ」

言われたとおりにしたら、凄く良かった。硬いのがずっと、気持ち良いところに当たってるの。

止められなかった。止めようっていう気すら起きなかった。

気付けばもう、自分で腰を振ってたわ。

「ああ、良いよ束。そらっ!!」

そうして時々くる突き上げが、また堪らないの。

「アンツ、イイ、いいよ。しよう。もっと、もっとして」

すると彼は両手で私の腰を掴んで、突き上げてきたわ。

そしたら凄いの。

今までも奥に届いていたけど、もっと強く奥が刺激されて、すっごい気持ち良いの。クセになりそうなくらい。

「しよう、しようお」

いつの間にか、私は名前を呼びながら抱きついてたわ。



「イク、いつちやう。いつちやうの。しょうも、しょうも、いつしよに、一緒にが良い」  
「ああ、お前の可愛い顔を見せてくれ」

ずるい。こんな時に、耳元でそんな事を囁くなんて。

不意にかけられた言葉に、胸が熱くなってしまう。

そうして一際強く男根を突き入れられて、奥に熱いものを感じた瞬間、私の意識は  
真っ白になっていったわ。

## 第03話 東、南の島で

どこまでも続く雲一つ無い青い空。

見渡す限り誰もいない白い砂浜。

穏やかで、水晶のように透き通った海。

ある日の休日。

晶と東はこっそりとIS学園を脱出し、南の無人島に来ていた。

目的は勿論デート。

ここなら、誰の邪魔も入らない。

「こ、この水着。どうかかな？」

着替えてくるから少し待ってて。

そう言われて待っていた晶の前に戻ってきた東の姿は、男なら興奮せずにはいられないほど魅力的な姿だった。

スラリとした手足。豊満な胸。腰からお尻にかけての、芸術的なくびれたライン。

そんな見事な肢体を包む紫色のビキニ。

「勿論似合ってるさ。これで似合わないなんていう奴がいたら、そいつは男じゃない」  
「あ、ありがとう。でも、他に言う人なんていないよ。君以外に見せるつもりなんて無いんだから」

「良かった。俺だけが独占出来るんだな」

「そうだよ。嬉しい?」

答える代わりに束を抱き寄せた晶は、そのまま唇を食るようにキスをしながら、両手で柔らかな尻を揉み始めた。

「んっ、もう、せっかちさんなんだから」

「仕方ないだろう。そんな姿見せられて我慢出来る訳ないじゃないか」

「ふふ、そんなに夢中になつてくれるなんて嬉しいな。でも今日は、まず私がしてあげる」

そう言つて束は既にガチガチになつている男根を海パンから取り出すと、しゃがみ込んで先端をチロチロと舐め始め、手で優しく擦りながら肉竿に舌を這わせ、そして口に含んでフェエラを始めた。

口全体を使つて吸つて舐めて、  
「あの“篠ノ之束とは思えないほど甲斐甲斐しい奉仕。」

「きもひいいい?」(気持ち良い?)

更に口に含んだまま、上目遣いでそんな事をまで聞いてくる。

「勿論だ。最高だよ」

「今日の為にね、色々勉強したんだよ」

一度口を離れた束はうつとりとした淫らな笑みを浮かべ、今度はその豊満な胸で男根をシゴキながら亀頭の先端にキス。

そこから更に尿道口を吸って、男のものを刺激してくる。

「くっ!!」

晶の腰が、余りの気持ち良さに思わず引けてしまう

「嬉しいな。感じてくれてるんだね」

「当たり前じゃないか。でも俺も、お前を気持ち良くしたい」

「嬉しいけど、まだダメ。こんな凶悪な入れられたら、もうされるがままなんだもん」

「良いじゃないか。俺はお前の、エッチに喘いでいる顔が見たい」

晶はそう言う束を優しく押し倒して両脚を開かせ、股布を横にずらした。

そこは既に愛液で濡れていて、いつでも男のものを受け入れられるようになっていた。

「随分エッチになったな。触ってもいけないのに」

「誰のせいだと思ってるのさ。毎回毎回あんなにして。私を泣かせて」

「お前が可愛いからだよ。だから今も、こんなになつてる」

濡れた淫裂に硬く反り返つた男根が擦りつけられると、女の敏感な部分が刺激されてピクンと束の腰が跳ねた。

「あんつ、せつかちさん」

「そうだ、よ!!」

荒々しく突き入れられた肉棒が、肉壺を蹂躪し最奥の一番敏感な場所をノックする。

「んんつ、や、ばかあ。こんな、いきなり奥までなんて」

「だつてお前、ここをグリグリされるの好きだろう?」

そして亀頭が子宮の入り口に届いたところで、晶は腰を押し付けながら大きくゆつくりと回し始めた。

すると硬く太く反り返つた男根が膣全体を擦り上げ、最奥が執拗にグリグリと刺激される。

体の内側から送り込まれる快感に、束は思わずしがみ付いてしまう。

「や、それ、ダメ。あああああん。ダメ。ダメだつて」

「何がダメなのか、言つてくれないと分からないなあ」

ニヤニヤと笑いながら意地悪な問い。

束も本当ならやりかえしてやりたいところだったが、それをするには、膣に入つて

ものは凶悪に過ぎた。

遅しくカリ高なチ○ポに肉壺をゴリゴリと擦り上げられると、抵抗の意思は砂上の楼閣の如くあつという間に突き崩されてしまう。

そして女らしい優美な曲線を描く腰は、いつの間にか淫靡に、まるで「もつと、もつと」とおねだりするかのように、淫らにくねりはじめた。

「奥、おく、そんなにグリグリされたら、すぐにイっちゃう」

耳元で囁かれるそんな甘い声に、遅しい男根がビクツと震える。

「ああん」

それがGスポットを刺激し、淫らな声が漏れる。

晶は水着のトップスを捲り上げて豊満な胸を露出させると、勃起している乳首をこね回し吸い始め、更に淫裂を突き始めた。

「つああん。そんな、激し——あああんんん!! 晶って、ンンツ、アツ、赤ちやんみたい。ンツ、ンクツ、こんなに一生懸命吸って」

「赤ちやんにこんな真似は出来ないよ」

一度貪るようなキスをしてから、繋がったまま体位が変えられていく。

男根が膣内を万遍無く刺激し、東の足がガクガクと震える。

しかし晶はそんな女を軽々と支えて、今度はバックから突き始めた。

パンツパンツと力強く膺を貫かれる度に、束の表情が蕩け、淫らな顔となっていく。今ここにいるのは天才科学者ではなく、一匹の牝だった。

「イイ、いいよ。もっと、もっと」

淫らに腰を振り男を求め、後ろから犬のように犯されて征服されて。

男根をより深く啜え込もうと腰を振る。

そんな自分の女の姿に晶は、猛烈に高まっていた。

激しく腰を振り、思うがままに蹂躪していく。

「ああん、んっ、ねえ、私が一番？」

「当たり前だ」

「んっ、良かった。最近、最近みんな君の事狙ってるから——」

「お前がいつだって一番だよ」

束の心配に、晶は激しく腰を突き入れる事で答える。

「他の女を抱かないとは——あ、あ、激し、ああああん!! ダメ、ダメだよ。ず

るい」

そして彼女の独占欲を粉碎するほど激しく愛していく。

「そうだよ。俺はズルイんだよ。でも、一番はお前だ。だから捨てられないように頑張

るよ」

G スポットを男根で執拗に擦り上げ、突き刺し、東に反対の言葉を吐かせない。

更に硬さの衰えない男根を突き刺したまま、今度は自分の上に跨らせる。

騎乗位だ。

「あああん。深い」

「好きだろう？」

「うん。だつてこの体勢、頑張つて突いてくれる晶が見えるんだもん」

見る者を虜にするような艶やかな顔でそんな事を言われたら、男としてやる事なんて1つしかない。

晶は空いている両手で東の腰を固定し、腰を突き上げる。

東の大好きな場所を突き上げ、腰を回してグリグリ刺激して、思う存分彼女の思いに  
応える。

それ以外は考えられなかった。

「あんつ、イイ、いいよ。ふかいのイイの!!」

身体を支えられなくなった東の上半体が倒れ、豊かな胸が晶の胸板でムニツツと潰れ  
る。

淫らな眺めだった。

そのまま抱きしめ、唇を貪りながら突き入れられる男根が、東を何度でも容易く絶頂



に導いていく。

彼女の脳裏に、耐えようという考えは欠片も無かった。

肉壺を万遍無く擦りあげられる快感が、どうしようもなく気持ち良くて極々自然に、男の物が一番気持ち良い場所に当たるように腰を動かしていた。

「本当に束は良い女だな」

突かれながら耳元で囁かれる言葉に、束の顔が赤くなる。

「ソソツ、どう、どうしたの、急に」

「こんな可愛くて健気なのにエロくて尽くしてくれて、こんな良い女他にいないよ」

「うそ。泥棒猫にも同じ事言ってるんでしょ？」

「お前が良い女だから、俺のもこんなになってるんだよ」

「答えに——ああああん。あんっ!!」

晶が反論なんて許さないとばかりに強く腰を突き上げると、束の言葉は快楽に飲まれ嬌声に変わる。

「どうした？ 何か言いたい事があるんじゃないのか？」

そして今度は何度もイカされ敏感になった膣を、意図的に弱くゆつくりと肉棒でかき回す。

イきたくてもイけない程度の、自分から腰を振らずにはいられない意地悪い動き。

「こんな、あ、イイ。ズルイ。もっと、もっと動かして」

「何がズルイのかな？ こうやって奥をグリグリされるの好きだろう」

「スキ、スキだけど。もっと激しくが良いの!!」

だが晶は意地悪だ。

唇を合わせ舌を絡ませ互いの唾液を交換するようにして唇を塞ぎ、東に「お願い」の言葉を言わせない。

しかしそれでも敏感な肉壺を蹂躪する男根に、女は徐々に押し上げられていく。

「ンンツ!! ンンツツ——」

東の体がビクツツと震え、緩やかに絶頂へと押しやられた。

直後、女がイッてる最中に男は激しく腰を動かし始め、更なる快感を叩き込んでいく。

「あつ、アツそんな、わたし、イッてる最中」

「何回だってイかせてやるよ。お前は俺の女だ。誰にも渡さない」

耳元でのそんな囁きに、東の膣がキュツと締まる。

「うん。私は晶のだよ。だから、もっと、もっととして!!」

「ああ!!」

また繋がったまま体位を変え、今度は正常位に。

すると女は両脚を使って男の腰を引き寄せ、男のものをもっと中に引き入れようとす

る。

「そんなに唾え込みたいなら、これはどうだ？」

晶は繋がったまま、束を抱き抱えて立ち上がった。

今度は駅弁スタイルだ。

「や、あああん!! ふ、深いの!! これ、おくに。ズポツて入ってる」

「気に入ってくれたかな？」

問うまでも無かった。

硬く反り返った男根が根元までずつぷりと女の淫裂に突き刺さり、軽く腰をゆるすだけで体がビクビクと震え肉壺がキョクキョクと締まる。

2人の胸の間でいやらしく潰れる豊乳の突起もはしたなく勃起して、男の胸にコリコリと当たっていた。

「うん。うん!! もうダメ。ダメなの!! さつきからビクビクしちやつて、イキツぱなしだ」

「いいじゃないか。お前のエロい姿。もっと見せてくれよ」

腰の動きが、徐々に早くなっていく。

「あ、アア、ンンツ、ンンンツ、壊れちやう。私のオマ○コ、壊れちやうよ」

「大丈夫だよ。ほらっ!!」

一際激しく男根が突き入れられ、子宮の入り口が乱暴にノックされる。そしてまたグリグリと入り口が苛められると、押し寄せる快感で東はもう何も言えなかつた。

こうして南国の無人島で2人は、時間を忘れて交わり続けるのだった――。

## 第04話 楯無の初めて

何とも過激な告白だった。

「俺は——」

楯無は人差し指をそつと晶の唇に当て、続く言葉を封じた。

「ストップ。貴方の答えは必要無いのよ。私がしたいからそうするの。いずれ私無しでは、いられなくしてあげるわ」

「……楽しみになっている。と言いたいところだが、待つのは好きじゃないんでな」

晶は楯無を抱き寄せて、その柔らかな尻を揉み始めた。

「え？ ちよつ、ちよつと、そんなに焦らないで」

「嫌だね。欲しいものはすぐに手に入れる主義だ」

楯無の言葉にも構う事なく手は動き、卑猥に撫で回していく。

「……ちよつ……止めなさい」

「どうして？ 嫌なら逃げればいいじゃないか？」

アダルトな黒のストッキングの上から丹念に柔尻を揉み解す手の片方が背中にまわ

り、更に強く抱きしめる。

そうして互いの顔が近付いたところで、晶は優しくソフトなキス。だが楯無の動きは固い。

「——怖いのか？」

「ち、違うわよ!!」

「大丈夫。すぐに良くしてあげるから」

「経験があるからって余裕ぶって」

「そうか？ お前に余裕が無いだけじゃないか？」

話している間も、晶の両手は止まらない。

ブラウスのボタンが外され、大人っぽいシースルーの黒いブラが露わになり、抵抗する間もなくフロントホックが外され、丰满な胸が露わになる。

そこで晶は楯無の背後に回り、両手でゆっくりとソフトに豊乳を揉み解していく。

だが一番敏感な頂には一切触れない。あくまで周囲をソフトに優しく揉み解すだけ。

そうして優しく胸を愛撫され、感覚が徐々に敏感になっていくと、楯無の中にもどかしさが募り始めた。

(……もうっ、何で先っぽを触らないのよ。こんなに、こんなに硬くなってるのに)

しかし言うのも恥ずかしい楯無は、切ない瞳で後ろの晶に振り返る。すると待つていたかのようにもう一度キスされ、同時に、両手で乳首がクリツと刺激される。

「ンンツ」

唇を塞がれていなければ、どんな声が出ていたか分からない。

ソフトなキスが徐々にディープなキスになり、楯無の口を犯していく。

更に何度も何度も乳首をクリクリと刺激され、その度に身体に走る快感が思考を乱す。

「ンツ、ンンツ、あ、あんっ、ダ、ダメ、そんなに、そんなにクリクリしないで」

送り込まれる快感に、そんな事を口走ってしまう楯無だったが、本心は全くの反対だった。

もっと、もっとして欲しい。もっとギユツとして欲しい。

晶はそれを適え胸を揉み、乳首をコリコリと転がしギユツとつねる。

だが、これだけで終わるはずが無い

いつの間にか右手がストッキングの上から優しく淫核のある辺りを撫で回し、コリコリしたものを見つけると、指先でカリカリと擦り始めた。

そんなもどかしい刺激に、楯無の腰が自然と動き始める。

もっと刺激が強くなるように、淫らにくねり始める。

すると晶の手がストッキングの中に入り、ショーツ一枚越しに愛撫を始めた。

「ああんっ!!」

少し強くなった刺激に腰がビクツと動く。

しかし晶は構わず愛撫を続け、更に、立てられた人差し指が薄布一枚ごと、淫壺に少しだけ押し入れられる。

「ンンッ、あつ、だ、ダメよ。そんな」

言葉だけの抵抗だった。手足から力が抜け、体が完全に男に寄りかかっていた。

指の動きは止まらない。入り口のところを丹念に、ショーツ越しに愛撫していく。

その姿が、生徒会長室のスタンドミラーに映る。酷く卑猥な姿だった。

後ろから抱きすくめられて胸を曝け出し、はしたなく勃起した乳首をコリコリと刺激され、ストッキングの中に入れられた手が、乙女の秘所をイヤらしく蹂躪している。

(.....私、なんてエッチな格好)

楯無は下腹部にキュンとした疼きを感じ、指を少しでも深くくわえ込もうと腰を動かす。

すると晶は、薄布をストッキングの中で器用に除けて、指を直接肉壺の中に。

「アッ、ダッ、ダメ、駄目」



「こんなに濡れてるのに?」

晶はわざとらしくクチャクチャと音をさせながら、肉壺の壁を擦りあげていく。漏れ出る愛液を自覚しながらも、楯無は強がった。

「そ、ンンツ、そんな事ない。ふつ、う。ふつうよ」

「そうか?」

「アツン!!」

淫核をギュツと抓られ、腰がいやらしくビクツと跳ねる楯無。

「これでも?」

「し、知らない」

「そうか。ならもつと強い刺激の方がいいかな」

「も、もつと?」

「そう。もつと」

耳元で囁いた晶は胸の愛撫をやめ、左手でズボンのチャックを降ろす。

出てきたのは硬く太く大きく反り返った男根。

それが男を誘う柔らかい尻に押し付けられる。

「これをお前の中に入れて、奥までしつかり突き刺して、感じてるって言わせてやるよ」

「わ、私が、そんな事いう訳——」

「本当に?」

「あやんつ!!」

膣の中にある指がいやらしく動いて敏感な肉壁を擦りあげられると、身体は楯無の意思を容易く裏切った。

言おうとした言葉は嬌声に変わり、まだ指で弄られているだけなのに、足がガクガクと震えてしまっている。

「本当に言わない? それとも、このままずっと指が良い?」

晶は意地悪だけど優しくなった。

イける程強くはしてくれないが、代わりに処女膜の前までを丹念に丹念に愛撫して肉壺をほぐし、気付けば黒いストッキングから愛液が流れ落ち、絨毯にシミを作っていた。

「どうする?」

答えが分かっているクセに問いかける、本当に意地悪な問い。

下腹部の疼きは強くなっていた。

お尻に押し付けられているこの男根で、疼いているところを突いてもらったらどれだけ気持ち良いだろうか?

そんな思考が楯無の脳裏を過ぎり、気付けば淫らな「お願い」をしていた。

「お願い、入れて。晶の逞しいので、私を「女」にしてちょうだい」

「お願いの仕方を良く分かつてるじゃないか」

満足気な表情を浮かべた晶は、愛液で黒光りする濡れたストッキングを破き、後ろから楯無の肉壺に挿入。

ゆつくりと肉壁を押し分け、処女膜を押し破り、誰も穢したことの無い部分に、硬く反り返った男の象徴が突き入れられる。

「ンツ、ンンツ、あああああつ、つはああンツ!!」

初めての挿入に、破瓜の血が一筋流れ落ちる。

しかし愛液が滴り落ちるまでほぐされた肉壺の感触に、楯無は痛みを感じるところか恍惚とした表情を浮かべていた。

そして鏡に映る自分の姿に、肉壺がキユンと締まる。

(私、なんてエッチな顔してるの)

立ったまま背後から貫かれ、他の男なんて知らないが、それでも太くて大きいと分かる男根が乙女の園に突き刺さっている。

「大丈夫か？」

耳元で囁かれる言葉が、この上なく気持ち良く感じる。

「大丈夫だから、動いて。突いて。晶の良い様に」

「お前、良い女だな」

男根がゆっくりとギリギリまで引き抜かれ、そしてまたゆっくりと入っていく。

肉壺を満遍なく刺激する大きなストローク。

「ンンッ、アツ、ハハアアア、ンッ!!」

鏡に映る自身の姿は、今まで最優秀と言われ続けてきた人間とは思えないほど淫らなものだった。

腰は男のものをくわえ込む為に淫らに動き、男根が突き入れられる度に、胸が男を誘うかのように揺れている。

娼婦そのものだった。

そんな事を思っていると、

「なあ楯無、もしかして鏡に映っている自分に欲情したのか?」

見抜かれた。

「そ、そんな事ないわ。私、ナルシストじゃ——」

「嘘つけ」

パンッ。

腰が大きく突き入れられて敏感な奥に男根が突き刺さり、与えられた快感が楯無の言葉を送る途中で遮らせた。

「さっきから鏡ばかり見てるじゃないか」

そう言うとき晶は、突き入れた男根を引き抜かず、むしろもつと押し込んで、楯無を繋がつたまま歩かせた。

行き先は勿論、鏡の前。

「え？　アツ、アツ、ちよつ、ンンツ　ちよつと？」

意図に気付いた楯無が抵抗するが、女性が一番敏感な部分に突き刺さった男根がそれを許さなかった。

ちよつと後ろから小突くだけで彼女の両脚からは力が抜け、完璧超人と言われる生徒会長が、男にされるがままで。

「ほら、これでもつと良く見えるだろう」

そうして晶は楯無に、壁に備え付けられている鏡に両手を付かせ、バックから容赦なく男根を突き入れた。

「アアツ!!」

「どうだ？　エロイ顔が良く見えるだろう？」

鏡に映る恍惚とした表情は、男なら誰でも奮い立ちそうなほど淫らかなものだった。

男根が突き入れられる度に揺れる豊かな胸は、後ろから揉みしだかれ、卑猥に形をかえている。

胸の頂と淫核を同時に愛撫され、男を受け入れた肉壺は、男根を愛おしそうにキュッ

キユツと締め付けている。

そうして与えられた快感は、楯無の理性をドロドロに溶かしていく。

「そんな、こと、アツ、アツ、ンンツ、」

「そんなこと、の次の言葉は？」

男根が肉壺を擦りあげる度に、「そんな事ない」という言葉が崩れ去っていく。

奥まで突き入れられる度に、「もつと」という言葉が湧き上がってくる。

そして初めて送り込まれる快感に翻弄されている楯無が、我慢なんて出来るはずが無かった。

「感じてるの。感じてるから、もつと突いて。晶のおつきいのもつと突いて!!」

「良い子だ!!」

男根に一際熱が籠り硬くなり、勢い良く何度も何度も女の園に突き入れられる。

「イイツ、イイの!!」

送り込まれる快感は、楯無をあつという間に押し上げられていった。

そうして程なく絶頂を迎えた彼女だったが、この男が一回で満足するはずもない。

その後休み時間終了ギリギリまで、楯無は何度も何度も犯され、絶頂へと導かれるのだった。



## 第05話 楯無とアリーナで

休日のIS学園アリーナハンガー。

そこで更識楯無は、ISスーツ姿で薙原晶に後から貫かれていた。

獣のように組み伏せられ、股布をずらされて、硬く太く反り返った男根で何度も何度も、淫らに濡れた女の園を蹂躪されている。

「しよう、だめ、ダメだつて。こんな、あつ、アンツ、こんなところで、んっ、ンン、なんて」

「でもお前の体は、こんなに喜んでるぞ」

最奥まで突き入れられた男根に子宮の入り口をグリグリとこね回されながら、ISスーツの下で自己主張する乳首を指先でクリクリと弄られる。

すると楯無の体はあつという間に腰砕けになり、男に蹂躪される無力な女に成り下がってしまった。

だがそれでも、僅かばかりに残っている羞恥心が拒絶の言葉を口にさせる。

「でも、でも、ンンツ、こんなところで、人に見られちゃう」



しかしそれが形だけの拒絶であることは、もう明らかだった。

顔はトロけ、弄られている乳首はピンピンに勃起し、腰は男の挿入に合わせて淫らに動いている。

「よく言うよ。機体調整を理由に俺を呼び出して、やってる最中から何かと体を摺り寄せてきたクセに」

「ぐ、ぐうぜ……………ンンツ…んよ」

「本当か？ 初めからこっちが目的だったんじゃないのか？」

晶は男根をゆつくりと、だが大きなストロークで徐々に深くまで突き入れ、最後は奥を細かく小突きながら問いかけた。

しかも意地悪く、決してイけない程度の強さで。

こんな動きに、既に腰砕けになっている女が耐えられるはずがない。

あっさりと楯無は本心を白状させられてしまった。

「だって、だってあの引きこもり（蘇）酷いんだもん。毎日毎日、貴方にどう可愛がってもらったか電話してくるのよ。私だって一緒に居たいのに、あの女」

こんな事を言われて高ぶらない男はいないだろう。

男根が更に硬くなる。

「アーンツ、今、ビクンて」

「じゃあ今日は一日中犯しぬいてやる。足腰が立たなくなるくらいまで、ずっと。お前が俺の女だって、体中に刻み付けてやる」

そうして激しく男根が突き動かされると、トロトロに溶けていた女の園は、全く抵抗出来なかった。

あつという間に押し上げられ、楯無の意識は真っ白になってしまう。

だが晶の動きは止まらない。

女の園に男根を突き刺したまま振り向かせると、今度は正常位でピストン開始。

浅いところも深いところも満遍なく擦り上げ、思う存分肉壺を蹂躪していく。

「や、あ、あつ、ダメツ、ダメツ、またイツちゃう、イツちゃうの」

一度押し上げられて敏感になった肉壺が、強化人間の硬く太く反り返った男根の攻撃に耐えられる訳がない。

楯無の腰が厭らしくガクガクと震え、しがみ付いた男の胸板で豊かな胸が押しつぶされる。

その姿は完璧超人とまで言われたIS学園生徒会長のものではなく、発情した一人の女雌でしかなかった。

更に晶は、耳元で囁く。

「膣内で、いいかな？」

「え？」

「お前の隅々にまで、俺をマーキングしたいんだ。いいだろ？」

腔内射精。

一瞬避妊という言葉が楯無の脳裏を過ぎるが、意地悪に厭らしく肉壺から送り込まれてくる快感が、そんな意識を塗りつぶしてしまった。

殆ど無意識に両足を動かし、挿入されている男根をより深くくわえ込もうと、男の腰を引き寄せる。

これでもう、外出しは出来ない。

「良い子だ。一番奥に、たっぷり出してやる」

そうして加速したピストンに女の園を激しく攻め立てられると、楯無は無意識のうちに、厭らしいおねだりの言葉を口にしてしまっていた。

「出して、私の奥に沢山出して、マーキングして。貴方の女だって刻んで」

「ああ。沢山刻んでやる。お前は俺のものだ」

耳元で囁かれる甘い言葉と、男根の力強い挿入。

刺激された女の本能が、肉壺をキュツと柔らかく締め上げ、男から精を搾り取ろうとする。

そうして一際強く男根が突き入れられると、大量の精が奥に放たれマーキングされて

いく。

「しよう。しようお」

だが終わった後も楯無は離れない。

恍惚とした表情でキスをせがみ、硬いままの男根を離すまいと、両足で腰を引き寄せたままだ

そんな姿に欲情した晶は、男根を肉壺に突き刺したまま、彼女を抱き抱えて立ち上がった。

いわゆる駅弁スタイルだ。

「え？ アツ、ンンツ、んああ、ど、どうし、たの？」

「言つたら。一日中犯しぬいてやるって」

精液と愛液でドロドロになった膣内で、男根が再び動かされ始める。

送り込まれる快感に、楯無は晶にしがみつく事しか出来なかった。

何せこのスタイルで女の体を支えているのは、肉壺に突き刺さった男根と男の両手のみ。

女は男に全てを任せて、抱きつく事しか出来ない。

「は、激しい。激しいよお」

「止めてなんかやらないからな。お前は俺のものだ」

迷いの無い力強い宣言に、女の本能が反応して子宮が疼く。

更にそこで、最奥まで挿入された男根で子宮の入り口をグリグリとこね回されれば、もう楯無の身体はメロメロだった。

「アツ、アツ、アツ、ダメ、またイッちやう。イッちやうの」

「いいよ。沢山イッていいんだよ。お前のトロけた顔を見せてくれ」

そんな事を言いながら、晶は近くにあったイスに座り、再び腰をピストンさせ始めた。すると楯無の表情は途端にトロけ、大量の精を腔内射精された快感で、今度は失神してしまう。

だが絶倫のこの男が、たった2回程程度の腔内射精で満足するはずもない。

男根は腔内で未だに、硬く太く反り返ったままだった。

(どうしようかな。このまま続けてもいいんだけど……………)

一瞬そんな事を思った晶は、ふと面白い事を思いついた。

それは――



―― I S 学園アリーナ：シャワールーム。

(……………あ、私、どうしたのかしら?)

失神した楯無は、下腹部の疼きと水の音で、徐々に意識を取り戻し始めていた。

(えっと、私は確かハンガーで——)

体中をまさぐられる気持ち良い感覚に身を任せながら、自分がどうなったかを思い出そうとする。

(私ったら、なんて恥ずかしい)

男に組み伏せられ、艶声をあげて腰を振り、抱きついて男のものを深くまでくわえ込み、恥ずかしい言葉でおねだりする。

冷静に思い出すと、あれが本当に自分なのかと疑いたくなるほどだ。

(でも……………気持ち良かったわ)

挿入された男根の感覚を思い出し、思わず赤面してしまう楯無。

硬く太く反り返った巨大なものが、膣内を丹念に擦り上げ、子宮の入り口をノックしてこねまわし、雄らしい力強いピストンで送り込まれた快感が、どうしようもなく女の本能を刺激する。

(そう、今お腹の中にあるような、こんな感じの……………え?)

その瞬間、楯無の意識は完全に覚醒した。

「しよ、晶!」

「お、気付いたか？」

「気付いたかじや、アツ、ンンツ、こ、こんなところで、ンアツ、なにを」

認識した自分の姿はひどく淫らかなものだった。

ISスーツは脱がされ、身を隠すものは何も無い。だけでなく、背面座位で挿入されたまま体を洗われているのだ。

「何って、お前の体を洗ってるんだ。大分汗をかいてたからな。綺麗にしてあげようと思ってる」

「じ、じぶんで、アアアツ、ンンツ、洗うからあ………」

「遠慮するなって」

十分に泡立てられたタオルが体の表面をなぞる度に、突き刺された男根が膣内で不規則に動き、女の部分を攻撃してくる。

しかも時々、ズンツと下から突き上げてくる。だが、イけるほど連続では突き上げてくれない。

「しよう、いじわる」

「何がかな？」

そ知らぬ顔で洗い続ける晶だが、その手は厭らしく動いていた。

片手で胸の頂をクリクリと丹念に弄びながら、ピンピンに勃起したクリ○リスをタオ

ルで洗う。

「ひあ、あつ、あつ、ダメ、また」

耐える間も、耐えようという意志もなく押し上げられていく楯無。

しかし晶は意地悪だった。

絶頂の一步手前まで追い込んで動きを止め、おあずけにして女を遊ぶ。

たまらず、楯無はおねだりしていた。

「しよう。いじわるしないで。奥が疼いて、せつないの」

動きの止めた男根を、一番気持ち良いところに押し当てようと女の腰が動く。

それは女の本能を刺激された雌の動きそのもので、本職の娼婦にも劣らぬほど淫らなものだった。

「こんなにエッチになっちゃって」

耳元での囁きに、楯無は赤面しながら答えた。

「しょうが、悪いのよ。アツ、私に、ンンッ、ンアツ、こんな、気持ち良いコト、アアツ、教えるからあ」

「エッチな子は大好きだ。だから、もっと見せてくれよ」

晶は繋がったまま楯無を立たせ、壁に手を付かせた。

いわゆる立ちバックだ。



そうして本格的なピストンが始まった時、シャワールームに人が入ってきた。

「いや、疲れたよ。こんなに疲れたのは久しぶりかな」

「貴女は基礎訓練が足りないの。だから実機演習で赤点取るのよ」

「私本業は整備だよ。実機なんて動かし方が分かってれば十分だって」

「文句言わないの。何処で何が役立つか分からないんだから」

「はいはい」

足音と声からするに2人だろうか？

入り口近くのシャワーを使い始めたようで、奥にいる晶と楯無の位置からは、入ってきた人達の姿は見えない。

しかし、ちよつと大きい声を出せば簡単に聞こえてしまうだろう。

女の艶声となれば尚更だ。

そこでSつ気を出した晶は、大きくゆつくりとしたストロークで肉壺を攻め立て始めた。

振り向いた楯無の視線が「止めて」と訴えるが、聞いてやるつもりはない。

むしろ涙目で、快樂と羞恥心の板ばさみになっている表情は、男を大いに欲情させるものだった。

しかもここで、入って来た2人の話題に楯無が上がってきた。

「そういえばさあ。最近の会長って、随分エッチイよね」

「どうしたのよ急に」

「いや何となく。だつてさ、この前の身体測定の時の下着見た？」

「いえ、見てないけど」

「凄かったよ。黒いブラとショーツで半分以上シースルーで見えてるの。しかもショーツはサイドストッパーで、ストッキングはガードーベルト。食い込みを直す仕草なんて、女優顔負けの色っぽさだったよ」

「それはまた。やつぱり男かしら？」

「絶対そうだよ。1年の薙原君、よく生徒会長室に行ってるもん。しかもその時つて、生徒会メンバーも近寄らない事が多いみたいで」

「じゃあオフィスラブならぬ、スクールラブ？」

「多分ね。でもどんな風にしてるんだろう？ やつぱり会長がリードしてるのかな？」

「どうかしら？ それが本当なら、案外リードされてたりして」

「会長が？ ちょっと信じられないかなあ」

そんな会話を聞きながら晶は、男根をゆつくりと突き入れながら楯無の耳元で囁いた。

「今こんな風に犯されてるって知ったら、彼女達はどんな反応をするかな？」

「や、やめて……………」

言葉とは裏腹に楯無の子宮がキュンと疼き、少しでも深く男をくわえ込もうと腰が動く。

すると男根が気持ち良いところに当たり、思わず声が漏れてしまった。

しかし話に夢中の2人組みはそれに気付かない。

「そう？ 会長みたいな人って、案外惚れ込んだら一直線になって、『薙原様、御奉仕します』って言ってるかもよ」

「本当に言ったらエロ過ぎだよ」

「言わせる方も凄いやと思うけどね」

そうして2人は、暫く晶と楯無を話のネタにした後、シャワールームから出て行った。勿論この間、男根と肉壺は繋がったままだ。

しかも晶はひどい事に、イけない程度に時折、奥を小突いたりグリグリとこね回すのだ。

そうやって焦らされ続けた楯無は、もう限界だった。

はしたなくお願いの言葉を口にしてしまう。

「しようお。お願い。突いて、沢山ついて。奥が切なくて、気が狂いそうなの」

「ああ!!」

晶の腰が力強く打ち込まれた。

ゴリゴリと膣内が擦り上げられ、何度も奥をノックされ、女の部分が攻め立てられる。もう楯無は、気持ち良くなる事しか考えていなかった。

突き入れられる男根が一番気持ち良いところにくるように、無意識に腰を動かし男を誘う。

そして誘われた男は更に激しく女を攻め立て、何度も絶頂へと導いた後、肉壺から男根を引き抜いた。

「アツ、ああお……………」

入っていた巨大なものの喪失感に、女の本能が寂しさを覚える。

だがそれよりも楯無は、未だ衰えを見せない男の象徴に見入ってしまった。

（ああ、まだあんなに硬そう。これが、私を狂わせたのね）

誰に教えられた訳でもなかった。

ただ自分を狂わせたそれが愛しくて、気付けば手を伸ばし、口に含んで奉仕していた。「ソツ、ちゅ、まだ、こんなに硬い」

拙い舌使いだったが、そんなのは関係無かった。

女が男のものを愛おしそうに舐めて、しゃぶって、奉仕してくれているのだ。これで高ぶらない男はいないだろう。

なので晶はそのまましやぶらせて精を飲んでもらった後、再び膣内に男根を挿入。先  
の言葉通り、1日中楯無を可愛自慢がったのだった——そして、その夜のこと。

この日の電話が、一方的な暴露話で終わるはずなど無かった。

あんな事やこんな事が赤裸々に語られ、程なくしてどっちのフェラが上手いだの、パイ  
ズリが上手いだの、締り良いだのという話にまでなり、気付けば3Pコースへ突入してい  
たのでした……………。

## 第06話 束と楯無と3人で……

とある休日のとあるバスルーム。

そこで束と楯無は、ボディソープをつけた己の体をスポンジ代わりにして、イスに座る晶の体を洗っていた。

両側から、手で、胸で、腹で、自分を刻み付けるかのように厭らしく。

美女2人にこんな事をされて興奮しない男はいないだろう。男の男根は既に、血管が浮き出る程に硬く反り返っていた。

「興奮してくれてるんだね」

束が耳元で囁く。

「これが、私達をまた泣かせるのね」

反対側で楯無が囁く。

すると束が晶の後へまわり、丰满な胸を背中に押し付けて上下に動かし始めた。先端の硬くなった頂が、コリッコリッと男の背中で転がされる。

そして楯無が前へとまわり、反り返った男根を胸で挟んで扱き始めた。

「お前達」

「いいんだよ。晶はそのまま座ってて」

束の手が、後から男の胸板を厭らしく撫で回す。

「そうよ。今日は、私達が気持ち良くしてあげるんだから」

楯無が豊満な胸で男根を扱きながら上目遣いで言うのと、その可愛さに思わずドキツとなってしまう晶。だがそれに嫉妬した束が、男を振り向かせディープキス。互いの舌を舐めあい、唾液を交換していく。

すると楯無も負けじと、男根の先端を丹念に舐めて、キスして、小さくて可愛い口には大き過ぎるソレを、必死に頬張り男のものを愛撫していく。

「ず、随分、上手くなったな」

「当たり前じゃない。引きこもりになんか、負けないわよ」

そんな事を言いながら晶を攻める楯無だが、すぐに妨害が入った。

束が楯無の背後にまわり、無防備な女の弱点内に指を突っ込んだのだ。

「ンア!! こ、こら、引きこもりい……ンンッ、アンッ、な、何するのよお」

「なにつて? 分からない? 分を弁えない生意気な三番さんに、お仕置きしてあげるのさ。こんな風にね」

差し込まれた指が膣なか内でクチャクチャと動かされ、淫核がクリクリとこね回される。

「ンア!! ヤアツ、ダ、ダメ。止めなさいよ」

「やだね。止めてなんてあげない。それよりも1つ勝負をしようよ」

「しよ、勝負?」

「うん。私の攻めに耐えながら晶をイかせられたら、先に挿入させてあげる。どう?」

この時、送り込まれる快感と「東よりも先に」という餌が、楯無の判断を狂わせた。勝てるはずの無い勝負を受けてしまう。

「い、良いわよ。約束は護りなさいよ」

「勿論」

こうして楯無は膣内をかき回されながらも、男の象徴を胸と口で必死に愛撫していく。

だが男根は時折ビクンビクンと震えるだけで、一向に精液を吐き出さない。

その間にも膣内は弄り回され、淫らな快感が彼女を襲う。

でもこの程度なら……楯無がそう思った時だった。

「ふうん。泥棒猫がイイのはココなんだね」

「え?」

楯無の腰が本人の意思とは無関係に跳ね、口からは艶声が漏れ出てしまった。

東はニヤリと笑い、同性にしか分からない巧みさで、発見した弱点を丹念に擦りあげ



ていく。

「ひ、引き、こもりい。や、止めてよお」

如何に楯無とはいえ、無防備Gな女の弱点トを一方的に責められてはたまらない。

しかし反撃しようにも、晶が楯無の頭を抑えて、フェラとパイズリを止めさせてくれない。

「や〜だね。ほら、頑張らないと私にイカされちゃうよ？ お預けになっちゃうよ？  
いいのかなあ」

束がゆっくりと丹念にGスポットを擦りあげながら、淫核を唇で啄む。

その度に腰が、彼女の意思とは無関係に跳ねあがり、否応無く追い詰められていく。

「こ、このおおく、ん、ンンッ」

蕩けた顔の楯無が懸命に奉仕してくれる姿に、晶の男根が更に硬くなりビクンと震える。

ここぞとばかりに彼女はパイズリを止めて、喉奥まで男の物をくわえ込みディープスロート。口全体を使って男根を責め上げる。

すると束は無防備になった胸に手を伸ばし、女Gの弱点トと勃起した乳首を執拗に攻撃し、楯無を更に追い込んでいく。

(しよう、早くイってよお)

舐めて、吸って、擦って、上目遣いで懸命に男の物を愛撫する楯無。

対する男の表情は気持ち良くなっているものの、楯無の髪を優しく撫でる余裕すらあった。

「ねえどうしたの？ 泥棒猫楯無のテクニクじや、やっぱり無理だったのかな？」

クチャクチャと厭らしい音を響かせながら、東の指が肉壺楯無内を蹂躪していく。

だが彼女に楯無をイかせてやる気は無かった。晶が強いのは分かっているから、イく直前まで何度も追い込んで、長くじつくりと焦らしてやるのだ。そして晶がイきそうになったところでイかせてあげる。散々焦らされたところで『お預け』されたら、泥棒猫楯無はどんな顔をするだろうか？ 東はそれが楽しみで仕方が無かった。

「そ、そんな、ことおろ、ンンツ、あ、ある訳、アツ、アアン、ないじや、ない」

「ほらほら、だったら早くしないと。こっちはヒクヒクして、随分気持ち良さそうだよ。私の指でイっちゃうの？ いいの？ ここに入れてもらって、ズコズコして欲しいんでしょ？」

「そ、そうよ。アンタより先にしてもらって、ンンツ、私ので、虜に、アアンツ、しちやうんだから」

「愛人の分際で、生意気」

東は考えを改めて、さっさと泥棒猫楯無をイかせてやる事にした。

そしてこの女の前で繋がっているところを、自分にメロメロになっている所を見せ付けてやるのだ。

「頑張つてフェエラをする楯無に後から覆いかぶさり、乳首と淫核を、さつきよりも激しく、荒々しく刺激してやる。」

膣内に指を突っ込んでみれば、愛液がドロドロと流れ出し、ひくひくと小刻みに痙攣すらしていた。もう一押しだ。

「ほら、もうこんなになつてる。もう我慢なんて出来ないでしょう。」

「そ、そんなこ、ンンンンンツ、アアアアツツ!! イク、いっちゃやう、ダメ、ダメエエエ」  
幾ら我慢しようとしたところで、押し上げられた体の疼きはどうしようもない。

そして同性ゆえの的確な指使いでGスポットが撫で上げられると、もう無理だった。

楯無の腰がビクンと跳ね上がり、次いでシャツアアと潮を吹きながら、全身から力が抜け落ちていく。取り繕いようもないほど、完璧にイカされてしまったのだ。

「やだよ。賭けは私の勝ち。泥棒猫はお預けね」

束が楯無の膣内から指を引き抜くと、ビクンと腰が震える。

すると晶は床に胡坐をかくように座りなおしてから、束を引き寄せた。

そして腕の中に納まった彼女を背面座位の姿勢にし、既に濡れそぼっていた肉壺に硬く反り返った男根を突っ込んだ後、こう言ったのだ。

「なあ。俺さ、お前の乱れてる顔って見てみたいんだ」

「え？」

一瞬、束は意味が分からないといった表情をする。

しかし次の行動で、その意味を理解した。否、理解させられた。

晶は自分の太ももで器用に束の両脚を開かせ、更にガツチリと後から抱き抱える事で、両腕も拘束したのだ。

つまり楯無の目の前には、ピンピンに勃起した乳首と、男根が深々と突き刺さった女の園が、ノーガードで曝け出されている。

「しよ、晶!？」

「楯無、さっきやられた事を、やり返してみないか？」

束が幾ら逃れようとしても、基本的な身体スペックがまるで違う上に、小刻みなピストンで送り込まれる快感がそれを許さない。

「アツ、ンンツ、晶。ダメよ」

「どうして? こうして小突かれるだけでも気持ちイイのに、一緒に舐めたり吸ったり、擦ったりしてもらったら、もつと気持ちイイと思うぞ」

「い、イヤよ。するなら晶にして貰いたい。泥棒猫無になんてイヤ」

可愛い事を言いながらピイツと横を向く束に、晶は男根を奥まで押し込む事で答え

た。

そしてそのまま、子宮の入り口を先端でグリグリとこね回しながら、耳元で囁く。

「これよりも、もっと気持ち良くなるんだよ」

「それでも……………ンアツ!! ど、泥棒猫!!」

いつの間にか復活した楯無が、束の淫核を指先でクリクリと弄んでいた。

「引きこもりも往生際が悪いわねえ。そんな私に犯られるの、イヤ？」

「あ、当たり前じゃない」

すると楯無はニヤリと悪女のような笑みを浮かべながら、淫核をピンツと指で弾いた。

「ンアツ!!」

意図せず漏れる艶声。そして今度は、勃起した彼女の乳首をコリコリと転がしながら言った。

「ならさっきの仕返しもかねて、丁寧に苛めてあげないとねえ。良いんでしょ、晶？」

「ああ。束の乱れてる顔が、どうしても見たいんだ」

「晶。意地悪しないで……………」

「意地悪じゃないさ。ただ、お前に気持ち良くなつて欲しいだけだよ」

そうして今度は、男根を奥に押し込んだまま、ネットリと腰を動かす。

子宮の入り口をこね回すように丹念に、首筋にキスマークを付けながら。合わせて楯無は、束の淫核をクリクリと摘んで転がしながら、晶の陰囊に舌を這わせていく。

その快感にビクンと男根が震え、衝撃が束の子宮を揺らす。

「や、ダメ、こんなの、ダメエ」

同時に送り込まれる快感に、束がイヤイヤと顔を横に振る。

だがそんなものはポーズでしかなかった。

言葉とは裏腹に表情はトロけ、腰は少しずつ、男根が気持ちイイ位置にくるように、自分で動かしてしまっている。

すると晶は、言葉で束を苛めはじめた。

「あれ？ 腰が動いているよ？ イヤじゃなかったの？」

「そ、そんなことお、ない、ないもん」

言われてハツとなり、慌てて腰を止めようとする束だが、ネットリと厭らしく送り込まれる快感がそれを許してくれない。

もう何度も愛し合って、弱い場所なんてとつくに知られているのだ。

それに加え、楯無が執拗に淫核をこね回して、苛めてくる。

抗えるはずもなかった。

我慢出来たのはほんの数秒。一度荒々しくピストンされてしまえば、もう抗えなかつ

た。

腰が淫らに動き始め、快感を貪り始める。

「素直になつてくれて嬉しいよ」

耳元での囁きに、束は甘えるようなディープキスで答える。

舌を絡ませ、唾液を交換し、楯無に見せ付けるように。

(あんななんか、渡さないんだから)

だが楯無も黙つてはいなかった。

おもむろに立ち上がつて晶の傍らに動くと、彼を強引に振り向かせて唇を貪り、そして伝える。

「私も貴方の女なの。束ばっかりはイヤ。私も可愛がつて」

そしてもう一回唇を貪る。

すると晶は束から男根を引き抜き、2人を抱き合わせるようにして床に押し倒した。「2人一緒に朝までだ。イヤつて言つても犯つてやるからな」

既に一度押し上げられ、濡れそぼっていた楯無の肉壺に、男根が荒々しく突き入れられる。

入り口が卑猥な形に広がり、敏感になっている肉壁が激しいピストンで擦られると、楯無は再び押し上げられていく。

「しよう、しようおお。激しいよお」

「可愛がつて欲しいんだろう?」

意地悪な笑みを浮かべながら繰り返されるピストンに、肉壺がヒクヒクと痙攣していき。

そうして男根が奥まで突き入れられると、膣がキュツと絞まり、精液を貪ろうとする。だが男の射精は無く、楯無一人だけがイカされてしまった。そして彼女の四肢が脱力すると、今度は束の肉壺に男根が突き刺され、荒々しいピストンが始まる。

「私は、泥棒猫みたいに——」

簡単じゃない、とすら彼女は言えなかつた。

2人きりの時よりも激しくて情熱的な蹂躪が、続く言葉を言わせなかつたのだ。

「お前達みたいな美女に言い寄られて、普通になんて出来るか」

敏感な粘膜が擦られる度に、束の口から艶声が漏れ出る。

硬く反り返った男根が子宮の入り口を叩く度に、彼女の顔がトロけ、快楽を貪る女の顔になっていく。

そしてあつけなくイカされた束は、全く衰えていない男根に抜かすのピストンでさらに責められ、二度、三度と押し上げられていく。

「——ン、アアアアアア、アアアン、激しい。激しいよお」



「でもイイだろう?」

「うん。いいよ。いいの。もつと、もつとして、腔内なかに頂戴。晶の白いの、沢山ちようだ  
い」

女の懇願に、男根を奥まで突き入れた晶は腔内なか射精せしで答える。大量の精液が束の中に注がれるが、依然として男根は硬いままだ。

そして今度は、ようやく動き始めた楯無に挿入。

硬く反り返った男根を奥まで押し込み、子宮の入り口にくつつけながら体を動かし、自分の上に座らせる。所謂騎乗位だ。

「アアアアアアアアツツ!! イイ、いいのお」

余りの快感に彼女の腰がビクビクと震える。

だが晶は容赦無かった。

ニヤリと笑いながら腰をガツチリと掴み、下から突き上げ始めたのだ。  
「奥まで届いて、いいだろう」

男根が肉壺を蹂躪し、子宮の入り口を乱暴に叩いていく。送り込まれる快感が楯無の顔をトロけさせ、その表情とピストンで揺れる豊かな胸が、また晶を欲情させていく。

ここでいった快感から戻ってきた束が、楯無に先ほどの仕返しを始めた。

騎乗位で責められる彼女の背後に回り込み、胸を揉みしだき、淫核をクリクリと弄り

始めたのだ。

「ひ、引きこもり東いい!？」

「さつきはよくもやってくれたね。お返しだよ」

「さ、さきにアンタが、アアンツ、ア、ア、アアアアン、ダメ、やめ、やめてお」

そして東は、楯無を苛めながら耳元で囁いた。

「ねえ、愛人は愛人らしく、晶に調教されちゃいなよ」

「調教?」

「そう。晶の言う事なら何でも聞いちゃう女になるの。そうしたら、いつでも可愛がってもらえると思うよ」

すると楯無はうつとりとした表情で答えた。

「アツ、ンンツ、いいわね。そうしたら、引きこもってばかりの貴女より、ずううと傍にいられるわ。学校でも、晶の活動先でも、2人でHし放題。貴女は一人寂しく待つてればいいわ」

「むう。愛人のクセに、生意気!!」

挑発に挑発で返され、さらに苛めようとする東だが、晶の言葉がそれを制した。

「全くお前達ときたら。少しは仲良く出来ないのか? これから先ずつと、お前達を離すつもりなんてないし、離してもやらない。勿論セックスの時だって疲れ果てるまで、

いや疲れ果てても可愛がつてやる。だから少しは仲良くしろよ」

「それつて、私と泥棒猫無が同列つてこと？」

対する答えは傲慢だが、同時に女を刺激するものでもあった。

「2人とも俺の女だ。仲良くして欲しいし、一緒に気持ち良くなつて欲しい。ダメか？」  
「仕方ないなあ。晶がそういうなら、エッチの時だけは仲良くしてあげる」

先に答えたのは束だった。

勿論、思うところはある。自分が一番でありたいのだ。

だがそれ以上に彼を困らせたくなかつたし、楯無と一緒にという事は、ドサクサに紛れて泥棒猫無の調教も出来るということ。悪い事ばかりでは無かつた。

「わ、わたしもお、アアンツ、いいわよ、ンアア!!」

艶声を漏らしながら頷く楯無。

すると肉壺を蹂躪する男根がビクンと震え、一際激しいピストンの後、膣内なか射精かだしで彼女の中を汚していく。

「2人とも、分かつてくれて嬉しいよ」

そう言いながら男根を引き抜いた晶は立ち上がり、2人を足元に座らせた。

雌の匂いを放つ美女達の艶やかな表情に、男の興奮は否応無く高まつていく。

衰えない男根が、彼女達の眼前に突きつけられた。

「綺麗にしてくれないか」

バスルームの照明に照らされたソレは、女達にとって凶暴な凶器だった。

太く長く、血管が浮き出るほどに硬く反り返ったソレは、愛液と精液でコーティングされ、グロテスクに光を反射している。

女を、有無言わず従わせてしまう男がそこにあった。

束と楯無が、そつと舌を這わせて、男根に付着したそれを綺麗に舐め取っていく。

「いいよ。2人とも——」

この後晶は束と楯無を存分に汚して、マーキングして、調教して、可愛がつていった。始めは2人ともお互いを意識していたようだったが、そんなもの、強化人間の体力の前では無意味だ。

無尽蔵の体力で彼女達を激しく犯し抜いていく。

結果朝になる頃には、1人では受け止めきれない激しく情熱的な思いを受け止める為、2人は協力するようになっていたのだった——。

## 第07話 シャルロットの初めて

「晶、ダメだよ」

とある日の午後、IS学園寮シャルロットの自室。

晶に手作りのご飯をご馳走した彼女は、彼に後から抱き抱えられていた。

彼女の姿は、新妻のような可愛いエプロン姿とは裏腹に、その下は襟ぐりの大きく開いたTシャツにきわどいラインのホットパンツ。

前かがみになれば深い谷間が見え、後からみれば薄いTシャツの生地越しにブラのラインがくつきりと見えてしまっていた。

ホットパンツも大胆なカットがされたもので、後から見れば柔らかいヒップのラインがくつきりと見えてしまっている。

そんな姿を見せられて、晶が我慢出来るはずもなかった。

いや、我慢はした。

せっかく食事を作ってくれたのだ。

出された物を食べ終えるまでは必死に我慢した。

そして食べ終わって、彼女が片付け始めたところで、彼の理性はプツリ——  
—切れなかった。

これから、というところでシャルの携帯が鳴ったのだ。

邪魔されたくない晶は、仕方なく携帯を手渡す。

『お父さん。どうしたの?』

『1つお願いしたい事があつてね。薙原君と話がしたいんだ。いつなら連絡が取れるかな?』

『えつと………晶なら、今ここにいるけど』

『なっ!? ほ、他に人はいないのかな?』

『う、うん。いないよ』

年頃の娘が、1人で男と会っている。

想像出来る状況は色々あるが、もしかして邪魔してしまっただろうか?

そんな後悔が、一瞬アレックスの脳裏を過ぎる。

暫しの沈黙の後、シャルロットが慌てて口を開いた。

『か、勘違いしないでね!! 晶とはお話してただけだから、ちよつとした世間話をしてただけだからね!! 周りに人がいないのは、偶然、偶々だからね!! 勘違いしないでね!!』  
『父さん。掛け直した方がいいかな?』

『だから勘違いしないですって!! 今替わるから。はい、晶』

『お電話替わりました。薙原です。してご用件は?』

交代するまでの時間はとても短かった。つまり2人の距離は、とても近いということ。

これは本当に邪魔をしてしまったかもしれない。

そんな事を思いながら、アレックスは気持ち切り替えた。

ここから先の交渉には、会社の命運が掛かっている。

『実は、以前博士のラボから接收された技術情報を、不正に研究している輩を見つけまして』

『ほう?』

『こちらで少々下調べをしました。NEXTが動く程の警備でも無さそうです。なのもし宜しければ、回収を我が社の方で行わせて頂ければと』

『なるほど。では、まず情報をくれませんか。ラファール<sup>1</sup>經由なら、漏洩の心配も無いでしょう』

『分かりました』

そうして送られた情報を、晶は幾つかのコメントを付けて束にも送信。

するとすぐに、束からコアネットワークで接続があった。

そうして相談を終えて、アレックスに束の言葉を伝えた晶は、切った携帯をソファに放り投げた。

「まったく……………」

お預けを喰らった彼は、既に高ぶっていた。

シャルロットを後から抱き抱えた彼は、エプロンの下に両手を潜り込ませ、柔らかい豊かな胸を荒々しく揉みしだいていく。

「あ、晶。激しい。もう少し、優しく」

「やだ。お前が悪いんだ。こんな格好見せ付けて、何度途中で襲おうと思ったか」

耳元での囁き。そしてお尻に触れる硬くて太くて長い男の感触。

彼が興奮していたという事実に、シャルの顔が紅くなっていく。

「襲ってくれて、良かったのに」

「お前の料理は美味しいからな。そつちも欲しかった。勿論、メインディッシュはお前だよ」

「僕、ついに食べられちゃうんだね」

「ああ」

晶の片手が下へと降りていき、柔らかい太ももを撫で回す。

同時に首筋に、幾つものキスマークを付けていく。



「お前は、俺のものだ」

「うん。僕は晶のものだよ。晶が全部取り返してくれたんだ。家族も、家も、性別も、名誉も、地位も、本当なら使い捨てられるだけだった僕に、全部」

「元はお前が俺を助けてくれたからさ」

「それでも、博士と楯無さんを動かしてくれたのは晶だよ。あの2人を1つの目的の為に動かせる人なんて、晶以外の誰にもいない」

晶の手がホットパンツの中に入り込み、女の園を擦っていく。

既に湿っていたそこは、すぐにクチャクチャと音を立て始めた。

「これは、どうしたのかな？」

指を肉壺に入れながら、晶が尋ねる。

「んんっ、晶が、我慢してたみたい。僕も我慢してたんだよ。早く襲って。何度も想像してたんだよ。なのに、中々襲ってくれないんだもん。こんなエッチな女の子は、嫌い？」

「まさか。こんなに思われて嫌な男はいないさ。シャルみたいな可愛い子なら、なおさらだ」

「良かった」

「だから待たせた分、たっぷり、な。イヤって言ってもやるからな」

「いいよ。僕が晶の女だって、刻み付けて」

「良い子だ」

肉壺から抜かれたベトベト指が、ホットパンツのボタンを外してジッパーを降ろし、脱がせていく。

もう片方の手は変わらず胸を揉み続けた後、ブラの下にまで入り込み、二本の指で乳首をクリクリと転がしていた。

戻り返った男根が、ショーツの上からシャルのお尻に擦りつけられる。

「お、おっきいね」

他の男のサイズなど知らない。

だがそれが人並み以上である事は、彼女も本能的に理解した。

一度受け入れたが最後、雌として組み伏せられてしまうことも。

「まずは一発目だ。これだけ濡れてれば、大丈夫だろ」

キツチンに両手を着かされ、ショーツのクロッチがずらされる。

そしてまだ誰も受け入れた事の無い肉壺に、男の物が挿し込まれていく。

シャルを気遣うようにゆつくりと。

だが入り口は卑猥なまでに広げられ、確実に女の部分を蹂躪し始めていた。

徐々に男の物が入ってくる感覚が、シャルロットを襲う。

肉壺が隙間無く、ピツチリと満たされていくのが分かる。

途中にあつた処女膜は、何の役にも立たなかつた。

巨大兵器の侵攻に壁は脆くも崩れ去り、僅かに流れ出た紅いものが、その名残だつた。  
「あ、ああアアアンツ!!」

思わず上げてしまった嬌声に、晶が耳元で囁いた。

「そんな声を上げていいのかな? 隣に聞こえちゃうよ? それとも、聞かせたいのかな?」

慌てて声を抑えようとするシャルロットだが、Sなこの男が、素直に許すはずが無い。  
軽く奥を小突いてから、ゆっくりと大きく腰をストロークさせ始める。

「ちよつ、晶。ダメ。こえ、声でちやう」

「良いじゃないか。聞かせてやれば」

「ヤダ。ヤダ。晶以外になんて聞かれたくない」

涙目で振り返りながら懇願する彼女に、晶はキスをして口を塞いだ。

そうして男根を奥まで押し込んだまま、今度は円を描くように腰を動かし始める。

「ンンツ、ンンンンンツーーー!!」

また違う快樂に、シャルロットは嬌声の声を上げる。

だが口を塞がれた彼女の声は、部屋の中にしか響かない。

愛液が溢れ出し、肉壺がもつともつとせがむように男根を刺激してくる。

このままでも良いのだが、思い切り彼女を征服したい晶は、繋がったままシャルを持ち上げベッドまで運び始めた。

いわゆる立ち背面というやつだ。

そしてこの体勢だと、彼女自身の体重で男根がより深く、根元まで突き刺さる。加えて男が歩くと、不規則に男根が膣壁を擦り上げ、今までとは違った快楽を彼女に送り込む。

彼女は自由になった両手で口元を押さえ、必死に声が漏れないようにしているが、その姿はますます晶を高ぶらせた。

ワザとらしく「よいしょ」と彼女を持ち直し、少し浮かせた彼女に、反動で男根を膣奥まで打ち込む。

加えてゆっくりと歩き、遠回りをして、大きな鏡の前で卑猥に押し広げられた肉壺を彼女に見せ付けてから、ベッドに押し倒した。

今度は正常位だ。

お望み通り声が出ないようキスで口を塞ぎながら、腰を大きくピストンさせていく。卑猥な言い方をするなら、種付けプレスだ。

既に肉壺はドロドロで、愛液がシヨーツを汚して流れ落ちていく。

長く大きく力強いストロークで子宮を攻められるたび、彼女の理性は溶け、足が自然と男の腰に絡みつき、更に深く男根を加え込もうとしている。

「エッチだなあシャルは」

「ぼく、僕は、晶の女だもん。僕のは、全部晶のもの。心も身体も、お金も会社も、全部。だから、離さないで」

「そんな事言つて良いのか？」

答えなど既に分かりきっているが、それでも晶は聞いた。

「良いよ。前言つたでしょ。『僕はずっと君に捕われたままで良い』つて。だから、使つて。私の全部を。他の人の為なんて、いやだ」

「良い女だよ。お前は」

もう一度キスしながらピストンしていく。

硬く太く長い男根で容赦なく肉壺を蹂躪し、自分の女だと刻んでいく。

シャルロットの肉壺がうねり、腰がガクガクと震え始める。

「イキそうか？ 中と外、どっちが良い？」

「なか、離出し中出しして、僕に晶のものだつて刻んで」

「ああ!!」

晶はラストスパートとばかりに激しく子宮を攻め立てていく。

組み伏せられたシャルロットは何も出来ない。

ただ目の前の男に抱きつくだけ。

そうして放たれた精が、彼女の肉壺を満たしていく。

瞬く間に押し上げられ、上り詰め、放心する彼女。四肢の力が抜けていく。

だが男の方は満足していなかった。

全く衰えない男根と有り余る体力で、シャルロットの女の部分を更に蹂躪していく。

「晶。硬いまま」

「お前が可愛くて、納まらないんだよ」

エプロンとTシャツを荒々しく剥ぎ取り、今度は四つん這いにさせ、動物のように後

から犯していく。

普段の温厚な態度からは考えられないほど暴力的な扱い。

だが彼女は嬉しかった。

自分だけがこんな彼を知っていると思うと、受け入れてしまう。

子宮の奥がキュツと疼き、淫らに腰を振ってしまう。

その様は母親の血のなせる業が、“愛人”という言葉が相応しい程に淫らだった。

誰も今の彼女を見て、初体験などとは思わないだろう。

(見せる気も無いけどな!!)

独占欲のままに、晶は腰の動きを加速させていく。獣のような荒々しい交わりだ。

激しい動きにブラが完全に外れて、豊かな胸が顕になる。

既に頂きの突起は一目で分かるほどに勃起していた。

晶がシャルロットの両手を後ろに引きながらピストンを続けると、突き出された胸が淫らに揺れて、女を主張している。

彼女は振り返りながらキスを求め、男はそれに応えた。

片腕が離され、女の顔が引き寄せられる。女は片腕を男の首にかけ、お互いの顔が離れないようにした。

互いの舌を絡め合いながら唾液を交感する。

本能のまま、思うがままに、クチャクチャと厭らしく。

そうしている間に2発目の精が放たれるが、やはり男の物は衰えない。

下着としての意味を成さなくなったショーツを剥ぎ取り、今度はシャルを上に乗せる。騎乗位だ。

「あ、アアアンツ。ふ、深いよお」

「深くて良いだろ」

既に何度もイッて敏感になっていく膣内を、男根が満遍なく擦り上げながら、奥の奥

まで蹂躪してくる。

その快感に、一瞬意識がトぶシャルロット。

だが浸る時間は与えられなかった。

晶はイッた彼女の腰を掴み、連続でピストンを始めたのだ。

「ンンッ、アッ、ハア、アアンッ」

もう彼女に、声を抑えようという気は無かった。

与えられる強烈な快感に、そんな意思は消し飛ばされていた。

そして愛しい男が懸命に腰を振る姿に、彼女の奥が更に疼く。

自然と、一番気持ち良い所に男根が当たるように腰を動かしていた。

雌の本能に忠実なその動きは、酷く淫らで、雄の本能を刺激してやまなかった。

降りてきた子宮に3発目の精をぶっかけられ、再び押し上げられるシャルロット。

力無く倒れこみ、豊かな胸の柔らかい感触が男に伝わる。

だが男はまだまだ元気だ。

雄と雌が交じり合った肉壺の中で、男根がビクンツと震えて、まだまだ女を攻められ

ると自己主張している。

「んっ、晶。元氣過ぎだよお」

「イヤか？」



顔を紅くしながら首を横に振るシャルロット。

それを見た晶は、彼女から男根を引き抜き、今度は目の前に突き出した。

「二度、綺麗にしてくれないか？」

愛液で濡れてグロテスクに光り、カリ高で血管の浮き出たそれは、硬く太く長く、女にとつて凶器と言える代物だった。

そして雌の本能に訴えかける雄の臭い。

彼女の口は自然と男根を銜え、丹念に愛液を舐め取り始めていた。

この後も2人は同室者が帰つてこないのを良い事に交わり続け、シャルロットには何度もの何度も、男のものだという証が刻み込まれたのだった——。

## 第08話 簪のおねだり

更識簪にとって、優秀過ぎる姉の存在はコンプレックスだった。

だからだろう。ずっと頼りになる人が、護ってくれる人が欲しいと思いつけてきた。そして、それはいつしか依存心という形で、彼女の中に根付いてしまった。

しかし更識家直系の娘が何かに依存するなど、あつてはならない。もし他人に知られようものなら、知った人間の口封じが必要になってしまう。

そんな彼女にとって、難航していた専用機開発の突破口を開き、誘拐された時には（姿を隠しながらとは言え）しっかりと護ってくれた薙原晶は、好意を寄せるに値する男だった。

加えて言うなら、絶対的な暴力と理性的な精神を併せ持つ彼なら、更識の人間が惚れ込んだところで誰も不思議に思わない。

存分に甘える事が出来る。

そうして甘えたい相手に初めてを捧げて以降、彼女は自分が思っていた以上に、彼のめり込んでいった。

人前では必死にいつも通りの自分を演じているが、2人きりになると――。

「晶さん」

恥ずかしげに、だがしつかりと身を摺り寄せてくる。

ここは、休日のIS学園アリーナハンガー。

姉が犯されたのと同じ場所で、妹も同じ男に擦り寄っていた。

身体にフィットしたISスーツが、否応無く身体のラインを際立たせ、柔らかな2つの膨らみが晶の腕に押し付けられる。

だがこの男は、少しだけ意地悪だった。

「どうしたんだ?」

どうして欲しいかなんて分かりきっているクセに、まるで何も気付いていないかのよう<sup>う</sup>に問い掛けてくる。

この人は、女の子におねだりさせるのが大好きなのだ。

そして簪は、それを何の抵抗もなく受け入れてしまう。

一度この人に甘えて<sup>依存して</sup>女の悦びを味わったら、もう断るなんて考えられなかった。

「――また、お願いします」

「なにを?」

「意地悪な人」

簪の手がそつと男の頬に添えられ、優しく振り向かせる。

そのまま、互いの唇が触れるだけのソフトなキスをする。

一度、二度、三度、何度も繰り返す。

「簪は甘えん坊だな」

彼女は返事をせず、無言のまま晶の股間に手を伸ばした。ズボンの上から、女を狂<sup>男</sup>わせる凶器<sup>根</sup>を優しく撫で上げる。

「貴方が、私を甘えん坊にしたんですよ」

「俺が？」

「はい。晶さんが、です。私を甘えん坊で、エッチな子にしたんじゃないですか」

簪は晶に初めてを捧げて以降、学園内の至る所で犯されていた。制服姿で、ブルマー姿で、水着姿で、他人にバレそうなドア一枚挟んだ個室で、声を押し殺しながら。そうして幾度も犯され与えられた快楽は、凶らずとも彼女を調教する結果となっていた。

今ではこうして2人きりになると、素直にエッチなお願いをしてしまうほど素直になつていた。

「だから責任をとつて、甘えさせて下さい。お姉ちゃんと同じように、私も可愛がつて下

さい」

「楯無と同じように?」

「お姉ちゃん、酷いんですよ。2人っきりの時は刀奈って呼んでもらってるって、自慢するんです。他にも、昨日はどんな風に愛してもらったとか、どんな言葉を囁いてもらったとか、コレが中をピツチリと埋め尽くして、奥を叩いて気持ち良いとか、順番待ちで我慢している妹に、酷いと思いませんか？」

「酷い姉だな。今度お仕置きしておこう」

「そう言つて、また押し倒すんですね」

「勿論。刀奈アイツは俺のものだ。そしてお前も俺のものだ。誰にも渡さない」

そうして今度は晶から口づけをする。始めはゆっくりと啄ばむように、そして徐々に長く。最後は口全体を犯すようにデープに。

「んっ、んんっ、ハア……………晶さん……………」

その間も、簪の手は止まらない。男の男根を優しく撫で上げ、女を雌にする凶器が、ズボンの中で大きくなっていく。

キスを味わいながら彼女の手が巧みに動き、ズボンのチャックを下ろして男根を露出させる。

今まで何度も味わい、狂わされてきた男根だ。

既に硬く反り返り、カリ高の龟头と太い幹に浮き出た血管が、これでもかと存在感を主張している。

女の手が優しく男男のものを擦り、愛撫根していく。

「いいよ。今度は舐めて、しゃぶってくれないかな」

「はい。晶さん」

そう言つて簪は、横長のベンチに座る晶の前に跪き、恭しく舐め始めた。

竿にゆつくりと舌を這わせ、亀頭を啜えて口全体で愛撫し、尿道の先を丹念に舐める。

「良いよ。今度はそのまま深く啜えて」

言われるがままに、簪は従順に男のモノを奥まで啜え込んでいく。

その姿は、初めて抱かれた時から考えられないほどに淫らだった。

「良い子だ。次は、自分の気持ちいいところを触つてごらん」

すると簪の右手が、ISスーツの股布の部分を横にずらし、淫核をキュツと扱き始めた。

初めはゆつくりと、徐々にリズムカルにはやく。更には淫裂の中に指を入れ、いつ男のモノが入っても良い様にほぐしていく。

愛液がタラタラと流れ落ち、彼女の指が、汗ではない淫らな液体で濡れていく。

自分のモノを必死に頬張る簪の髪を、晶は優しく撫でて、尋ねる。

「簪、初めはどっちが良い？ 口かな？ 顔に掛けて欲しい？ それとも、中陰をたつぷりと扱陰られながら？」

晶は簪に、どこに射精して欲しいかを選ばせた。

この時、彼はいつも意地悪だった。

簪が選ばなければ、決して最後までしてあげないのだ。それでいて硬く反り返った男根を見せつけ、舐めさせ、女の弱点を嫌らしく攻め続けて、女の理性を削り取っていく。とても、意地悪な人なのだ。

だから最近、簪もとても素直になってしまった。

「中陰が、中陰が良いです。晶さんに抱き着きながら、中陰をゴリゴリって擦られながら、突いてももらいたいんです」

返事を聞いた晶は、IS学園アリーナのハンガーに備え付けられている、横長の椅子に横になった。

「じゃあ、自分で入れてごらん」

「はっ」

簪が晶の上に跨り、少しずつ腰を下していく。

反り返った硬く太い男根が、少しずつ濡れそぼった肉壺の入り口を押し広げ、女の中陰に入っていく。

「んっ、んんっ、ん、はああああアアン」

時間を掛けて、男根を根元まで肉壺に啜え込んだ簪は、晶の胸元に倒れ込んだ。

彼女お気に入り入りの体勢だ。男のモノを咥えている最中は、とにかく密着しているのが大好きなのだ。

姉に比べればやや小振りな胸が、男の胸板に当たり、ISスーツの下で卑猥に潰れる。

「ぜん、ぶ。ンツ、全部、入りました、晶さん」

「そしたら今度は、俺の番だな」

簪の腰に手が添えられ、中をかき回すようにネットリと男根が動かされていく。

肉壺の入り口が太い男根によってピッチリと押し広げられ、中が蹂躪される姿は、酷く淫らな光景だった。

そして彼女が大好きな犯され方。キスして、抱きしめながら、男根を濡れそぼった肉壺の奥に叩き付ける。

漏れ出る淫らな声は、唇を塞がれていくぐもった声にしかならない。

「ンツ、ハあ、ンンツ、アンツ。いい、良いです。晶さん。もつと……もつとして下さい」

「良いよ。幾らでもしてあげる。足腰が立たなくなるまで、何回でもね」

言い終わると晶は、彼女を抱えて一度立ち上がった。

対面駅弁座位で、男根は濡れそぼった肉壺に挿したままだ。

つまり彼女は自分の体重で、否応無く男のものを肉壺に奥深くにまで咥え込む事に



なった。

男が動く度に男根の先端が、女の最奥をグリグリツと抉り、簪の意識が一瞬ごと飛びそうになる。

晶をギュツと掴んでエクスタシーに耐えていると、簪は横長のイスの上にゆつくりと下ろされた。

正常位——下品に言うなら、種付けプレスの恰好だ。

「簪があんまり可愛いから、虐めたくなっちゃった」

覆いかぶさり、耳元で囁きながら、晶は硬く太く反り返った男根を、抜けるギリギリまでゆつくりと引き抜いた。

膣壁が否応無く、満遍無く擦られ、快感の余り脚が震えてしまう。

それと同時に、今まで中中にあったモノが抜けていく喪失感。

だがその直後、晶は逃げ場の無い彼女に勢い良く男根を突き入れた。

何度も何度も男の欲望のままに突き入れ、彼女を雌にしている。

最奥を抉るだけでなく、突き入れる角度を微妙に変えて、淫らに濡れそぼった肉壺全体を満遍なく擦りあげていく。

「アンツ、あああああ、ンンツ、アアン、晶さん。良いです、もつと、もつとして、もつと下さい」

「ああ。でも、もう一度おねだりが聞きたいな」

「この中腔に下さい。私の、いやらしい肉壺に、晶さんの白くてドロドロした精液、下さい。沢山、たくさん下さい」

「本当に簪は良い子だな。そこまで言うなら、ホラッ!!」

晶が男根を女の最奥までプチ込むと同時に、簪はエクスタシーの頂点に達した。

そして雌の器官を白く染め上げていく。だが、この男はここからが本番だった。

射精しても全く衰えない男根で、イッて敏感になった肉壁を擦りあげていく。

執拗に、丹念に、ネットリと。

余りの快感に簪が、殆ど無意識の内に晶に抱き着く。両腕だけでなく、両足を男の腰に回してはしたなく。

しかし男の動きは止まらない。

もう一度簪を抱きかかえ、再び対面駅弁座位で彼女を下から攻め続ける。

両手両足で晶にしがつく簪の肉壺は、下からの攻撃に無力だ。男の欲望のままに、好きなように蹂躪され続けた。

「ヤ、アンツ、ダ、ダメ。だめです晶さん。イクツ、ンンツ、ンツ、ハア、またイツちやいます」

「良いよ。好きなだけイクと良い。簪が気絶して果てるまで、何回でもイかせてあげる

から」

耳元で囁かれた簪は、全身をビクツと痙攣させ、更に肉壺で男根を絞り上げながら再び果てる。

だが男は射精しないで、女が果てている最中もお構いなしで肉壺を蹂躪していく。そして、再び耳元で囁いた。

「簪はエッチだな。いつも皆がいるこのハンガーで、こんなにドロドロに濡らして。おねだりして」

「そ、それは……………晶さんが……………」

言ったから、と言おうとした言葉は、無造作に突き入れられた男根で中断させられてしまった。

「アンツ、ンンツ、アツ、ごめんなさい。私が、私がおねだりしたからです」  
「だろう？」

従順な態度に満足した晶は、今度は簪を四つん這いにさせ、獣のように後ろから犯し始めた。

加えて、後ろから好き放題出来るのを良い事に、ISスーツを脱がせていく。

平日は皆が切磋琢磨しているこの場所で、簪は着ているものを剥ぎ取られ、生まれたままの姿で犯されていく。

その背徳感と与えられる快感が、肉壺を抉る男根をキュツと締め上げた。

「良い締め付けだ。こういう風に犯されるのは、そんなに良いかい？」

「イイです。もつと、もつとして下さい。お姉ちゃんよりも激しく!!」

「おや？ 簪は刀奈と張り合いたいのかな？」

晶は後ろから簪を蹂躪しながら、あえて楯無の事を「刀奈」と呼んだ。

すると案の定、肉壺がキュツと締まる。

「アンツ、あ、今は、今は私だけを見て下さい。刀奈なんて、言わないで」

すると晶は、簪に後ろから覆いかぶさりながら、耳元で囁いた。

「簪がもつとエツチになつたら、夢中になつちやうかも」

「ンツ、アアアアン、どうしたら、ンンツ、どうしたら、良いんですか？」

「簡単だよ」

言いながら、晶はまた体勢を入れ替えた。

肉壺に突き刺さったままの男根が肉壁をゴリゴリと擦りあげ、それだけで簪は再びエ

クスタシーに達しそうになる。

今度は騎乗位だ。

「今度は簪が、自分で動くんだ。いやらしく腰を振って、俺のモノを喜ばせてくれ。いつも皆でトレーニングしているこの場所で、エツチに腰を振るんだよ」

「しよ、晶さん」

言葉攻めに羞恥を覚えたのか、僅かに簪の動きが止まる。

しかしそんなもの、下から男根を一度突き上げられてしまえば、軽く吹き飛ぶ程度のものでしかなかった。

「アーンツ。わ、分かりました。アアーンツ、う、動かしませぬ。お姉ちゃんより、沢山動かしませぬ」

そうして彼女は腰を振り始めた。

初めは少しぎこちなかったが、次第に激しく、そして男根が気持ち良いところに当たるように、迎え腰で結合部が晶から良く見えるように。

突き入れられた男根が、簪の淫貝をピツチリと押し広げている。

優等生の簪が、アリーナのハンガーで全裸で腰を振っている姿は、酷く犯罪的で淫らな光景だった。

たまらず晶は簪の腰を掴み固定して、下から突き上げてしまった。

突然の不意打ちに、彼女の意識が一瞬飛ぶ。しかし晶は止めなかった。

2度、3度と突き上げて意識を呼び戻し、次いで腕を引っ張って抱き寄せて、キスをしながら更に突き上げて肉壺を虐めていく。

簪の腰が、ガクガクと震えだした。

「あ、アアアアン、いいです。晶さん、いいです!!」

彼女もキスを求め、2人は自然と舌を絡め合わせ、ディープキスで互いを貪り合っている。

そして簪の絶頂間際、晶が口を開いた。

「さあ簪。どこに欲しい。ちゃんと言うんだ」

「は、はい。アアンツ、ンツ、奥です。ンンツ、中に晶さんの白くて、アンツ、熱くて、ドロドロしたものを注いで下さい!!」

「良く言えたね。ご褒美だ」

そうして男根を思い切り肉壺の奥に突き刺した晶は、彼女の望み通りに、雌の器官を男の精液で汚していった。

子宮中を汚される感覚に、簪は恍惚した表情を浮かべる。

普段の表情からは考えられないような、女の、発情した雌の顔だ。

「あ……………良かったです。晶さん」

「それは良かった。でも、分かってるだろうか?」

「アンツ、は、はい」

無尽蔵の体力を誇るこの男が、たかだか数回射精した程度で終わるはずがない。

簪の中雌にある男根は変わらず硬いまま、発情しきった女の器官をグリグリと虐めて

いる。

そして男は、再び体勢を入れ替えた。種付けプレスの恰好だ。

(あ……………私これから、また気を失うまでされちゃうんだ)

足腰の力の抜けた簪に、もう抗う術は無い。

これから何度も何度も啼かされるだろう。

だがそう思うほどに、簪の肉壺はキュツと締まり、愛液をタラタラと流し始めた。

雌の本能が、雄を受け入れたがっているのだ。

「晶さん」

そうして簪は、キスをねだった。

すると男はディープキスで応え、次いで、女の園を雄の象徴で蹂躪し始めたのだった。

## 第09話 調教される更識姉妹

裏社会に絶大な影響力を持つ更識家。

その現当主である更識楯無刀奈と妹の更識簪は、同じ男に好意を寄せ、同じ男に初めてを奉げて以降、姉妹そろって雌の悦びを教え込まされていた。

何せ強化人間雌原晶の体力は無尽蔵で、男根は硬く、太く、長く、カリ高で反り返り、女を蹂躪する凶悪な凶器なのだ。そんなモノで肉壺を執拗に責められ、啼かされ、可愛がられ、何度も何度も中出し膣内射精で子宮を白く汚され続けては、雌としての本能が屈服を選択してしまうのも仕方ない事だろう。

いつしか姉妹は愛しい男が与えてくれる快楽に従順となり、自然と奉仕するようになっていった。

手で、口で、胸で、雌穴を使って。愛しい男が望めば何処でも。

そんな風に奉仕する事を覚えた姉妹が、一緒に抱かれるようになるまでそう時間はかからなかった。

今日3人がいるのは、更識家本邸宅の浴場。



調教された姉妹は、そこで自らの体を使って、男を洗っていた。勿論、タオル等という無粋な物は使わない。

浴室イスに座る晶の、後ろから刀奈が、前から簪が、ボディーソープを泡立てた自身の体をタオル代わりにして洗っていた。

「ンツ、ンンツ」

「アツ、アンツ」

姉妹のツンと尖った乳首が、胸板と背中に押し当てられ、コリコリとした感触が男を楽しませる。

2人の健気な奉仕と艶やかな姿に、男根が徐々に大きくなっていく。

すると刀奈が後ろから手を回し、女を啼かせる凶器を、愛おしげに洗い始めた。玉袋を優しく撫で、竿は手で扱き、亀頭は掌の全体で包み込んで。

ボディーソープのヌルヌルした感触が男の性感を刺激し、今まで幾度となく姉妹を啼かせてきた男根が、瞬く間に戦闘態勢を整えていく。

次いで簪が、自身の唇で晶の唇を塞いだ。初めはついでばむようなソフトキス。そして徐々に長く、最後には舌を入れて互いの唾液を絡ませるティープキスに。上と下の同時攻撃は、男の本能を酷く刺激する淫らな光景だった。

このままですが、というのも悪くは無いだらう。

だが晶はされてばかり、というよりも、自分で女の子を啼かせたい方だった。

彼の右手が簪の股間へと伸び、ヌルヌルになつてゐる手で、彼女の陰核を扱きあげる。

「しよ、晶さん。アツ、もつと……………」

幾度となく犯され、調教された簪の体は敏感で従順だ。

送り込まれる快感にキスが止まり、男が女の弱点を触りやすいように、自ら迎え腰となり受け入れていく。

簪は、自身の子宮がキュツと疼くのを感じた。

そうして妹の肉壺が男の受け入れ準備を始め、ボディソープ以外の何かで淫裂が濡れ始めた頃、晶のSっ気が目を覚ました。

「簪、シャワーを取ってくれないか。温度は少し温めで」

「え、あ、は、はい……………」

陰核扱きから解放された簪は、解放された事に少し残念そうな顔をしながら、言いつけ通りにシャワーを取って手渡した。

すると晶は、簪の腰を抱きかかえて逃げられないようにした後、ニヤリと笑みを浮かべながら口を開いた。

「簪、下のお口が少しヌルヌルしてるから、洗ってあげるよ」

「えっ!?! まつ、まつて下さい。シャワーで、直接なんて」

恥じらつて言葉では否定しても、ピンピンになった陰核をシャワーで直接洗われる快感を想像してか、視線も、表情も、既に雌のそれだった。

男の胸元を押す手の力は弱く、むしろ撫でまわしているようにも見える。

「大丈夫。優しく洗ってあげるから」

「は、はい」

男に迫られれば、簪に否は無い。

局部にシャワーが押し当てられると、彼女の腰がビクビクと震え、悶える声が浴室に響いていく。

そしてすぐに腰砕けになった彼女は、立っていられずに両腕で晶に抱き着いた。

すると男は意地悪な笑みを浮かべながら、更に妹の局部を洗っていく。

シャワーで洗いながら、指で丹念に陰核を擦り、肉壺の中にまで指を侵入させていく。

「簪。いくら洗っても、ヌルヌルしたのが取れないな。どうなっているのか、教えてくれないかな」

どうなっているのかなんて分かりきっているのに、晶はあえて尋ねる。

恥じらいながら答える姿みたいのだ。

「わ、わたしのアソコは、洗われて……感じちゃって、ヌ、ヌルヌルに………なっています」

抱き着かれ、耳元で恥ずかしがりながら囁くような声に、男の男根がビクリといきり立った。

「アソコって？」

「オ…………オマンコ、です」

「どうなっているのか、自分で開いて見せてくれないかな」

男のお願<sup>命</sup>いに、簪はどこまでも従順だった。

恥ずかしがりながらも横になり、両足を開き、両手で淫裂を開いていく。

「こ、ここうなつて……………います。晶さん……………見えます、か」

「ああ。良く見えるよ」

すると晶は簪に覆いかぶさり、刀奈の手によつて臨戦態勢になっている男根を、躊躇無く肉壺にブチ込んだ。

優しい扱いではない。だが妹は痛がるどころか、両手両足で男に抱き着き密着し、より深く啜え込もうとする。

簪は甘えん坊なのだ。ブチ込まれている最中は、とにかく密着したがる。

そうして始まった種付けピストンに、簪は瞬間に押し上げられていった。我慢する事なんて初めから考えていない。今はただ、目の前の愛<sup>命</sup>しい人が与えてくれる快楽を、存分に味わうだけだった。

そして極太の男根によつて、妹の淫裂がピツチリと押し広げられ、蹂躪される光景を見ていた刀奈も、自身の子宮が疼くのを感じていた。

自然と手が胸と下へと伸び、乳首と淫裂を弄り始める。

だが、全く物足りない。前慰にすらならない。すぐにブチ込んでくれると分かつてはいても、もどかしさだけが募つてしまう。だから姉は、妹を虐める事にした。

姉より先に男の物を味わうなんて悪い子には、お仕置きが必要だろう。

そう思い、刀奈は床に置かれていたシャワーを拾い上げて――。

「ねえ簪ちゃん。お姉ちゃんが、ちよつと手伝つてあげるわね。――早く、イッちやいなさい」

――繋がっている2人の間に、シャワーノズルをねじ込んだ。

そうしてノズルが押し当てられた場所は、大股開きで男のモノを啜え込み、発情してピンピンに勃起している妹の陰核だ。

簪の腰がビクビクツツと震え、男に更に強くしがみつく。

恐らくイッたのだろう。

だが男のピストンは止まらない。妹がイッている最中であろうと関係無い。女を雌體內射精に変える凶器が肉壺の隅々までを蹂躪し、妹を連続絶頂へと導いていく。しかし中出し體內射精はしない。いつもなら中出しだが、今日は簪に飲んでもらいたい気分だったのだ。

男は精液を搾り取ろうと痙攣する肉壺から男根を引き抜き、連続絶頂で放心気味の妹の前に男根を突き出す。すると簪は男のモノを咥え、一滴残らず飲み干していった。それどころか口全体で男根を吸い上げて、尿道に残っている精液まで搾り取ろうとする。(簪ちゃんったら、あんなに雌の顔をして……)

恍惚とした表情で男のモノに奉仕する妹の姿を見て、姉の子宮が再びキュツと疼く。

そして簪の口から男根を引き抜いた晶は、今度は刀奈の腕を掴んで引き寄せた。

有無を言わず、荒々しく。

(あ……もう、スイッチ、入っちゃってる)

普段は紳士な薙原晶だが、SEXでスイッチが入ってくると、少しばかり荒々しくなるのだ。

女尊男卑の世の中をあざ笑うかのように、女を組み伏せ、可愛がって、虐めて、どこまでも責めて、薄っぺらい理性など剥ぎ取って、一匹の雌に変えてしまう。そんな男になるのだ。

そして今日まで幾度となく犯され、それこそ妹の簪よりもずっと犯されている刀奈は、既に身も心も薙原晶の雌だった。

晶の手を自身の淫裂に導きながら、積極的にキスをせがんでいく。

更に豊かな胸を雄の胸板に押し付け、興奮で尖りきった乳首を男に擦りつける。

だが男は、もう刀奈を蹂躪したくて仕方が無くなっていた。発情した雌の顔をさせ、啼かせたいのだ。

「刀奈、四つん這いになって、尻をこっちに向けるんだ」

お願いではなく、有無を言わさない命令。

更識家当主が、こんな事を言われて従うなどあり得ない。しかし今この場では、この男の前でだけは、更識刀奈は、名門更識家の当主ではなく、男に奉仕するただの雌だった。

言われた通りに四つん這いになり尻を向け、更に片手で淫裂を押し開き、男にアピールする。

早くブチ込んで欲しいと。

すると晶は刀奈の腰を両手でしっかりと固定し、有無を言わさず最奥まで男根をブチ込んだ。

そうして激しいピストンが開始されると、浴室に刀奈の嬌声が響き渡る。

もしここが一般家屋であれば、外まで聞こえてしまっていただろう。

いや、もしかしたら更識家の使用人に、当主の喘ぎ声が聞こえてしまっているかもしれない。

だが刀奈に声を止める事は出来なかった。止めようという気も無かった。

男に蹂躪される事を覚えてしまった体は、どこまで従順に男のモノを受け入れ、締め付け、精液を搾り取ろうとする。子宮が我慢しきれないとばかりに降りてきて、勝手に種付けをせがんでしまう。

そしてもう少しでイけるといところで、晶はピタリと動きを止めた。

挙句後ろから覆いかぶさり、耳元で囁くのだ。

「なあ刀奈。どうして欲しい？ 当主様様の中に勝手に出さないからさ。ハッキリと、言葉でどうして欲しいか聞きたいんだよ」

そして晶は刀奈が何かを言うまでに、降りてきている子宮の入り口を、亀頭でグリツと挟む。

強烈な刺激が姉の全身を駆け巡るが、イクには後一突き足りない。

寸止めされた姉に、我慢など出来るはずが無かった。

「イきたいの、イかせてちょうだい」

逞しい雄の手で固定された腰を懸命に振ってアピールするが、スイッチの入っている晶は、いつも以上に意地悪だった。

「ふふ。どうしようかな」

迷っている素振りを見せている間も、男は男根を動かし、女をイク直前の状態にとどめ続ける。



そして既に発情し切っている刀奈に、我慢など無理な話であった。普段なら決して口にしえないような言葉で、おねだりをしてしまう。

「晶。ううん。ご主人様。お願いします。イかせて下さい。私のエッチな穴を虐めて、白いのを注ぎ込んで下さい」

この飛び出て来た言葉を聞いた瞬間、今度は晶の理性がフツ飛んでしまった。

ただでさえ太く、長く、カリ高で、硬く反り返っていた男根に力がこもり、その熱が肉壺を通して刀奈に伝わる。

（あ、凄い。興奮してくれてる。ご主人様って言ったら、いつもよりずっと興奮してくれてる）

女尊男卑の世の中で、更識家当主が、男を「ご主人様」なんて言った事が他人に知れたら……そんな考えが一瞬脳裏を過る。

（ううん。関係無い）

だがすぐに、刀奈はその考えを振り払った。

彼は更識家には興味が無いと言ってくれた。欲しいのは更識家ではなく刀奈だと。

その言葉はとても心地良く、だが最近は少し不満でもあったのだ。

どうせなら、更識刀奈の全てを受け取って欲しい。そう思うようになっていた。

つまり、更識という組織そのものを彼に――。

（交渉事が苦手な部分は、私がカバーすれば良い。彼には力の象徴として………だから「ご主人様」って言っても、変じゃないの）

漠然とそんな事を考えていた刀奈の思考は、そこで強制的に中断させられた。

雄が雌を組み伏せるための凶悪なピストンで、女の器官を責められ始めたのだ。

それから何度も何度も中出し（体内射精）で子宮を白く汚され、イッて敏感になつた肉壺を、全く衰えない男根で、これでもかと虐め抜かれる。

すると自然に、掴まれている腰だけが男に向かつて突き出される、卑猥な体位となつた。男性優位の、女は蹂躪されるだけの淫らな恰好だ。

だが晶は、まだ全く満足していなかった。

今度は後ろから刀奈を抱きかかえ、立ち上がり、背面駆弁スタイルで犯し始めたのだ。勿論支える両手で足は大きく開かされ、がに股にさせた上で鏡の前に立ち、結合部を本人に見せつけるようにしている。

そして、耳元で囁く。

「刀奈。お前の中に、俺のがズツポリと入っている。どんな状態か、言ってみてくれないか？」

「しよ、晶の。ううん。ご主人様のが、私の中をピツチリと埋め尽くして、全体を擦つて、アーンツ、そして、奥を、奥を叩いています。もつと、幾らでも、ご主人様が満足するま

で、突いて下さい」

両足を大きく開かされ、真下から貫かれている刀奈は、もう男にされるがままだ。出来る事と言えば、男に媚びて、肉壺で男根を締め上げるくらい。

学園では「完璧超人」などと言われている彼女も、こうなつてはただの雌でしかなかった。

只々一方的に男に蹂躪されていく。

そんな時に、今まで休んでいた簪が近寄ってきた。

「お姉ちゃん」

「簪ちゃん」

「さつきしてくれたこと。私もしてあげるね」

「えっ?」

言いながら簪は床に転がっていたシャワーを手に取り、蛇口を捻る。

ナニをするのか気付かされた刀奈は逃げようとするが、逃げられるはずもない。

今の彼女は真下から男根で貫かれ、動く為の足は床についておらず、しかも男の手で大きく股を開かされ、陰核も淫裂も剥き出し。つまり、妹の攻撃を遮る物は何も無い。

弱点を剥き出しにされた、無力な雌だ。

「まつ、待って。今、そんなのされたら………」

「ダクメ。お姉ちゃんばっかり可愛がってもらってズルいもん。だから早くイッて、私に代わって。ね、お姉ちゃん」

そうして妹は、姉が手でガードする前に、問答無用で陰核にシャワーを押し当てた。流れ出る流水が発情しきっている女の弱点を責め立てていくと、刀奈の肉壺がキュツと締めまり、男の物を強く締め上げていく。

同時に簪は、姉の唇をディープキスで塞ぎ、勃起した乳首をコリコリと弄ぶ。

予想外の3点同時攻撃に、姉は悶える事しか出来なかった。

しかも妹の責めは、これで終わりではなかったのだ。

「私が先にご主人様つて、言おうと思つてたのに。お姉ちゃんに先に言われちゃった。ねえ、どんな気持ちで言つたの？」

今度は言葉責めだった。

圧倒的優位な立場なせいか、それとも先に言われてしまった事の腹いせか。

名門更識家当主が男の事を「ご主人様」と呼んだ心境を、その男の前で語らせる。

普段の簪からは考えられない行いだ。しかし逆を言えば、それだけ晶に調教されているという事でもあった。

(い、言える訳、ないじゃない)

だが発情しきった体は、容易く本人の意思を裏切っていく。

シャワーを押し当てられながら妹に陰核をキュツと抓られ、合わせて男根で奥を小突かれてしまえば、抵抗など出来なかつた。

「言う。言うから、簪ちゃん。止めて、お願い」

「ご主人様の前で、ちゃんと言えたら止めてあげる。お姉ちゃん」

「俺も聞きたいな。お前の心の声を、是非とも教えてくれないか」

言いながら晶は腰をネットリと動かし、肉壺を満遍なく擦りあげていく。

すると快楽が羞恥を押し流し、剥ぎ取られた理性の下から、調教された雌の顔が浮かび上がってきた。

「アツ…ンツ、晶に、ご主人様に、アアアンツ、私の全てを、刀奈だけでなくて、ンンンツ、当主としての私も、更識も貰って欲しかったから。だから、アンツ、ご主人様って」

この思いを聞いて高ぶってしまった晶は、彼女を横にして覆いかぶさった。

いわゆる種付けプレスの恰好だ。

「つたく、お前。普通は逆だろう。俺がどうにかして更識の実権を手中に収めようと暗躍する側だろうが。なのに、お前ときたら」

そうしてピストンが開始されると、刀奈は妹がされた時と同じように、両手両足を使つて男にしがみついた。密着した2人の間で、豊満な胸が潰れて卑猥な形になり、柔らかな感触が男に伝わっていく。

「もう、アンツ、決めたもん。私の『全てを』奉げるって。だから、アアアアンツ、使つて、私を、刀奈を、更識を」

「良いだろう。貰おうか、お前の全てを」

そうして刀奈を絶頂へと導いた晶は、肉壺から男根を引き抜き、今度は簪を押し倒した。

姉妹の愛液でドロドロに汚れた男根を、妹の濡れそぼった淫裂に突き入れながら尋ねる。

「お前は、どうなんだ？ さつき、先に言われたって言ってたけど」

「アンツ、あ、アアアアン、私はもう、晶さんの女です。ンンツ、あ、ハアアアン、だからもう、次に2人きりになった時に、アンツ、晶さんメイド服とか大好きだから、それを着てご主人様って言って、ンンツ、可愛がってもらおうって思ってたのに、お姉ちゃん、いきなり言うから」

すると晶はニヤリと笑った。

とてもイケナイ事を考えている悪い笑みだ。

「なら簪、これからお前は俺の専属のメイドだ。ご主人様の言う事は絶対。いいな」

「え、しよ、晶さん？」

「ダメだよ簪。ご主人様を名前で、それも「さん」付けで呼ぶなんて、礼儀のなっていない

メイドにはお仕置きが必要だな」

言い終わるなり、晶は男根を乱暴に力強く肉壺に打ち込んだ。

「アンツ、あ……………」

「さて、もう一回聞こうか。簪、俺の言う事は絶対。いいね？」

「はい。ご主人様」

簪が恍惚とした雌の表情で答えると、今度は妹の好きな密着した体位で、肉壺全体を満遍なく擦りあげてピストン。奥の子宮口もグリグリと穿り返し、女の悦びを味合わせ  
てやる。

この後、浴場から寝室へと場所を変え、晶は文字通り朝まで更識姉妹を可愛がり続けた。

そして誰がご主人様なのかを、彼女達にしっかりと刻み込んでいくのだった——

PS

ちなみにメイドプレイはこの話の中だけなので、あしからず。

## 第10話 メロメロにされちゃった束さん

自他共に認める「天才」、篠ノ之束博士。

世界最高の頭脳、類稀なる容姿、細胞レベルでオーバースペックという身体能力に加え、男の視線を引き付けてやまないワガママボディの持ち主。

およそ敗北という単語から最も縁遠い人間の1人だが、そんな彼女が唯一負け越しているものがあつた。

「しよ、しよおお。もうダメ。ダメ。イク、またイク、いつちやうのっ!!」

自身の寝室でパート難原ナー晶に生まれたままの姿で、バックから肉壺に男根を捻じ込まれ、はしたない嬌声を上げさせられている。

この男に体を許してから、もう何回抱かれただろうか？

初めはベッドの中でも、対等だと思っていた。

しかし強化人間の底知れぬスタミナと持久力は、細胞レベルでオーバースペックという束の身体能力をして、抗いきれるものではなかった。

長く硬く太く反り返った男根は、束の肉壺をピッチリと押し広げ、淫らな衝撃を送り



込んでくる。カリ高の亀頭は墜壁を満遍なく擦りあげ、子宮の入り口をノックして、グリグリと刺激して、こじ開けて、女を蹂躪してくるのだ。

そんなものに毎日毎日犯され続けければ、ベッドの中での主導権がどうなるかは、言わずとも分かるだろう。

“天災”とすら言われ裏社会に恐れられる東博士は、ベッドの中では雄に蹂躪される雌でしかなかった。

愛液を垂れ流す肉壺に男根を突っ込まれ、後ろから豊かな双丘を揉みしだかれ、淫らかな声で鳴かされる一人の女だ。

勿論束も、ただ一方的に犯され続けた訳じゃない。

肉壺を蹂躪される前に、口と胸で男に奉仕して出させて——だがそれでも、男の無尽蔵なスタミナと持久力には勝てなかった。

一度肉壺に挿れられてしまえば、後はワンサイドゲームだ。

何度出しても硬いままの男根は、イッて敏感な肉壺をゴリゴリと擦りあげ、中出しでマーキングしながら女の弱点をこれでもかと責めてくる。

快樂の余りビクビクと震える腰を、男は両手で掴み女を逃がさない。

「いいよ。何回でもイかせてやる。イヤだって言っても、イかせてやる。俺を、こんなに夢中にさせて!!」

激しく突き出される男根が、与えられる淫撃が、束の女を剥き出しにしていく。

「いいよ。晶が満足するまで、何回だっでもいいよ。沢山出して。私にマーキングして」  
掴まれている腰が、男の動きに合わせて動かされる。より深く啜え込めるように。

その厭らしい動きに、男根が反応する。

「アーンツ、今、ビクンって」

「お前のそんな腰使いみたら、こうもなる。そのトロけた顔。もつと見せてくれ」

言うなり、晶は繋がったまま束を振り向かせる。

所謂、正常位というやつだ。

そして腰をグリグリと動かしながらデーパーキス。互いに舌を絡ませ、唾液を交換し、獣のように互いを貪り合う。

手は胸を揉み、勃起した乳首を抓りあげ、束を鳴かせ続ける。

「しよう、しようお」

束がトロけた顔で、譫言のように繰り返す。

それがまた愛おしくて、晶は束をまんぐり返しにして、上から男根をブチ込んでいく。  
男性優位の、女は征服されるしかない体位だ。

女性優位社会を作った本人が、男に征服されトロけさせられる。

皮肉だが、本人にそんな事は関係無かった。

愛しい男が与えてくれる快楽に、身も心も征服されていく。

突き込まれ、円を描くようにグリグリと責められ、イッて中出し腔内射精され、子宮を男の精液で満たされ、それでも終わらず責められる。

すると今度は、肉壺に男根が突き刺さったまま抱き上げられた。駅弁スタイルだ。

自身の体重で、男を深く啜え込んでしまう。

今までよりも強く、肉壺の奥に、子宮の入り口に、男の物がグリグリと当たり、腰がビクビクと震える。

束は反射的に、両手両足で晶に抱き着いた。豊かな双丘が男の胸板で、卑猥な形に潰れていく。

そして男が歩き始めると、肉壺をピツチリと押し広げている男根が、不規則に膣壁を擦りあげて女を責める。

——グリッ、グリッ、グリッ。

一歩ごとに、また押し上げられていく。

イッている途中でまたイかされて、イキ終わる前にまたイかされる。

さつきから腰はビクビクしっぱなしで、イッた回数なんてもう覚えていない。

そんな中で、晶が囁く。

「束、今日はどうして欲しい？」

最愛のパートナーは、女にお願いさせるのが大好きなのだ。

もうイきまくって、トロトロにトロけさせられ、止める事なんて出来ないと分かりきっていて、女にお願いさせる意地悪さんだ。

「きよ、今日は、ンツ!!」

男根がグリツと奥を小突き、言葉が中断させられる。

「どうしたのかな? このままスローペースの方が良いかな?」

だが晶は意地悪にも、こんな事を言う。

加えて少しだけ束を持ち上げ、男根が奥まで届かないようにしてきた。

今まで散々奥を責め立ててきたのに、急に止められたら、雌の器官がジンジンと熱を持ったかのように疼いて仕方がない。

だから少しでも快楽を貪ろうと、中途半端に挿入されている男根を、腰を揺らして扱いていく。

しかしそれは、束を焦れさせるだけだった。

腰を揺らして膣壁を男根で擦りあげればあげるほど、この圧倒的なもので奥を蹂躪して欲しいと思ってしまう。

「ただど駄弁スタイルで抱きかかえられている今、全ては男の思うがままだ。

「やん、意地悪。アンツ!!」

そして時折、気まぐれに奥が小突かれる。

快樂の波が決して引かないように、女を焦らす悪辣さだ。

「俺は束の、お願いが聞きたいな。それともこのまま、焦らしプレイの方が良いかな？」

こんな事を言われたら、束は言うしかない。

もう何度も何度もイカされて奥までトロけきつっているのだ。

ここまできたら最後まで蹂躪して欲しい。

そう思ってしまった束の口は、自然とお願いを口にしていた。

「今日はベッドで、抱き合いながら………」

「ならどうすれば良いか、分かるね？」

優しくベッドに降ろされ、今まで肉壺に突っ込まれていた男の象徴が引き抜かれる。

圧倒的存在感が無くなった事による喪失感。

それが束に、娼婦のように淫らな行動を取らせた。

はしたなく両足を広げ、男の前に淫貝晒し、両手で開きながら懇願する。

「晶の、そのおっきいチンポで、私のココを、エッチなオマンコを、突いてちょうだい。

ううん。突いて下さい」

「良い子だ」

焦らすようにゆっくりと、愛液でドロドロ口になつている長く硬く太く反り返った男根

が、再び女の中に侵入していく。

淫具はピツチリと押し広げられ、膣壁はカリ高の亀頭でゴリゴリと擦りあげられ、奥にまで届いたとき、肉壺は男のものでピツチリと隙間無く埋め尽くされていた。

そして晶はエツチなお願いが出来たご褒美とばかりに、束に覆いかぶさり抱きしめながら腰を動かし、ピストンを開始する。

出来上がっている体は正直だ。肉壺を擦りあげ、奥に男根を叩き付ければ簡単に押し上げられイッてしまう。

加えてディーブキス。

上も下も存分に味わい、決して逃がさないとばかりに力を込める。

すると束も抱き着き返してきた。更に両足で男の腰を引き寄せる。

最高の女が、はしたなく抱き着くほどに求めてくれている。

そう思うだけで、晶は燃え上がるのを押さえられなかった。

存分に女を蹂躪して、男の欲望を吐き出し、何度も何度もマーキングしていく。

何回犯つても物足りない。

こうして今日の営みは、束が意識を失うまで続けられたのだった――。

◇

暫しの時間が過ぎた後、眠っていた晶は、男根から伝わる快樂によつて目を覚ました。視線を下に向ければ、朝立ちでそり立つている男根を、四つん這いになった束が愛おしそうに啜えて、口全体を使って舐め回している。

所謂フェラチオというやつだ。

そこで晶は、一切我慢しなかった。

束の頭を掴んで固定して、口の中を精液で汚してやる。すると束は文句の1つも言わずに、全てを飲み込んでくれた。

「んふ、ご馳走様。朝から大量だね。寝る前にあんなに出したのに」

「お前にしてもらえるんだったら幾らでも出せるさ。その証拠に、ホラ」

ベッドの上に立ち上がった晶は、未だそり立つ男根を束の鼻先に突きつけた。

「そんなこと言つて。他の女の子相手でも絶倫のクセに」

彼女はピイツと横を向いてしまうが、視線はチラリチラリとこちらを見ていた。

なので晶は束の頭を撫でながら、ゆっくりとこちらを向かせる。

「否定はしない。でもホラ、まだこんなだから頼むよ」

昨日散々よがり狂わされた男根を目の前にした束の行動は、躡けられた女のそれだった。

男の望む通りに啞え、口全体を使って奉仕する。

「んっ、んんっ」

丹念に、丹念に男のものを愛撫していく。

そうしているうちに束は昨日の情事を思い出してしまい、手が自然と女の園へと伸びていった。

指がクリトリスを扱き、淫貝の合わせ目から割って入り、内側の肉壁を擦っていく。

ジワリと愛液が流れ、それはすぐにクチャクチャと音を立て始めた。

この姿に晶の男根はますます硬くなり、一度束の口に精を放つと、彼女を四つん這いにしてお尻をこちらに向けさせた。

そうして背後から覆いかぶさり、前戯なんて要らないほどトロけている肉壺に男根を突っ込んで腰を振る。

獣のような交わりだ。

だが束はそれを受け入れ、雌の器官で雄のものを扱きあげる。

「もう、アンツ、朝からしようながないんだから。ンツ。私に、たっぷりマーキングしてね」  
「本当、良い女だな」

長く硬く太く反り返った男根が、肉壺を隅々まで蹂躪していく。

送り込まれる快感に、瞬く間に腰砕けになる束。



でも男は逃がしてくれない。

淫靡な曲線を描く腰が両手でしっかりと固定され、男根が激しくピストンされていく。

そうして束が果てたところで、晶が耳元で囁いた。

「このまま、バスルームに行こうか」

「うん。でもこのまま繋がったままで」

「勿論」

晶は駆弁スタイルで束を持ち上げ、繋がったまま歩き出した。

一歩ごとにグリツ、グリツと女の奥が刺激されると、肉壺がキュンキュンと蠢いて男根を締め上げる。

はしたない愛液が、ポタポタと床に滴り落ちていく。

だがここに気にする者などいない。

そうして運ばれた束は、丹念に晶の体を洗い始めた。勿論タオルなんて無粋なものを使わない。全て手と体を使って直接だ。

だが洗われている間、この男が黙っているはずもない。

ボディースーツがついてヌルヌルになった手が、束の淫核を弄る。擦って、扱いて、ピントと弾き飛ばす。

「しよ、しよ。ダメ、上手く洗えないでしょ」

「そうか？」

とぼけたように答える男の手は止まらない。

それどころか、今度は乳首を弄り始めた。

「こ、こらあああ、アンツ、上手く、洗えないでしょう」

「いや、もう十分洗ってくれたから、今度は俺が洗ってあげるよ」

そのまま勃起している乳首と淫核がキュツと抓られる。

「アンツ、洗うところは、そこばかりじゃあ、ンツ」

「大事なところだからね、ちゃんと綺麗にしておかないと」

悪びれも無く答えた晶は、束を自身の膝の上に乗せ、今度は全身を隈無く洗い始めた。

自分の女なのだ。優しく、丹念に、丁寧に。エッチなところも弄りながら。

そして一番美味しいところは一番最後に。

「束。この中も、洗わせてくれないかな」

耳元で囁きながら、トロトロと愛液の流れ落ちる淫具の合わせ目を、指でなぞる。

「うん。いいよ。そしてまた、新しいのを注いで」

女の手が、男の象徴を優しく撫で上げる。

自分の女にこんな事をされて、燃えない奴はいないだろう。

晶は何度目か分からないキスをして、束と再び一つになるのだった――。



こうしてお互いを存分に食った後、遅めの昼食。

エプロンを着けた束がキッチンに立っていた。

既に手慣れたものなのか、危なげない手つきで食材を捌いていく。

とは言っても、手の込んだ物ではない。

トーストにサラダと牛乳という簡単なものだ。

だがそんな簡単な物ですら、初めは出来なかつたのだ。

それがいつの間にか出来るようになっていた。

人間、変われば変わるものである。

「晶。出来たよ」

「ん？ あ、ああ」

「どしたの？ ボーツとしちやって？」

そこで束はニヤッと笑った。

「ははあくん。この束さんのエプロン姿に見とれていたね？」

「うん。大正解」

恥ずかしげもなく答える晶。

パープルカラーのブラとショーツにホワイトカラーのエプロンという反則的な姿に、完全に見とれていたのだ。

食事を作っている最中じゃなかったら、間違いないく押し倒していた。

「ちよっ!? そ、そんな臆面もなく答えられたら、恥ずかしいじゃないか」

「自分の気持ちに嘘はつけない。完全に見とれていたさ」

「も、もう!! 焼いたトースト冷めちゃうから、早く食べてよ」

照れてプイツと横を向く東。

彼女とは、今まで何度も体を重ね、愛を囁いてきた。

人によってはこの程度の事で照れるなんて、と思うかもしれない。

だが晶は、こうした時に見せる東の表情が大好きだった。

(多分、だからだよなあ。こうして弄って、何回でも可愛がってあげたくなるのは)

取り敢えず昼食を終えたら、もう一回。

そう決めた晶は、東お手製の昼食をしっかりと腹に詰め込んでいくのだった――



## 第11話 貴族の主従はエロかった（第108話時点）

セシリア・オルコット。

イギリス代表候補生にして名門貴族の当主であり、世界に10人といないセカンドシフトパイロット。

美しい容姿と均整の取れた肢体に、気高く気品ある佇まいから、高嶺の華と言われている女性。

だが世間一般の評判が、必ずしも本人に当てはまるとは限らない。何故なら彼女の肉体は、その気高い精神性とは裏腹に、酷く淫らな性質を抱え込んでいたのだから。

ここはイギリスにあるオルコット邸当主の寝室。時間は深夜。

そのキングサイズのベッドの上で、当主セシリア・オルコットは薙原晶に抱かれていた。

言うまでもなく、彼女の男性経験は今日が初めてだ。

だからだろう。

男は時間を掛けて、女の緊張を解き解していった。

優しくキスと共に逞しい男性的な体で、柔らかで女性的な体が抱きしめられ、温もりに包まれる。

怖い事は何も無いとでも言うように、キス一つにもタツプリと時間を掛け、ゆつくりと服が脱がされていく。

胸も、アソコも、女の優しく、ゆつくりと、時間を掛けて愛撫していった。

浅ましい男性本位な愛撫ではなく、女性を良くしてくれる優しい手つき。

そうして徐々に高められた官能は、彼女に初体験の痛みを感じさせなかった。

いや、もしかしたら有ったのかもしれない。

しかしそれ以上の幸福感が、そんなモノを押し流してしまっていた。

(ああ。私は恐らく、とても幸せ者なのでしょうね)

彼女は初めて男に貫かれた時、そんな事を思っていた。

貴族社会にいれば、或いはＩＳ学園のような女性ばかりのところになれば、嫌でも

初体験は酷かった”等と言う話が聞こえてくる事もある。

それに比べれば、自分はどうかだろうか？

お姫様のように優しく扱ってもらい、望んだ相手と初めてを迎える事ができた。加えて名門貴族の当主ともなれば、意に沿わない相手が初めての可能性もあったのだ。まして自分はセカンドソフトパイロット。パートナーが政治的なパワーバランスで決めら

れてしまう可能性もあった。

ただどうして、凡そ自分が望みうる最高の形で女にして貰えた。

それがとても嬉しかったせいだろうか？

セシリアは極自然に、男を気持ち良くしてあげようと思った。

（確か殿方は、女性が腰を振る姿に興奮すると……）

誰かが寮に持ち込んでいた女性誌の片隅に、そんな記事があった。

だが初めて貰かれた体位は、同じ雑誌によれば正常位と呼ばれるノーマルな体位で、どちらかと言えば男性が動く体位らしい。

なので初めてを優しくオーガズムに導いて貰ったセシリアは、未だ硬いままの男根を  
中で感じながら、男に囁いた。

「晶さん。次は、私が動きますわ」

「初めてだろう。無理をするな」

「嫌ですわ。してくれた分は、してあげたいのです。私に、させてくれませんか？」

「そう言われて、断れる男なんていないよ」

女が自分とのSEXに積極的。男として、これほど嬉しい事は無いだろう。

セシリアが晶の腰に両足を絡め、抱き着き、男根を奥にまで咥え込んだまま横に転がる。途中、肉壺をピッチリと押し広げる男根が不規則に暴れ、敏感な粘膜を擦りあげて



いく。そうして送り込まれる快感に耐えながら、女は男に跨る騎乗位をとった。

世間一般では、女性上位と言われている体位だ。

しかし、何事にも例外はある。

彼の硬く、太く、長く、遅しく反り返った男根は、簡単に女の弱点子官へと届き、快樂へと導いていくのだ。

「あ、ん、んんっ。しょ、晶さん。奥まで、ピツチリ、ですわ」

雌の器官を圧迫される感覚に戸惑うセシリア。

だが今の彼女にとって、それはスパイスでしかなかった。

ピツチリと自身の中を埋め尽くされる感覚が、そのまま彼の気持ち良さを表しているようで、もつと気持ち良くしてあげようと、自然と腰を振り始めてしまう。本人も無自覚なまま、子宮の疼きを鎮めようとして。

「いいよセシリア。その姿、凄い興奮する」

「ほ、本当ですか？」

「ああ」

「ンツ、よ、良かったですわ。本で、殿方はこういう姿に物凄く興奮するって、あつたの  
で」

「へえ。でもそれは合っているようで、微妙に違うかな」

言葉と共に突き上げられた男根が、愛液で濡れた肉壺に新たな快楽を送り込む。

「そ、そうなの、アンツ——ですか？」

「そうだよ。男はね、女の子が気持ち良くなっている姿を見て興奮するんだ。だから——」

晶は自身に跨り、男根を咥え込むセシリアの腰を掴み、少しだけ強くピストンを始めた。

「——もつと見せてくれないか。お前が乱れる姿を。もつと見たいんだ」

逞しい男根が、雌の器官を虐め始める。

大きく膨らんだ亀頭が肉壁を満遍なく擦りあげ、子宮口を突き上げ、送り込まれる淫らかな衝撃が、奥の疼きに届いていく。

その度に、少しずつ淑女という仮面が剥がれ落ち、奥に潜んでいた雌の本性が覗き始めていた。

（あああ、いいですわ。そう、もつと、もつと、こう。アンツ!!）

男の動きに合わせて、腰の動きを変わっていく。

突き入れられる男根が、一番気持ち良いところに当たるように。

気付けばセシリアは、淑女にあるまじき淫らさで腰を振っていた。

心のどこかで「はしたない」とは思うのだが、愛しい男が与えてくれる快楽に抗えな

い。

そして気高い淑女が恥ずかしがりながらも、自らの肉壺で男根を扱いてくれる姿は、晶を大いに興奮させていた。

「セシリア」

「ンツ、あ、な、なんですの？」

「もつと、気持ち良くしてあげる」

「もう、もう沢山してもらってますわ」

「もつとだよ」

言い終えるなり晶は体を起こして、もう一度彼女を押し倒す。

いわゆる正常位だ。

だが今回は初めて貫いた時とは違い、覆いかぶさりキスで唇を塞ぎながら、ねつとりと腰を動かして女の肉壺を掻き回していく。

淫らで厭らしい責め方だ。

そして流れ出る愛液がベッドを濡らし、快樂の余りに離れてしまった女の口から、淫らな声が紡がれていく。

気高き名門貴族当主の寝室に、淫らな声が響き渡る。

「ンンツ、んっ、ンンンンンツ、————はあ!! 晶さん、ダメ。ダメです。それ、

ダメですわ!!」

硬く反り返った長く逞しい男根が肉壺子宮の奥口をグリグリして、粘膜を満遍なく擦りあげたかと思えば、不意打ちのようにまた奥が責められる。セシリアは、一気に押し上げられていった。

（奥が、奥がキュツって。いいですわ。アンツ、これが男の人）

そうして再び征服された彼女の体から、力が抜けていく。

だが男のモノは、まだ硬いままだった。

それが分かった時、セシリアはつい先ほどまで処女だったとは思えないほど、淫らな顔と声で囁いていた。

「晶さん。遠慮なく、私の中で果てて良かったのに」

「嬉しい事を言ってくれる。なら、次からは遠慮なく」

「ええ。拒むくらいなら、初めから抱かれませんか」

そうして晶が再び動こうとしたところで、セシリアの脳裏に、常に彼の傍らにいるもう1人のこと。シャルロットのことが過った。

最近ふとした拍子に、妙な色気を感じるのだ。

なので「もしや」と思い、尋ねてみる。

「ところで、1つ聞いても良いですか？」

「何だ、急に？」

「もしかして、シャルロットさんにも手を出したのですか？」

並大抵の男であれば、ここは誤魔化したかもしれない。

情事の最中に女の側から別の女の名前を出されるなど、心臓に悪い事この上ない。

だが晶は平然と、それでいて一切嘘をつかなかつた。

「ああ。もう手を出している。そして何度もこういう事をしている。呆れたか？」

「いいえ。むしろ納得しましたわ。だって最近、妙に色っぽいんですもの。それに権力者が妾を持つのは、ある意味で由緒正しき伝統。私も貴族ですから、その辺りは弁えていますわ。それよりも私が許せないのは、あの子がこんな気持ちの良い事を、私よりも先に何回も味わっていた事です。ですから今日は——」

セシリアが再び男に抱き着き、体勢を入れ替える。

騎乗位だ。

「私だけを、見て下さいね」

「分かった」

すると彼女は、男を墮落させる悪女の如き淫靡さで、再び腰を振り始めた。

ゆっくりと男のモノを、己の肉壺で抜くかのように。

それでいて自分の気持ち良いところにも押し当て、奥の疼きを慰めていく。

だがそれは一向に消えていかない。むしろ、より強くなつていく。だからだろうか。

セシリアは、極自然にお願いしていた。

「晶さん。動いて、動いて下さい。私の中に入っているこの逞しいモノで、私の奥を、突いて、突いて下さい」

つい先ほどまで、処女だったとは思えない程の淫らさで。

この後、セシリアは望み通りに可愛がられた。

奥の疼きが消えるまで、何度も何度も。

正面から抱き合いながら。犬のように後ろから。時には愛液でドロドロになった男のモノを口を使って綺麗にし、それがまた肉壺にブチ込まれる。

そうして犯され続け、今度は扉に手をついた姿勢、所謂立ちバックで犯されている時に、晶がセシリアの耳元で囁いた。扉の外に聞こえないように、小さな声で。

「なあ、気付いてるか？」

「え、な、何をでしようか？」

息も絶え絶えに、貫かれたままの彼女が振り向く。

だがその最中も、晶は責めるのを止めない。

奥まで突っ込んだまま、グリグリと女の弱点を虐めてくる。

「扉の向こうでさ、チエルシーさんが聞き耳立ててるってこと」  
「え？」

セシリアの中が、キュツと締まる。

「自宅周囲に展開させてもらった無人機(※1)が、この部屋に近づく人間を感知してね。追跡させていたんだ。そしたら——」

セシリアの眼前に、空間ウインドウが展開される。

そこにはいつも自分を元気づけてくれる、世界で最も信頼するメイドの姿があった。だが今は、普段からは考えられないような乱れた姿を晒している。

扉の前に座り込み、メイド服のスカートの裾を口に咥え、右手がショーツの中で淫靡に蠢き、流れ出た愛液が床を濡らしていた。更に胸元は開かれ、そこから覗く清楚なブラはその役目を放棄し、露わになった乳房は己の左手で慰められている。尖端の乳首など、完全に勃起し、更なる愛撫を待ちわびているようだった。

「ああ。チエルシー、あんなに乱れて……………」

するとセシリアは何を思ったのか寝室の扉を開け、男に貫かれている乱れた姿を、自らメイドの前に晒した。

「お、お嬢様?！」

突如開かれた扉に、そして主の乱れた姿に驚くチエルシー。

しかしセシリアは、メイドにそれ以上を言わせなかった。

「ごめんなさいね。ンツ、アアンツ、貴女がこういう事に、こんなに興味があるなんて知らなかったの。——でも、ンツンツ、主の情事を覗くだなんて、メイドとしてはいけない事よね。アンツ」

主が貫かれたまま半歩前に進むと、男根が肉壺から少しだけ抜ける。

だが男はすぐにその隙間を埋め、肉壺の奥を小突く。

それを数回繰り返しメイドとの距離が無くなったところで、主は優しく、淫靡な罰をメイドに与えた。

「チエルシー。そのままショーツを脱いで、アアアンツ、そこがどうなっているのか、教えなさい。主の情事を見てどうなったのか、ンツ、何をしていたのか、アアツ、説明してくれないかしら？」

真つ当な理性が残っていれば、従うはずの無い命令だ。

だが晶とセシリアの交わりを盗み聞きし、古風な鍵穴から中を覗き見していたチエルシーは、すっかり2人の淫らな姿に当てられてしまっていた。

「は、は、は」

顔を真つ赤にしながらも、チエルシーはショーツのサイドストッパーを解き、己の秘部を主と男の前に晒す。



「は、初めは、薙原様がお嬢様に乱暴しないかを監視しているつもりでした。ですが、御二人の声が聞こえてきて……………お嬢様の余りに気持ち良さそうな声に、我慢出来なくなつて……………」

チエルシーの手が、己の秘部へと伸びていく。

そうして細い指が淫核を抜き、肉壺の中へと入り、クチャクチャと厭らしい音を立て始める。

「んっ、んんっ、こ、このように自分で……………」

「アーンツ、素直ね。空いている片手は、ンツ、どうしたのかしら？」

男に肉壺を小突かれながら、セシリアはメイドを追求していく。

「あ、空いている手は、こうして……………アアツ……………乳首を弄つて、慰めていました」

「ふふ。ねえ晶さん。ア、アアーンツ、こんなエッチなメイドには、躰けが必要じゃないかしらっ。」

「そうだな。でもその前に……………」

言いながら、晶は繋がったままのセシリアを抱きかかえた。

所謂、逆駅弁スタイルだ。

「……………まずはお前を満足させないと。ホラッ、自分のメイドの前で、存分にイくと良い」

硬く反り返っている男根がピストンされ、セシリアの奥に何度も突き刺さっていく。そして抱きかかえられている彼女に、抗う術は無い。

男の良いように奥をグリグリと虐められ、既に出来上がっている肉体は、あつという間に押し上げられてしまった。

そうしてセシリアを満足させた晶は彼女を降ろし、チエルシーの眼前に、未だ逞しいままの男根を突き付ける。主の愛液で濡れた男根だ。

「さて、綺麗にしてくれないか？」

すると彼女は恐る恐る手を伸ばして男根を掴み、そつと亀頭に口づけし、主の愛液を舐め取っていく。

明らかに男慣れしていないぎこちなさだ。

しかし、そんなものを吹き飛ばす色気があった。

美人のメイドが、己のモノを丹念に舐めて、綺麗にしてくれるのだ。

加えて半分脱げているメイド服。下手な全裸よりエロイ。

これで萌えない男はいないだろう。

更に高ぶってしまった晶はチエルシーをその場で立たせ、立つたままブチ込む事にした。

所謂、立位というヤツだ。

「あ、薙原様………」

男根が淫貝に押し当てられると、彼女の体がビクリと震える。

しかしその目には、どこか期待感があつた。

だから晶も都合の良い言い訳を口にして、そのまま女を蹂躪していく。

「これは、主公認の躰けだからな」

「はい。主の情事を覗いたメイドに、お情けを——」

ズンツ。

言い終わる前に、硬く太く長く逞しく反り返っている男根が、自慰で慰められていた肉壺に突き入れられる。

勢いそのままに子宮の入り口が突かれた瞬間、チエルシーの視界は一瞬真っ白になつてしまった。

だが男の行為は止まらない。

分かつていた。

これは躰けであり、お仕置きなのだから。主のように優しく抱かれるはずがない。

しかし、不快なものでは無かつた。

自分で慰めていては決して届かないところを、女の弱点を的確にズンズンと責め立てて、瞬く間に押し上げてくれる。

そして気付けば、チエルシーは目の前の男に抱き着き、抱きかかえられていた。所謂、駅弁スタイルだ。

男根が奥の奥にまで突き入れられ、女は為されるがままの体位。

グリグリされピストンされ、次々と送り込まれる快感が、まともな思考を許さない。ただひたすらに、快楽に溺れていく感覚。

（お、お嬢様は、こんな快感をこれから先ずつと……）

味わえる。羨ましい。

そう思ってしまった。メイドとして、あるまじき感情だろう。

この感情は、心の奥底に閉じ込めて蓋をするべきだ。だが、出来なかった。

突き入れられる男根が、雌の本性を呼び覚ましていく。

（主の幸せは、私の幸せ。でも、でも私も、こんな風に!!）

情熱的に愛されてみたい。

そんな思いが体を突き動かしたのか、腕にギュツと力が入り体を密着させていく。

すると晶は駅弁スタイルのまま当主用ベッドまで歩いて行き、今度はそこでチエルシーをまんぐり返しにして、上からの種付けプレスを始めた。

力強く打ち込まれる男根に、雌の器官が悦ぶ。腰がビクビクと震え、あつという間に押し上げられていく。だが彼女は耐えよう等とは思わなかった。

(だってこの人は――)

望めば望んだだけ、何回でも可愛がってくれる。

そんな確信があつたからだ。

だから彼女は、演じる事にした。

悪いメイドが、ご主人様にお仕置きされるのは当然の事なのだから。

そうしてこの後はセシリアも加わり、3人は朝方まで交わり続けたのだった――

※1：無人機

第108話で登場したスーパーシミタールのこと。

登場作品：アーマードコア プロジェクト・ファンタズマ

アーマードコア ネクスス REVOLUTION DISC

クローム製二脚型MTの「シミター」に飛行ユニットを取り付けたタイプ。

本来の装備はチェーンガンとプラズマキャノン二門。

原作では限定的な飛行性能だが、本作中では偵察機として扱えるだけの飛行性能を持つように改良されている。



## 第12話 カラード、1人目

登場人物

社長（薙原晶）

世界最強の単体戦力“NEXT”を駆る青年。

強化人間であるため、身体能力は常人を遥かに上回る。

勿論、アッチの方もすこぶる強力。

ユーリア・フランソワ

元IS強奪犯。

腰まである燃えるような赤髪と、勝気な瞳が印象的な女性。

ボンツキキュッボンツという男好きする体と容姿の持ち主。

性格は外見通り勝気で高飛車。男は自分に貢ぐ為に存在すると思っ

ている女王様。

その他

首輪

元IS強奪犯にISを与えるにあたり、作り直された監視用アイテム。

着けられた対象はバイタルデータや位置情報、言動だけでなく、思考情報までマスター設定された人間に筒抜けになってしまう。

とある日の夜。カラード社社長室。

そこで全裸の女が、デスクに組み伏せられ犯されていた。

バックから硬く、太く、長く反り返った男根が、女の肉壺を蹂躪している。

淫裂はピツチリと押し広げられ、流れ出た愛液が、スラリと伸びた脚を伝わり落ちていく。

そして淫撃が奥を貫く度に、女の嬌声が部屋に響き渡っていた。

「どうしたんだ？ 男になんて負けないんじゃないのか？ ホラ、どうなんだよ？」

「ここ、これからよ。アンツ、ンン、ンア、す、すぐに搾り取って、アアン!! やるんだからあ」

「そうなのか？ なら早くしないと、またお前の負けになるぞ？ もういくの、何回目だ？」

女の腰がビクビクと震え、肉壺がキュツと締まってく。

「いつ、イッてなんかないわ。ちょっと、楽しませてあげてるだけよ。今までの男は、み



んな私に夢中に——アーンッ!!! ダメ、それだめえ」

男は、女に言葉が続けさせなかった。

男根を力強く奥まで叩き込み、ついでに豊満な胸の頂もギュツと抓って苛めてやる。

「ホラ、どうしたんだ？ 夢中にさせてくれるんじゃないのか？」

「む、夢中に……アーンッ、ああ、ンンッ、させてるじゃない。頑張つて、腰振っちゃつて。ンンッ、お、男なんて、突っ込んで、腰振る事しか考えてないんだからああ」

「そうだな。こうやって突っ込んで、女の中内を蹂躪して、鳴き声を聞いてるとそれだけでいきり立つてくる」

逞しく反り返った男根が、肉壺の中を満遍なく擦りあげていく。

ビクツと震える腰がガツチリと掴まれ、逃げ場の無い女はされるがままで。

だが、急に男の動きが止まった。

「アーンッ、どうしたの？ もっと腰振りなさいよ。腰振つて、膣内に白いのドピュツて出さないよ。男なんて、それしか出来ないでしょ」

「それも良いんだけど、お前みたいな奴に突いて下さい。中出しして下さいって懇願させるのも、男は大好きなんだよ」

「ンッ、最低。女を屈服させて喜ぶのね」

「そうさ。お前がちゃんと言えたら、このまま朝まで可愛がつてやる」

「ふん。なら、エッチはここま————アンツ!! きゅ、急に奥を突くなあ。ンツ、ハア、ダメよ。バックからなんて、フェアじゃ、んああああ、ないじゃない。こんな、一方的に突かれるだけの態勢なんて、ンツ、ダメよ」

「そうか? お前のは俺のをキュと締め上げて責めてきてるぞ? ホラツ、分かるだろう? こうやって小突く度に、膣内がキュツって締まって、俺を責めてくるぞ」

主導権がどちらにあるかなど分かり切った話だった。

だが女は認めない。認められない。

今まで男に傳かれる事が当然だった女は、セックスでも男を格下に見てきた。

散々貢がせて、気に入った男にだけ奉仕させてきた。

しかし今は違う。

(アンツ、こんなので、ンツ、ずっと突かれたらああ)

逞しく反り返ったカリ高の男根が、気持ち良いところを何度も何度も擦りあげて子宮口を小突いてくる。

身体を突き抜ける快感が反抗の意思を削り取り、獣のように犯されるのを受け入れてしまう。

されるがままに蹂躪され、愛液を垂れ流していく。

(く、悔しい。アンツ、でも、でも何で、アアアアツ、こんなに気持ち良いのよお)

男根が突き入れられる度に、肉壺が被虐の喜びを伝えてくる。悔しいと思つても、肉欲には逆らえない。

腰が自然と、男のものを深く啜え込もうと動いてしまう。

すると男の動きが遅くなり、じつくりと女の中を味わう動きに変わった。

快楽はあるが、イけるほどではない。

何て意地悪な男だろうか。

「欲しいんだつたら、ちゃんとおねだりしないダメだろう？」

しかも女が勝手に快楽を貪れないよう、両手で腰をガツチリと押さえている。

動いて、突いて、膣内を白濁で染めて欲しいのに、してくれない。

「早くう、はやく動きなさいよお。男なんて、アンツ、それしか………アアアンツ、できないんでしょお」

「そうだなあ。男なんて、確かにこうやって突つ込んで、腰振るだけだもんなあ」

「そう、よお。ンツ、だからあ、アンツ、はやく、しなさいよお。早く動いて、ドピュツて出しなさいよお」

だが男は応えない。

ゆつくりと奥をグリグリし、イかせない程度の快楽を送り込むだけだ。

「ひ、卑怯者お。アンツ、ンンツ、抵抗できない女に、懇願させるなんてえ………」

「卑怯？ 何がだ？ お前から挑んできた勝負だろう？ 3回先にイッた方が負けつてな。しかも先に、フェエラもパイズリもさせてやったじゃないか。タツプリとハンデをやったんだ。十分にフェアだろう。ん？」

気まぐれに男根が力強く突き入れられ、不意打ちの淫撃に艶声が漏れる。

「アアアンツ!! ダメ、だめよお。奥ダメえ」

「なにがダメなんだ？ ホラ、何がダメなんだよ？ 言ってみろ」

男は奥を小突きながら、はしたなく勃起した乳首と淫核をギユツと抓った。

すると女の肉壺が一際強くキュツと締まり、勢いよく噴き出した潮が床を濡らしている。

隠しようもなく、簡単にイカされてしまったのだ。

「気持ち良かったか？」

女は小さく、だが確実に肯いた。

本当はもう、何度も何度もイカされて限界だったのだ。

無尽蔵な体力と、硬く、太く、長く、逞しく反り返った男根。今迄の男など比べ物にならない。こんなもので責められ続けたら、どんな女でも耐えられないだろう。

(もしこれで、朝までされたら……………)

想像して、ユーリアの子宮がキュツと疼いた。

蹂躪される雌の悦びを感じてしまう。

(欲しい……………)

膣を支配する巨大な圧迫感が、否応なく雌という事を自覚させてくる。

そして女は、気付いていなかった。

今自分がどんな顔で、どんな仕草をしているか。

蕩けた顔で後ろにいる男を見て、無意識に尻尻を突き出していることに。

今まで誰にも見せた事のない、媚びた女の姿だ。

すると男は、女を躡るべく腰を動かし始めた。

「アツ、ンンツ、イイ、いいのお。もつと、もつとお」

「随分しおらしくなったな。良いだろう。ご褒美だ。このまま朝まで可愛がってやる。

気絶しても、ずつとな。お前はもう俺のモノだつてことを、身体に教え込んでやる」

「あつ……………」

首輪を嵌められる前であれば、誰であってもこんな台詞は許さなかった。

しかし今は、この男の所有物。人間扱いしてくれてはいるが、所有物なのだ。

首輪という絶対的な強制権がある飼い主に、逆らつてはいけない。

内心でそんな言い訳をしながら、その実望んで、女は男に可愛がられ続けたのだった。



ユーリア・フランソワが晶に抱かれる切っ掛け。

それは「天災」篠ノ之東が、気まぐれに彼女のプライベートを覗き見た事だった。

「おやあ、おやややあ？へえ、犬っころも発情するんだねえ」

眼前の大型ディスプレイに映し出されているのは、ベッドの上でオナニーしているユーリアだった。

シャワーから出たばかりなのだろうか？

髪は濡れ、身に着けているのは首輪だけ。

そんな姿で大股開きになり、淫裂に指を突っ込み慰め、それでも足りないとばかりにもう片方の手で淫核を苛めている。

本気で感じているのだろう。

肉壺からは愛液が垂れ流され、淫核も乳首もはしたなく勃起していた。

「ふうん。何を思っただけなのかなあ？」

首輪の機能を使い、心の声をスピーカーに流してみよう。

『イ、イイのお。アンツ、もっと、もっとお。もっと奥までえ』

指が激しく動き、クチャクチャという厭らしい音が漏れ出る。だが女は満たされない。

更に激しく淫核を扱き、乳首も扱き、肉壺に指の根元まで突っ込むが、一番弄りたいところまで届かない。

燃え上がった分だけ、奥の疼きが強くなっていく。

『ダメ、指じやダメ。届かない。博士も、更識の姉妹も、イギリスとフランスの代表候補生も、良いわね。好きな時に、ンンッ、抱いて貰えて……』

そんな思考が漏れ出てきたので、気になった束は思考情報を映像化してみた。

すると――。

「うわあ………。私達って、こう見えてたんだ」

映し出されたのは、社長室から出てきた晶の女達だった。

ある時は自分<sup>※</sup>。

ある時は楯無。

ある時は簪。

ある時はセシリア。

ある時はシャルロット。

妙に艶っぽい表情で、完全防音の社長室から出てくるところだ。何があったかなど一

目瞭然だろう。

ちよつと恥ずかしい束であった。

『ンツ、イク。イキそう。でももつと、アアン、もつとお』

だから悶えるユーリアを見て、ちよつとした悪戯心が芽生えた。

こつちだけ恥ずかしい思いをするなど割に合わない。

お前の恥ずかしい姿も見せろ。

姿だけじゃなく、嘘をつけない内面でどんなはしたない事を思っているのか、暴いてやる。

そんな思いから彼女の深層心理を映像化してみたところ、結果はかなり予想外なものであった。

「へえ〜。女王様気質でSかと思つてたけど、実際は屈服させられたいMだったんだ。

これはイイね」

ディスプレイに映し出されたのは、晶に組み伏せられて犯されて、女として蹂躪されている姿だった。

日頃男に対して強がっているクセに、強い自分を組み伏せられる男に支配されたいという矛盾に満ちた欲望だ。

「可愛いところあるじゃない。あ、だから日頃から、誘うような事を言つてたんだ。ア



レ、本気だつたんだあ」

ニヤニヤした笑みが止まらない。

自分の男に隷属したいなら、協力してやろうじやないか。

二度と離れられなくて、死ぬまでこき使つてやろう。

「ふふう〜ん。どうしてやろうかなあ〜」

こうして「天災」は、この雌犬をどうやって調教してやろうかと考え始めたのだった。



1週間後、ユーリアの自室。

一仕事終えた部屋の主は、何だか妙な気分になっていた。

(最近……私、欲求不満なのかしら?)

あの男藤原晶に女として蹂躪され、悦んでいる夢を見た。

朝起きたらショーツがぐっしよりと濡れ、乳首も陰核もはしたなく勃起していた。

仕方ないので朝から慰め、火照った体を冷やそうとシャワーを浴びたら、いつの間

に敏感な部分にシャワーを押し当てていた。

(本当、どうしたのかしら?)

制服を脱ぎ捨て下着姿になったユーリアは、鏡の前に立った。

(私も、結構いけてると思うんだけどなあ)

黒いシースルーのブラとサイドストツクパータイプのショーツ。色とデザインを合わせて買った、ガーターベルトとストツキング。

男なら誰でも振り向いてしまうだろう。

だが社長は、見向きもしない。手を出してくれない。

(わ、私ったら、何を考えて……………)

だが一度考えてしまうと、妄想が際限なく膨らみ始めてしまった。

夢の事を思い出してしまう。

(こんな風に、触って……………)

指がお腹を撫で、次第に下へと下がっていく。

少しづつ、少しづつ。

そうして、そろりそろりと下着の中に入り込み、硬くなり始めている陰核をギュツと

抓る。

「ンツ」

声が出てしまった。

でも、この部屋には誰もいない。だから、大丈夫。

ギョツギョツと抓り、すぐに物足りなくなつて、淫裂に指を突つ込む。

浅く、深く、浅く、深く。

指をピストンして膣壁を擦り、快感を貪る。

(足りない。全然足りないのお)

もつと奥を逞しい男根で力強く擦りあげて、突いて、蹂躪して欲しい。指の感触じゃ全然足りない。

一度火照り出した体は、肉壺に男を受け入れたくてたまらなくなる。

(この奥を、ンンツ、白いのでドロドロにして、アアンツ、染めて、汚されて……………)

組み伏せられる自分の姿を想像して、チンポの代わりに指で掻き回して、クチャクチャと厭らしい音が室内に響いていく。

何回イツても物足りない。

男が欲しい。

でも有象無象はイヤだ。

自分より強くて、護ってくれる人が良い。

(アンツ、そんなのお……………アツ、ンンツ、1人しかいないじゃない)

社長の姿が脳裏を過ぎり、垂れ流された愛液がシートを汚していく。

だが本人は気にしていなかった。

自分自身を慰める浅ましい行為に、更に妄想が掻き立てられ乱れていったからだ。

そしてこの様子は、一部始終余さず記録に残されていた。

蕩けた顔も、厭らしく勃起した乳首も淫核も、愛液を垂れ流す雌穴を指で掻き回す姿も、全て。

首輪という絶対的な監視装置だけではない。部屋にも設置されていた高性能カメラやマイクによって、あらゆる方向からユーリアの痴態は、記録に残されていたのだ。

「ふふうん。効果覲面だねえ」

束は自室で、ニヤニヤと笑っていた。

彼女にした細工は簡単だ。

ISというのはパイロットの身体情報を全て管理している。その応用で、深層心理と感覚系を少しばかり弄ったのだ。

具体的に言うと、行なったのは2つ。

1つは電腦ダイブ技術の応用で、本人の願望に沿った夢を見せた。毎晩毎晩、夢の中で晶に組み伏せられ、女である事を刻み込まれていたのだ。そして記憶には、少しだけ残るようにしておいた。理由？ いきなり全部残してはつまらないだろう。少しずつ記憶に残し、淫らな記憶が徐々に積み重なっていく様を眺めて楽しむためだ。だが記憶

は少しずつでも、体は覚えている。起きた時、さぞかし女の部分が疼いて仕方が無かつただろう。

もう一つは乳首に淫核、膣内といった女の部分の感覚を鋭くしてやったのだ。朝起きてムラムラしているところに、下着がこすれただけでも感じるほど敏感になっていたら、どうなるだろうか？ 結果は予想通り。盛った雌犬の出来上がりだ。

「さて、もしたら後は仕上げかな」

元々抱かれたがっていた女を躡けるなど、自分の男にとっては朝飯前だ。

何せ細胞レベルでオーバースペックという自分ですら屈服させられたのだ。

普通の女など、そう長くは持たないだろう。

そんな事を思いながら、束は晶を呼び出したのだった——。



こうして束に仕込まれ晶に蹂躪されたユーリアは、身も心も忠実な配下へとなっていた。

男に尽くし愛され組み伏せられ犯される。

他人から見たら歪な関係だが、当人達にとっては関係無い。

そして男を格下に見ていた彼女は、今日も――。

「ダメツ、ダメえ。もう、もうう」

社長室で犯されていた。

既に制服は剥ぎ取られ、中に着込んでいたISスーツ姿だ。

だがIS学園指定の地味なスーツではない。

東が下僕の為にデザインした、黒いハイレグタイプのスーツだ。しかも胸元と背中が大胆にカットされ、女としての魅力が存分に引き出されるようになっていた。

しかもこのスーツは下僕用に作られただけあって、着たままできるように色々と工夫がされていた。

まず男を受け入れやすいよう、クロツチの部分が開くようになっていた。しかもISの思考制御システムと結びついてお陰で、ユーリアが晶を受け入れると思えば、それだけでクロツチ部分が開いて淫裂が露わになる優れものだ。

またこのスーツは、女を淫らに罰する拘束具としての機能も持っていた。飼飼い主の気分次第で、女の部分を自由に刺激できるのだ。乳首や淫核をずっと刺激して厭らしい気にさせたり、肌そのものを敏感にさせたり、オプシオン機能でパイプをスーツの内側に固定して悶えさせたり。女を苛めるためだけにあるようなスーツだ。だがISスーツとしての性能が疎かにされている訳ではない。むしろ既存の製品を遥かに超える性

能を実現していたのだから、まさしく技術の無駄遣いともいうべき一品だった。

そんなスーツに身を包んだ彼女の顔は、既に蕩けた雌顔だ。

まんぐり返しで男根を受け入れ、突き入れられる淫らな衝撃に嬌声を上げている。

「もう、何なんだ？」

晶が意地悪に尋ねた。

答えなど分かり切っている。だがそれでも言わせたい。

蹂躪され支配されて喜ぶこの女に、淫らな言葉を言わせておねだりさせたいのだ。

「イキそうなの。だから、アンツ、ンンツ、中に出して下さい。ご主人様あ」

濡れそぼった肉壺に男根が突き入れられる度に、ジュポジュポと厭らしい音が響く。

そんな中で行われた懇願は、酷く淫らで嗜虐心を煽った。

「良いだろう。だが一回じゃないぞ。今日は何回まで耐えられるかな？」

「頑張るから、アンツ、沢山、アアアアンツ、沢山……して、ンンツ、下さい」

結果論だがユーリアにとって、晶はまさしくご主人様と呼べる人間だった。

世界最強の単体戦力。絶大な社会的影響力。必要な装備を必要なだけ与えてくれる

器量。そして何より、女をどこまでも蹂躪して可愛がってくれる無尽蔵な体力。夢物語

にしかないような人間だ。

(それが私のご主人様。離しません。こんな女にした責任、とって下さいね)

そんな事を思いながら、ユーリアは晶に犯され続けたのだった——。



# 第13話 カラード、2人目

登場人物

社長（薙原晶）

世界最強の単体戦力“NEXT”を駆る青年。

強化人間であるため、身体能力は常人を遥かに上回る。

勿論、アッチの方もすこぶる強力。

ユーリア・フランソワ

元IS強奪犯。

腰まである燃えるような赤髪と、勝気な瞳が印象的な女性。

ボンツキユツボンツという男好きする体と容姿の持ち主。

性格は外見通り勝気で高飛車。男は自分に貢ぐ、為に存在すると思っっている女王

様。

だったのだが、前回のお話で晶の毒牙にかかり忠実な下僕となった。

今ではすっかり押し倒されて悦ぶ雌犬。

エリザ・エクレール。

元IS強奪犯。今回の被害者。

クセの無い銀髪のセミロングに切れ長の瞳を持つ、見る者にどこか冷たい印象を与えている女性。

外見通り怜悯な性格だが、損害は最小限と仲にしようとする苦勞人思。  
ハウンドチームのリーダー。

### 小道具

#### 首輪

元IS強奪犯にISを与えるにあたり、作り直された監視用アイテム。  
着けられた対象はバイタルデータや位置情報、言動だけでなく、  
思考情報までマスター設定された人間に筒抜けになってしまう。

#### 試作ISスーツ

束さんが下僕用に作ったエロ機能満載のISスーツ。  
デザインからしてエロい。

試作第一号は胸元と背中が大胆にカットされたハイレグタイプ。  
ユーリアに与えられた。

ちなみにどのくらいエロいのか、ものすごくザックリ言うところ……。

・男を受け入れやすいよう、クロツチの部分が開くようになってる。

ける。  
 ・ I S の思考制御システムと結びついているため、クロッチは女が望むだけで開

ける。  
 ・ クロッチだけでなく淫裂も一緒にくぱあして男に女の奥まで見せる事ができ

る。  
 ・ マスター設定された人間は、装着者の女の部分を自由に刺激できる。

例えば乳首や淫核をずっと刺激したり、肌そのものを敏感にさせたり e t c e

t c .

だが I S スーツとしての性能が疎かにされている訳ではない。

以前箒ちゃんに渡した小型シールドシステム（の改良版）が内蔵されているため、肌が見えている部分でも対人兵器レベルなら防げるといふ反則的防御力を実現している。

なおエネルギー供給は首輪から行われるため、ハウンドチームが使う限り、実質エネルギー切れ無しというチートな一品。

では、本編をお楽しみ頂ければ幸いです。

エリザ・エクレールが薙原晶に抱かれるようになった切っ掛け。

それは彼とユーリアの交わりを見てしまったことだった。

時間は夜。場所はカラードのエクササイジングルーム。

寝る前に少し体を動かそうと思って訪れたそこで、ユーリアが彼に激しく犯されていたのだ。

(えっ!?! 嘘でしょう?)

思わず物陰に隠れて、まじまじと見てしまう。

あのユーリアが、と思わずにはいられなかった。

勝気で高飛車。男は自分に貢ぐ為に存在すると思っっている女王様が、正常位で貫かれながらキスをせがみ、両足を男の腰に回して男根を深く受け入れている。

嫌がっている様子は欠片もない。

同性の目から見ても、完全に蕩けた雌顔だ。

(それにあのISスーツ……)

ユーリアが身に着けていたのは、最近与えられたという試作ISスーツだった。

胸元と背中が大胆にカットされた黒のハイレグタイプ。

確か事前の説明では、布面積は減っているが小型シールドシステムが内蔵されている為、IS非展開時でも対人兵器レベルなら完全に防げると言っていた。またシールドエネルギーは首輪から供給される為、ハウンドチームが使う限りエネルギー切れも起こらないという反則的性能だ。

だがそんな一品も、今はユーリアの痴態を彩るアイテムでしかなかった。

大胆にカットされた胸元ははだけられ、豊かな双丘とその先端が、男によつて弄ばれている。

(どれだけ盛ってるのよ)

エクササイズルームに嬌声が響き、滴り降りた愛液が床を濡らしていく。

(でも、気持ち良さそうね……………)

ユーリアの腰がビクビクと震え、イッているのがよく分かる。

しかし男は突くのを止めない。

イッている肉壺に更に男根を突き入れピストンして、女を休ませない。

何度も何度も蹂躪してそれでも飽き足らず、今度は女を上に乗せて騎乗位で責め始めた。

するとユーリアは男に抱き着き、キスをせがみだした。

その時に、エリザは見えてしまった。

淫裂をピッチリと押し広げる逞しい男根を。

(なんて太さよ。それに、長さも……………)

大きくピストンされているが、女の中から抜けていない。

あの長さで太さで膣を掘られたら、どれだけ気持ち良いだろうか？

そんな思いが脳裏を過ぎり、暫く男を受け入れてない子宮がキュツと疼く。同時に、もう1つ見えてしまった。

ISスーツのクロッチ部分だ。

(開いてる?)

初めはクロッチを横にズラして、男を受け入れていると思っていた。だが良く見えるようになって分かった。

クロッチ部分そのものが開いて、男を受け入れやすくなっている。切ったという訳ではないだろう。

ISスーツの防刃性能は並大抵の刃物など通さない。

恐らく、元々そういう風に作られていたのだ。

彼女の冷静な部分、そんな分析を行なっていく。

(でもそんなスーツを与えられたっていう事は………)

どう考えても、普通のISスーツには必要の無い機能だ。なのに与えられた。

その意味が分からないほど、エリザは子供ではない。

ユーリアは薙原晶の愛人として、常に男を受け入れられるように調教されているという事だ。

ましてI Sスーツの作成には東博士が関わっている。つまり本妻公認の性処理係だ。そんな事を思っている間も、彼女は犯され続けた。

「アアンツ、もつとお、もつとお」

「素直だな」

「社長が……：……ううん。アアンツ、ご主人様が、はうん、そうさせた……：……ンツ、んじやないですかあ」

ピストンされながら答えるユーリアは、酷く艶やかだった。

男に媚びるように尻を振り、自ら望んで犯されている。

その色香に当てられたのだろうか？

エリザの右手が、秘所へと伸びていく。スパッツの更に内側、ショーツの中にまでに入り込み、そつと淫裂に指が這わされた。

（ちよつとだけ、ちよつとだけよ）

内心でそんな言い訳をしながら弄り始める。

だがすぐに物足りなくなってしまう。

（もう少し、もう少しだけ……）

言い訳に言い訳を重ね、左手がTシャツの内側へと潜っていく。そして中で飾り気の無いスポーツブラをよけ、硬くなり始めた乳首をコリツ、コリツ、と弄り始めてしまっ

た。

他人のセックスを見ながらのオナニーだ。

(シツ、アツ、最近こ無沙汰だったから、はあん、イイわ)

気付けば、ちよつとではなくなっていた。

指は根元まで入り込み、卑猥な動きで己を慰めている。

クチャクチャという音が響き始め、流れ出た愛液がショーツとスパッツを濡らしている。

そして左手で弄っていた乳首は、もう完全に勃起していた。自分で幾らやつてももの足りない。

(ユーリア、気持ち良さそう………)

何時の間にか、犯されて<sup>ユ</sup>いる仲間の姿を自分に置き換えていた。

クロッチの開いたエロスーツを着て、逞しい男根で奥をグリグリされ、胸の頂を男にしゃぶられ悶えている姿だ。

そして実を言うところの時、見られている2人は観客<sup>エリザ</sup>がいる事に気付いていた。

気付いていて、見せたのだ。

時間は、少しだけ巻き戻る――。





ユーリアを犯す晶は、エリザが近付いているのに気づいていた。どうしようか、と思ひ閃く。

隠れて近くに仲間がいるところで突つ込んで、声を抑えて悶えさせてやろう。想像しただけでいきりたってくる。

だが当のユーリアからコアネットワークで、エリザの前で犯し続けて欲しいという懇願があった。

(露出の趣味にでも目覚めたか?)

(違、アンツ、うう。喋ってる最中にグリグリしないでえ)

(なら早く話せ。俺はもつとお前を苛めたいんだ)

男根がギリギリまで引き抜かれ、勢いよく打ち込まれる。

すると肉壺が、被虐の喜びでキュツと締まった。

(アンツ)

(で、理由は?)

(わ、わたしがあ、はあああん、ご主人様の女に、ンンツ、なつたつて自慢、アアアンツ、してやりたいんですう)

言葉以上の淫らな願望が、首輪を通して主に伝わってくる。

もつと、もつと犯して欲しいと、チンポを突き入れられながら懇願してくる。

膣外射精外出なんてさせないとばかりに、両足が男の腰に絡む。

(自分で言えばいいだろう)

(言うより、アンツツ……、ご主人様が、こうやって犯してくれた方が、ずうと……)

ンンツ、説得力ありますからあアアアアアアアアアアツ!!)

強気で勝気な美人が、犯して欲しいと懇願してくる。

これで燃えない男はいないだろう。

晶はユーリアの望み通りに犯してやることにした。

隠れてじっくりとやるのは、今度のお楽しみだ。

「なら、今度は俺の上に乗れ。下から貫いてやる」

どんな体位で犯されるのも好きなユーリアだが、騎乗位はお気に入りの体位の1つだった。

理由？　しいて言うなら、ご主人様に抱き着いてキスをせがみやすいところだろうか。

正常位でもバックでもご主人様はしてくれるが、騎乗位なら自分からせがみやすい。そうして跨った彼女は、普段からは考えられない程に甘えていた。

豊かな双丘を押し付けキスをせがみ、腔内<sup>中</sup>射精<sup>出</sup>を懇願しながら腰を振る。

「ご主人様、また、沢山下さい。中をドロドロにして、汚して躡けて下さい」  
仲間<sup>エリザ</sup>に見せつけるかのように腰を振るユーリア。

結合部からジュポジュポと厭らしい音が響く。

そして高まつてきた晶は、ちよつと悪乗りを始めた。

今度は逆駅弁スタイルでユーリアを持ち上げ、エリザからよく見えるようにしてやったのだ。

結合部からは愛液を垂れ流し、はだけられた胸元では豊かな双丘が揺れている。

そんな中で晶は、わざわざ声に出して説明してやった。

「このスーツさ、こうやって突いている最中でも、お前のエツちな部分を刺激できるんだよな。クリとか乳首とかさ」

するとはだけられた胸元のスーツが独りでに動き出し、豊かな双丘を覆っていく。またパツクリと大きく開いていたクロツチも少しだけ閉じ、淫核の部分を覆っていた。

「え、そんなことされたらあ」

「楽しみだろ？」

男はマスター権限を使って、淫らな機能を起動させた。

既に押し上げられていたところに、更なる淫撃が叩き込まれる。

「アンツ、だめえ、ダメえ」

「ほら、イク時はイクって言うんだぞ」

「はい。イク。イっちゃいます」

「早いな。もう少しご主人様を楽しませようとは思わないのか？」

言いながら男は、女を苛める。

男根が抜けるギリギリまで持ち上げ、落とす。

無慈悲な淫撃が子宮を打ち据え、被虐の悦びで膣がキュツと締まる。

「でも、でもお」

後ろから持ち上げられているユーリアに、抵抗の術はない。

ただ男が与えてくれる快感を受け入れ、望み通りに蹂躪されていく。

そしてエリザは、仲間の痴態を見て自分を慰め続けたのだつた――。

◇

次の日の夜。

シャワーから出てきたエリザは、居間に入った瞬間、硬直を余儀なくされた。

余りにも予想外な人物が、ソファに座っていたからだ。

「た、東博士!？」

「遅かったね。シャワーでナニをしていたのかな？」

ワインググラスを片手に、ニヤニヤとした笑み。

勿論、知った上での問い掛けだろう。

そして東博士であれば、セキュリティが一切反応しなかったのも納得がいく。

マスター権限を持つ彼女なら、正規の手順でセキュリティを解除できる。仮に不法侵入だとしても、政府機関中枢まで容易くハッキングできる彼女なら、結果は同じだろう。

「シャワーですから、体を洗っていました」

嘘は言っていない。

だが束は、その解答が気に入らなかつた。

雌犬には雌犬に相応しい回答があるだろう。

指が鳴らされテレビの電源がオンになると、シャワー中のエリザの様子が映し出された。

『い、イイです。社長、突いて、もつとお』

パイプで自らの雌穴を慰め、空いた片手で乳房を弄っている乱れた姿だ。

しかもクチャクチャとした愛液の音まで、しっかりと拾い上げられている。

首輪で知られるのは仕方がないとは言え、顔が赤くなるのを止められなかつた。

「博士。何を……………」

「ああ、勘違いしないで欲しいんだ。別に他人の男をオナニーのネタにしたからと言って、責めている訳じゃないよ。むしろ協力してあげようと思ってね」

「協力、ですか？」

「そ、協力。君は晶に抱かれない。私はちよつとした実験をしたいってだけ」

「実験？」

「うん。コレを着て欲しいんだ」

そう言つて束が、足元に置いてあつたバックを投げ渡した。

開けてみる。出てきたのはISスーツだった。

黒いモノキニ（※1）タイプで、布面積はユーリアのモノと同じくらい。下手をしたらこちらの方が少ないかもしれない。

何せ胸元だけでなく、サイドまで大胆にカットされているのだ。そしてモノキニタイプだけに背中を覆う部分は殆どなく、臀部などお尻の割れ目が見えそうなほど布面積が減らされてしまっている。

「い、今ですか？」

「そうだよ。本人にちゃんとフィットするように、調整が必要だからね」

束博士の言葉に、否と言える訳がない。

大人しく着替えると、束は無造作にエリザに触れ始めた。「ふうくん。うん。体にはちゃんとフィットしているみたいだね。流石は私」

自画自賛しながらも、束の手は止まらない。

乳房に手を這わせ、先端の位置を確かめ、コリコリと弄ぶ。

オナニーで一度高ぶった体には、たまらない刺激だった。

「は、博士。ンツ」

「おや？ もう感じちやつてるのかい？ ダメだよ。まだまだ調整があるんだから」

手が下の方へと向かい、クロツチの上から淫裂をなぞっていく。

ISスーツというフィルター越しの感覚が、酷くもどかしい。

すると急にクロツチの部分が左右に分かれ、淫裂が露わになった。

指がダイレクトに触れてくる。

（えっ、なに？ アンツ!!）

驚いている間に指が無造作に突っ込まれ、オナニーで敏感になっていた膣ちを弄り始めた。

「うんうん。スーツはちゃんと機能しているみたいだね。じゃあ今度は、ココを弄って欲しいって思っでごらん」

束の細くて綺麗な指が、胸の頂をピンと弾く。

その甘い刺激にエリザは逆らえなかった。

指でコリコリされ、甘噛みされるイメージが脳裏を過ぎる。

すると――。

「ンツ、なに、これえ………はあん」

スーツの内側が卑猥に動き、装着者の望んだ通りに女の乳首を弄っていく。

「ふふ。流石他人のセックス見ながらオナニーしちゃうエッチな雌犬だ。才能あるよ。じゃあ次の調整だ」

膣をクチャクチャと弄っていた指が引き抜かれ、代わりに、いつの間にか持っていたバイブが挿入された。

陰核も一緒に刺激する二股バイブだ。

そしてエリザのISに、システムメツセージが流れた。

――マスター権限によりクロツチ閉鎖。

――バイブを挿入状態でロックします。

「えっ?」

クロツチが閉じたお陰でバイブが固定され、機械的な振動が肉壺と陰核を苛めていく。

「な、なにこれえ、アンツ、止めて、止めて下さい。ンツ、アンツ!!」



だが束は止めない。

ニヤニヤと笑いながら続ける。

パイプの振動が回転が変わり、肉壁を満遍なく擦りあげていく。そうして女の部分が丹念にほぐされると、次いで回転がピストンに切り替わった。

「は、はかせえ、アンツ、ンンツ。こんなあああ、こんな事して、ひゃああん、どうするんですかあ」

「勿論、ISスーツの調整だよ。やっぱり使用者本人を見ながらの方が、調整しやすいからねえ」

嘘ではないが、事実を全て語っている訳でもない。

束はISというシステムを介して、エリザの肉体を調整しているのだ。

感じやすく、それでいて晶以外ではイけないように。

別に今までの働きに不満がある訳じゃない。

むしろ逆だ。よく働いてくれている。

だからご褒美だ。

「世界最強の単体戦力」の唯一直接の配下というだけでなく、愛人としても使つてやろう。

身も心も捧げて、せいぜい役に立つといい。

こうして調整を受けて晶に抱かれたエリザは、いつしか――。

◇

社長室で晶の前に跪いたエリザは、口を使って男に奉仕していた。

キツチリと制服を着こんだ日常の姿でありながら、逞しい男の象徴を啜え、しゃぶり、愛おしそうに舌を這わせて悦ばせる。

「すっかり馴染んだな」

「社長が、そういう女にしたんじゃないですか」

男根の先端に、ついはむようなキス。

「そうだったか？」

「そうです。こんな凶器で私をじつくりと躡けて、卑怯ですよ」

エリザが思い出すのは、この男に初めて抱かれた日だ。

本当に一日中抱かれ、朝から晩までイカされ続けた

それでも尚尽きない体力など、本当に人間かと思ってしまう。

(でもあんなに気持ち良かったの、初めてだわ……………)

アレを味わってしまったら、もう普通の男では物足りない。

また、味わいたい。

その思いに、制服の下に着込んでいたISスーツが反応した。

クロッチが淫裂にピタリと張り付いて、男を受け入れやすいよう左右に開いていく。

もし今足を開けと命令されたら、愛液の滴る肉壺が奥まで見えてしまうだろう。

そしてスーツの動きは、全て男に伝わる。

「へえ。そんなに欲しいのか？」

首輪の主にも、隠し事など出来はしない。

小さく、だがハッキリと肯く。

「そうか。なら立って、尻をこっちに向けろ」

今は女尊男卑の世の中。だがこの場では関係無い。

デスクに手を付き、言われた通りにする。

そしてタイトスカートが社長の手によって捲られると、淫裂が露わになった。

男を誘うように、スーツによって左右に開かれ奥まで丸見えだ。

「随分感じてたんだな？　いつからだ？」

分かっているのに言わせようとする社長は、本当に意地悪だ。

「呼ばれて、この部屋に来た時から……」

その時からスーツの機能を使って、ずっと刺激していた。

お陰で肉壺は愛液を垂れ流して、いつ突っ込まれても良い様になっている。

「良い子だ」

女の腰が掴まれ、遅しく反り返った男根が女の部分に押し当てられた。

そこで女は懇願する。

この場において男が上位者であり、女は奉仕する者でしかないのだ。

「薙原様。私の中をその遅しく反り返ったチンポで、突いて、掻き回して、汚して下さい。何回でも、気のすむまで。中に出して、貴方のモノとマーキングして下さい」

普段はクールビューティな美人に、雌顔で挿入をせがまれ中出しを懇願される。

男としては燃えない奴はいないだろう。

こうしてエリザ・エクレールも、薙原晶の愛人となっていっただった――。

ちなみに、ちよつとした後日談。

東さんは試作ISスーツの作成が面白かったのか、偽名で更識傘下のエログッズ企業から、エロエロランジェリーやエロアイテムを発表するようになったという。そして女を感じさせる事に特化したそれらのアイテムは、そっち系の業界で大人気になっていくのでした。

ちゃんちゃん。

※1：モノキニタイプ

モノキニ（つなぎビキニ）後ろから見るとビキニ、前からみるとワンピースに見える水着の事。

## 第14話 カラード、3人目

登場人物

社長（薙原晶）

世界最強の単体戦力“NEXT”を駆る青年。

強化人間であるため、身体能力は常人を遥かに上回る。

勿論、アッチの方もすこぶる強力。

ネージュ・フリーウェイ

元IS強奪犯。今回の犠牲者。

背中を艶やかに流れるストレートブロンドを持ち、蒼い瞳に清楚とも言える顔立

ちの女性。

お嬢様とも言える雰囲気を持つが、3人の中では一番腹黒い女。

カラードでのコールサインはハウンド3。

小道具

## 首輪

元 I S 強奪犯に I S を与えるにあたり、作り直された監視用アイテム。着けられた対象はバイタルデータや位置情報、言動だけでなく、思考情報までマスター設定された人間に筒抜けになってしまう。ちなみに電脳ダイブ技術の応用で、装着者に意図的な夢を見せる事も可能。

## 試作 I S スーツ

東さんが下僕用に作ったエロ機能満載の I S スーツ。

主な機能は以下。

- ・男を受け入れやすいよう、クロツチの部分が開くようになってい
- ・ I S の思考制御システムと結びついているため、クロツチは女が望むだけで開
- ける。
- ・クロツチだけでなく淫裂も一緒にくぱあして男に女の奥まで見せる事ができ
- る。

・マスター設定された人間は、装着者の女の部分を自由に刺激できる。

例えば乳首や淫核をずっと刺激したり、肌そのものを敏感にさせたり e t c e

t c.

だが I S スーツとしての性能が疎かにされている訳ではない。

以前箒ちゃんに渡した小型シールドシステム（の改良版）が内蔵されているため、肌が見えている部分でも対人兵器レベルなら防げるという反則的防衛力を実現している。

なおエネルギー供給は首輪から行われるため、ハウンドチームが使う限り、実質エネルギー切れ無しというチートな一品。

では、本編をお楽しみ頂ければ幸いです。

東は最近、首輪を使ってハウンド<sup>元1 S 強 毒 犯</sup>チームの深層心理を覗くのが楽しみであった。

初めは単なる気まぐれだった。

だが覗いてみると、面白いこと面白いこと。

“男は自分に貢ぐ為<sup>ハ</sup>に存在する”なんて強がっていたユーリア・ブランド<sup>ウ</sup>ソワ<sup>ド</sup>は、強い自分を組み伏せられる男に支配されたい、という矛盾に満ちた欲望の持ち主だった。

“クールビューティ<sup>ハ</sup>気取り”のエリザ・エクレー<sup>ッ</sup>ル<sup>ド</sup>は、男に奉仕して可愛がられたいという性癖の持ち主だった。

こんな面白そうな事が分かって、何もしないなどあり得ない。

まず手始めに本人達に内緒で、コッソリと肉體改造をしてやった。

女の器官の感覚を鋭敏化して感じやすくし、男に屈服しやすいように。それでいて



飼とい主と以外ではイけないように。

併せて寝ている最中に、本人達の願望から作り上げた淫らな夢を見せてやった。

繰り返し繰り返し、入念に何度も何度も。

加えて小道具も用意した。

試作 I S スーツという名目で彼女達に着せたそれは、女を調教する為のエロスーツだ。

何せ飼とい主とが命じれば、着ている最中ずっと乳首や淫核、肉壺を刺激して疼かせるという代物なのだ。

肉体改造され淫夢を見せられた上で、こんな物を着せられて耐えられる女などいないだろう。

そして調教される彼女達の心の移り変わりは、深層心理で自分自身に着せる服装という形で現れていた。

初めはカロードの制服姿だったのが、今では従う者である事を示すメイド服だ。

しかも提供された試作 I S スーツの影響を色濃く受けているのか、胸元が大胆にカットされ深い谷間が見えている。背中も大きく開かれ、スカートも下着が見えてしまいうなほど短い。

従者であると同時に、女としてもみて欲しいという願望の現れであった。

(うんうん。良いねえ)

束はご満悦だった。

嘘をつけない深層心理でこの姿という事は、自分の男こに完全に屈服したという証だからだ。

そして2人を調教したなら、残った1人も調教してあげなくては可哀そうだろう。

なので悪戯つ子のように悪い笑みを浮かべながら、首輪の機能を使い心の奥底を容赦なく暴いていく。

生まれは良いとこのお嬢様。優れた容姿、優れたスタイル、優れた能力。当然のようにISパイロットを目指し、飛び級を重ね、優秀な成績で卒業し、有名IS企業に就職した。だがそこで、容姿と資産しか取り柄のない先輩に嵌められた。

恋人をいつの間にか籠絡され、呼び出された先で集団暴行されかけ、辛うじて逃げ出したら、今度は両親に冤罪がかけられ、警官に抵抗したという無実の罪で射殺された。

こんな醜聞を持つ者が、表のISパイロットに成れる訳がない。

しかし捨てる神あれば拾う神あり。

ライバルに負けてISパイロットへの道を断たれた時、裏の人間が彼女をスカウトしたのだ。

高度なハッキング能力とIS操縦技術を併せ持つ彼女は、亡国機業としても欲しかつ

たのだろう。

(で、この結果生まれた願望が、自分を護ってくれる守護者が欲しい、と) 理解できる話だった。

そしてこれなら、自己防衛で腹黒くなってしまうのも仕方がない。

だがそれよりも、気になる事があつた。

もう一度入念に記憶を洗いなおしてみるが、やはりない。

「……………もしかして、処女？」

思わず呟いてしまう。

恋人がいたのだからその手の経験もあるかと思つたのだが、何度記憶を洗いなおしても出てこないのだ。

集団暴行されかけた時も、どうにか切り抜けている。

つまり裏社会にいて、ISという絶対的な力を振るっていた美人な元悪党が、実は処女だったということらしい。

東はニヤリと悪い笑みを浮かべ、楽しい楽しい悪巧みの妄想を加速させていくのであつた――。



数日の時が経ち、ネージュ・フリーウェイの寢室。

安らかな眠りについているように見える彼女だが、実際には淫夢による調教が行われていた。

“自分を助けてくれた守護者に処女を捧げる”という本人の願望を具現化した内容だ。

だから夢の中で、彼女は健気に奉仕している。

自ら望んで男の前に跪き、男根の先端に優しくキスして、竿の部分をも丹念に舐め、口全体を使って愛撫していく。

日頃腹黒い女が、ただただ男に気持ち良くなってもらおうと、拙い手管で尽くしているのだ。

それを見ながら束は思う。

(ふふふ、良いねえ)

本人の願望だけに、全く拒否反応が無い。むしろ積極的に受け入れている。

これなら次の段階に進んでも大丈夫だろう。

(という訳で、スイッチON!! まず10倍くらいからいってみようか)

淫夢の中で、ネージュの肉体感度を引き上げてやる。常人なら、胸を揉まれただけで

イツてしまふ感度だ。そして深層心理という嘘のつけない場所だけに、彼女の行動はとも素直だった。

フェラチオで奉仕しながら淫核を抓って虐め、指を肉壺に入れてジユポジユポさせ始める。

(うんうん。やっぱり性処理係はこうでなくっちゃ)

犬ところの淫らな姿に、束はご満悦だ。

無論、これだけで終わるはずもない。

並行して首輪いさの肉体再生機能を応用し、本物の肉体感度も上げていく。

(どうなるかなあゝ、どうなるかなあゝ)

悪い笑みを浮かべながら束は想像する。

処女なのに感じやすいよう淫らな肉体に改造された女が、晶に抱かれたらどうなるか。

しかも腹黒に見えて、実は純情ときている。

深層心理に誰がご主人様かを刷り込んだ上で、初めてを極上の快樂の中で散らせてやれば、従順で忠実な部下兼性処理係が出来上がるだろう。

そんな事を思っている間にも、淫夢による調教は進んでいく。

晶に頭を押さえられたネージュは、口の中に放たれた精を当然のように飲み込み、恍

惚とした表情を浮かべていた。

次いで願望の世界だけに、恥ずかしそうに股を開きおねだりする彼女の濡れそぼった肉壺に、男根がブチ込まれ——というところで、束は淫夢を打ち切った。

(夢の中でも、処女を散らせるのはお預けだよ)

理由は簡単。

目覚めた時に体が疼いていれば、微かに残してやった夢の記憶から自分を慰めるだろう。

そうして現実世界でも願望を意識させてやれば、夢の内容が定着しやすくなる。

実際モニターを見てみれば、真夜中に目覚めたネージュが、ベッドの中で胸と秘部を弄っていた。

初めは恐る恐る。徐々に大胆に。クチャクチャとした音が、部屋の中に響いている。

『なに、コレえ。んっ、だめえ、全然収まらない』

まだ現実の肉體改造は完了していないが、それでも常人より敏感になっている。

まして感度は、まだまだ上げていく予定なのだ。

そんな状態で体が疼きオナニーを始めたら、さぞかし妄想が進むだろう。

つまりネージュは本人すら気づかぬ間に思考を誘導され、晶を深層心理から求めるように調教されていたのだった——。



更に数日後の夜。

東はネージユの部屋の前に来ていた。

首輪で彼女の状態を確認してみれば、オナニーで乳首もクリもピンピンになり、肉壺からは愛液が垂れ流されている。自分の男をオカズにして、淫らな妄想に耽っているのだ。

そんな時に本妻の訪問を受けたら、どんな反応を返すだろうか？

ニヤニヤと悪い笑みを浮かべながら、インターホンで彼女を呼び出した。

『————は、はい。何でしょう？』

『ちよつと開けてくれないかな？』

『しよ、少々お待ちください。今、部屋が散らかってて————』

明らかな嘘。尤も発情している姿を見られたくないというのは、人として当然の心理だろう。

だが東は、それを許さない。

『私は構わないから、すぐに開けてくれないかな？』

お願いの形を取った、実質的な命令だ。

『わ、分かりました』

すぐにオートロックが外され、ドアが開かれる。

そうして部屋に入った束を迎えたネージュの姿は、シート一枚を体に巻き付けただけのものだった。

女同士でなければ、誘っていると思われても仕方のない姿だ。

(うんうん。大分出来上がってるねえ)

しかし束は、気づかぬフリをして話し始めた。

「ちよつとね、君に着て欲しいものがあるんだ」

言いながらバッグから取り出し、手渡したのはランジェリーだった。

清楚なデザインと繊細な刺繍の施された、白いブラとショーツ。そして同色のガードーベルトにストッキング。

「分かりました。ですが、後でもいいでしょうか。体調が、少し優れなくて……」

首輪を通じて流れてくる彼女の真意は、早くオナニーの続きをしたい、だった。

束はニヤリと笑う。

無造作に手を伸ばし、濡れている肉壺に指を突っ込みかき回してやる。

「アンツ、は、はかせえ。な、なにを……」



「こんなに濡らしておいて、体調が優れないだつて？　嘘は良くないなあ。それに私の男をネタにしてオナニーしてること、知らないとも思っているのかい？」

クチャクチャとした音が、室内に響く。

そして本人すら気づかぬ間に改造された肉体は、容易く快樂に屈した。

あつという間に腰砕けになり、されるがままになつてしまふ。

「ンンツ、アンツ、も、申し訳ありません。はか、せえ」

「別に、怒っている訳じゃないんだよ。私の晶に惚れ込んだんじやうなんて、ある意味仕方のないことなんだから。それにね。よく働いてくれている部下には、ボーナスをあげないといけないでしょう」

「ボー、ナス？」

「うん。本妻公認で、晶に抱かれてもいいよ」

「あ、い、良いんですか？　本当に？」

深層心理と肉体の両方を弄られている彼女にとって、願望を実現できるその言葉は、ある種の麻薬に近かった。

恍惚とした表情で自分自身が抱かれる姿を想像し、肉壺の奥、子宮が疼いてしまふ。

「良いんだよ。そしてこのランジェリーは、その為の小道具さ。着てごらん」

束の言葉に、ネージュの身を包んでいたシートが床に落ちる。

そうして勃起した乳首がブラで隠され、濡れた肉壺がショーツで隠され、脚線美を強調するストッキングとガードーベルトが着けられていく。

勿論、渡されたのが只のランジェリーである訳がない。

試作<sup>エ</sup>IS<sup>ロ</sup>スーツの技術を応用した一品だ。つまり女の部分を虐める機能が満載ということ。

だが束は、今回1つだけ機能をロックしていた。

雌穴の奥だけは、刺激してやらない。改造で敏感過ぎるほど敏感になり、疼いている奥だけは放置だ。

そうして悶え始めたネージュに、束は囁く。

「我慢しないで良いんだよ。ここを抓られて甘噛みされながら、ズンズン突いて欲しいんでしょ？」

ブラの上から勃起した乳首が抓られ、ショーツの上から淫裂がなぞられていく。

今の彼女に、抵抗などできはしない。されるがままだ。

だが束は念には念を入れて、彼女が行動し易いように言い訳を用意してやった。

「命令だよ。晶に抱かれなさい。そのエッチな体で奉仕して、女にしてもらいなさい」

普通なら、こんな命令など聞く筈がない。

しかし、今のネージュにとっては違っていた。

絶対の飼束い主博からの命令なのだ。

だから抱かれるのも仕方がないこと。

自分の願望を実現させる為じゃない。命令なのだ。だからこれは、仕方のないことなのだ。

こうしてネージュは本妻束の手により、本人すら気づかぬ間に、性処理係へと仕立てられていったのだった——。



更に時は進み、数日後。

ネージュが社長編と一緒に、兵器番の見本市編で買第い物話をした後後のこと。

とある高級ホテルのスイートルームで、彼女は願望通りの初体験を迎えようとしていた。

男編の手によって衣服をゆっくりと脱がされ、身を包むのは白い清楚なランジェリーのみ。

そしてキングサイズのベッド上で、女は恥ずかしそうにM字開脚しながら懇願していた。

「私の初めてを……もらって下さい」

美女にこんな事を言われて、燃えない男はいないだろう。

更に束からプレゼントされたランジェリーが、使用者の思いを感知してエッチな機能を発動させていた。

ブラの先端、胸の頂き部分が開いて勃起した乳首が露わになり、ショーツのクロッチ部分が淫裂ごと開かれ、濡れた肉壺が露わになっている。本人すら気づかぬ間に男に都合の良いように改造された肉体は、ホテルに来た時から発情を始めていたのだ。

そして彼女は望み通りに優しく押し倒され、正面から抱き合う正常位で貫かれた。(んっ、アーンツ、初めては痛いって聞いてたけど……)

破瓜の血こそ流れたが、痛みは全く無かった。

それどころか奥まで挿入され、ズンツと突かれただけで腰砕けになるほど気持ち良かった。

膣内をピッチリと埋める男根がゆっくりと動かされる度に、腰がビクビクと震えてしまふ。

自分で慰めるのとは、比べ物にならなかった。

(あ、ダメ。こんなの知っちゃったら、もう、もうお)

男を受け入れる事に、何の疑問も感じていない。

口も胸も肉壺も、爪の先から髪の毛一本に至るまで、全てこの人のもの。  
極々自然に、そう思うようになっていた。

そんな相手から可愛がられたら、逆らえるはずがない。逆らおうという気すら起きない。

勃起した乳首を甘噛みされ、もう片方を指でコリコリと弄ばれ、硬く反り返った男根で肉壺をゆつくりとかき回される。

その全てが、ネージュの心を溶かしていく。

(もう、諦めていたのに………)

優しく貫かれながら、彼女は思う。

嵌められ、裏切られ、裏社会に堕ちたあの日。それまで信じて疑わなかった夢も理想も、全て叶わないものと諦めた。将来は何処かで敗北し、ボロ雑巾のように使い捨てられるものと思っていた。

(だけど………)

この人冊の下でなら違う。

犯罪者という過去を知っていて、なお大事にしてくれている。

昔裏切った恋人みたいに、騙したりしない。護ってくれる。

そう思えた。

だから気づけば、甘えていた。

キスをせがみ、抱きつき胸を押し当て、両足を男の腰に絡め男根を肉壺の奥深くまで咥え込む。

日頃の腹黒さなど欠片もない。

只々、全身で男を感じたいと甘える女の姿があった。

そして淫らに改造された肉体は、優しくされるだけでは、すぐに物足りなくなってきた。

「社長。もっと、激しく………して下さい」

「いいのか。初めてなんだろう？」

晶は子宮の入り口に男根を押し当て、グリグリと刺激しながら尋ね返した。

「良いんです。欲しいんです。もっと、して下さい。それとも、こんな女は嫌いですか？」

「いいや。自分でおねだり出来る女は大好きさ」

優しくゆっくり動かされていた男根が、徐々に大きく力強く動かされ、ネージュを快樂の海に墮としていく。

いや、本人に墮ちるといふ感覚は無かった。

何度も何度もイカされ、あるのは諦めていた願望が叶ったという幸福感だけ。

そして初体験で与えられる快樂に、彼女は翻弄され——次第に、夢の記憶が蘇り始めた。

無論本人に、思い出したという感覚は無い。

だが「してあげたい」という思いが、彼女を突き動かした。

「社長。アンツ、今度は、私が……、ンツ、上に……」

「へえ。ああ、いいぞ」

男が横になると女は跨り、逞しく反り返った男根を自らの淫裂へと導いた。

そうしてゆつくりと腰を下ろしていけば、肉壺をピツチリと押し広げる存在感に、すぐにイキそうになってしまう。

だが彼女は止まらなかった。

男に気持ち良くなってもらうために、快樂の波に吞まれながらも腰を動かし、男根を肉壺でしごいていく。

「ンツ……アンツ……どう、ですか、社長？」

「いいよ。そのまま続けてくれ」

日頃腹黒い女が健気に奉仕する姿は、中々にくるものがあつた。

だから、チョット悪戯したくなってしまふ。

「はい。——アンツ、しゃ、社長。突き上げては、ンツ、ダメです」

「お前の中が気持ち良くて、ビクツて動いちやうんだよ」

奉仕を邪魔しない程度に、奥を小突いてやる。

そうして悶える彼女を見て、晶は思う。

(奥まで突っ込んで中出し體內射精したら、どうなるかな?)

今ですら改造によって、敏感過ぎるくらい敏感になっているのだ。

さぞかし良い声で鳴いてくれるだろう。

「なあ、ネージユ」

「はい。ンツ、何でしょう?」

「これからお前の中を汚して、俺のモノだつてマーキングしてやる。拒否はさせない。

いいな」

答える前に、子宮がキュツと疼いた。

自ら奉仕する女が、しかも男に都合の良いように改造された女が、断るはずもない。

「はい。隅々まで、はぁん……汚して、下さい。アンツ、ンツ、貴方のモノだと、ンア、

ンツ、刻みつけて下さい」

「良い子だ」

晶は彼女の腰を掴んで、逞しく反り返った男根をズンツと突き上げた。

肉壺が悦びの悲鳴を挙げ、感じ過ぎた彼女が腰砕けになる。体を起こしてはくられず、



男の胸元に倒れ込む。

だが晶は止めない。抱きしめ動けないようにして、更なるピストンで女を虐めていく。

愛液が垂れ流され、イッて潮を吹いても、男はピストンを続けていく。

そうしてされるがままの女に、男は囁いた。

「お前はコレから、俺に抱かれる度にコレを味わうんだ。逃がさないからな。会社でも、お前の部屋でも、このエッチな体を存分に犯してやる」

「こ、これから、アアアア、ずつと？」

「そうだ。お前はこれから、俺にだけ抱かれるんだ」

「あ、あああ、アアア、はい。私は、アアアアアア、貴方の女、です。あ、あ、アアアア、アアアア!!」

快楽の波に揉まれながら、彼女はハッキリと答えた。

何せ願望が叶えられた上で、望んだ男から「お前は俺の女だ」と宣言されたのだ。嬉しくないはずがない。

突き入れられる男根が愛おしく、抱きしめられて胸も男に押し付けている。

だから残っている口で、男に迫る。デーブキス。

舌を絡め唾液を交換し、全身で男を感じたいと訴える。

男の返答は直接的に、好き放題な中出し膣内射精だった。

何度も何度も精が放たれ、敏感な肉壺と子宮が、愛しい男の感触を覚えていく。そうして晶の女である事を自覚させられたネージュは、行為が終わった後も男に奉仕していた。

自身の肉壺から抜かれ、愛液と精液でドロドロになった男根を丹念に舐めて綺麗にし、一緒に入ったシャワーでは自分の体を使って男の体を洗っていく。手で、胸で、男のチンポは自分の肉壺で丹念に。また汚れたら、もう一度手と口で綺麗にして、気持ち良くなってもらう。

こうしてネージュは、自分が思いつく限りの奉仕を行っていたのだった——



時間は進み、翌日の昼過ぎ。

カラードの社員寮に帰宅したネージュを待っていたのは、同じ首輪を嵌められた2人の仲間だった。

だが何故か、ちよつと目が怖い。

そして問答無用で両腕をホールドされる。

「え？」

「ねえネージユ。昨日は何処に行つてたのかな？　ISをステルスモードにして通信まで切つて、何か特殊任務でもあつたのかな？」

「そんな訳ないわよねえ。私達に嘘までついて、社長と一緒に出かけしてたんですものね」(※1)

先に口を開いたのがユーリア。

次いでエリザが、バレてないと思つていた事をサラリと告げてくる。

そして同性だけに、追及は直接的だった。

「で、清楚な勝負下着着て、社長に迫つたんですよ？　どうだったの？」

ユーリアが尋ねながら、制服の上から胸を揉んでくる。

「ちよつ、アンツ!!」

思わず、声が出てしまった。

隠しようもないくらい、感じている女の声だ。

「おやあ？　随分可愛い声出すじゃない」

「ちよつと、止めてよ」

「イ・ヤ・よ」

言いながらユーリアは片手で器用にブラウスのボタンを外し、隙間から手を突っ込んできた。

ガードする間もなく、ブラの中にまで手が入られ、先端がコリツと抓られる。乳首が勃起しているのを知られてしまった。

「ネージユ。これはどういう事かな？　もしかして、帰ってくる直前まで可愛がられてたの？」

耳まで真つ赤にしなが肯く。

すると今度は、エリザの手が動いた。

空いている片手がスカートの中、ショーツで隠された秘部へと伸びる。

そして指が、淫裂をなぞった。

「濡れてるわね。もしかして、こっちにもお情けを頂いたの？」

再び肯くネージユ。

日頃腹黒い女だけに、羞恥に悶える姿が何とも可愛らしい。

そこに、晶が来た。

「お前ら、何をしているんだ？」

「仲間を騙した悪い子に、羞恥の制裁。ところで社長。ネージユってどんな風に抱かれたの？」

ユーリアがニヤニヤと笑いながら尋ねる。

他人の口から自分が抱かれている時の様子を聞くななど、羞恥プレイ以外の何物でもないだろう。

だがここで、当人が反撃に出た。

「ふん。そんなに知りたいなら教えてやるわよ。私はね、社長に処女をあげたの。初めてを奪ってもらったの。高級ホテルのスイートルームで、ムードたつぷりに。綺麗な夜景の見える部屋で。何回も中に出してもらって。一緒にシャワーも浴びて、お互いに洗いあつて、朝も、帰ってくる直前にも抱いてもらったの。ふん。いいでしょう」

ドヤ顔で勝ち誇るネージュだが、すっかりカウンターパンチが放たれていた。

「私もエリザも、もうとつくに抱かれてるわよ。つまりアンタが一番遅かったの。というか、アンタが処女だった方が驚きだわ。ねえ社長、処女なんて面倒な女の口直しに、私はどうですか？」

ネージュを開放したユーリアが、晶にすり寄る。

するとエリザもネージュを開放し、晶にすり寄った。

「なら、私も一緒にどうですか？」

「ちよつと貴女達!! そんなキャラだった!? それなら私も混ぜなさいよ」

「ダメ。アンタは昨日の夜から今日の朝までずつつつと可愛がられてたんでしょ。な

ら今日は私達に譲りなさい。これからは私達を騙さなくても、堂々と抱かれて良いんだから。今回はこれで手打ちにしてあげる。ねえエリザ」

「そうね。今日は1人で発情した体を慰めてなさい。それで騙した事は許してあげるわ」

大事な仲間2人にこう言われては、ネージュも引き下がるしかない。

しかし、タダでは引き下がらなかった。

両腕をホルルドされている晶に抱きつき、2人に見せつけるかのようなディープキス。

舌を絡め唾液を交換し、昨日まで処女だったとは思えないほど淫らで濃厚なキスだ。

そしてこんな姿を見せられれば、既に調教されている2人が燃えないはずがないのであった――。



時は進み、数日後。

束は自室のモニターで、ネージュの深層心理情報を眺めながら首を捻っていた。

調教が順調に進んでいたので、てつきり深層心理で彼女が自分自身に着せる服装は、

他の2人と同じようにエロいメイド服になると思っていたのだが……蓋を開けてみれば違うのだ。

何と白いブラウスに黒いタイトスカート。それに黒いエプロン。エロさなど欠片も無い。

そして本人がイメージしている背景が、どう見ても喫茶店なのだ。

アンティーク調の落ち着いた雰囲気。

カウンター席でコーヒーを飲む晶。話を聞いて微笑むネージュ。

「……………えーと、これはつまりどういうこと？」

思わず呟いてしまう。

束をして、答えを出すまでに数秒を要した。

いや、答えなど出ている。だが予想と余りに違っていて、認めたくないのだ。

しかし何度心理分析をしても、同じ結果が出てくる。

話を聞くというのは、支えになりたいということ。

喫茶店というのは、相手にとって落ち着ける場所でありたいということ。

(つまりあの犬つころろは、あれだけ調教したにも関わらず従う者じゃなくて、寄り添って支えになりたいと思っただけのこと？ 確かに願望を叶える方向で深層心理を弄ったけ

ど、ここまで飛躍する？ ああ、でも支えになりたいって感情も悪いものじゃないし、こ

れはこれで結果オーライかな)

むしろこういう感情があるからこそ、人なのだろう。

そう思った束は、今回の実験データの整理し始めたのだった――。

※1：私達に嘘までついて、社長と一緒にお出かけ

『番外編 第04話』で、ネージュは社長とお出かけする為に仲間2人を騙していたのでした。



# 第15話 とある日の雌犬ども

ハウンドチーム。

東博士のオリジナルズ<sup>A C シ リ ー ズ O P 機</sup>を与えられた、「世界最強の単体戦力<sup>機</sup>」直属の部下達。

彼女達は、世界中の賞金首に恐れられる存在だ。だが日常生活では雑原晶を「ご主人様」と呼び、いつでもどこでもチンポを受け入れ中出し<sup>腔内射精</sup>を悦ぶ、男にとって都合の良い女達でもあった。

そして今日、朝からご主人様の性処理に使われているのはユーリア・フランソワ。コールサインはハウンド2。

腰まである燃えるような赤髪で、性格は外見通り勝気で高飛車。男は自分に貢ぐ為に存在すると思っている女王様。

だが今は、ただの性処理係であった。

ご主人様に言われるがままに制服のスカートを捲り、デスクに手をつけて、いやらしい尻を突き出している。

場所はカラード社長室。ドアが閉められている時、会社の人間は決して入ってこな

い。

だから、存分に可愛がってもらえる。

そう思っただけで、下着代わりに着ている試作ISスーツのクロッチが勝手に開いた。愛液を垂れ流すいやらしい肉壺が丸見えになる。早くブチ込んで欲しいと思えば、淫貝がスーツによつてくばあと開かれた。男に女の奥まで見せて、早く早くと懇願しているのだ。

するとご主人様は、すぐに突っ込んでくれた。長く太く硬く反り返ったチンポが濡れた肉壺を虐め、淫撃が子宮を揺さぶるたびに、甘い声が室内に響いていく。

次いで胸元に手が伸び、ブラウスの中に入った手が豊かな双丘を揉みしだいた。でもISスーツ越しでは物足りない。勃起している乳首をもつとギユツと抓って欲しい。そう思えば、胸の部分が勝手に開いた。

「なんだ。そっちも弄って欲しいのか?」

「はい。アantz、弄って、antz、下さいい」

ユーリアは蕩けた女の顔で懇願する。

ご主人様の前で強がっても無駄なのだ。

既に幾度となく抱かれた。初めは強がりもしたが、今まで全戦全敗。無尽蔵の体力とデカチンポで、自分が女である事を思い知らされていた。ましてハウンドチームの面々

は、晶の性処理係となれるように肉体感度が引き上げられている。

そんな女が乳首をコリコリされギョツと抓られながら、肉壺を虐められて耐えられずが無かった。

あつという間にイカされてしまう。

だが晶をご主人様と仰ぐユーリアは、自分だけがいくのを良しとしなかった。

ご主人様にも気持ち良くなつて貰おうと、懸命に腰を振つて肉壺に入っているチンポを扱っていく。

これに晶は、腔内射精 中出しで応えた。

性処理係に選択権などない。いや、仮に選べるとしてもユーリアは腔内射精 中出しを選んだだろう。

ぶっかけて欲しくて腔外射精 外出しを懇願する事はあつても、腔内射精 中出しを断る理由などないのだ。

お腹がタプタプになるまで腔内射精 中出しされ、マーキングしてもらおう。想像しただけで、子宮が疼いて堪らない。

こうしてユーリア・フランソワは、朝からタップリと可愛がられたのだった――



時間は進み、その日の午後。

晶はハウンドチームの面々を引き連れ、PMC業界の会合に出席していた。場所は市内のホテルで、到着した瞬間から多くの視線を集めている。だがそれも、仕方のない事であった。

何せPMC業界というのは、男の多いむさ苦しい業界だ。

女がない訳ではないが、絶対数が圧倒的に少ない。

そんな中で美人揃いのハウンドチームが、目立たないはずがなかった。

加えて周囲の男どもの妄想を刺激してやまないのが、ハウンドチームの晶への対応である。

首輪という絶対強制権があるとは言え、実に甲斐甲斐しく世話を焼いているではないか。

羨ましくないはずがない。

いつしか周囲の屈強な男どもは、妄想の中で彼女達を犯し始めていた。

組み伏せチンポを突っ込み、泣きながら止めてと懇願する女に中出し（内射精）して優越感に浸

る。或いは快樂で蕩けさせ、女から求めさせ奉仕させる。

欲望のままに、彼女たちは犯されていた。

妄想の中で。

それが分かっているからこそ、ハウンドチームは面白くて仕方がない。

彼女達は自ら望んで奉仕して、ご主人様に中出し離内射精してもらっているのだ。断るなんてありえない。

今日もそうだ。ユーリアが一番はじめだったというだけで、エリザとネージュも可愛がつてもらっていた。奥にタップリとマーキングしてもらい、顔にも体にもかけてもらっている。でも一番ご主人様を感じられるのは中だ。中が一番良い。

でもここにいる男どもは、妄想することしかできない。

「世界最強の単体戦力」直属の配下という地位は、この場にいる者達にとって、手の届かない高嶺の華と同じなのだ。

だからネージュハウンドは会合の休憩時間で、どうとでも取れる他愛のない会話を楽しむ事にした。

精々妄想して、マスでもかいていれればいい。

ここはホテルのラウンジ。さぞかし多くの人間が聞き耳を立てているだろう。

「ねえ社長」

隣に座っているご主人様扉に話しかける。

「どうした？」

「ISスーツメーカーから、幾つか試作デザインが送られてきていました。どれにしますか？」

「ああ、アレか。何か気に入ったのがあったか？」

ハウンドチームが使用しているISスーツは、東博士お手製の超高性能スーツだ。

態々性能の劣る物を使う理由はない。

だがメーカーにしてみれば、彼女たちは広告塔として余りにも魅力的だった。

容姿・スタイル・実績・知名度、あらゆる点で条件を満たしている。

なので自社のデザインを採用してもらおう事で、自社ブランドの宣伝に使おうと考えていたのだ。

送られてきたのは、その試作品である。

もともと今まで、採用されたメーカーは無いのだが。

「まずは社長の意見を聞いてから、と思いましたが」

「お前達が着るヤツだからな。任せるよ。気に入ったデザインがあれば教えてくれ」

「私達が気に入っても、社長が気に入らなければ意味がありません。私達は貴方の部下であり、もしも採用したら奥方奥博士様様に作って貰うのですから」

「分かった。帰ったら見てみよう」

「お願いします。ああ、でも実際に着用したところを、見て貰った方が良いですね。デザインが良くて、着てみると似合っていないという事もありませんから」

さり気なく吐かれた言葉が、周囲の男たちの妄想を刺激した。

会社に戻ってISスーツの試作品選び。しかも実際に着用してとなれば、内容は水着美女の鑑賞会に等しい。

そしてデザインだけが評価対象で性能を気にしないというのであれば、視線の向かう先は胸元や背中 of 布面積のカット具合、腰から尻にかけてのくびれ、スーツの尻や股間への食い込み具合だろう。

加えて何より大事なのが、社長の意向が最優先ということだ。

つまり薙原晶がチェックの為にどんな事をしようとも、彼女は受け入れると言っているのだ。

男どもの妄想が加速していく。

ISスーツはどんなデザインだろうか？

彼女達の魅力を引き出すとなれば、間違いなく布面積は少ないだろう。今現在ハウンドチームが使用しているような、モノキニタイプ（後ろから見るとビキニ、前からみるとワンピースに見えるタイプ）だろうか？

胸元は大きなVカットで、豊かな双丘が零れそうになっているかもしれない。股間は

ハイレグだろうか？ 意外とローレグかもしれない。背中は大大きく露出しているに違いない。もしかしたらサイドも大胆にカットされているかもしれない。

そんな物を着た絶対服従の美女が目の前にいて、何をしても良いとなれば、手を出さない男はいないだろう。

社長は、どんな風に味わうのだろうか。

押し倒す？ それとも跪かせて奉仕させる？

どちらにせよ、至福の時間に違いない。

周囲の男どものそんな妄想を敏感に感じ取ったネージユは、内心でニヤニヤと笑っていた。

外見が清楚な金髪美女の実際は、腹黒&小悪魔なのだ。

「お前なら何を着ても似合いそうだけだな」

「似合っているだけではダメです。動きやすさもチェックしてもらわないと。他人から見たら、動きが悪くなっている場合もありますから」

これはスポーツ選手のウェアを考えて貰えれば、分かりやすいだろうか。

例えばスピードスケートや水泳の選手にとって、ウェアの違いは馬鹿にできないほどのタイム差を生む。

だから社長自らチェックして、と彼女は言っているのだ。



「分かった。なら格闘訓練かな。それが一番分かりやすい」  
「はい。宜しくお願いしますね」

ISスーツを着た、金髪美女との格闘訓練。

これで妄想の捗らない男はいないだろう。

訓練中なら何処に触れようと、全く問題ない。

例えば胸に触れて揉んでしまっても、寝技の最中にISスーツが脱げかけても、指がクロツチの横から滑り込んで肉壺にズッポリと嵌っても、全て合法なのだ。

そして訓練は最後までやってこそ訓練だ。

胸を揉まれた程度で怯むなら、再教育が必要だろう。繰り返して揉んで、揉まれる事に慣れさせてやるべきだろう。

肉壺を弄られて怯むようなら、弱点克服の訓練が必要だろう。まずは指で執拗に弄ってやって、克服できないようならもっと長くて硬いもので、丹念に突いてやるべきだろう。

最後の鎧であるISスーツが脱げそうになるなど論外だ。他に欠点が無いか、徹底的に調査すべきだろう。勿論着用したままの方が、調査が捗るの言うまでもない。

周囲の男たちがそんな妄想でネージュを犯している中、彼女は彼女で色々と妄想していた。

すると、コアネットワークで通信が入る。

(つたく何を考えている)

(あら、そういえばご主人様には筒抜けでしたね。興奮しました?)

(AV男優になった気分だよ)

ハウンドチームの3人は、ご主人様品に隠し事ができない。

首輪の機能により、思考情報を丸裸にされているからだ。

ネージュはそれを利用し、自分がご主人様品との格闘訓練の最中に犯される、というシチュエーションのイメージ映像を送りつけていた。

場所はカラードの訓練室。

黒いモノキニタイプ品のISスーツに身を包んだ彼女が、リングのど真ん中で組み伏せられ、種付けプレス品をされている。

デカチンポが淫具をピツチリと押し広げ、ピストンの度にいやらしい声が響き、何度も何度も好き放題品に出しされ、ザーメンが肉壺に擦り込まれていく。

ネージュ性処理係は、どこまでも従順に受け入れていた。

むしろ両手両足で抱きつき、引き寄せ、もつともつととおねだりしている。

そうして存分に可愛がられた彼女は、引き抜かれた愛液と精液でドロドロになったチンポを、丹念に舐め始めた。

勿論、男のは硬いままだ。

だからまた、イキまくって敏感になっている肉壺に突っ込んで欲しい。性処理係の穴は、貴方を満足させる為にあるのですから———という感じの内容だった。完全にセルフアダルトビデオである。

(良いじゃないですか。それとも私が相手では、お気に召しませんでしたか?)

(いいや。次は是非、お前が妄想したシチュエーションでやろうと思ったね。覚悟しとけよ。ロープブレイクなんてないからな)

つまり精力絶倫体力魔人のご主人様の体力が続く限り、リング上で犯されるということ。

想像しただけで、ネージュは女の部分が疼くのを感じた。

(はい。私は貴方のもんです。だから、存分にしゃぶり尽くして下さいね)

こんな会話をしている間に休憩時間は終わり、会合が再開されたのだった———



会合の席で、話を聞いていたエリザ・エクレールは思った。

(早い話が私達の真似をしよう、という訳よね)

カレードが世界に与えた影響は大きい。

成功者を真似て、後を追いつ、追いつ抜こうというのは極々普通の考えだ。

(でもまあ……無理よね)

彼女は確信していた。

確かに企業の思惑は理解できる。

ISを開発・販売している超巨大軍需企業体は、自社ISを宣伝したい。

民間軍事企業は、ISという武力を使つて安全に仕事をしたい。

世界中の治安情勢が悪化している今なら、お互い利益のある取引だろう。

また1年くらい前まではISを使う事に慎重な意見も多かったが、カレードの活躍により、今は積極的に使うべきという意見の方が多くなっている。

これによりIS保有国は、人道上の理由かつ困難な状況の場合に限り、企業所属のISに出撃を認めるようになっていた。

これだけの土壌があるのだ。上手くいくと思うだろう。

だが彼女は、上手くいかないと思つていた。

何故ならISは女尊男卑の象徴だ。

よほど人間が出来ているパイロットを引っ張つてこない限り、男を見下すだろう。I

Sを整備するメカニックも同じだ。そしてI Sを扱うチームに男がいても、普通は邪魔なだけだ。仮に実力があつたとしても、男というだけで見下されてしまえば、チームとして機能する訳がない。必ずどこかで不和が起きる。不和を嫌うなら、女性だけのチーム編成になるだろう。

そして国の所属であれば、出撃する時は明確な倒すべき敵がいて、そいつを倒せばすぐに帰還できる。だがカラードの真似をするとなれば、数日間外部で活動する事もある。女性だけ、しかも美人揃いのチームが、数日間外部で活動するのだ。

犯罪者連中が何を考えるかなんて、分かり切った話だろう。

ましてI Sという超兵器に、真正面から挑む馬鹿はいない。

必ず隙を突こうとする。

(こいつら、I Sを過信し過ぎよね)

対してハウンドチームが賞金首を狩り続けていられるのは、東博士のオリジナルI S<sup>A C シ リ ーズ O P 機</sup>を与えられているからだけではない。

強固なセキュリティの施された自宅や潤沢な補給など、後方支援と言われる部分が非常に手厚く行われているからだ。

(特にミッシェン中に体をちゃんと休められる場所って重要なんだけど、そこをしつかりやろうとするとコストが跳ね上がるのよね)

ハウンドチームはミツシオン中、グロ<sup>6</sup>ーブマ<sup>1</sup>スター<sup>7</sup>Ⅲを改造した、専用輸送機を拠点に活動している。

東博士の手によって改造されたこの機体は、控え目についてモンスターマシンであった。

外見は殆ど変えられていないが、物理装甲のみで対ISミサイルを凌げるという、航空機としては破格の防御力を与えられている。

この時点で輸送機の皮を被ったナニカだが、内装系はもつとおかしかった。

メインエンジンは再設計により高効率高出力化され、無補給かつ24時間以内に、地球上の如何なる場所にも到着可能となっている。これに加えイージスシステム並の探知能力、CIC相当の電子設備、小型のシールドシステムやチャフ、レーザー迎撃システム、小道具として使うガンヘッドやパワードスーツの運搬能力、狭くはあるが居住環境まで完備されているとなれば、空中要塞と言っても良いだろう。

そしてこれほどの支援を受けているからこそ、ハウンドチームは狩りに集中できるのだ。

（企業は、どこまでやるつもりなのかしら？）

エリザは元IS強奪犯という経験から、支援の有無が生死に直結する事を良く分かっていた。

逆に言えば、支援の少ないところは犯罪者にとって狙い目なのだ。

ISの性能を過信している奴らは特に。

彼女はご主人様さまに、コアネットワークで通信を繋いだ。

(もしかしたら今後、鹵獲されたISの救出依頼なんていうのが、来るかもしれませんね)

(確実に来るだろうな)

(でもご主人様)

(うん?)

(ご主人様が助けに行くのは無しですからね)

(何故だ?)

(美人のISパイロットが犯罪者連中に捕らわれて、何もされなと思いますか? つ

いでに言えば多分チーム全員女性でしょうから、中々楽しい事になると思いますよ)

(ああ、なるほど。ならば是非とも行かないと)

(駄目です。女なんて獣なんですから、打算9割助け出された嬉しき1割で、ご主人様に

迫ってくるかもしれません。それに、それ自体がハニトラだったらどうするんですか)

(おや、心配してくれてる?)

(飼い犬が飼い主の心配をするのは当たり前です)

（ありがとう。でも本当にありそうだな。そういう依頼があった時は、気をつけよう）

この時エリザは言葉にしなかったが、本心は首輪により筒抜けだった。

助け出されただけの奴が、寵愛を頂こうなど許せるはずもない。

エリザはそんな事を思いながら、ご主人様の傍ら横に立っていたのだった――

◇

PMC業界にISを貸し出し、カラードの真似事をさせる。

これには超巨大軍需企業体の強い意向が働いていた。

何故か？

カラードに所属している機体は、とにかくメディアへの露出度が高い。

戦闘部門、レスキュー部門、宇宙開発部門、いずれもだ。

出動したなら、メディアが勝手に追いかけてきて宣伝してくれる。

ISを開発・販売している超巨大軍需企業体からしてみれば、非常に羨ましいと言え

た。

また機体が宣伝されるという事は、必然的に搭乗しているパイロットも一緒に紹介さ



れ、世間の認知度は高くなっていく。

これはISパイロット達にとってもチャンスであった。

一般的に認知度が高いという事は、(大体的場合において)腕が良いと認識される事であり、自身の名声や権力を高める事に繋がるからだ。

こうした背景がある中で、会合の後には立食パーティーが開かれていた。

大手PMCはここで、自社がISをミッションに投入できるという事を知らしめる。ISを借りられないところは、借りられるところとコネクションを作る。派遣されてきているISパイロット達は、自分自身を売り込む。様々な立場の人間が、各々に目的を持ってパーティーに参加していた。

そんな中にあっても、一番注目されているのはハウンドチームであった。

彼女らの周囲には、対応には気を使わなければいけない業界の大物ばかりが集まっている。

元IS強奪犯という重罪人の周囲に、ISパイロットですら、気を使わなければいけない人間が集まっているのだ。

エリート街道を突き進んできた者達にとって、これほど屈辱的な場面もないだろう。

故に羨望と嫉妬の視線が集まる。

大体、何故彼女らなのだ。

自分達の方が、実力も容姿もスタイルも経歴も、全て上ではないか。

それが偶々、〃世界最強<sup>E</sup>の単体戦力<sup>T</sup>〃に気に入られた。

たつたそれだけの事で、こんなにも扱いが違う。

不公平だ。理不尽だ。

派遣されてきているISパイロット達の心に、黒い感情が積もっていく。

そして自身をエリートだと思っている者ほど、堪え性が無いというのはよくある話だった。

「なによ。飼い主に気に入られただけの雌犬が偉そうに」

普段は理性で抑え込んでいた感情が、彼女らの特別扱いぶりを見た事で、高ぶってしまっただろう。

本人が思っている以上に、大きな声となってしまうていた。

妙な沈黙が訪れる。

だがこの時点では、ハウンドチームは誰も全く気にしていなかった。

何せ自分達はご主人様<sup>M</sup>の猟犬であり、女であり、絶対服従の首輪を言い訳にして、好き好んで性処理係までしているのだ。今日だって朝からたつぷり可愛がつて貰っている。雌犬と呼ばれたところで、今更だろう。

だから無視していたのだが、エリート様はそれを反論できない弱者の態度ととつたら

しい。

調子に乗って、次々と暴言を吐いていく。

勿論、晶の耳にも入っていた。

そしてここで止めていけば、このエリート様は大恥をかかずに済んだだろう。

最大限大目に見て、酒の席でちよつと行き過ぎてしまっただけ、とする事もできたかもしれない。

だが、そうはならなかった。

「大体、他にもっと実力があつて毛並みの良いパイロットなんて幾らでもいるじゃない。なのになんで、こんな薄汚れたのを使つてるのかしら？ 人を育てるのは上手いみたい

だけど、色香に騙されるなんて所詮は男ね。きつと股を開く女なら、誰でも良いんだわ」

エリート様は特大の地雷を踏み抜いたので。

ご主人様晶への侮辱である。

これに真つ先に噛み付いたのがユーリアであつた。

しかし喧嘩腰に、ではない。

表面上は、口元が少しばかりニヤついている程度だ。だが目が全く笑っていない。

そんな表情で、彼女は近づいていった。

「ふうん。じゃあ、毛並みの良い実力ある貴女は、飼所屬い主企業様にどんな機体や権限を与え

られているのかしら？ 当然、専用機くらいは持つてるのよね？」

「えっ？」

持つているはずがない。

専用機与えられるのは、選ばれた一握りのパイロットだけだ。それを「くらい」という事そのものがおかしい。

「あれ？ 持つてないの？ なら専用輸送機は？ 状況によっては小道具も必要になるから、あると便利よ。私達が使っているのはグロ<sup>o</sup>ーブマス<sup>1</sup>ターⅢ<sup>7</sup>の改良型だけど、貴女は？」

これも、あるはずが無かった。

ISなら飛んで行けるし、緊急ミツシヨ<sup>n</sup>なら追加<sup>1</sup>ブ<sup>s</sup>用<sup>用</sup>スター<sup>v</sup>オ<sup>o</sup>B<sup>B</sup>を使えばいい。

そもそも足りないものがあるのなら、後から持つてこさせれば済む話だ。

理性的に考えれば、それで全く問題ない。

しかし、羨ましくないとさえ言えれば嘘だった。

自分に与えられていないものが、元IS強奪犯という薄汚れた人間に与えられている。

それが堪らなく悔しい。

だから無いという事に、尤もらしい理由をつけて正当化する。

「足りないものがあるなら、後から持ってこさせれば良いじゃない。専用輸送機なんて、只の無駄遣いよ」

「あ、無いんだ。なら貴女の飼所属企業い主様は、どんな小道具を貴女に与えてくれているの？

貴女自身が言うように実力があつて毛並みも良いなら、相応の権限も一緒に与えられていると思うのだけど？」

ISパイロットに与えられるのは、ISという超兵器だ。

それを上手く使つてこそそのISパイロットだろう。

小道具が必要ななら、企業の資本を使えばいい。超巨大軍需企業体の資本力なら、並大抵のものは用意できる。

この返答を聞いたところで、ユーリアは表情を変えた。

彼女は元々、男は女に貢ぐためにいると公言していた女王様だ。

他者を見下す表情が、これ以上ない程に似合っていた。

「なにそれ？　つまり企業がNOと言つたら、貴女は小道具すら使えないってことじゃない。とすると……あれ？　おかしいわね？　薄汚れている私達は専用ISを与えられ、小道具も自由に使える。専用の輸送機まである。なのに実力があつて毛並みも良い貴女に与えられているのは、量産型ISだけ。カスタムはされているのかしら？　まあいいわ。で、小道具はその都度申請して、企業のOKが無いとダメ。輸送機も専用

じやなくて、他との共用で使いまわし。随分差があるわね？ あ、もしかして貴女、飼<sup>所属企業</sup>い主様に信用されてないんじゃないの？」

「い、この!! 言わせておけば!!」

激昂するエリート様だったが、そこまでだった。

ユーリアが近づき、触れ合える程の至近距離で吐き捨てたのだ。

「黙りなさい」

高圧的で威圧的な視線と台詞に、相手の氣勢が削がれる。

その瞬間に、彼女は続けた。

「自分の立場を分かっているの？ 代わりなんて幾らでもいる、只の雇われパイロツ

トじゃない」

「あ、貴女だつてそうじゃない!!」

感情的な反論にユーリアは、自身の首輪を指差しながら答えてやった。

「全然違うわよ。私達は首輪を嵌められた犬ところよ。そしてこの首輪がある限り、私達はあの人の部下。私達だけが、あの人の直属の部下なの。代わりなんていない。でも貴女は違う。貴女程度のパイロットなんて幾らでもいるもの。だつてそうでしょう？」

貴女が本当に実力のあるパイロットなら、今頃専用機を与えられて、更に高いステージにいるはずだもの」

周囲にいた業界関係者は苦笑し、ニヤニヤと笑っていた。そんな中で、ユーリアはご主人様ごしゆじんさまに話しかけられた。

「そのくらいにしておけ。無闇に敵を作るものじゃないし、俺も気にしていない」逆説的に言えば、先ほどの暴言は聞こえていたということだ。

エリート様の顔が真つ青になっていく。

「飼い主が侮辱されたんですよ。忠犬としては、噛みつくところじゃないですか」食あたりして、腹でも壊したらどうする」

ある意味で、この台詞がエリート様に止めを刺していた。

何せ周囲の者達は、あの雑原晶が「お前など噛みつく価値も無い雑魚だ」と言ったと解釈したのだから。

そんな他者の迷惑を他所に、上司と部下の会話は続いていく。

「壊しません。それよりも社長」

「ん？」

「この後はどうしますか？」

「大体のところとは話したし、帰るかな」

パーティが始まってから、既にそれなりの時間が経っている。

退席したところで問題は無いだろう。

こうして晶とハウンドチームの面々は、会合会場を後にしたのだった。

ちなみにカロードに帰った後、ハウンドチームの面々はもう一度抱かれていた。

ネージュは試作デザインの新ISスーツを着たまま種付けプレスで、ユーリアは黒のオーブンランジェリーというエロい姿の騎乗位で、エリザは全裸に剥かれた駅弁スタイルで、それぞれ好き放題に肉壺を突かれて、果てていたのだった――。



## 第16話 更識家当主（仮）のお仕事（第153話以降）

更識家現当主の楯無と妹の簪は、薙原晶によつて女にされて以降、自ら望んで奉仕するほどに手懐けられていた。

姉は生徒会長室で雌穴を差し出し、妹は更衣室で男根をしゃぶり、家の寝室では姉妹揃つて欲望を受け止め失神するまで可愛がって貰う。

2人にとつて晶は、既に更識家の当主なのだ。諦めの悪い彼は中々首を縦に振らないが、姉妹の考えはもう固まっていた。誠心誠意ご奉仕して、必ず当主だと認めて貰う。そう思つていた。

だから、今日も――。

「晶は、んんっ、あんっ、動かなくて良いのよ。アッ、全部、私達が動くから、ね」  
更識家当主の寝室。

キングサイズのベットのうえで楯無は晶に跨り、逞しくそそり立つ男根を自らの雌穴で扱っていた。

淫具がテラテラと愛液で光る肉棒でピッチリと押し広げられ、女が腰を下ろす度に体

がビクツと震えている。開発されて弱々になった子宮口に、男の鈴口がキスしているのだ。だが奉仕したい彼女は、懸命に腰を振る。晶に満足して欲しいのだ。

すると後ろから、乳首がギユツと抓られた。

「アンツ、か、かんちゃん。だめえ」

「お姉ちゃんばっかりズルい。私も早く欲しいの。だから、早くイツて、ね」

姉妹には犯してもらっている時、暗黙の了解があった。

イツたら交代というものだ。

だから簪は、大好きな姉を虐める。後ろから豊満な胸を揉み、乳首を抓り、勃起したクリトリスをギユツとこねくりまわす。

すると、ホラ。

「駄目、かんちゃん。ダメよ。イツちゃう。イク、イクイクいくうううう」

噴き出した潮が、男の腹を汚していく。

すると晶は体を起こし楯無をまんぐり返しにして、敏感になった膣穴をグリグリと虐めながら言った。

「じゃあ、簪。ちよつと待ってろ。楯無に腔内射精中出ししたら、今度はお前の番だ」

無尽蔵の体力を持つ晶の男根は、中出ししても衰えない。

むしろ簪は精液と愛液でドロドロになった男根を突っ込まれると想像しただけで、女

の部分で疼いてしまった。

「はっ」

返事と共に、簪は股を開いてオナニーを始めた。胸を揉みながら、指を雌穴に入れてジユポジユポさせていく。よく濡らしておいて、突っ込んで貰った時にすぐ気持ち良くなつて貰えるように。

そうして姉が種付けプレスでイカされた後、妹は正常位で男を受け入れた。正面から、ギユツと抱きしめてもらえるお気に入りの体位だ。両足を男の腰に絡ませ、より深く男根を咥え込んでいく。

「晶さん。晶さん」

繰り返して繰り返して男の名を呼び、キスをして、唾液を交換し、突き込まれる男根の快楽に溺れていく。そうして一度中出し（内射）された後、背後から両手を握られた立ちバックで犯されている最中に姉の反撃があつた。

「かんちゃん。さつきはよくもやってくれたわね」

「お、お姉ちゃん？」

姉が手に持つのは、肌に張り付けるタイプのバイブだった。

少し厚いシールのようなもので、簪自身も使った事がある。

それが、3つ。

何をされるのか分かり防ごうとするが、晶は両手を離してくれない。

それどころかズンツと男根を突き入れると同時に握っていた両手を後ろに引き、簪の体を引き起こしてきた。

男が痴態を望んでいるなら、簪の行動は1つしかない。

胸の頂に貼られたシール型パイプが振動し、勃起していた乳首が無機質な振動で虐められると、艶やかな声が室内に響いていく。更に同じように勃起していたクリトリスに貼り付けられると、妹はすぐにイッてしまった。雌穴がキュツと締まり、男に精をせがんでしまう。すると男は荒々しいピストンを始め、彼女は再び放たれた精で子宮がマーキングされるのを、うっとりとした表情で感じていた。普段の彼女からは想像もつかないような、淫靡な表情だ。

次いで晶は、また楯無を犯し始めた。

両手を壁につかせ、後ろからだ。細い腰をガツチリと掴み、逃がさないとばかりに激しく、時にゆっくりとグリグリして、女をどこまでも追い込んでいく。中にマーキングするだけでは飽き足らず、背中にも顔にもぶっかけて、汚していく。お前は俺のものだと刻み付けていく。簪も同じだ。何度でも何回でも、朝日が昇ってくるまで、2人は犯され続けたのだった。



(うぐん。なんか、外堀を埋められてる気がするぞ)

超絶今更ながら、晶は朝御飯を食べながらそんな事を思っていた。

彼としては、欲しいのは楯無と簪であつて更識家ではない。餅は餅屋で裏の事は楯無に任せた方が上手くいくだろう。自身が余計な口を出す必要などない。だが2人と使用人の動きを見てみると、どうあつても当主を名乗つてもらおうという意味をひしひしと感じるのだ。

例えば朝御飯の座席の位置。何故か上座で両サイドに楯無と簪。後ろに着物姿の使用人が控えている。晶の事を「当主」とは呼ばないが、所々で楯無や簪の言葉よりも優先している節がある。

来た時に泊まっている部屋も当初は客室だったが、いつの頃からか随分と設備が良くなっていた。NEXTのセンサーで探ってみたら、楯無の部屋と同レベルの防音・耐爆・耐爆性能。つまり当主の部屋と同レベルの作りだ。

(いや別に良いんだけどさ、でもやつぱり、更識の当主は楯無だろう)

楯無がやっていた方が上手くいくなら、彼女が当主で良いじゃないか、というのが晶の考えだ。だが更識と簪にとっては違っていた。彼女達は自身が好いた男に当主に

なって貰って、傍らで支えたいと思っていたのだ。無論好いているというだけで当主の座が許されるほど、裏社会の名門たる更識家は甘くない。が、晶なら何も問題は無かった。暴力が最もモノをいう裏社会において、<sup>N</sup>「世界最強の単体戦力<sup>E</sup>」が当主というのは、圧倒的な強みとなるからだ。雑務など、姉妹や家の者が片付ければよい。

このため更識家の総意として、晶が当主になるのは決定事項であった。

そして事態が動いたのは、朝食が終わった直後。彼がお茶を飲んで、一息ついた時である。和服美人な使用人さんが晶に話し掛けた。

「晶様、いえ、旦那様。今日の<sup>G</sup>予定は特にありませんが、この後は如何されますか？」

「ん？ 旦那様？ それ、俺のことか？」

「はい」

「ちよつと、気が早いと思うんだけど」

「いえいえ。早くなどございませぬ。御当主姉妹をあれ程可愛がられているのですから、当然、男として責任を取るおつもりなのでしょう？ なら、旦那様が相応しいかと」

不意打ち気味に放たれたド直球な台詞に、流石の晶も一瞬間まっぴらしてしまう。

更識姉妹に至っては真つ赤になっている。

「え、あ、ああ。そう、だな……………」

これが当主様と呼ぶ為の布石である事はすぐに分かった。

だが楯無も簪も貰う気である以上、旦那様という呼び方まで断るのは2人に対して不誠実だという彼なりの考えがあった。

「なんかこそばゆい気もするが、そっちが嫌でなければ、まあ、構わない」

返答に対する使用人の反応は早かった。

「では早速、更識家に仕える者達に通達致します。今この時より、薙原晶様のことは旦那様とお呼びするように、と」

え、ちよつと待って。早いんだけど。とは言えなかった。

楯無と簪が、ものすつごい嬉しそうな顔をしているのだ。

そして2人の顔を見ている間に、和服美人な使用人さんはスマホを取り出して何処かの番号をコール。繋がると、すぐに口を開いていた。

『薙原晶様が、旦那様と呼ばれる事をお認めになりました。これ以降、あのお方の事は旦那様と呼ぶように』

『その通りです。楯無様と簪様は奥様となられます。つまり、分かりますね』

『ええ。では、後は任せましたよ』

和服美人な使用人さん。スマホを懐にしまうと、晶に向かって深々と頭を下げた。

「これより我ら使用人一同。旦那様に誠心誠意仕えさせて頂きます。出来れば、どうか末永く我らの主でいて下さい」

「全く。お前らな。まあいい。じゃあ最初の命令だ。今まで通りキツチリ楯無の目となり耳となり手足となれ。いいな」

「はい。旦那様の御命令、確かに承りました」

「こうして晶は更識家で旦那様と呼ばれるようになったのだが、それに伴い肉体労働が一つ増えていた。

「ねえ晶」

「ん？」

「一つお願いがあるのだけど」

「一体なんだ？」

「この家にいる使用人全員を、晶の色に染め直して欲しいの。もつとハッキリ言っちゃえば、全員とエツチして、晶のものだと刻み込んであげて欲しいの」

「お前。それって、どういう」

「ちゃんと理由はあるのよ。更識は裏の家。私達が敵にスパイを送り込み、情報を持ち出して、裏切りを仕掛けるように、敵も同じことを私達にやってくるわ。そういう時、最後の抛り所になるのはお金や待遇じゃないの。裏切れないと思うものがあるかどうか



なの。一般的には裏切りには死をだけど、私としてはもう一押し欲しいと思つてゐるわ」

「それと今のが、どう関係するんだ？」

少しばかり惚けてみる晶だが、楯無にはお見通しだった。

「あら、分かるでしょう。晶はもう、敵には容赦しないつていうムチは示しているわ。だからね、今度はアメを示して欲しいの。そして私達は女で、晶は男。男女の仲は時として、何よりも強く裏切りを防ぐわ。それとも、ウチの使用人はお眼鏡に叶わない？ 更識はくノ一の流れを汲むだけあつて、使用人の容姿も床の上手さも保証するわよ」

「あのなあ。それつて普通は浮気だぞ」

「あら、今更じゃない？ 私と簪を手籠めにした男が、普通な訳ないでしょう。引き籠<sup>巣</sup>り、セシリア、シャルロット、ハウンドの3人は好き放題にいつでも何処でもよね。クラスメイトも何人かそれらしいのがあるし、ラウラと義妹達は時間の問題でしょう。というか、むしろ早く食べてあげなさいよ。多分、とつても待つてるわよ。後は……………ああ、デュノアから出向で来てる子なんて、もう晶の言う事なら何でも聞いちゃうんじゃないかしら」

「仕事というか義務的に抱くつていうのもアレだが、まあ分かった。お前達を抱いた後に時間があつたらな」

「お願いね。ああ、そうね。今日この後予定が無いなら、彼女を抱いてあげて」

晶にとつてはお願いだが、和服美人な使用人さんにとつては命令だった。

だが奥様公認ならば否は無。誠心誠意仕えるという言葉通り、旦那様にご奉仕するだけである。

しかし数時間後、使用人のそんな考えは完璧に吹き飛ばされていた。

突き入れられた極太の男根で最奥を執拗に責められ、よがり狂わされ、何度も何度も女の園を白濁で汚され、なお衰えない男根で蹂躪されたのだ。そうして最後には、愛液と精液でドロドロになった男根を、自ら望んでお掃除フェラするほどに躡けられていた。

床上手という自負など関係無く、男に自ら望んで屈服した女の姿であった――



そうして数週間が経った頃。

更識家の使用人は残らず晶に犯されていた。勿論楯無と簪がいた時は2人が優先されてきたが、何らかの理由で当主姉妹が奉仕できない時は、使用人が代わりを勤めるよ

うになつていた。

モーニングフエラをして、お風呂で体を洗わせてもらい、当主となる男の男根を雌穴で扱き、お情けを注いでもらう。何度でも、好きなだけ中出し腔内射精してもらうのだ。

そして初めは奥様の命令という建て前があつたが、いつしか彼女らは望んで抱かれるようになっていた。

有り余る体力と精力でこれでもかかと雌穴をかき回され、男を誑かすあらゆる方法が通じず、何度射精しても衰えない男に、蹂躪される悦びを教え込まれてしまったのだ。

なまじ床上手で他の男を知っていただけに、もう他の男では決して満足できないだろう。

今では人気の無い廊下で、移動する車の中で、あらゆる場所で望むままに奉仕する使用人達が出来上がつていた。

「——とところで、更識家の使用人全員を手籠めにした感想は？」  
とある休日。

楯無の雌穴に好き放題中出し腔内射精した後のこと。

晶の腕に抱かれ休憩中の彼女が、そんな事を尋ねてきた。

「みんな美人だし可愛いし健気だし、俺としては言う事ないかな」

「なら、私とかんちゃんは？」

晶の返答は雄そのものだった。

未だそそり立つ男根が、楯無の淫具に押し当てられる。

「自分でだけしかけたクセに心配なのか？ あいつらは使用人であつてお前達じゃない」

返答を待たず、男根がゆっくり挿入されていく。

そして散々嬲られていた雌穴は、とても敏感になつていた。

肉棒が膣壁を擦り、奥をちよつとグリグリされただけで、甘美な感覚が押し寄せてくる。

「心配なんて、ンツ、してない、あんつ、わよ」

「ならどうして？」

「みんな、ンンツ、アンツ、貴方のことを、グリグリだめえ、言つてたらからあ、ンンンツ、はああん、聞いてみたかったの」

「どんな事を言つてたんだ？」

「もつと、アツ、もつと抱かれたいって」

「それは嬉しいな。でもお前と簪が優先だ。他は食い散らかすだけだな」

徐々にピストンが早くなつていく。

「良いの。それで良いの。旦那様は、アンツ、奥、良いの。食い散らかすくらいで良いの」

晶は彼女を四つん這いにさせて、バックから腰を掴んで本格的にピストンし始めた。

雌穴がキュツと締まり、男から精を搾り取るうとする。

「そうか。じゃあこれからも食い散らかして、更識の全てを俺のものにする。管理はお前がしろ。これで良いか？」

「はい。アツ、良いです。良いですう」

結局は楯無の思惑通りになっていた。

（だがまあ、今更か）

楯無と簪を貰う気でいた以上、どこかで決めねばならなかつたことだ。

そして君臨すれども統治はせず。細かい事は今まで通り楯無に任せれば良いだろう。

（俺はいざという時の為に控えているくらいで丁度良いか）

こんな事を想いながら、晶は楯無を犯し続けたのだつた——。



後日のこと。

晶が更識家に泊まりにくると、使用人が総出で出迎えてくれた。

和服美人な使用人さんが前に出てくる。

「当主様、お帰りなさいませ」

「……………未だに慣れん」

「慣れて下さいませ。貴方様の一番は東博士かもしれませんが、我らにとつての一番は貴方様です。むしろ受け取ってもらわねば困ります」

「分かった分かった。2人は？」

「もうじき帰宅されます。先に湯あみをなさいますか？」

「そうさせてもらおうかな」

「分かりました。準備は出来てますので、そのままどうぞ」

楯無と簪がない時、当主の体は使用人が洗う事になっていた。

勿論、嫌々行っている者などいない。むしろ寵愛を受ける為に倍率が高過ぎてトラブルになりそうだったので、持ち回りというルールが決められたくらいだった。

「分かった。2人が戻ったら教えてくれ」

「はい。どうぞ、ごゆっくり」

この後、浴室に向かった晶は今日の担当を犯し始めた。好き放題に中出しして、ぶっかけて、お掃除フェラをさせて、更にもう一回中出し體內射精マーケティングをして、女だという事を刻み込んでいく。

こうして名実共に晶のものとなっていった更識家は、勢力を更に拡大させていった。全てを差し出したご褒美に、東が力を貸したのだ。

例えば束お手製の偵察衛星へのアクセスコード。彼女にしてみれば大した性能ではないが、既存の偵察衛星と比べれば桁違いである。それを複数機貸し与えたのだ。これにより更識家は、情報面で他組織よりも圧倒的な優位性を得ていた。カロードの情報網と併せれば、国家機関が相手でも遅れは取らないだろう。また武力面の強化も行われていた。以前提供されたYF-23<sup>ワー</sup>「ブラックウイドウII<sup>ッ</sup>」の改修が行われたのだ。基本性能の向上は勿論だが、目玉となる改修が2つあった。1つは新開発されたコンデンサーにより、極短時間ながらエネルギーシールドを張れるようになったのである。これによりアクティブアーマーのように瞬間的に使用する事で、大幅な防御力の向上を実現していた。もう1つが、光学迷彩の装備の実用化だ。これは4つあるマウントアームの内2つを潰してしまい、かつ戦闘機動中は使用不可能という使用制限の多い装備ではあるが、隠密任務の多い更識において、姿を消せるという利点は多少の欠点など補って余りあるものだった。

他にも晶の目となり耳となり手足として様々な力を与えられた更識家は、裏社会において絶対的な存在となっていく。

—— 奴らに睨まれたら終わり。

—— 奴らが出てきたら終局。

尤も、何処にでも口の悪い者はいる。

負け犬どもは悔し紛れに言うのだ。

更識家は薙原晶の後宮だ、と。

尤も、言われた者達は全く気にしていなかった。むしろ本当の事なので喜んでいたくらいだ。

そして今まで更識家を纏めていた女傑、更識楯無が薙原晶に如何に可愛がられているかを示すエピソードがあった。

彼は絶対イマージュ・オリジス天敵来襲前に、彼女をロシア代表から引退させて手元に戻していたのである。



# 第17話 本音の初めて（第153話以降）

布仏本音。

I S 学園2年1組に在籍する専用機持ちの1人にして、裏社会の名門「更識家」に仕える「布仏家」の娘。

おっとりした不思議な雰囲気を持つ彼女の初めては、I S 学園のI S 格納庫であった。

誰もいない格納庫で主<sup>音</sup>から聞いた夜の生活を思い出してしまい、そつとクロツチの上から淫貝に指を這わせていただけのつもりが徐々に激しくなり、我慢できなくなつて本格的にオナニーしていると見られてしまったのだ。

M字開脚という大股開きで淫貝に指を突つ込みジュポジュポして、愛液を垂らしながら自身の胸を愛撫して頂きを抓り、主<sup>音</sup>の男の名を呼びながらオナニーしている卑猥な姿を、である。

そんな光景に出くわして反応しない男などいないだろう。まして自身の名を呼ばれているとなれば。

恥ずかしくて何も言えなくなっている本音に、晶は何も言わなかった。

覆いかぶさり、抱きつき、キスをしながら両手で全身を撫でまわしていく。本音がしたないのである。男から求めたという事実があるだけだ。

「しょ、ンンッ」

だから、何も言わせない。

何かを言おうとする度にキスで唇を塞いで妨害する。ISスーツの首にあるホックを外して胸を露出させ、揉んで、彼女自身の手でほぐされていた淫貝に指を入れ、たっぷり時間を掛けて優しく優しく掻き回していく。唇を離せば、本音の口からは艶声が漏れ始めていた。未だ恥ずかしいという思いがあるのか、両手で口元を押さえ、我慢しようとしている。だが、体は正直だった。乳首は硬くしこり、男がちよつと抓るだけで体がビクツと震えている。淫貝を弄んでいた男の指は、流れ出る愛液でグチヨグチヨだ。

晶が耳元で囁く。

「いいかな？」

胸と淫貝を愛撫されながらの問いに、彼女は肯き返すのが精一杯だった。

すると男の、女を狂わせる巨根が押し当てられ、ゆっくりと突き入れられていく。

女を気遣うように、少しずつ、少しずつ。途中にあつた細やかな抵抗が破られ、破瓜

の血が淫貝から流れ落ちる。

本音が女になった瞬間だった。

そこで彼女は、痛いのか気持ち良いのか自身でも良く分からない感覚が怖くて、両手で晶に抱きついてしまう。

結果として彼女は、男をより深く受け入れる事になってしまった。男が気遣いながらゆっくり挿入していたのを、自分自身で一氣に最奥まで入れてしまったのだ。

ズンツ!!

男の鈴口が本音の無垢な子宮口を直撃し、腰がピクンと跳ね上がる。

予期せぬ衝撃に混乱する本音を気遣い、晶は動きを止めた。そうして彼女が落ち着くのを待つてから、鈴口を子宮口にソフトに押し当てて優しく愛撫していく。

キスをしながら時間をかけて、ゆっくりと雌穴に男を覚え込ませていく。

彼女の腰が、ピクン、ピクンと小さく動いていた。

(本音って、感じやすいんだな)

本人は自覚していないかもしれないが、表情はトロけ始めていた。膣もキュツと締まって、男から精を搾り取ろうとしている。

だが激しいピストンはまだしない。相手は初めてなのだ。ゆっくりと解きほぐしていく。

晶は優しく丹念に奥を小突いていく。

そうして彼女の艶声が格納庫に響き始めた頃、晶は徐々にピストンを大きくし始めた。

膣壁を味わうかのように巨根が抜けるギリギリまで引き、ゆつくりと推し進め、奥に押し当ててグリグリして、また巨根が抜けるギリギリまで引き抜く。

格納庫という共有スペースで半裸の女が犯される姿は、酷く卑猥で淫らだった。

普段おっとりとしている彼女がよがっているとなれば、特に。

ピストンが早くなり始め、パンツ、パンツと男根が突き入れられる度に、豊かな双丘が揺れ、男の情欲を高ぶらせていく。

男が乳首を甘噛みすると、女はもっと味わってと言わんばかりに男の頭を抱き抱えた。

そうしてタツプリと時間をかけてからイカされ、更に突かれてまたイカされ、初体験體內射精で中出しマーケティングをされた本音は、男根を突つ込まれたまま言われた。

「本音さん。いや本音。順序が逆になつちやつたけど、お前を俺のものにする。拒否は自由だけど、離さない」

本音は不器用な人だと思つた。

オナニーを見られて恥ずかしいのはこつちなのに、女性に恥をかかせないように、こ

んな風に言っている。

下腹部に男の熱を感じながら、彼女は返答した。

「しよーちん。ううん。晶くん。これから、未永く宜しくお願いしますね」

「ああ」

男の嬉しさを表すかのように、女の中にある男根がピクンと動いた。

奥が刺激され、小さな艶声を漏らす本音。

この後2人はすぐに続きを始め、終わって汗を流す為に入ったシャワールームで2回戦目を始め、更衣室で着替える途中で3回戦目をやって――。



帰る途中のことだ。

「しよーちん。ケダモノ過ぎ」

「そんなにかな?」

「そうだよ。もうダメって何回も言ったのに。あ、あんなに……………なんて」

抱かれている時の事を思い出して、赤面する本音。

それを可愛いと思いつつ、晶も抱いている時の事を思い出していた。

正常位、後背位、騎乗位、駅弁スタイル etc etc。

初体験の女性には、ちよっとばかり大変だったかもしれない。

「ごめん。つい。でも気持ち良くなつて貰えたと思うけど、ダメだったかな？」

「しょーちんズルイ。そんなこと言われたら、き、気持ち良かったとしか言えないもん」  
本音は初めてだったとは思えない程に乱れさせられていた。

最後の方など騎乗位で自ら腰を振り、男根を気持ち良いところに押し当てていたくらいだ。

普段おっとりしている彼女の淫らな姿というギャップに、晶がハッスルしちゃうのも仕方が無いだろう。

「よかった」

「でも今日ので、しょーちんの周りに女の子が多い理由が分かった」

「え？」

「だって、私は沢山気持ち良くしてもらったけど、しょーちん体力まだまだ有り余ってるでしょ」

「ん、いや、まあ……………な」

とぼけてもバレてそうだったので、晶は正直に答えた。

「だから、他の子も抱くんですよ。1人だけだと相手が持たないから」

「否定はしないけど、抱いた子には笑顔でいて欲しいと思ってるよ」

「簪ちゃんも？」

「勿論。というか、かなり可愛がつてる」

「知ってる。だつて簪ちゃん。しょーちんとの夜を私に言うんだよ。事細かに。それで……その……」

格納庫で思い出してオナニーしてしまった、と。

だがその恥ずかしい思いには触れず、むしろもつと恥ずかしくなる言葉を囁いた。

「これからは本音も、だからね」

ボンツ、と彼女の顔が一気に赤くなった。

さて、簪はどこまで話したんだろうか？

今まで彼女と行ったプレイが脳裏を過ぎる。

普通に服を脱いでベットのうえでというノーマルプレイ。モーニングフェラからの騎乗位座内射精中出し。お風呂で姉妹井泡風呂プレイも沢山している。学園の人気の無い教室で制服プレイもしているし、格納庫でのISスーツプレイも多い。ブルマ姿の彼女を体育館の器具室で犯した事もあれば、シャワー室やプールで全裸に剥いて犯した事もあった。

(うーん。どこまでだ?)

正解は全部なのだが、彼がそれを知るのはもう少し後の事であった。

（まあ良いか。可愛い本音をハーレムに入れれたし、後は徐々に慣らしていけば）

男の欲望丸出しな考えを巡らせながら、晶は彼女を寮に送り届けたのだった――。



こうして晶のハーレムの一員となった本音は、徐々に、それでいて確実に、至る所で犯されるようになっていった。

主である簪と同じように、人気の無い教室で、格納庫で、体育館の器具室で、そして今日は、IS学園のプールでだった。

「ンンッ、はぁ………アンツ!!」

両手を壁につきバックから犯されている彼女の姿は、学園指定の競泳水着だった。

適度にデザイン性のある水着だが、女尊男卑な世を反映してか、女性的なラインが強調される作りになっている。

側腹部と背部の布地は大胆にカットされ、股布から腰までのラインも、一般的な水着より急角度だ。必然的にお尻の布面積も減っているため、授業中によく食い込んでいたりする。女生徒が指でクイツと直す仕草は、晶の楽しみの1つだった。また布地がお尻



に食い込みやすいデザインのため、バックから突っ込んでいる時の視覚的エロさは、彼を大いに興奮させていた。

男根に力が入り、本音を責め立てていく。

「しょーちん。もう、もうお」

「本音は可愛いな」

「奥、奥に、もつと、もつとお」

男根をより深く咥え込もうと、本音が尻を突き出す。ついこの間まで処女だったとは思えない淫らさだ。

そして晶は優しい言葉とは裏腹に、彼女を力強く責め立てていた。

パンツ、パンツと男根が打ち込まれる度に、雌穴がキュツと締めまり愛液が滴り落ちていく。

「ああ。幾らでもしてやる」

「うん。うん」

晶に抱かれるようになってから、本音は急速に女を開花させていた。

キスも、フェラも、パイズリも、腰の振り方も、男を立てて喜ばせる奉仕の方法を、瞬く間に覚えていったのだ。

今では初めての時のような拙さは微塵も無い。男を悦ばせる方法を知った、1人の女

だった。

そして自分の女となった本音の雌穴を、晶は好き放題に掻き回し、體內射精中出しマーキングで男を教え込んでいく。幾ら射精しても衰えない男根で、何度でも、丹念に、快楽を覚え込ませていく。

勿論他への愛撫も忘れない。大胆にカットされている側腹部から水着の中に手を入れて、90越えバスタの巨乳を水着の中で好き放題に揉みしだき、乳首をコリコリと弄びながらピストンで責め立てる。

すると彼女が振り返って、雌顔でキスを求めてきた。

普段のおっとりとした表情からは想像できないほどにトロけた顔だ。

「しょーちん。んっ、んんっ、はあ、ンッ」

互いの唇が触れ、舌を絡ませ、唾液を交換して、夢中になって相手を貪っていく。

そうしている間に晶は、彼女の水着をはぎ取って全裸で犯したくなった。

着衣プレイも良いが、学校のプールという共有スペースで一糸纏わぬ姿にして犯したくなったのだ。

想像しただけで、男根に力が入る。

「んっ、しょーちん。何か、アンツ、おつきくなつた。ンンツ、何考えてるの?」

「(イ)う(い)う(イ)と」

一度男根を引き抜き、有無を言わず水着をズリ下げ、生まれたままの姿にする。

綺麗で、それでいて愛液を垂れ流す卑猥な姿に、晶はまたすぐに男根をぶち込んだ。我慢なんてする必要はない。本音はもう自分の女であるし、彼女も愛されたいと思つて  
いる。

向かい合つて抱き合つてキスして密着して、男根が雌穴の奥をグリグリしても、足りないとはかりに彼女は腰を押し付けてきた。だから晶は、彼女の両足を抱えてやった。所謂駅弁スタイルだ。

男根がより深く挿入されて子宮口がこじ開けられ、その奥にまで侵入していく。女の一番神聖な場所にハーレム野郎のチンポが押し入り、好き勝手に犯していく。

駅弁スタイルで持ち上げられている本音に、逃れる術はない。ただ男に抱きつき、与えられる快樂に蹂躪されるしかない。

この後、彼女は何度も潮を吹くまでイカされ、好き放題に中出し膣内射精マーキングをされていった。そして引き抜かれた精液と愛液でドロドロになったチンポを、本音はお掃除フェラで綺麗にしていったのだった——。



後日のこと。

昼休みのIS学園。屋上。

本音はクラスの友人2人と一緒にお弁当を食べていた。

右隣に座っているのが相川清香。あいかわきよか ショートカットのスポーツ万能元氣娘。

左隣に座っているのが宮白加奈。みやしろかな ショートボブで1年生の頃は割と恥ずかしがり屋

さんだったが、とある事件以降、少し性格が変わってきている。

「ねえ本音ちゃん。最近、何かあった？」

右隣に座る相川が、本音をマジマジと見てから尋ねてきた。

「ううん。何も無いけど、どうしたの？」

「特にこれって理由は無いんだけど、最近、何だか色っぽい」

「そう？」

「そうだよ。振る舞いに艶があるっていうかさ。何か違う」

「気のせいだよ」

「気のせいじゃないと思うな」

左隣に座る宮白、愛称「かなりん」が口を挟んできた。

「気のせいだよ」

「ううん。最近の下着、とつても色っぽいもん。今日の体育の時だつてさ、着けてたのス

トラップレスの黒ブラでしょ。下だつてシンプルだけど黒くてサイドが紐なタイプ。セシリアさんはいつとも可愛かつたり大人っぽいものつけてるけど、本音は今まで、そういうの着けてなかつたでしょ」

「そ、そうかな。多分、気のせいだと思うよ」

ストラップレスのブラは今までも愛用していたが、紐タイプのショーツは以前晶に見せた時に大変喜んでもらえたので、つい着てきてしまった。

「ふう〜ん」

2人の友人が、ちよ〜〜疑いの視線を向けてくる。

危険を感じた本音は、背中に冷汗を感じながら別の話題を持ち出した。

「き、キヨちゃんだつて身体測定の時、晶清香くんに測つて貰う時にさ、いつものスポーツブラじゃなくて可愛いの着けてたでしょ」

「あつたりまえでしょ。晶くんに測つて貰う時に、変なのなんて着てこれないよ。むしろ次はもつと良いのを着てきて……………あ、でもダメかな。私50音順で呼ばれたら一番最初だ。色々な事なんて出来ないのよねえ。残念」

相川清香あいかわきよか

50音順で呼ばれたら、どうあつてもトップバッターだ。

時間をかけたら後ろの人に文句を言われてしまう。

「キヨちゃん。色々って、何を考えてるの?」

「一番最後だったら転んだ振りして抱きついて、そのまま押し倒してニャンニャン」  
色々と無理のある穴だらけな妄想だが、御飯中のネタ話などこんなものだろう。

「キヨちゃんのエッチ」

「クラスの子なんて、大体同じような事考えてるよ。ねえ、かなりん」

「そ、そこで私に振るの!?!」

「え? 違うの!?!」

「違わな……って違うからね。私はそんなこと考えてないからね」

真面目ぶる彼女だが、彼女の方こそ悪い知り合ハウンドの面々いから色々聞いているお陰で、そっち方面に興味津々となっていた。

最近、夜に一人で処理する回数が増え気味なのだ。

「ふうくん」

かなりんは本音と相川に、ちよく疑いの視線を向けられた。

彼女がとある事件で晶に救出されているのは周知の事実だし、晶が今後もクラスメイ  
トの面倒を見ると宣言する前第148話から、カロード志望であったのは種々の言動か  
ら疑いようがない。何せISトップメーカーからの専用機打診を断っているくらいだ。  
考えていないというのは、ちよつと無理があり過ぎだろう。

相川が面白半分に突っ込んだ。

「そういえば、かなり人も最近攻めてるよね？」

「な、何が？」

「体育で畠くんとストレッチする時、最近はずつとハードサポートタイプのブルマーⅠS学園が採用しているブルマーには、クラシックタイプと呼ばれる従来型の他に、ハードサポートタイプと呼ばれるものもあった。伸縮性の少ない生地で筋肉をサポートすると同時に、露出面積を上げて放熱効率を高める事を目的としたタイプだよね」

「ぐ、偶然だよ。偶然。偶々いつも着てたのが洗濯中で、仕方なく、ね。私だってちよつと恥ずかしかつたんだよ。大きく足を上げたり開いたりしたら、ちよつと見えそうになつちやうから。でも体育っていう授業中のことだし、やましい事なんてこれっぽっちもないよね？ みんな同じ条件なんだから」

「同じ条件だけど、畠くんの背中押す時、すつこい密着してたよね。体全体で押すようにしつて」

つまり胸が男の背中に密着していた、ということだ。

「しよ、畠くんにしつかり押して欲しいって言われてね、しつかり体重をかけたただけだよ」

「ふう〜ん」

再度疑いの視線を向けられたかなりんは、話題を元に戻して反撃を始めた。

「そ、それよりも本音だよ。紐シヨーツなんてすごい攻めたの、どうして履くようになったの？ 絶対何かあったからでしょ」

「な、何でもないよ。気分。気分だからね。ちよつと雑誌を見て、良いなあって思っただけだから」

「女の子がそういうものを見る時は、大体男絡みなんだよ。最近出会いがあつたなんて話は聞かないし、なら相手は1人だよな？ 一夏くんには鉄壁のガードが2人いるから、可能性は1人だけ。違う？」

「ち、違う。違うからね」

「もう強情。あくまで否定するんだ。なら、晶くんに直接聞いちゃおう」

「あ、ダメ。それは、ダメ」

本音は気恥ずかしさから、普段のおっとりとした姿からは想像も出来ないほど女っぽい声で言ってしまった。

「……………あ」

「ふうくん」

「へえ」

そしてコレが、クラスメイト達が女となっていく遠因になった。



セシリアやシャルロットという同性から見ても高嶺の華ではない。クラスにハーレムの下地が出来上がりつつあったとはいえ、本音という美少女ではあるがおっとりさんで普通の彼女が女になった事で、周囲が触発されてしまったのだ。

これによりクラスメイト達は、徐々に、それでいて確実に、積極的なアピールをするようになり始めたのである――。

## 第18話 ラウラの初めて（第155話以降）

ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒの初体験は、暴風と大雪が吹き荒れる山奥でだった。

発見した秘湯にテントを張り、外界から隔絶された空間で、晶と2人つきりで温泉に浸かっていた時の事だ。

「——良い湯だな。日頃の疲れが洗い流されるようだ」

ラウラが「うくん」と両手を上に伸ばすと、成長著しい胸が逸らされ強調されるような形になっていく。

ISスーツを着たままとは言え、男から見ると中々美味しい光景だ。

（しかし、この成長具合は反則だろう）

IS学園入学当初の彼女は、低身長かつ起伏の少ないストーンなまな板体形であった。ぶつちやけて言えば綺麗ではあつても晶の好みではない。だが2年生も終盤になった今は違う。人並な身長と双丘、キュツとしたくびれ、脚部へと続く魅惑的な曲線という、異性の目を引き付けてやまない大変良い女になっていた。

そうして昔と今の違いを思い浮かべていると、ラウラがニヤニヤしながら肩を寄せてきた。

「ところでシャルロットから聞いたんだが、お前はチラツと見えるのも大好きらしいな」  
「へ？」

「だからシャルロットから、チラツと見えるのも大好きだつて聞いたんだ」

「な、何のことだ？」

「こういうことだろう」

言いながらラウラは、ISスーツの横乳部分を指で引つ掛けてチラツと見せてきた。しかし悪戯のように行っているせいか、全然エロくない。

この為、晶の採点は辛口だった。

「0点」

「なっ!？」

「色気が足りない。大体お前、女が男に対してそういう事をする意味が分かってるのか」  
言いながらラウラの腰に右腕を回して抱き寄せる。

「お、おい。何を」

「何をじゃない。お前無防備過ぎなんだよ。だから、ちよつとお仕置き。男に対して迂闊にそういう事をするとな襲われちゃうって身をもつて分かれ」

晶の右手が、ラウラの胸を撫で回していく。

「ISスーツ越しに感じる柔らかい感触が、彼女の成長具合を現していた。

「こ、こら。こういうのは、んっ、好き合っている者同士で行うことだろう」

「へえ。それが分かっているのに、俺にチラ見せしたんだ」

「シャルロットが、チラ見せしたらお前が、ンッ、凄く興奮していたと言っていたからな。だから、ちよつと試してみただけだ。お前の興奮した姿など、ひゃん、見た事が無いからな」

「なるほど」

晶の手は止まらない。

横乳の部分からISスーツの中に侵入し、直に揉み始める。

戯れに乳首をクリクリ弄ってやると、彼女の体がピクツとなった。

「おや？ 感じてる？」

「ちよつと、びつくりしたただけだ」

「そうか」

強がってはいるが、胸の頂は触れば触るほど固くなってきた。

余りの反応の良さに徐々に興奮してきた晶は、彼女の後ろに回り両手で胸を弄び始めた。

「こ、こら。やめ、やめない……かあ。ンンッ。これ、以上はあ……」

戸惑うラウラの反応を楽しみながら、晶は東の言葉を思い出していた。

「遺伝子強化試験体の遺伝子情報。解析終わったよ」

「どうだった？」

「それなりに良く出来てるけど、弱点持ちだね」

「弱点？」

「五感を鋭敏にした反動かな。おっぱいも、クリトリスも、膣も、子宮も、とっても敏感なの。女の部分を責められたら反撃なんてできないくらい。軍人として使えなくなったら、娼婦として再利用する気だったのかもね」

「そんなに？」

「多分晶のチンポでズコズコしたら、すぐに躡けられちゃうくらい」

「躡けるって。そんな気はないぞ」

「私は時間の問題だと思うけどねぇ」

「なんでさ？」

「晶さ。このお人形さんのこと結構気に入ってるでしょ」

「それなりに」

「なら、この人形が他の男に抱かれるのはOK？」

「何となく嫌だな」

「でしょ。前とは違つて今なら色々使い道がありそうだし、晶に従順である限りはハーレムに入れても良いよ」

——閑話休題。

「ラウラつて、本当に感じやすいんだな」

耳元で囁く。

「そ、そんな、ことお。あんつ。や、やめないか」

「止めて欲しいなら、頼み方つてのがあるんじゃないのか」

意地悪い言葉を返しながら、晶はラウラの胸を弄び続けた。

乳首をコリコリして、ギョツとする度に、彼女の体がビクツ、ビクツと震えている。

「ばかを、言うな。クラスメイトに………ンツ………こんな事をして。普通ではないだろう」

「普通のクラスメイトは、男におっぱいのチラ見せなんてしないよ。無防備過ぎるお前が悪い。諦めて俺に抱かれる」

男の左手が、ラウラの下腹部に伸びた。

股布を除けて、クリトリスを指の腹で擦り始める。

「や、やめっ!! アンツ、んん、くつ、ンンツ、ほ、ほんとうに、やめ、アツ」

止めるはずがない。

晶はラウラが逃げられないように右腕でガツチリとホールドして、左手でクリトリスを弄り続けた。更に指を膣に浅く挿入し、クチャクチャとかき混ぜてやる。するとお湯の中であるにも関わらず、指先に粘液が感じられた。

「お前が悪いんだぞ。抱く気なんか無かったのに、無防備に近づいて、チラ見せまでして」

「わ、私に、アンツ、興奮した、のか？　ンンンツ」

「男なら誰だって、お前みたいな良い女を抱きたいさ。だから悪い男に引つ掛からないように、下手な事をするところなるって教えてやる」

「言ってる事が、あんつ、んつ、ンンツ、ひゃん。ダメだと、言ってるだろう。言ってることと、あつ、やってる事が、はあん、メチャメチャだぞ」

「なら、弾き飛ばせば良いだろう」

晶が本当にその気なら、ISを使ったところで弾き飛ばせる訳がない。

シユヴァルツエア・レーゲンとNEXTの出力差は桁違いなのだ。

それでも本当に嫌だったなら、ラウラもISを使っただろう。だが実際には使わなかった。

心の何処かで気を許しているというのもあったし、この快樂の先を知りたいという好

奇心もあった。

だが言葉にして求めるのも恥ずかしい。だからラウラは行動で示した。

背中を晶に預け、男が雌穴を弄りやすいように腰を動かしていく。

日頃クールな女にこんな事をされて、興奮しない男はいないだろう。

男根が瞬く間に反り返り、ラウラの尻に押し当てられた。

「そ、それは……………」

「セックスに疎いお前でも、これがどういう意味か分かるか？」

「あ、ああ。アンツ。だが、初めては、その。ンンツ、痛いと聞く。んつ、だから、その、優しく、して欲しい」

「勿論だ」

処女を何人も抱いてきた晶だけに、勢いに任せて突っ込むような真似はしなかった。

ファーストキスを奪い、ラウラの体を撫で回し、指でじっくりと時間をかけて解きほぐしていく。

そしてラウラの体は本当に敏感だった。

丹念に愛撫したとはいえ乳首とクリトリスは痛々しい程に勃起し、弄る度に体がビクツ、ビクツと震えている。更に指で搔き回された肉壺は、処女とは思えない程に愛液を垂れ流していた。もう十分だろう。



晶は彼女の胸を揉みながら立ち上がらせ、男根を淫貝に押し当てた。

「ラウラ。入れるぞ」

「ま、まで。心のじゅんぴ——んああああ!! あつ、ひゃん、ンンツ、アンツ」

立ちバックで挿入されたデカチンポが、トロトロに解きほぐされた膈壁を擦り最奥を小突く。流れ出た破瓜の血が間違いないく処女であった事を示しているが、彼女に痛みは無かった。それどころか耐えようと思う間もなく押し上げられ、肉壺が男から精を搾り取ろうとキュツと締まっていく。押し寄せる快楽に、ラウラは翻弄される事しか出来なかった。

「あ、ああああ、アンツ、な、なぎはらあ……………」

振り向いた彼女の表情は、普段の凛々しくクールビューティな姿からは想像も出来ないほど、雌を感じさせるものだった。

束の言葉が、再び脳裏を過ぎる。

「多分晶のチンポでズコズコしたら、すぐに躡けられちゃうくらい」

弱過ぎだろう。同時に心配になってしまった。軍というのは、未だに男社会な部分も多い。もし他の男がこの弱点に気づいたら、好き放題に蹂躪されてしまうかもしれない。

(……………)

想像するだけでイラツとしてしまった。だから彼は、ラウラを自分のモノにする事にした。ドイツ本国など、どうとでもなる。学園卒業までにこのクールビューティを躰け直して、離れられないようにしてやろう。そう決めた晶は、腰を動かし始めた。優しく、ゆつくりとピストンし、ラウラに男根の快楽を教え込んでいく。

「ンツ、はあ、アンツ、な、なきはらあ……ダメ、だと、言ってるだろうお」

艶声での拒否など、男を高めるスパイスでしかない。後ろから抱きしめながら胸を揉み、空いている片手で子宮の上あたりを優しく撫で、徐々に手を下に向かわせてクリトリスを抓る。更に男根を大きくピストンさせて膈壁を擦り、時に奥をグリグリと虐めてやれば、ラウラはもう腰砕けだった。本当に弱い。遺伝子設計で意図的に作られた弱点は、雌は決して雄に勝てないようにしている、と言っているようなものだった。

（束の言つてた娼婦として再利用する気だったかもしれない、というのも本当かもしれないな）

軍人として極めて高い能力を持ち、容姿もスタイルも極上なクールビューティを娼婦にまで叩き落す。

その手の趣味を持つ人間には相当にブツ刺さるシチュエーションだろう。

「そんな顔して、ダメも何も無いだろう。体はもつと、もつとつて言ってるぞ」

「そ、そんなことおお、アンツ。ダメ、お、突くなああああ」

「嫌だね。こんなトロトロで感じまくってる女を前にして突かないなんて、あり得ない。ホラ、良いんだろう?」

突き入れた男根で、奥をグリグリしてやる。

ラウラはもう、自分の足で立てていかなかった。力が入らず、男に背中を預けてしまう。するとチンポが深く挿入されて、強くなった快楽に更に翻弄されてしまう。快楽のスパイラルだ。そして今でも十二分に感じさせる事が出来ているが、晶はこれで終わらせる気は無かった。

彼女の両足を後ろから軽々と持ち上げ、背面駅弁スタイルになる。

女が成す術もなくチンポに突かれるこの体位は、彼のお気に入りだ。

「なぎ、はら。ダメ、ダメだ。アンツ、これ、は……ンツ、深すぎるう」

「晶って呼んでくれないか」

「しようお。お願いだ。これは、深い。気持ち、良すぎるんだ。だから、アンツ、ンツ、はあ、あつ、お、下して」

「嫌だね」

「にや、にやんで。しようって呼んだのに」

「お前は、もう俺のものにするって決めた。だからしつかり中にマーキングしてやるよ」  
「それは、ひゃん、アツ、ンツ、アンツ、ダメ。だめだ。出来ちゃうからあ。ダメだ」

「大丈夫。方法は幾らでもあるし、気持ち良いぞ」

「でも、でもお」

愛液を滴らせる肉壺に、デカチンポを勢いよく打ち込む。

たったそれだけで、ラウラの意味は折れた。

「あんつ、んつ、あああああん。分かったからあ。マーキングして良いからあ」

「良い子だ。じゃあ、初セックスで膈内射精中出しだな」

「うん。うん」

彼女は押し寄せる快樂に、何が何だか分からなくなっていた。

言われるがままに肯き、押し上げられ、膈内射精中出しされると同時に潮を吹き、はしたない

姿を晒す。

普段のラウラからは想像も出来ないほど乱れた姿に、晶は更に高ぶっていった。

射精しても全く衰えないデカチンポが、すぐにピストンされ始める。

「しよう。ちよ、ちよつと、休ませて。アンツ、ンンツ、休ませてえ」

「ダメだ。お前の中に、もつともつと俺を刻み付けたくなくなった。子宮がタプタプになる

まで膈内射精中出ししてやる」

彼女にとっては、子宮も敏感な場所なのだ。

熱い精液を注がれる度に例えようもない快樂が刻み込まれ、自分が誰のモノなのか否

応なく覚え込まされていく。

こうしてラウラ・ボーデヴィツヒは、薙原晶の女になったのだった——。



真面目な人間ほど、セックスに嵌るといふ風説がある。

勿論只の風説であり、世の全てに当てはまる訳ではない。

だがラウラ・ボーデヴィツヒについては、割と当たっていた。

初体験以降2人きりになると、積極的に求めてくるようになったのだ。

誰もいない教室で、放課後の訓練が終わったIS格納庫で、プール授業の後の更衣室で、体育の後のシャワー室で、etc etc。

そしてラウラがハーレムの一員になれば、こうなるのは必然であった。

——とあるホテルの一室。

キングサイズのベットに、晶、シャル、セシリア、ラウラの4人が全裸で横たわっていた。

部屋の中は雌の臭いが充満し、女達は精液と愛液でドロドロになっている。

「……………お前は、本当に体力お化けだな」

ラウラが晶のデカチンポを扱きながら言った。

女3人を相手にして、些かも衰えていない。

「そうか？」

「そうだとも。他の男など知らんが、軍人として鍛えた私をノックダウンさせて、更にもノックダウンさせて、まだ余裕があるなど体力お化け以外の何と言うんだ」

「そうかもな。あとついでに、ちよつとしゃぶつてくれないか。お前の口に出したい」  
「仕方ないやつだ」

ラウラは極々自然にチンポに舌を這わせ、口に含み愛撫し始めた。

そうして暫しフェラチオを楽しみ、彼女が精液を飲み込んだところで晶は話し始めた。

「エツチになったな」

「お前が教え込んだんだろう」

「お前がチラ見せなんかしなければ、抱いたりもしなかった」

「お前はそういう事をしないと、信用していたんだぞ」

「男にあんな事をする方が悪い。というか、他の男にあんな事してないだろうな」

「誰がするか。私だって相手は選ぶ。というか、お前以外に抱かれたくはない」

「良い返事だ」

晶はラウラを四つん這いにして、バックからブチ込んだ。弱々の雑魚マンコは容易く男に屈して、愛液を垂れ流し始める。

「相変わらずだな」

「お前のが、アンツ、大き過ぎるんだ。ンツ、アンツ、ダメ、少しは、手加減しろお」  
「嫌だね。お前が乱れる姿は、見ている気持ちが良い。手加減なんかしてやらないし、これから先も、ずっと可愛がってやる」

「アンツ、言つたな。ずっとだぞ。んっ、はあ、アアアアンツ、ずうつとだからな。私を、捨てるなよ。ずつと、ずつとだからな」

「ああ。ずつとだ」

そんな話をしてしていると、シャルとセシリアが晶の両腕に抱きついてきた。

柔らかな双丘に腕が挟まれ、とても気持ちが良い。

「僕も、可愛がってね」

「私もですわ」

「勿論だ。これから先もずつと、ずうつと、お前達は俺のだ。手放したりなんてしない」  
ピストンしながら2人にキスして、ラウラと同じように四つん這いにさせる。

極上の美少女を3人並べて穴比べだ。今日までに散々やってきたが、これは何回やつてもいい。

雌穴を好きなように味わい、  
何回でも楽しめる。

腔内射精

中出しマーキングをして、すぐに別の雌穴にブチ込む。

こうして欧州三人娘は全員、晶の女として身も心も染め上げられていったのだつた――



## 第19話 義兄と義妹 “達” (第156話以降)

IS学園1年1組のクロエ・クロニクルは、2年生のラウラ・ボーデヴィツヒ遺伝子強化試験体より、1年ほど早く生まれた遺伝子強化試験体だ。漆黒の眼球という特徴的な差異こそあるが、2人の遺伝子設計は殆ど変わらない。従って身体的な成長も、ラウラ・ボーデヴィツヒとほぼ同じように遂げていた。

1年生も終盤になった今では、流れるような銀髪と端麗な顔立ち、人並な身長と双丘、キュツとしたくびれ、脚へと続く魅惑的な曲線という、同性異性を問わず誰もが振り返る程に美しく成長していた。これに加えて学年首席の頭脳と平均以上の身体能力、品行方正な人柄となれば、多くの者が彼女を完璧な優等生で弱点など無いと思うだろう。だが現実には違う。遺伝子強化試験体には遺伝子設計で意図的に作られた弱点があった。女を雌とする悪意に満ちたもので、双丘も、胸の頂も、クリトリスも、膺も、子宮も、性感帯と言われる部分は全て人並以上に敏感なのだ。愛撫などされようものなら容易く蕩け、雌穴を蹂躪されようものなら快楽のあまり抵抗など出来ないだろう。もし悪い男に知られたら、骨の髄までしゃぶり尽くされるに違いない。

そんな己の弱点など知らない彼女は今、紳士的な義兄を信用して信頼して親愛の情を抱いているが故に甘えていた。

場所はI S学園近郊のホテル。時刻は20時頃。

貸し切られた最上階のロイヤルスイート専用の室内プールで、一面ガラス張りの窓からは雪とネオンに彩られた夜景が見えている。

まだ冬と言える季節だが、完璧に気温調整された室内プールなら関係無い。

「あの、お義兄様。この水着、どうでしょうか?」

プールサイドのリクライニングチェアで休む晶の横に、クロエがモジモジと近づいてきた。

当初は頑なに拒否していた「お義兄様」という呼び方も、今では根負けして許してしまっている。悪意で呼ぼうとしていたなら抵抗出来たかもしれないが、こんな美少女に純粋な親愛の情を込めて言われ続けたら……:……まあ、無理だろう。

「とても良く似合ってる。夏の浜辺なら、視線を独占かな」

白い上下のビキニに同色パレオは、成長した彼女に良く似合っていた。全体的に清楚な印象だが、部分部分で見ると女性的な色気が垣間見えている。普段は制服で隠されている双丘の谷間が適度に強調され、ボトムはローライズタイプで意外と布面積が小さい。だが下品な色気とならないように、パレオで布面積が増やされている見事なコー

デイナーイトだ。

「他の人の視線なんて、どうでもいいです。見せたいのはお義兄様だけですから」

クロエが微かに頬を赤くしていると、同じように引き取られた元生体パーツ候補の1人が、彼女の胸を後ろから揉んできた。

同性だけに容赦なく、思いつきり両手でワシツとだ。

「ちよっ!? リ、リルナ!!」

「見て欲しいのは、中身もでしょ。ホンツとお義姉ちゃんつてば、お義兄様の事になると奥手でポンコツなんだから」

「色々とストレート過ぎる物言いをしているのは、リルナ・メフィールド。元ネタはシャイニング・レゾナンスのリンナ・メイフィールド。」

形の良い臀部まである甘栗色の髪を緩やかにまとめ、ふわつとした温厚そうな表情と豊かな双丘は、多くの者に包容力のあるお姉さんを連想させるだろう。だが一緒に引き取られた仲間達は皆知っていた。彼女は小悪魔で、人を揶揄うのが大好きなのだ。そして小悪魔的な性格は、水着にも現れていた。ホルターネックタイプの緑色のビキニで、ローライズなパンツは後ろから見るとお尻の割れ目が見えてしまっている。トップは胸元が大きく開かれていて、柔らかくて深い谷間が惜しげもなく晒されていた。

「ハ、ハ、ハ!! お義兄様の前ではしたない。止めなさい」

「なんで? 一年前はちんちくりんでペタンコだったのに、今じゃこんなに成長してお義兄様だつてもっと見たいって思うよね?」

程よく成長している双丘が揉まれ、白いトップの中で卑猥に形を変えていく。

因みにコレは、リルナの善意であった。

生体パーツ候補という本当に怖かった時に、彼女は仲間達を励まし続けてくれた。薙原晶に引き取られる切っ掛けを作ってくれたのも彼女だ。だから引き取られた仲間達はクロエを、尊敬や感謝の念を込めて「お義姉ちゃん」や「お義姉様」等と呼んでいる。血縁関係では無いが、同じ恐怖と苦勞を分かち合ったかけがえのない仲間達の絆――

――義姉妹なのだ。

そして引き取られた仲間達の間で、クロエが晶に抱いている感情など筒抜けであった。皆同じ感情を抱いているのですぐにバレていたのだが、クロエ以外の全員一致で一番初めはクロエだと(本人すら知らぬ間に)決められていたのだ。だがここで、少々予想外の事が起こる。

本当に怖かった時にあれほど凛々しくて頼りになっていたお義姉ちゃんが、晶の事になると途端に奥手でポンコツになってしまったのだ。役に立ちたくて同じIS学園に行つたというのに、丸つきり進展が無い。しかも引き取られてから月に2回程度、ずつとお義兄様と皆で集まっているのに、全く先に進んでいない。

なのでリルナは100%の善意で、お義姉ちゃんの背中を押してあげることにしたのだ。

押すというよりは、蹴り飛ばすと言った方が正しいかもしれないが……………。

「ハ、ハ………ンツ、本当に、止めなさい!!」

一瞬漏れ出た甘い声に、リルナは思う。

(お義姉ちゃん。もしかして感じやすい?)

因みにリルナも処女であるが、耳年増というやつであった。

本で得た知識を元に、お義姉ちゃんの胸を優しく揉んでいく。

白いトップの上から乳房全体を優しく、丹念に。すると胸の頂に、硬い感触が現れ始めた。興味本位でコリコリしてあげると、敬愛するお義姉ちゃんの体がビクツと刎ねる。振り向いた義姉の表情は、今まで見た事が無いほど蕩けたものだった。

「リ、ルナあ。本当に、ダメだからあ……………」

涙目のあまりに淫靡な表情に同性ですら理性が飛びそうになり、もつと見てみたいという感情が、手を自然とローライズなボトムへと向かわせていく。

そこで、晶が止めた。

「リルナ。そこまで。お義姉ちゃんが泣いてるぞ」

「え、あ、ご、ゴメンなさい」

「う、うんう………」

晶は立ち上がり、殆ど放心状態となっているクロエを抱き寄せてからリルナに告げた。

「ちよつと一時間くらい部屋に行ってるから、皆に言っておいてくれないか」

「あ、あの。お義兄様？」

「大丈夫。怒ってる訳じゃないから」

。　　そうして晶はクロエをお姫様のように抱えて、プールを後にしたのだった――



ロイヤルスイートの寝室。

クロエをベッドに横たえた晶は、ベッドサイドのイスに座ってから話し掛けた。

「大丈夫か？」

「は、はい。でも私………あんなに簡単に、乱れて………」

クロエは自身の体の思ってもいなかった反応に、ショックを受けていた。

彼女は常日頃から晶の傍らに立つのに相応しいレディをイメージし、そうあろうとし

ている。優秀で、清楚で、彼の事だけを考え、他の事に心動かされるなどあつてはならない。幾ら義姉妹が相手だったとは言え、あんなに簡単に乱れるようでは相応しくない。

そんな事を思っていると、晶が話し始めた。

「……………実は、な。お前の体の事でお前に言っていなかったことがある」

「どんな、ことでしょうか？」

「<sup>アド</sup>遺伝子強化試験体<sup>ヴァン</sup>にはな、<sup>スト</sup>遺伝子設計で意図的に作られた弱点がある」

「え？」

クロエは、将来が閉ざされる気がした。

お義兄様の隣に立つのに、弱点などあつてはならない。只でさえ強敵が多いのに、意図的に作られた弱点など抱えては……………。

「その内容はな——」

言いながら晶は立ちあがり、クロエに覆いかぶさった。

「——エッチに弱いつて事なんだ」

唇が塞がれる。

「ンツ、ンンツ!! お、お義兄様？」

「女の部分は全て、人並み以上に敏感なんだよ。だからこんな事をされたら、すぐに感じ

ちやうんだ」

もう一度唇が塞がれ、そのままビキニの上から胸が揉まれていく。

ゆつくりと、優しく、丹念に。そして硬くなった胸の頂が甘噛みされ、甘く切ない快樂がクロエを襲う。

「アーンツ、ンツ、んあ!!」

あつという間に体が反応し、肉壺が男を受け入れる為の準備を始める。

「胸ですらコレなのに、ココを突かれたらどうなると思う?」

晶の手が下腹部を撫でると、クロエは甘い疼きを感じてしまった。

膣。そして子宮。女が男と交わり、精を受ける為の場所。激しい快樂を伴う行為。

知識としては知っていた。時折、義姉妹の中でもこんな話をしていた。ちよつとエツチで卑猥なホ口を見た事もある。

その姿に、自分とお義兄様が重ねられていく。

(あ、あんな表情を、私が?)

はしたないという思いと共に、お義兄様が相手ならという思いも湧き上がってくる。

そしていつものクロエなら、理性的で冷静な判断で落ち着きを取り戻し踏みとどまつただろう。

だが胸を弄られ、甘噛みされ、いつの間にかボトムの内側に入り込んで女の園を搔き



回している指が、正しい判断をさせてくれない。

晶の言葉が脳裏に響く。

「でも心配しなくていい。お前を誰かに渡したりなんてしない。他の男に触れられなければ、弱点なんて無いも同じだからな」

女の園を掻き回す指が2本に増え、クチャクチャと卑猥な音をたてている。

脚は何時の間にかM字開脚で広げられ、男を受け入れやすいように迎え越しになってしまっていた。

「お義兄様……………」

押し寄せる快樂が、クロエを一匹の雌にしていく。

今度は自分からキスをせがみ、両腕を使って抱きつき、卑猥なホロそのままに男を貪る。

そうして暫し互いが互いを貪り続けた後、晶が言った。

「クロエ。お前を奪っていいか？」

「はい。私を、お義兄様のものにして下さい」

ボトムのサイドストッパーが外され愛液を垂れ流す淫裂が露わになると、彼も水着を脱ぎ、硬く・太く・長く・反り返った逞しい男根をゆつくりと挿入していった。

所謂正常位で微かな抵抗を押し破ると、クロエが少女から女になった証、破瓜の血が

流れていく。

そして遺伝子強化試験体の意図的に作られた弱点は、充分過ぎる程に機能していた。彼女は最奥を小突かれるだけで押し上げられ、奥をグリグリされればイッたまま降りてこれない。何度も何度も連続でイカされ、デカチンポで勢いよく突かれれば潮を吹き、男の成すがままに犯され続けるしかなかった。

(これは、本当に心配になるな!!)

クロエの艶声に高ぶりながら、晶はそんな事を思った。

本当にエッチに弱過ぎる。ずっと手元に置いておかないと、悪い男に捕まったら大変だ。

だから俺のものだと刻み付けておこう。

極めて身勝手な考えのもと、中出しでマーキングしておく。そして神聖な部屋に男の精を受け入れた彼女は、ウツトリとした表情を浮かべていた。

「これで、アツ、ンツ、クロエはお義兄様のものに、アアツ、なったのですね」

「ああ。そうだ。他の男になんてやらない。俺だけのものだ」  
「嬉しいです。ンツ、やつと、ンンツ、やつとなれました」

クロエは男根を膣に収めたまま、両手両足を使って抱きついた。所謂だいしゆきホルドだ。

余りの可愛さに男根が反応し、晶は再びピストンを始めた。

「お、お義兄、さまあ。アンツ。ふ、ふかいですう」

「可愛すぎるお前が悪い。もつと乱れた姿を見せてくれ」

言いながら体位を変え、今度は騎乗位で犯していく。下から突き上げながら胸を揉み、精を放ち、それでも飽き足らず次はバックでだ。

「はい。ンンンツ、アンツ、気のすむまで、ンンツ、犯して下さい。何回でも、何度でもお」  
クロエはベッドの上で獣のように犯され、何度も何度もイカされた後、引き抜かれた男根に極々自然に舌を這わせていた。

愛液と精液でドロドロ口になった男根を、舐めて、口に含んで、献身的に綺麗にしている。

誰に教えられた訳でもない。義姉妹達とちよつとだけ見た事のある卑猥なホ口を思いついて、お義兄様に尽くしたいという一心でお掃除フェラを始めていたのだ。

「クロエは良い子だな」

「ンツ、ちゆ、お義兄様の、ためです。こんな義妹は、お嫌ですか」

「いや。クロエみたいな可愛い子にされて、喜ばない男はいないよ」

「ここで晶は時計を見た。あつという間に1時間が経っている。

本心を言えばもつと続けたいところだが、今日は他の義妹達もいる。

名残惜しいが、ここまで———と思ったところで、クロエが話し掛けてきた。「どうした?」

「お義兄様。私だけ女にして貰ったのでは不公平です。ですのではどうか、この幸せを他の義妹達にも分けてあげて下さい」

「本人達が同意したらな。流石に無理矢理は嫌だしやらないぞ」

こう言いながらも、晶は多分同意するだろうなあと思っていた。

エッチしている最中からずっと、強化人間の脳内リーダーがドアの外に7つの反応を捉えていたのだ。しかも甘い声と共に、ドアがギシギシしている。

ナニをしているかなど、NEXTのセンサーを使うまでもないだろう。

「大丈夫です。お義兄様にご奉仕できるのを悦ばない義妹などおりません。———

—ねえ、みんな」

クロエが枕元にあるスイッチを操作して寝室のドアを開けると、想像通りの光景が広がっていた。

7人の義妹達が、淫らな行為にふけっている。

大事なところに指を突っ込み、掻き回し、空いている手で胸を揉み、乳首を抓って、高ぶってきたのか近くの義妹の唇を奪い、クリトリスを抓り、快樂を貪り合っていた。

そして全裸ではなく、水着の半脱ぎというのが晶の性癖にドストライクだった。

別に全裸がダメという訳ではない。彼自身、エッチをする時に相手の衣服を剥ぎ取って、一糸纏わぬ姿にして犯したりもする。ハウンドの面々を社長室やトレーニングルームで全裸に剥いて犯す時なんてかなり燃える。何回犯つても飽きない。更識家の使用人達だって、廊下で全裸に剥いて犯したりもする。だがそれはそれ、これはこれだ。半脱ぎで恍惚とした表情の女の子達というのは、彼的にかなりそそるシチュエーションだ。しかもレズエッチの後に男を教え込むなんて、燃えない男はいないだろう。

そんな事を思っていると、クロエが皆に声をかけた。

「ねえみんな。お義兄様が、私と同じようにみんなを女にして下さるわ。でも無理強いはしたくないって仰るの。だから、女になりたい子だけこっちにいらっしやい。ああ。心配しなくても良いわよ。お義兄様は優しいから、来ても来なくても、今まで通り優しくして下さいるわ」

来ない者はいなかった。

全員がキングサイズのベッドに上がって行き、晶の傍らに侍っていく。

こうして美しい義妹達の初体験は、9Pという大乱交になったのだった——



時間は翌朝まで進む。

一晩かけて全員に何度も中出し（体内射精）して可愛がった晶は、クロエを更に可愛がっていた。

「おにいさまあ。アンツ、クロエは、もう、もう」

「いいよ。何度だつてイけばいいさ」

「はい。アツ、そこ、そこですう。イイです。もつとお願いします。おにいさまあ」

クロエは四つん這いで、獣のようにバックから犯されていた。

成長して淫靡な曲線を描くお尻が後ろから鷲掴みにされて、デカチンポが愛液でドロドロの雌穴に勢いよく打ち込まれている。何度も何度も。その度に彼女の腰がビクツと震えていた。更に打ち込まれたチンポで奥をグリグリされたら、両手で体を起こしている事すら出来なかった。力が抜け、されるがままになつてしまう。男に尻を突き出す卑猥な格好で、元々弱い雌穴が調教されていく。

「クロエは可愛いな」

後ろから覆いかぶさった晶が耳元で囁くと、彼女の膣がキュツと締まった。

「クロエはあ、ずうつとおにいさまの傍にいますう」

「ああ。良いぞ」

晶はもう一度思う。

ずっと手元に置いておかないと、悪い男に捕まったら大変だ。こんなにエッチに弱かったら、確実に骨の髄までしゃぶり尽くされるだろう。

晶は独占欲が赴くままに、繋がったまま彼女を起こした。

所謂、背面騎乗位だ。

体重で男根が奥の奥まで入り、これまで以上に肉壺の奥がグリグリされる。

更に腰を掴んで下から突き上げていくと、クロエは容易くイかせられていた。何度目か分からない潮吹きで、ベットのシーツが汚れていく。

だが晶のピストンは止まらない。いつている最中でも容赦なく責め立て、弱々で男に従順な肉壺に、これでもかと男を教え込んでいく。

そうしてクロエの奥を何度も白く染めたところで、義妹の1人が迫ってきた。

「お義兄様。お姉ちゃんばかりズルイです」

リルナだ。

生まれたままの姿で、肉壺からは愛液と精液が流れ落ち、豊かな双丘の頂は触って欲しいと自己主張している。

晶はクロエを横たえてやると、すぐに応えた。

何度も愛してトロトロに蕩けた体に前戯なんて必要無い。

まんぐり返しで遠慮なく肉壺に男根をブチ込み、ピストンを始めた。

「アッ、あつ、ンンッ、はあ、は、はげしいですう」

普段は小悪魔な彼女も、晶の前では一匹の雌に過ぎない。

悦んで蹂躪され、中出し膣内射精を受け入れている。むしろ彼女の脳裏に、外出し膣外射精なんて考え

はなかった。敬愛するお義兄様に、外で出させるなんてあり得ない。何回でも、何度でも——だから正常位になると、だいしゆきホールドで抱きついていた。一滴残

らず中に出して欲しいのだ。

晶は無尽蔵の体力で応える。

そうして彼女の体力が尽きると、次に近づいてきたのは冬祭ふゆまつり真理元ネタは冬月 茉莉

(とうげつ まつり)だった。長く艶やかな黒髪のお団子ツインテールちゃん、幼い表

情とは裏腹に、胸部から腰、臀部へのラインは扇情的極まりない。昨日プールで着ていた黒いビキニは、とつくに剥ぎ取られている。

「お義兄様。一度、綺麗にしますね」

晶の前に跪いた彼女は、愛液と精液で汚れたチンポのフェラを始めた。丹念に舌を這わせ、舐め取り、次いで豊かな双丘で男根を挟み、パイズリフェラをしていく。

「上手だよ、真理」

「んっ、ちゅ、はあ、お義兄様が悦んでくれて、嬉しいです」

「俺も、真理を悦ばせたいな」



豊かな双丘からチンポを引き抜くと、晶はベット端に腰掛け真理を自身の上に座らせた。所謂、背面座位だ。更に足を大股開きにさせて、雌穴にズツポリと男根が突き刺さっているところを他の義妹達に見せてやる。

「お、お義兄様?!」

「恥ずかしくなんてないだろう。もう皆一緒なんだから」

後ろからガツチリと抱き抱えたまま、晶はピストンを始めた。

元々濡れていた肉壺が更に本気汁を垂れ流し始め、キュツ、キュツと男根を締め上げていく。

「真理、どうかな?」

「アンツ、あ、良いです。ンツツ、はあ、アツ、アンツ!!」

「どういう風に、良いんだい? 言ってみてくれないか」

女の子自身に説明させるのは、晶のお気に入りの行為の1つだ。

これに真理は、頬を染めながら応えた。恥ずかしくはあっても、お義兄様が悦んでくれるなら関係無い。

「おつきいオチンチンが、私のヴァギナに、アンツ、あああ、はあ、ンツツ、ズツポリと嵌つて、一番奥をズンズンして、イイツ、良いんです。気持ち良いんです。もつと、もつと、して下さいい」

返答はチンポを奥に押し当てての中出しマージングだ。勿論、1回で終わる訳がない。何度も何度も執拗に行われ、女性子の神聖な部屋宮が、白濁で汚されていく。

次に近づいてきたのは、アルベ・フィーリア元ネタはTony'sヒロインコレクシヨン「フェアリー★ガーデン」アナベルだった。金髪ストレートロングの利発そうな子で、高い腰の位置と起伏に富んだ曲線は、どんな服を着ても見栄えするだろう。だが今は生まれたままの姿で晶に尻を向け、恍惚とした表情で自ら肉壺を押し開き奉仕しようとしている。

「お義兄様。どうぞ、アルベのも使ってください」

こんな事を言われて躊躇する男はいないだろう。遠慮なくバックからブチ込み、ほぐれている肉壺をチンポで更に耕していく。突き入れられる度に、足を伝っていく本気汁が増え、すぐに大洪水となっていた。だが気にする者はいない。もう全員が白濁を受け、女になり、もっと貪って欲しいと思っっているのだ。だから皆、待つっている間に自らの指で肉壺を掻き回し、すぐにでも受け入れられるようにしている。

その姿は盛りのついた雌犬、というのが相応しいだろう。

こうして晶は一日中義妹達を犯し続け、名実共にハーレムに加えたのだった――



## 第20話 薙原晶の性活（第171話以降）

言わずと知れたハーレムの主、薙原晶の朝は束とのセックスから始まる。

ガチガチに勃起している朝立ちチンポを、愛おしそうに優しくフェラしてくれるのだ。そうして晶が目覚めると、彼女は馬乗り騎乗位になつて自らの肉壺で極太チンポを扱き始める。これまで幾度となく抱かれすっかり躰けられてしまった彼女の腰使いはとても淫靡で、晶は何も我慢することなく彼女の子宮にマーキングする。勿論1回ではない。腰を掴み何度も何度もチンポを突き刺し、思うがまま気のすむまで何回もだ。

そして2人とも、できるなら一日中絡み合っていたいが、それぞれやらなければならぬ事がある身だ。

だから適当なところで切り上げたところから（時に束の裸エプロンとかで更にハッスルしちゃう事もあるが）、彼の対外的な一日は始まる。



まず一週間の大半を過ごすI S学園では流石に自重……は余りしていない。

放課後の生徒会室には、日替わりで別の女の艶声が響いていた。

今日抱かれているのは、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。元々軍属で“ドイツの冷水”などと言われるほど機械的で人間味がなく、つる・ぺた・すとーんな彼女だったが、様々な体験（半強制的）で人間的感情が育ち、遺伝子操作により成長を約束された容姿と身体は、今や誰もが振り返るほどの美女となっていた。豊かな胸にくびれた腰、臀部から脚部へと続くボディラインは本当に美しい。

だが何より晶を楽しませているのは――。

「ほらっ」

全裸に剥いた彼女を壁に押し付けてバックからズンツとチンポを肉壺に突き刺すと、軍人という屈強なイメージとは裏腹にあつという間に腰砕けで弱々しくなり、壁に身体をあずけなければ立てなくなってしまう。遺伝子強化試験体として生を受けた彼女は、研究者の悪意ある調整により、性感帯がとても敏感なのだ。胸も、乳首も、肉壺も、淫核も、そんな人間が無尽蔵の体力と極太チンポを持つ晶に可愛がられたらどうなるか。

「や、やめ、ダメ、ダメだ。ンンンツ、あ、あ、アンツ、イイ」

瞬く間に理性を溶かされ、本音がポロリと零れ出る。そして愛液が肉壺から面白いように流れ、どれほど感じているか丸わかりだ。

だが軍人として厳しい訓練を受けていた彼女は、すぐに正気を取り戻し、取り繕うように言った。

「ここ、こちら、毎回まいか……いい、んあ、言ってるが、神聖な学び舎で、お前は、ん、ア、ン、ン………なにをして、ん、いるんだ」

「なにつて？ こういうイケナイこと。大体ダメだつて言うなら、俺に脱がされる前に言わないと」

子宮の入り口をチンポでグリグリしながら答えてやる。すると彼女の足は小鹿のようにプルプルと震え、立っているのもやつとという雰囲気だった。だから晶は手助けしてやる。チンポを更に押し込み壁に押し付け、逃げ場の無い肉壺をゆっくり優しく、遅く反り返ったチンポで耕し、ラウラを躡けていく。

「ダメ、ダメと言つても、ア、ン、ン、お前は、ン、ン、脱がすではないか」

「そうだよ。お前は俺のだ。それに、期待してたんだろ？ 乳首はこんなにピンピン。マンコは濡れ濡れじゃないか」

「ここ、これはちがつ、ア、ン、ン、ここら、ひ、卑怯、ン、ン、だぞ」

ズンツとチンポを突き入れられると、振り向いた彼女は抗議の声をあげる。だが言葉とは裏腹に、その表情は感じ過ぎて涙目で、否応なく男の劣情を誘うものだった。

だから、知らずにチンポにも力が入る。

「んあ、な、なんでもっと硬くなって」

「お前が悪い」

晶は遠慮なくピストンを始めた。壁と挟まれたラウラに逃げ場はなく、敏感な身体は瞬く間に押し上げられていく。そうして彼女が絶頂すると同時に、子宮が男の精でマーキングされる。だけでは終わらない。無尽蔵の体力を持つ晶はすぐにピストンを再開し、ラウラを連続絶頂へと導いていった。遺伝子調整で意図的に敏感で、極めて弱い性感帯を持つ彼女に耐えられるものではない。肉壺は男に媚び媚びで、もっと、もっととおねだりするかのようになんぽを締め上げ、乳首や淫核は虐めて欲しいとばかりに勃起して自己主張している。

「お前は、酷い男だ」

「そうだな。だから誰にも渡さない。お前はずっと俺のものだ」

晶は耳元で囁きながら、ガチガチの勃起チンポを肉壺に捻じ込み女を蹂躪する。ラウラはもう完全に腰砕けとなっていた。自分の足では立っていられず、好き放題に貪られている。すると晶は彼女を振り向かせ、持ち上げてからもう一度チンポをブツ刺した。駄弁スタイルだ。

そして持ち上げられた彼女は晶に抱きつき、甘えるかのようにキスした。ソフトなキスではない。貪るようなディープキスだ。

卒業を控えた今、ラウラは晶に完全に心を許していた。

一般的な関係ではないかもしれないが、この男の傍にずっといたい、そう思うようになっていたのだ。

だから甘える。ガチガチの勃起チンポが自身の中で震えるのを感じると嬉しくなってしまう。何回でも汚してほしいから、強く抱きつく。普段の彼女からは想像もつかないほど淫靡なキスを続け、豊かな胸を押し付け、全身でもっと、もっととおねだりする。「可愛いな。ラウラは」

言いながら、晶は強くチンポを強くブチ込む事で応えた。ピストンしてグリグリして、何度も何度もマーキングして、それでもやめない。彼女をどこまでも味わい尽くして、執拗なまでに躑けてマーキングしていく。

こうしてラウラは日々調教され、すっかり晶の女となっていたのだった。



今度は別の日。

更識家に来て楯無と簪を気絶するまで可愛がった晶は、その後風呂場で、美人で床上手な使用人達からご奉仕を受けていた。誰一人、嫌々やっている者はいない。美人系や



可愛い系など色々いるが、皆が誠心誠意、晶に気持ち良くなってもらおうとしている。

そして当主様晶の身体を洗うのに、タオルなどと言う無粋な物は使わない。自らの手で、身体で、敬愛する主の身体を丹念に限無く洗い、一段落したところで使用人の一人が四つん這いになって、晶に尻を向けて自らの指で淫具を押し開いた。

「当主様。どうか、お情けを」

ここに居る使用人達は皆、当主様の絶倫具合を知っている。だから、嫌でも期待してしまう。男も、我慢する気は一切無かった。

ガチガチの勃起チンポを肉壺に捻じ込み、望み通りにピストンしてやる。長く逞しく反り返った極太チンポで女を蹂躪し、更には種付けプレスでマーキングして、誰のものをしつかりと分からせてやる。女達はそれを受け入れ、むしろもつと刻み込んで欲しいと抱きつき、キスをせがみ、中出しをおねだりする。

更識家の使用人は全て晶のものなのだ。だから好きな時に、好きなように抱いて、好きなように奉仕させて、好きなように中出しできる。何回でも、気の向くままに犯せるのだ。だが文句を言う者は一人もない。普通の男なら全員を満遍なく可愛がるなど不可能だが、強化人間で無尽蔵な体力の持ち主である彼なら関係無い。また当主様晶は「世界最強の単体戦力」という超絶の武力の持ち主である事に加え、経済面でも絶大な影響力を誇るカロードの社長でもあるのだ。更識家の使用人達は、全てをかけて尽くし、

奉仕するのは当然のことと想っていた。

晶は理想的な当主様なのだ。

だから奉仕にも、力が入る。

「と、当主様、んっ、はあ、如何、でしょうか。アンツ」

晶に馬乗りになり、下から貫かれている使用人が尋ねた。彼女は自ら腰を振り、晶を気持ち良くしようとしてくれている。だが極太チンポが気持ちいいところを擦り過ぎて、時々動きが止まってしまふ。

そんな使用人に、晶が答えた。

「ああ。気持ち良いよ」

答えながらニヤリと笑い、使用人の腰を掴む。そして、下からズンツと突き上げた。1回ではない。何度も、何度もだ。

「あ、あ、アンツ。と、どうしゆしやま」

余りの気持ち良さに、使用人の呂律が回らなくなる。だが晶には関係無い。遠慮なくピストンを続け、気持ち良さの階段を強制的に上らせてやる。女の身体がビクビクツツと震える。イツたようだが、晶はピストンを止めない。途中で体位を変えて種付けプレスで更に虐めて、子宮の奥にしつかりとマーキングしてからチンポを引き抜いてやる。

そして精液を吐き出した後も、晶のチンポは硬いままだ。逞しく反り返っている。す

ると別の使用人が、当たり前のようにお掃除フェラを始めた。丹念に舌を這わせ、チンポを綺麗にしていく。

「当主様。次は私にお情けを」

男に媚びる雌顔で、使用人は懇願する。一刻も早くブチ込んで欲しいようで、フェラをしながら空いている片手で肉壺と淫核を弄りオナニーを始めていた。

「分かった。横になって足を開け」

高圧的な命令だが、使用人は一切逆らわなかった、それどころか嬉しそうにM字開脚で足を開き、肉壺がよく見えるように自らの指で押し広げていた。

早く、早く、と懇願しているようだ。

こんな事をされて、我慢する男はいない。遠慮なくブチ込み、望み通りに肉壺全体をチンポで擦り上げ、乳房を揉み、乳首を甘噛みして、女を楽しませてもらう。

勿論、こいつにも中出しだ。むしろ使用人の方から晶の腰に両足を絡めて、「当主様、中に………」と耳元で懇願してくるのだ。だから遠慮なく、元々遠慮する気もないが、女の神聖な場所を白濁で汚しマーケティングしていく。

こうして更識姉妹を筆頭に、更識家の者は晶の女として抱かれていったのだった――



また別の日。月に数回ある義妹達との集まりの日。

元々晶に対して極めて好感度の高かった義妹達は、一度抱かれてからは遠慮なく迫るようになっていた。無論、どこでもという訳ではない。普段は立場を考え、英雄の義妹として恥ずかしくない振る舞いをしている。所謂お嬢様、というやつだ。だがお義兄様（三）と義妹達だけで集まった時は違う。他の女達と違い会える日が限られているせいか、とても積極的になるのだ。

だから――。

「お義兄様あ」

銀髪美少女のクロエ・クロニクルは、騎乗位で淫らに喘いでいた。義兄の逞しく反り返った極太チンポが淫貝を押し広げ、肉壺の奥にまでズツポリと差し込まれている。与えられる快樂に理性は蕩け、普段の凛々しさはどこにもない。だが、それも無理からぬことであつた。何故なら彼女は、ラウラ・ボーデヴィツヒと同じ遺伝子強化試験体（アドヴァンスト）なのだ。つまり長所も弱点も同じということ。

長所は女として誰もが羨む優れたスタイル。昔はつる・ぺた・すとーんだったが、成長した今は違う。豊かな胸、くびれた腰からスラリと伸びた足は、女としての魅力に溢

れている。容姿の方も、漆黒の眼球という他人にはない特徴を持つものの、間違いなく誰もが振り返る美しさだ。

これに対して弱点は、極めて敏感な性感帯だ。乳房を揉まれれば容易く感じて乳首ははしたなく自己主張し、淫核を弄られれば快楽の余り腰砕けになってしまう。

そんな弱点だらけな女が、無尽蔵の体力を持つ男の極太チンポで、最大の弱点である肉壺と子宮をせめられたらどうなるか？ しかも愛しいと思っている男に。

答えは簡単だ。一匹の雌になるしかない。与えられる快楽に乱れ、艶声をあげ、男にされるがままだ。いや、本能的に男を喜ばせようと腰を振り、肉壺をキュツと締め、男のものである証が欲しいと全身でおねだりしていた。

だから晶は彼女の腰をガシツと掴み、力強くチンポを突き上げた。次いで奥に精を放つと、クロエは容易く絶頂してしまった。だが男の行為は止まらない。チンポをブツ刺したまま体を起こし、今度は種付けプレスで彼女をせめ立てる。何度も精を放って肉壺と子宮を白濁で汚し、ピストンで擦り付け、俺のものだとマーキングする。執拗に。執拗に。

そうしてクロエが失神したところで、晶はチンポを引き抜いた。そして普通の男なら、これだけ連続射精をしたら体力の限界だっただろう。だが彼は違う。チンポはまだ硬いままだ。逞しく反り返っている。

すると別の義妹、冬祭<sup>ふゆまつり</sup>真理<sup>ま</sup>元<sup>り</sup>ネタは冬月 茉莉（とうげつ まつり）が、晶の前に跪いてお掃除フエラを始めた。長く艶やかな黒髪のお団子ツインテールちゃん、幼い表情とは裏腹に、胸部から腰、臀部へのラインは扇情的極まりない。晶は全く我慢しなかった。口に遠慮なく精を放って飲ませると、四つん這いにして後ろから犯し始めたのだ。愛撫する必要はない。クロエとしている間にオナニーしていた彼女の肉壺は既に濡れ濡れなのだ。ピストンしながら胸を揉み乳首を弄ってやると、肉壺がキュツと締まった。遠慮なんてしない。当然中出しだ。そして彼女もチンポをブツ刺したまま体位を変えて、今度は正常位でせめ立てる。腰を掴んで激しくピストンし、放った精液を肉壺と子宮に擦り込んでいく。

高ぶつてきた晶は、今度は近くにいたアルベ・フィーリア元ネタはTony's ヒロインコレクション「フエアリー★ガーデン」アナベルを抱き寄せた。金髪ストリートロングの利発そうな子で、高い腰の位置と起伏に富んだ曲線は、どんな服を着ても見栄えするだろう。だが今は全裸で、男に抱かれる女でしかない。待っている間使っていたバイブが晶の手で引き抜かれ、彼女は駆弁スタイルで犯され始めた。種付けプレスと同じように、女が一方的に犯されるスタイルだ。逞しく反り返った極太チンポが下から突っ込まれ、子宮の入り口を叩き、こじ開け、中まで犯していく。余りの快楽に、アルベは晶に抱きつくことしかできない。豊かな胸が男の胸で押しつぶされ、卑猥に形を変

えている。勿論、彼女にも中出した。人外とも言える量の精液で子宮を汚し、マーキングしていく。幾ら射精しても衰えないチンポは凶器そのもので、女を蹂躪する。駅弁スタイルで繋がったまま晶は歩き始め、アルベを近くのテーブルに乗せた。そしてピストンしながらディー・プキスをして胸を揉み、乳首を弄ってせめ立て、再び射精。硬いままのチンポで肉壺をかき混ぜ、アルベの体を隅々まで味わい尽くす。

次に犯されたのは、リルナ・メフィールド元ネタはシャイニング・レゾナンスのリンナ・メイフィールドだ。形の良い臀部まである甘栗色の髪を緩やかにまとめ、ふわつとした温厚そうな表情と豊かな双丘は、多くの者に包容力のあるお姉さんを連想させるだろう。性格は小悪魔系だが、晶の前では一匹の雌でしかない。彼女は晶にお尻を向けて、股間に沿わせた手で自ら淫具を開いてみせた。流れ出ている愛液が、彼女の発情具合を表している。

男の方も、ここで止まるなどありえない。

遠慮なくブチ込みピストンを始め、当然のように中出ししてマーキングしていく。何回汚しても汚し足りない。胸を揉み、ディー・プキスして、男は女のあらゆる場所を俺のものだと主張していく。女はそれを当然のように受け入れ、むしろもつと、もつとせがんでいく。男が汚し足りないと思っっているように、女はもつと汚して欲しいと全身で主張していた。

この後、他の義妹達も同じように白濁で染められていったのだった――。

◇

更に別の日。

カラードの社長室では美人な秘書さんが、晶の前に跪いて逞しく反り返ったチンポをフェラしていた。ねっとり、丹念に舌を這わせ、時折啄ばむようにキス。制服カラードの制服はマブラヴの国連軍C型軍装という日常的な姿とのギャップが、酷く淫靡で扇情的だ。

だがそれもそのはず。彼女は更識から派遣されている秘書で、更識はクノイチの流れを組む家なのだ。男を昂らせ誑し込む手管など、当然のように修めている。

しかし秘書に、晶を誑し込もうとする意図は無かった。むしろ身も心も尽くしたいと思っているからこそ、こうして跪き、奉仕しているのだ。大体、今や地球圏最高の権力者の1人である彼が性欲を我慢する必要がどこにある。家と学園に在る間は……：……まあ仕方がないとして、働いている時にお傍に控えているのは秘書課の人間なのだ。だから更識から派遣されている秘書達は、日替わりで社長晶の性処理をしていた。誰に言われた訳でもない。自分達が尽くしたいからしているのだ。



そして今日性処理をしているのは、少し前に晶が「緊急」の用件でいなくなった時の秘書さんであった。第171話の時の秘書さんです

「ん、どうですか？」 社長

「相変わらず上手いな。そのまま口の中を汚したくなる」

「どうぞ。いつでも、お好きなように」

すると晶は秘書の頭を押さえ、口の中にチンポを突っ込み精を放った。秘書はそれを当然のように受け入れ、一滴もこぼさずのみ込む。秘書の口の中にあるチンポは、まだ硬いままだ。当然だろう。社長は精力絶倫で、女を一晩中可愛がれるような体力の持ち主なのだ。

(欲しい。早く、欲しいです。社長……………)

期待してしまふ。夢想してしまふ。この長く硬く遅く反り返った極太チンポが、自分を貫き犯し蹂躪して、白濁が最奥を汚した時の快感を。想像しただけで子宮が疼き、肉壺が愛液を垂れ流して男を受け入れようとしてしまふ。

だが、まだだ。一度チンポを突っ込まれて犯され始めてしまったら、もう奉仕できない。この極太チンポは女を容易く雌にする凶器なのだ。だから先に奉仕しようと、秘書は制服の胸元をはだけ、豊かな胸を使ってパイズリフェラを始めた。

程よい乳圧と鈴口へのキスに、チンポがビクつと震える。それを嬉しく思いながら秘

書が奉仕を続けていると、社長が立ち上がったて命令した。

「立って、尻をこつちに向けるんだ」

パイズリしていたチンポが、目の前に突き出される。ガチガチに勃起した極太チンポだ。コレが、中に。犯してもらえ。そう思うだけで秘書の表情は蕩け、命じられるままに立って後ろを向き、近くの机に手をついて尻を突き出した。すると社長は秘書のスカートをめくり、黒いTバックの極少クロツチをずらして、チンポをゆつくりと挿入し始めた。じれったい程にゆつくりとだ。だが遅いが故に、チンポの大きさがこれでもかと感じられる。淫貝が、肉壺が、極太チンポでゆつくりと押し開かれ、最奥目指して進んでくる。そして最奥に辿り着いたチンポは奥に押し付けられ、グリグリと子宮の入り口を愛撫し始めた。ゆつくりと。じれったいほどにゆつくりと。だがこれでも気持ちいい。圧倒的な熱量と質量が、女を雌に変えていく。逞しく反り返った極太チンポが肉壺をみっちり押し広げて、気持ち良いところを全部刺激してくる。だから秘書は毎回思うのだ。

（これで、こんな凄いものでピストンされたら）

そんな事を思っていると社長が腰を引き、ゆつくりと、だが徐々に早く、ピストンを始めた。極太チンポが肉壺全体を擦り、快感を暴力的に送り込んでくる。これに抵抗できぬ女がいるだろうか？ いや、いない。これを知ってしまったら、女は誰しも雌にな

るしかない。しかも無尽蔵の体力で可愛がってくれるのだ。

秘書は無意識の内に、チンポをもっと深く啜え込もうと腰を動かしていた。そんな動きに社長は興奮してくれたのか、腰を掴み、固定して、勢いよく奥をせめてくる。敏感な部分が何度も何度も叩かれ瞬く間に押し上げられイッてしまうが、社長は止まらない。愛液の流れ出る肉壺を執拗に耕し、白濁で中を汚して更に耕し、愛液と精液の混じったものが流れ落ちていく。

そして昂ってきた社長は、秘書を全裸に剥いた。社長室という日常的な空間で、女を全裸にして犯し続けたのだ。思うがままにチンポでせめて、ベトベトになったチンポをお掃除フェラさせて、また犯して。

そして社長室で犯される秘書達が、自分達の特権と思っている事が1つあった。それは終わりが近くなってくると、駅弁スタイルで繋がったまま隣にある社長専用のシャワールームに運んでくれるのだ。犯されながら運ばれ、繋がったままシャワーチェアに座る社長の上に座らされ、挿入されたまま後ろから、汗だくになった体を洗ってくれるのだ。犯されたままの姿では社長室から出れないというのもあるが、これは秘書達にとつてご褒美であった。

こうして秘書は、社長の性処理をしていたのだった。



更に更に別の日。

IS学園で晶は、クラスメイトとセックスしていた。

相手は宮白加奈と赤坂由香里だ。

宮白加奈は紺色の髪をショートボブにしている比較的大人しい子で、持っている私服は性格通りにシンプルで清楚な物が多い。だが親友であるあかりんは知っていた。スタイルの方は全然大人しくないのだ。

赤坂由香里は長い赤髪をポニーテールにしている姉後肌な子だ。入学当初からキセルを啜えて着物を着ればヤクザの若奥様に見えると言われていたが、卒業を控えた今では、妙な貫禄を持つようになっていた。

そして2人には悪い友人がいるので、あっち方面は耳年増であったが、実戦経験が極めて豊富な晶の前では形無しだった。キスと指テクであつという間に蕩けさせられ、放課後のプールで犯されている。

少々ハイレグ気味でデザイン性の高いスク水は半脱ぎで、肩紐が降ろされて胸元がはだけ、クロッチはズラされ、中を汚した白濁が淫貝から漏れ出ている。既に何戦かした後だが、晶のチンポは逞しく反り返ったままだ。

「かなりん。ちよつと綺麗にしてくれないか」

朦朧とするかなりんの眼前に、ガチガチの勃起チンポが突き出される。彼女は言われるがままに、愛液で汚れたチンポに舌を這わせ、綺麗にし始めた。

他の、例えば床上手な更識の使用人に比べたら拙いが、それがまたイイ。懸命にしてくれている姿が晶を昂らせる。チンポがビクビクと震え、只でさえガチガチな勃起チンポが更に元気になってしまう。

晶はかなりんを寝かせ、正常位で突っ込んだ。腰を掴み、奥までせめ立てるピストンだ。駄目だ。足りない。奥まで蹂躪したい。晶は体位を変えて種付けプレスで更にせめ立てる。愛液と精液でドロドロになって肉壺をチンポで耕し、奥をグリグリして存分にかなりんを味わう。鈴口を子宮の入り口に押し付けて射精。既に何度も中出ししているが、更に射精して汚して汚し尽くして、繰り返しまーキングしていく。

送り込まれる暴力的な快感に、かなりんは失神してしまった。  
だから今度は、あかりんだ。

四つん這いにしてバックからぶち込む。妙な貫禄を持つようになった彼女だが、今は一匹の雌だ。チンポがドロドロの肉壺を擦る度に艶声をあげ、何度も潮を吹いて絶頂を迎えている。耕され、まーキングされ、また耕されて、またまーキングされて、男に何度も何度も蹂躪されて、その中でも腰を突き出し、男をもつと奥まで啜え込もうとして

いる。そのエロい姿に晶は昂り、もつともつと彼女を汚したくなり、犯す。犯し続ける。唇も乳房も乳首も淫核も、全部弄って味わって、自分のものだとか刻み込んでいく。

そうしてあかりんは失神してしまったが、晶の昂りは収まらない。

だから晶は、失神しているかなりんに再びブチ込んだ。するとかなりんは朦朧とした意識で晶に抱きつく。所謂だいいしゆきホールドだ。両足を男の腰に絡め、殆ど無意識に男のものを味わう。雌としての本能か、外出しなんてさせないと奥へ奥へと導いていく。こんな事をされたら、奥にマーキングするしかないだろう。再びドロドロのねつとりした精液で奥をマーキングして、更に耕し、雌の本能に応える。

次はもう一度あかりんだ。

ぶち込まれた快感で、彼女は朦朧としながらも意識を取り戻す。今度は側位だ。そして朦朧としながらも彼女は男の昂りを感じ、子宮がキュンと疼いてしまった。欲しい。もつと欲しい。そんな思いが溢れ、キスをねだる。唇が塞がれ、胸も揉まれて、下からは突き上げられる。中に熱いものを感じて、子宮が雌の喜びをあげた。疼きが止まらないう。もつと、もつとと思ってしまう。男は、それに応えてくれた。繰り返しのピストンで何度も絶頂へと導き、ドロドロのねつとりした精液を子宮にのませ、これでもかど肉壺を耕してくれる。

ここまでされて、堕ちない女はいないだろう。

宮白加奈と赤坂由香里は、こうして晶の女として着実に調教されていったのだった。



一日の最後。

自宅に帰った晶は、束お手製の料理で腹を満たした後、思いつきりイチャイチャしていた。

互いに触れ合いながら夢を語り、一緒に風呂に入りお互いを洗いあつて、ベッドに入りお互いの気持ち良いところを愛撫する。

そんな中で、束が細く美しい指で晶のチンポを擦りながら尋ねた。

「全く。この凶器チンポで、今日は何人の女の子を泣かしたの？」

「んん。5人くらい」

「あれ？ 今日少ないね」

「その分、一人一人たつぷりとだったな」

「なるほどね」

束は、晶が他の女を抱く事を全く気にしていなかった。むしろ自分の男がモテるのは当然で、自分が一番であるなら、何人いても良いとすら思っている。

だから、こんな言葉が出てくるのだ。

「ふふ。他の女はしつかり躑けておいてね。特に更識は役立つから、泥棒猫無も、その妹も、使用人も、念入りに、何があっても離れよう、裏切ろうなんて思わないくらい徹底的に」

「分かってる。でも更識だけじゃないな。他の子も良い子達ばかりなんだ。だから全員、俺のものとして可愛がるさ。一度手に入れたものは離さない」

「私もだよ。離しちや、ダメだからね」

「当たり前だ」

こうして話した後、2人は絡み合い始めた。時間を掛けて愛し合い、同じベッドで熟睡して、朝を迎えるのだ。

——冒頭へ戻る。



第21話 義兄と義妹 “達” その2 (番外編第09話  
以降)

義妹達と薙原晶がいつものホテルに集まった時は、決まって大乱交だ。

そして体力お化けで精力絶倫なお義兄様薙原晶が、美女揃いの義妹達を一通り抱いただけで満足する筈がない。また義妹達は幾度も抱かれる中で、極々自然に理解させられていた。お義兄様は雄としての格が違う。何回でも何十回でも愛してくれる。気持ち良くしてくれる。自分のものだと刻み込んでくれる。力強い雄に雌が引かれるのは本能で自然の節理だ。

だから――。

「おにいさまあ。もつとお、もつとして、ローズを汚して下さい」

義妹の1人。豊かなピンク色の髪に男好きする容姿、メリハリの利いたボディラインを持つ美女、ローズ・ピニラス元ネタはピンクツインテーパーニーちゃん DX ver. が四つん這いで晶にお尻を向け、白濁が流れ落ちる自身の淫貝を、細く綺麗な指で押し広げながら懇願する。男に向ける表情は淫靡で快楽に染まっており、僅かばかりも我慢

できないと細い指を淫具に入れ、クチャクチャと弄り男を誘惑していた。

男が我慢する必要は、欠片も無い。

——ズンツ!!

何度射精しても全く衰えない極太の男根を突っ込み、ローズの奥を再び蹂躪する。子宮を小突き、グリグリして、蹂躪しながら射精して、白濁を肉壺に擦り込み、これでもかとマーキングを繰り返して、それでも終わらない。何度目か分からないほどイかせた後に男根を引き抜き、仰向けにさせて、豊かな双丘を道具のように使ってパイズりする。そこで顔射し、綺麗な、それでいて快樂に染まった顔も白濁で汚してやる。まだ終わらない。汚して欲しいなら幾らでも汚してやろう。体を起こさせ、四つん這いにさせた彼女の前に、啞えろとばかりにチンポを突き出す。快樂に染まった彼女は従順だった。愛液と精液でドロドロに汚れたチンポを喉の奥まで啞えて、口全体で抜き、時に舌を優しく丁寧に這わせ、男に尽くしてくれる。

興奮しない男はいないだろう。もう一度愛液の滴り落ちる肉壺に突っ込み、種付けプレスでローズをイかせて、白濁で汚してマーキングしてやる。

そうして男根を引き抜いた晶は、近くにいた別の義妹を抱き寄せた。

彼女の名は鳴美唯乃なるみゆの元ネタはT2アート☆ガールズ 夢見る箱入り娘 鳴神唯乃。あどけないが整った容姿に膝裏まである流麗で長い黒髪。人並な身長で、大き過ぎず小

さ過ぎないバランスの良い曲線は、男なら誰しも手に入れたいだろう。そんな美女は献身的な性格で、夜の作法も献身的なものだった。

「お義兄様。唯乃が上になりますから、どうかそのままです」

晶がベッドに仰向けになると、唯乃はそり立つチンポに跨り、ゆつくりと腰を降ろした。極太の男根が淫貝をピツチリと押し広げ、肉壺に徐々に入っていく光景は背徳的な淫靡さがあり、それだけで男を興奮させる。

晶は下から思いつき突き上げたい衝動に駆られたが、唯乃が奉仕してくれるというので待つてみると、彼女はゆつくりと腰を振り始めた。肉壺を隅々まで圧迫する男根からの快楽に耐えながら、晶を気持ち良くしようと、清楚で献身的な唯乃が羞恥に耐えながら腰を振っている。男ならチンポが反応して当然だろう。巨根に力が入り、思わず腰を突き上げてしまう。

「あつ!! おにい、さまあ」

限界ギリギリだったのだろう。それだけで唯乃の腰が止まってしまった。だが献身的な彼女は再び腰を動かそうとする。それを晶は止めさせた。チンポを突っ込んだまま手を引つ張つて胸元に倒れ込ませ、耳元で囁く。

「今度は俺が気持ち良くしてやる」

返事を聞く前に腰を掴み、チンポで奥をグリグリしてやる。執拗に何度も何度も責め

立て、ついでにディープキス。唯乃の全身を思うがままに食っていく。清楚な表情が蕩け、我を忘れたかのように晶に抱きつき、貪るようにディープキスをやり返してくる。いいね。エツチな子は大好きだ。肉壺に白濁を吐き出し、腔内射精中出しでイツてビクビク震える腰を押さえ、肉壺を隅々まで圧迫するチンポを味わわせてやる。

「唯乃。まだまだだぞ」

晶はチンポをブツ刺したまま、体位を変えた。途中、極太のチンポが不規則に肉壺の中を擦り上げ、イツた唯乃が潮を吹くが止めてなんかやらない。今度は正常位でピストンだ。すると唯乃は両手両足で晶に抱きつき、密着する。2人の間で双丘が潰れて卑猥な形になり、勃起した乳首が男の胸に当たる。世間の男は唯乃のこんな淫らな一面を知らないだろう。その優越感が晶を更に昂らせる。腔内射精遠慮なく中出しをした後もピストンを続け、肉壺に白濁を擦り込んでいく。

チンポを引き抜くと、四つん這いで近寄って来たアスイーリア元ネタはT2アート☆ガールズ「星光の魔女見習い」アストレアがフェラチオを始めてくれた。長い金髪に整った容姿は意思の強さを感じさせ、程よく発育した双丘とくびれた腰、スラリと伸びた脚の脚線美は誰が見ても美女だ。

そんな女が自分のチンポに丁寧な舌を這わせ、フェラチオをしている。昂らない男はいないだろう。チンポを口の中に突っ込み射精すると、アスイーリアは当然とばかりに

飲み干した。それどころか鈴口に口をつけ、残った精液を吸いだしにくれる。晶は四つん這いになって、いる彼女の後ろにまわり、バックから犯し始めた。腰をしつかりと掴み、巨根全体で肉壺を満遍なく擦り上げるように、長いストロークで、そして突っ込む時は奥までしつかりとブツ込んで、女の弱点を責め立てる。艶声が上がると、何度でも、何回でも、繰り返し返してやる。するとアスィーリアの両腕から力が抜けて上半身が倒れ、男に向かって尻を突き出す卑猥な恰好になった。昂りが止まらない。自分の女だと刻み込むように肉壺を執拗に責め立て、膣内射精中出しして、こいつの肉壺にもチンポで白濁を擦り込んでいく。まだ止めない。鋼のように硬く勃起したままのチンポを肉壺に差し込んだまま、アスィーリアの両腕を引いて体を起こし、背面座位で下から突き上げてやる。空いている両手で胸を揉み、硬く自己主張している乳首を弄ぶ。更にクリトリスも弄りながら突き上げてやると、面白いように潮を吹いていく。そして快楽に染まった表情を見ると、更に蹂躪したくなってしまう。繋がったまま立ち上がり、今度は背面駆弁スタイルで責め立てる。彼女自身の体重でチンポが奥の奥にまで挿入され、これまで以上の快楽が彼女を襲う。だが彼女に抗う術はない。この体位の時、女にできる事は何もないのだ。一方的に女の園を蹂躪され、白濁で汚され、男が満足するまで何もできない男優位の体位。しかも晶は絶倫だ。アスィーリアは背面駆弁スタイルのまま鏡の前まで連れて行かれ、巨根が自身の淫貝を押し広げ、肉壺に刺し込まれている様を見せられ

ながら犯された。オナホのように一方的だが情熱さも感じるといふ矛盾が感情のスパイスとなり、どうしようもない快感が全身を駆け巡る。そしてアスリーリアは再び体内射精中出しされた後、懇願していた。

「おにいさまあ。また、中陰にい、擦り込んで下さいい」

淫靡な表情と回っていない呂律が、どれほどの快楽かを表していた。そして晶は希望通りに、いや希望以上にガチガチに勃起したチンポで応えた。ベッドに戻り種付けプレイで蹂躪したのだ。

そして何度目かの射精の後にチンポを引き抜き、今度は倉敷くらしきひな比奈元ネタは佐倉日菜 *illustration by* 深崎暮人。を抱き寄せた。童顔で紫色の髪をシャギーロングで整え、後ろ髪を纏めてサイドテールにしている子だ。スタイルの方は極めて女性的で性的。平均より若干低い身長に、男であれば誰でも揉みしだきたくなる巨乳と尻。それでいてウエストは細く、四肢はスラリと伸びている。

こんな子に心からの好意を向けられて反応しない男はいない。正常位で愛し始めると、彼女も情熱的に応えた。両手両足を使って抱きつき、密着して、ディープキスで貪り始める。男の目を引いて止まない巨乳を押し付け、チンポを奥へと誘うように両足で晶の腰を絡め取る。積極的な子は大好きだ。晶はキスを止め、今度は乳首をしゃぶり始めた。硬く自己主張した乳首を甘噛みし、もう片方は指でコリコリと弄びながら、子宮

を小突く。膣がキュツと締まり、悦んでいるのが良くわかった。そして女が悦んで嬉しくない男はいない。チンポを奥まで押し込み、子宮の入り口に押し当て、ねつとりと円を描くように回転させ、じつくりと虐めてあげる。比奈の膣がまたキュツと締まって腰が何度も跳ね上がる。イツてるようだが止めてあげない。欲望のままに責め立て、トロトロに蕩けた表情を見た晶は、懇願させたくなくなった。

「どうして欲しい？」

「お義兄様、意地悪しないで」

「言ってくれないと分からないなあ」

この間もチンポでグリグリと肉壺を責め立て、感度の良い巨乳を弄ぶ。完全に悪い男だが、今は関係無い。薄っぺらい拒否の仮面など引っぺがして、雌の懇願をさせたい。そう思うだけでチンポには力が入り、力強い雄を感じた比奈の理性は瞬く間に溶けていった。

「お義兄様の精液を比奈の、比奈の子宮に注いで下さい。沢山注いで、擦り付けて、マキングして下さい」

「良い子だ」

晶は正常位のまま覆いかぶさるように抱きつき、比奈をガツチリと固定してピストンを始めた。血管の浮き出た巨根による長いストロークで肉壺全体を擦り上げ、比奈とい

う女を蹂躪していく。イツて敏感になつてる肉壺を更に虐め、中出し腔内射精して、吐き出した  
 精液をチンポで執拗に、肉壺へ擦り付けてマーキングしてやる。だが、まだ抜かない。  
 晶は上半身を起こして、比奈ひなの腰をガツチリと掴んでから再びピストン。更に精液を吐  
 き出してから、ようやくチンポを引き抜いた。比奈ひなは感じ過ぎたのか、意識が朦朧とし  
 ているようだった。

次は晶が手を出す前に、真理とリルナが寄つて来てダブルフェラを始めた。

冬祭ふゆまつり真理まり元ネタは冬月 茉莉とうげつ まつり。長く艶やかな黒髪をお団子ツイ  
 ンテールにしている、幼い表情とは裏腹に、胸部から腰、臀部へのラインは扇情的極ま  
 りない。今日の服装は胸元が大きく開き、腰まである大胆なスリットの入った黒いチャ  
 イナドレスだったが、とつくに晶に剥ぎ取られ全裸になつていた。

リルナ・メフィールド元ネタはシャイニング・レゾナンスのリンナ・メイフィールド。  
 ふわつとした温厚そうな顔で、お尻辺りまで伸ばしている甘栗色の髪を緩やかにまとめ  
 ている子だ。しかし性格は外見とは裏腹に小悪魔で、スタイルの方も生意気そのもの。  
 そして彼女も今日の服装はチャイナドレスだった。極めて短いスカートで、男を誘う卑  
 猥なパンティが見えてしまうほどの。だがそんな装備は、一回目の時点できれいに剥ぎ  
 取られていた。

美女2人が自分のチンポを丁寧に舐める光景に、晶の昂りは止まらない。取り合えず



感情の赴くままに2人の顔を顔射で汚し、真理を先に犯す。バックから犬のように。揺れる胸を後ろから掴み、揉みしだく。柔らかくて気持ち良い。肉壺も良い。愛撫する度にキュツと締まるのが良くて、乳首を何度もギュツと抓って虐めてやる。勃起してコリコリになった乳首はもつともつと自己主張しているようで、繋がったまま正常位になつて甘噛みする。すると真理は乳首でイツたのか潮を吹いて体から力が抜けてしまった。もつと味わつて虐めてあげたいが仕方がない。三回戦の時にもつと可愛がつてあげよう。

次はリルナだ。立つてテーブルに寄りかからせ、対面立位で犯し始める。そしてすぐに両足を持ち上げて、対面駅弁スタイルだ。チンポがグリツと最奥まで突っ込まれ、感じ過ぎたリルナが晶に抱きつく。そしてこの体位も背面駅弁スタイルと同じで、女は何もできない男優位なスタイルだ。奥を責めるもの入り口辺りを責めるのも、グリグリ捏ねまわして虐めるのも、男の気分次第。そう思うとチンポがいきり立つて仕方がない。快樂の波に翻弄されるリルナが可愛くて、素直にピストン。

「お義兄様。ダメ。イツちやう。イツちやうからあ」

リルナが唯一自由になる両腕でギュツと晶に抱きついてくる。腰がビクビクで震えていきそうなのが分かる。勿論止めない。このまま続ける。肉壺が一際キュツと締まり、全身に力が入る。イツたようだ。でも晶はピストンを止めない。何度もイツて敏感

になった肉壺を蹂躪するのが大好きなのだ。膣内射精 中出しで汚して、更に突いて、入りきらなかった精液と流れ出た愛液が床を汚していく。

失神したリルナを優しく降ろした晶は、次にアルベを抱き寄せた。

アルベ・フィーリア元ネタはTony's ヒロインコレクション「フェアリー★ガーデン」アナベル。金髪ロングで利発そうな表情と高い腰の位置は、どんな服を着ても似合いそうな子だ。だが今は生まれたままの姿で、表情は淫靡な女そのもの。自らM字開脚で白濁の流れ落ちる淫貝を晒し、細く綺麗な指で押し広げ、おねだりする。

「お義兄様。また、アルベを舐けて下さい」

女が自らの意思で恥ずかしい姿を晒し、舐けてと言う。男なら堪らないシチュエーションだろう。

そして当のアルベは、全く衰えていない男根から目を離せないでいた。一回戦の時に執拗に肉壺を耕されて、既にでき上がっているのだ。そんな状態で、あんなにガチガチで血管の浮き出た巨根を捻じ込まれたら———そう考えるだけで子宮が疼き、愛液が流れてしまう。

そして、それはすぐに現実となった。

圧倒的な硬さ、太さ、長さ、熱量を持った、女を雌に叩き落す極悪チンポがアルベの淫貝を押し広げ、肉壁を擦りながら突き入れられ、最奥がノックされたところで、晶の

優しい声がアルベの耳に届いた。

「どうやって躑けて欲しい?」

雌としてどうやって躑けて欲しいかを、女自身の口から言わせる。意地悪なことこの上ない。だが言わなければ、お義兄様はチンプを動かしてくれない。このまま生殺しだ。愛されたい。愛して欲しい。気づけば望みを口にしていた。

「良い子だ」

晶はニヤリと笑い、アルベを蹂躪し始めた。優しく、それでいて何度も男を教え込み、一回目以上に執拗に女の園を耕して躑けていく。本人の望み通りに。

そうして犯し抜いて失神させたところで、晶はクロエを抱く事にした。この2年で美しく成長した彼女を。流れるような銀髪と端麗な顔立ち、人並な身長、大き過ぎず小さ過ぎず形の良いバスト、くびれた腰から脚へと続く魅惑的な曲線。唯一の泣き所であった漆黒の眼球も、つい先日治療されて普通の目になっている。つまり誰が見ても良い女という訳だ。

しかし彼女の肉体には、女として、雌として、致命的な弱点があった。遺伝子強化試験体として生を受ける際、研究者の悪意ある調整により、乳房も乳首も淫核も淫貝も肉壺も子宮も、女の弱点全部がこの上なく敏感なのだ。乳房を揉まれれば容易く感じて乳首ははしたなく自己主張し、淫核を弄られればあつという間に愛液を垂れ

流し、肉壺にチンポを突っ込まれようものなら抵抗なんてできない。性的に極めて弱い美しい雌。

晶はそんな事を思いながら、失神から目覚めたばかりのクロエに覆いかぶさった。抱きしめ、情熱的なキスをしながら、チンポを淫貝に押し当て、推し進め、肉壺に捻じ込んでいく。クロエの反応は、雄を誘う雌そのものだった。もつと愛して欲しいとばかりに、両手両足を使って抱きつく。いわゆるだいしゆきホールドで全身を男に密着させる。しかも両足は晶の腰に絡め、チンポを奥へ奥へと誘いこもうとしていた。カリ高で、血管の浮き出た、太く、硬く、長く、女を雌に変えて屈服させる凶器のようなチンポを、彼女は自ら弱々の雑魚マンコの中でも一番弱い最奥へと導こうとしていた。

そしてクロエは甘く蕩けきった雌の声で、お義兄様の耳元で囁く。

「蹂躪して下さい。お義兄様の逞しいもので、私の全てを」

こんな事を言われて、理性を保てる男はいないだろう。

晶は遠慮なくピストンを始め、膣も子宮も白濁で汚し尽くしていく。正常位で、側位で、バックで、何度も何度も執拗に。そして昂っている晶は、中を汚すだけでは飽き足らず、パイプズリで顔を汚し、フェラチオで口の中を汚し、クロエの全身を汚して、弱い雌を蹂躪していく。

だが蹂躪されているクロエは幸せそうだった。敏感過ぎる性感帯という悪意に満ち

た調整だが、お義兄様に愛してもらえらるなら、それは祝福だ。汚される度に愛されたいと実感できる。

そんな中で晶は、クロエを対面駅弁スタイルで犯しながらシャワールームに向かった。

「おにい、さまっ？」

「随分汚しちゃったからな。洗ってやろう」

ガチガチの勃起チンポをクロエの膣に入れたまま、晶はバスルームのシャワーチェアに座った。晶はゆっくりと座ったが、最奥まで捻じ込まれていたチンポは、僅かな衝撃もダイレクトに弱点へと伝え、クロエを強制的にイかせていた。ビクビクと震えてキュツと締まる雌穴が男を気持ち良くさせる。だが晶はあえて知らんぷりをして、シャワーを手に取り、クロエの体についている白濁を流し、顔を拭き、ボディソープを泡立て、丁寧にクロエの体を素手で洗っていく。背中を、腕を、お尻を、その間も繋がりはなしのチンポは雌穴の中で不規則に動き、クロエを翻弄していく。

「おにいさまあ。突いて、突いて下さいい」

一匹の雌は甘く蕩け切った声で懇願しながら、腰を動かし、チンポを一番気持ち良いところに押し当てようとする。だが意地悪い晶は、まだ突いてやらない。今度は繋がったまま正常位になり、腹を、腋を、胸を、泡立てたボディソープで丹念に洗ってやる。そ

してピンピンに勃起している乳首と淫核を洗い始めると、彼女はまた簡単にイカされた。肉壺がビクビクと震え、キュツと締まる。もう足腰に力が入らないクロエはされがままだ。

——雄に蹂躪されるしかない美しい雌。

そんなクロエを見てみると、只でさえガチガチになっっている勃起チンポに更に力が入る。もつともつと犯し尽くしたいという感情のままに、晶はピストンを始めた。逞しい巨根で肉壺を隅々まで擦り、最奥まで暴力的に突っ込み、弱々雑魚マンコに自分が誰の雌であるか分からせる。いや、もうとづくに分からされている弱々雑魚マンコは、悦んで強く逞しい雄を迎え入れ、奉仕するべく更に愛液を垂れ流し、精液が欲しいとばかりに肉壺を締め上げる。

晶は一切我慢しなかった。チンポを最奥まで捻じ込み、押し付けながら今日一番の大量射精でマーキングしてやる。子宮を濡れさせんばかりの大量射精で十分に蹂躪した後、チンポを引き抜く。失神した女の淫貝から精液が漏れ出ている光景のなんと淫靡なことか。そしてこれほど女を抱いた後でも、晶のチンポは硬いままだ。逞しく、反り返り、雄としての存在感を誇示している。

——まだ抱きたい。

そう思っていると、先程犯したローズがシャワールームに入って来た。

「お義兄様。次は、私が」

豊かなピンク色の髪に男好きのする容姿、メリハリの利いたボディラインを持つ美女が、そうする事が当然とばかりに跪いてフェラチオを始める。愛液と精液でドロドロになったチンポに、丹念に舌を這わせて綺麗にしていく。終わったら豊かな胸も使つてパイズリフェラ。逞しいチンポを突っ込んでもらう為奉仕し、全身でおねだりする。

言葉はいらない。晶は行動で応えた。

再び種付けプレス。ローズは男好きする悪女のような外見とは裏腹に、屈服させられるような体位が大好きなのだ。だから種付けプレス、バック、駅弁スタイル、女が成す術もなく犯されるような体位を選んで蹂躪してやる。また汚して、マーキングして、誰のものかを刻み込んでいく。

こうして義妹達と晶の大乱交は三周目に突入したのだった。



翌日、晶が所用で先に帰ったいつものホテルのいつもの部屋。

つやつつやになった義妹達は、エロエロなガールズトークに華を咲かせていた。

「8人相手にしてびんびんしてるなんて、やっぱりお義兄様つて凄いわね」

「でもアレくらいじゃないと、ハーレムなんて作れないんでしょうね」

「そうよねえ。ええつと、束様、更識姉妹、その家の使用人、ご学友のクラスメイトほぼ全員、ハウンド、秘書課の皆さん……………織斑先生と山田先生も入るのかしら？」

「スカウトしたつていう学園の先生？ お義姉ちゃん的にはどんな人なの？」

「織斑先生はとても厳しくて、山田先生は……………ちよつと貞操観念の強い優しいお姉ちゃんみたいな感じかな」

「ふうくん。確か織斑先生つて、ブリュンヒルデ元世界最強”よね？」

「そうよ」

「じゃあ想像だけど、やっぱり肉食系でガツガツしてるのかな？ あ、でもお義兄様が相

手なら、強気に挑んでも敵わなくて、ベッドの上で分からされちゃうパターンかな？」

「うわつ、なんだかすつごいエッチ」

「山田先生は？」

「貞操観念の強い人だけ……………」

考えて、クロエは思った。確証は無いが、お義兄様に迫られたらコロツといきそうな気がする。同じ女から見てもエッチな体なのに、強い貞操観念のお陰で色々と溜め込んでいるかもしれない。ズボズボされたら、本当にコロツといくのではないだろうか？

「だけどっ？」



「お義兄様の魅力にかかれればイチコロじゃないかしら？」  
「性格的には大丈夫なの？」

「3年間ちゃんとお義兄様の教師を出来た人よ。問題無いと思うわ。それよりもリルナ、貴女いつのまにあんなにエッチな下着買ったの？」

今回の集まりでリルナが身につけていた下着は黒のシースルーで統一された、ハイレグパンティとブラ。しかも局部に穴が空いていて、乳首や淫貝が丸見えなタイプだ。スタイルの良い彼女が身につけると、破壊力が凄まじい。

「家で雑誌見てたら、護衛更識の人の人が一式揃えましょうかって言ってくれたから、お願いしたの。お義兄様、物凄いハッスルしてくれたから良かったわあ」

昨日の情事を思い出し、恍惚した表情をするリルナ。すると唯乃が口を開いた。

「私も、そういうの着た方が良いかなあ」

これにはローズが答えた。

「貴女の場合ストレートにエロいよりも、清楚にエロい方がお義兄様はハッスルしてくれると思うわよ」

「どんな感じ？」

「エロさを前面に押し出したデザインのものよりも、レースでちよつとだけ裝飾された上品なタイプね。お義兄様って好きなタイプ多いけど、汚すのも大好きみたいだから、

「清楚な唯乃を汚したい」って思わせれば、凄くハッスルしてくれると思うわ」

昨日も凄かったのに、アレ以上凄くなる。想像した唯乃は赤面を押しえられなかった。

次いで、比奈が口を開いた。

「でも今更だけど、ローズってお義兄様に蹂躪されるの大好きよね」

「当たり前じゃない。私達のお義兄様よ。何回でも何十回でも蹂躪されたいし、して欲しいわ。比奈は違うの？ 昨日はそのおっぱいを押し付けて、揉んでもらって、媚び媚びだったじゃない」

「だって、お義兄様悦んでくれるんだもん。あ、でもそれ言ったらアルベもエッチだったね。自分から舐けて下さいって言って、拡げちゃって」

アルベが赤面しながら反論した。

「ちよ、ちよつと!! みんな同じようなことしてるじゃない。アスイーリアだって擦り込んで下さいって」

素面の時に言われて恥ずかしいアスイーリアは、ササツと別の義妹を生贄にした。

「それ言うなら真理だってそうじゃない。あんなエッチなチャイナドレス、何処で買ったのよ」

「えつと……………自作しちゃった」

「え?」

「だってお義兄様アレ系の服装大好きでしょ。でも何処かで買つて変な人達に嗅ぎつけられたらイヤだったし、それならお義兄様をハッスルさせらるエツちなやつ作っちゃえつて思つて、自作したの。結果は大成功!!」

昨日真理が着ていた黒いチャイナドレスは、胸元が大きく開き、スカートの両サイドにあるスリットは腰まで伸びているという大胆なものだった。ついでに言えば背中も大きく開いており、肌色面積がとても広い。そして大きな胸を強調する開いた胸元も、深いスリットも、お義兄様は予想通りに使つてくれた。手を入れて揉みしだき、指を入れてクチャクチャと弄つてくれた。作つてる最中に想像してオナニーしてしまった通りに、真理を犯してくれたのだ。

だから――。

「次も、何か自作してこようかな♪」

この言葉に、クロエが物は試しと尋ねてみた。

「何かイメージしてあるの?」

「あるよ」

「どんなの?」

「ちよつと待つてね。えーと、こんなの」

近くに置いてあったバッグから小さな手帳を取り出し、真理はクロエに見せた。  
すると……………。

「ねえ真理。これ、私に作ってくれないかしら？ ほら、お義姉ちゃんつて寮生活だから、余りこういうの作れないのよ。だから、ね」

優しいが、何故か威圧感を感じる声だった。

「お、お義姉ちゃん？」

「ね。良いでしょう」

ジリジリと迫るクロエ。

それを止めたのはローズだった。後ろから抱きつき、ついでに胸をモミモミしてあげる。

「はいストツープ。お義姉ちゃん暴走し過ぎ」

「ひゃああん。こ、こら、止め、つつつなさい」

「止めない。お義姉ちゃんこんなに敏感でお義兄様に沢山可愛がってもらってるのに、それ以上なんて駄目。卑怯。お義兄様は義妹達全員で、公平に分け合うべき」

「おにい、様はあ、平等、じゃない」

お遊びの雑な愛撫にすら、クロエの体は反応し乳首が硬くなり始める。そして少しばかり涙目になってきたクロエの表情に、ローズの意識がエツチな方向に飛びかける。

が、その前にアルベのチョップがローズの脳天に炸裂した。

「ローズこそストッブ!! お義姉ちゃん虐めちゃ駄目じゃない」

「あ、っ、っめんなさい」

何とも仲の良い義姉妹達である。

こうして彼女達は暫しの間エロトークで盛り上がった後、日常へと戻っていったのだった。

分かり易いように義妹ちゃん達一覧。(エロVer)

クロエ・クロニクル

原作登場キャラ。本作では義妹達の精神的なお義姉ちゃん。

唯一の泣き所であった漆黒の眼球は第179話にて治療済み。

原作ではロリ(?)だったが本作では成長しており、流れるような銀髪と端麗な顔立ち、人並な身長と双丘、くびれた腰から脚へと続く魅惑的な曲線という、同性異性を問わず誰もが振り返る程の美しさとなっている。

エロ的紹介

性感帯の感度が極めて良いため、性的に極めて弱い雌。もし悪い男に捕まったら泡風

呂に沈められて金を雀り取られるか性奴隷一直線。肉壺は名器でありながら弱々な雑魚マンコなので、男はいつまでもブツ込んでいたくなり、クロエはいつまでも責められるという無限ループ。

冬祭真理（ふゆまつり まり）

元ネタは冬月 茉莉（とうげつ まつり）。

長く艶やかな黒髪をお団子ツイントールにしている、幼い表情とは裏腹にとっても発育が良い。それでいて引つ込むところは引つ込んでいるという、大多数の女性が羨むようなスタイルをしている。

エロ的介绍

でかい胸は乳首イキできるくらいに感度が良くて、お尻も柔らかかで男はずっと触っていたくなる。晶が犯してくれるならどんな体位でもOKだが、しいて言うならおっぱいも一緒に弄って欲しい派。

アルベ・フィーリア

元ネタはTony's ヒロインコレクション 「フェアリー★ガーデン」 アナベル。

金髪ロングの子で、利発そうな表情と高い腰の位置、起伏に富んだ曲線は、どんな服

を着ても見栄えする素晴らしいもの。

### エロ的介绍

スタイルは全体的に大き過ぎず小さ過ぎずというバランス型。普段は利発そうな表情をしているが、エッチの時はお義兄様に馴けて欲しいという性癖が顔を出す。そして「言わされる」ことで更に感じちやう若干M気質。

### リルナ・メフィールド

元ネタはシャイニング・レゾナンスのリンナ・メイフィールド。

ふわっとした温厚そうな顔で、お尻辺りまで伸ばしている甘栗色の髪を緩やかにまとめている子。性格は外見とは裏腹に小悪魔で、スタイルの方も生意気そのもの。

### エロ的介绍

エッチの時も小悪魔な様子は変わらない。が、お義兄様のチンポでズボズボされたらそんな余裕などあつという間になくなるので、いつも一方的に快樂の波に翻弄されてしまう。その様子が可愛くて晶が更に昂り無限ループ。

### 鳴美唯乃（なるみ ゆの）

元ネタはT2アート☆ガールズ 夢見る箱入り娘 鳴神唯乃。

あどけないが整った容姿に膝裏まである流麗で長い黒髪。人並な身長で、大き過ぎず小さ過ぎないバランスの良い曲線に、スラリと伸びた四肢をしている。

#### エロ的紹介

日頃から清楚で献身的。そして夜の方も献身的。自分で動いてお義兄様に気持ち良くなってもらおうというエッチをする。が、暫くするとスイッチが入って貪るようなエッチになる。日頃清楚なだけに、ギャップが非常にエロイ。

#### アスイーリア・ライト

元ネタはT2アート☆ガールズ 「星光の魔女見習い」アストレア。長い金髪に整った容姿は意思の強さを感じさせ、程よく発育した双丘とくびれた腰、スラリと伸びた脚の脚線美は、誰が見ても美女。

#### エロ的紹介

意思の強さを感じさせる容姿とは裏腹に、エッチでは献身的で尽くしたい系。だが割と雑魚マンコなためズボズボされ始めると尽くす前に一方的に蹴られてしまう。そしてオナホのように犯されている自分の姿を見せられると、それで更に感じてしまう。

倉敷比奈（くらしき ひな）



元ネタは佐倉日菜 *illustration* by 深崎暮人。童顔で紫色の髪をシャギーロングで整え、後ろ髪を纏めてサイドテールにしている。そして真理と同じくとても発育の良い子。

### エロ的紹介

童顔で感度の良い巨乳の持ち主。胸と子宮を同時に責められるのが大好き。あと腰をガツチリ掴まれて逃げ場のないピストンされるのも大好き。

### ローズ・ピニラス

元ネタはピンクツインテバニーちゃん DX ver. 豊かなピンク色の髪に蠱惑的な微笑み。ボディラインは男好きするメリハリの利いたものであり、清く正しくというよりは男も女も手玉にとる悪女であり、義妹というよりは義姉というイメージが先にくる子。でも義妹達のお義姉ちゃんはクロエしかいないと思ってる。

### エロ的紹介

義妹達の中では一番エロイ。マーキングされるのも、フェラするのも、パイズリするのも、種付けプレスされるのも、兎に角全部好き。何回でも何十回でも蹂躪されたい。でも他の男は嫌いなので、勘違い野郎には容赦ない。因みにクロエの事も大好きなので、偶に(?)暴走する。



## 第22話 悪の女幹部を躰けちやおう!!

先に今回の犠牲者紹介

シルヴィ・ラーシア

亡国機業の元最高幹部の1人。

腰まである甘栗色の髪に切れ長な瞳を持つ妖艶な表情が印象的な女性。その肉体は均整の取れた四肢に豊かな双丘や臀部とが相まって、強いセックスアピールを放っている。(元ネタは「コミックアンリアル vol.2 CoverGAL サキュバス・シルヴィア designed by モグダン」)

暫し前の事だ第165話の後。

朝から晶とエッチしてたっぷり愛してもらった束は、ルンルン気分でネットサーフィンをしていた。自分の男はコスプレエッチも大好きなのでネタ探しだ。性器の部分が空いているエロ下着、性器の形が浮き出る程のピッチリスーツ、OL風なスーツ、ミニスカートなメイド服、下着を着ない和服、某格ゲーのクノイチが着ているえっちな服、

大胆なスリットが入った聖職者風な服 e t c e t c。好きな幅が大変広いのだ。お陰でクローゼットにはその手の衣装が山ほどある。そしてどんな服を着ても、全裸で迫っても彼は喜んでくれる。正常位でお互い抱き合つての密着ラブラブエッチ、獣のようにバックからのエッチ、種付けプレスで奥の奥まで乱暴に耕されるエッチ、どれもこれも良い。何回でも愛してくれるし、何回でも愛してあげたい。

そんな事を思いながらエロネタを探していると、偶々素人が書いている官能小説を見つけた。お題は「悪の女幹部を躱けちやおう!!」というもので、内容は正義の味方に負けた悪の組織の女幹部が捕らえられ、性的に調教されて………というものだ。

ここで東は、数日前にした晶との会話を思い出した。

亡国機業の最高幹部を何人か捕らえたので、電脳ダイブの応用で情報を引き出して欲しいという話だ。確かに幹部連中が持っている情報は色々と役に立ちそうなので、彼女らが持っていた専用機を調整して、意識を電脳空間に放り込んでおいた。情報収集の方法は簡単で、深層心理から自身が日常と思っている光景を読み込み、その情報で仮想空間を構築して、日常生活を送らせる。これだけだ。しかし効果は絶大で、使っている口座や暗証番号、フロント企業、送り込んでいるスパイ、敵対企業の動き、生活の中で関わった全ての情報が丸裸になっていた。

その後は覚醒させる必要も無かったので放置していたが丁度良い。ニヤリとした笑

みが浮かぶ。悪事の限りを尽くしてきた奴らが相手なら、良心が痛む事もない。悪の女幹部に奉仕の心を教えて、雌奴隷に墮としてやろう。勿論、誰にでも奉仕する訳じやない。限られた相手にだけ、誠心誠意仕えるように。でもロボットみたいにしたらつまらないから、元々の人格を残して、反抗しつつも従順に従うように。そんな調整をしてみよう。

東は思い立ったが吉日とばかりに、最高幹部連中を眠らせてある部屋へと向かった。

透明なポットが並ぶ部屋で、透明な特殊溶液に満たされたポット1機にアクセサリーを1個だけ身に着けた全裸の女が、1人ずつ入れられている。部屋の中をサツと見渡す。機材を稼働させる最低限の機器しか置いていない。

(うくん。まずはポットの改造からかな)

脳裏に設計図を思い描いていくと、この部屋では少々手狭だ。半分ほど隣の部屋に移そう。

そして東は思い向くまま気の向くまま、ルンルン気分で作業に取り掛かった。

まず隣の部屋に新しいポットを用意する。調教用に改造したもので、ポットの下から何本もの触手が出てくるようにしておいた。それで手足を拘束して動きを封じ、内一本はパイプとして肉壺に突っ込んであげなのだ。勿論振動&ピストン機能付きで、先端から出てくる薬液は感度向上+強力な発情効果がある。これで延々と女の弱点を撈られ

続けられ、幾ら精神的にタフでも体は否応なく快楽を覚えていくだろう。これだけじゃない。他の触手からも薬液を出せるようにしておいたから、任意の部分を好きなように弄れる。とりあえず全身の性感帯を、遺伝子強化試験体並にしてあげよう。今まで男を組み伏せていたであろう悪の女幹部様が、性的に弄られたらあつという間に負けてしまう弱々雌奴隷になるのだ。男のチンポに成す術もなく分からされたら、どんな顔をするだろうか？

数日かけてポットを準備した束は、そんな事を考えながらとりあえず1人ポットに放り込んだ。適当に選んだ「元」最高幹部の名はシルヴィ・ラーシア。美人系の整った容姿に切れ長な瞳、腰まである甘栗色の髪、男好きする大きな胸とお尻に均整の取れた四肢という、雌奴隷に相応しい容姿とスタイルだ。

呼吸可能な特殊な溶液を満たしてスイツチオン。するとポットの下から触手が伸びて両手両足を拘束し、次いでヌラヌラと光る触手バイブがゆっくりと淫具へと迫っていく。まだ全く塗れていないが問題無い。押し当てられた触手の先端から媚薬が吐き出され、淫具が無慈悲に執拗に愛撫されていく。

効果は靦面だった。瞬間間に愛液が流れ出て、「早く早く」とばかりに男を迎え入れる準備を始めたのだ。だが突っ込まれるのは違う。女を雌奴隷に墮とす改造触手だ。奥の奥まで突っ込まれ、吐き出された薬液が女の肉壺を雌奴隷に相応しい弱々雑魚マンコ

に改造していく。感じる快樂は今までの何倍にもなり、突っ込まれてピストンされたらあつという間に腰砕けになるだろう。

でもこれだけじゃ足りない。雌奴隷なら胸も使つて奉仕しないといけない。豊かな胸に別の触手が伸びていき、先端が開く。ブラジャーのように張り付き、じつくりと薬液を浸透させていく。乳房全体の感度を引き上げて、乳首は抓られたらイツちやう位の感度にしてあげよう。

こうして改造を施していくと、シルヴィの表情が変化しだした。電脳ダイブ中で意識は覚醒していないはずなのに、頬がうっすらと赤くなり、何かに耐えるような顔をしているのだ。

これを見た束はニヤリと笑い、彼女の深層心理を覗き始めたのだった。



一日の仕事を終えたシルヴィは片手に持ったワイングラスを傾けながら、ガラス張りの壁面越しに、鮮やかなネオンに彩られた夜景を楽しんでいた。ここはとあるホテルのロイヤルスイート。最上階にあるこの部屋は眺めが良い。次いで眼下に視線を向ければ、豆粒のように小さく見える一般小市民達がストリートを歩いていて、支配者に使わ

れるしか脳の無いゴミどもだ。自身との絶対的な差に愉悦を覚える。それは極々自然に、明日はゴミ共をどうやって有効活用しようかという思考になり、心躍る幾つもの案が脳裏に浮かんでは消えていく。

「……………あら、もうこんな時間」

随分と考え込んでしまったらしい。気づけば23時。規則正しい生活を心がけている訳ではないが、そろそろ寝よう。———と思っただが、アルコールが入ったせいだろうか？ 今日は何やら体の奥が熱い。妙に、疼くのだ。

(……………)

いつもなら側近と戯れて処理するのだが、生憎と今日は用事を言いつけてしまい地球の反対側にいる。

偶には、1人でというのも良いだろう。

右手が胸元に伸び、白いバスローブの隙間から中に入り、自身の乳房をそつと揉んでいく。

「んっ」

なんだか、今日は随分と感度が良い。揉んだだけなのに、想像以上の快感に声が漏れてしまった。もう少し強く揉めば、より強い快感に声が出そうになる。我慢しなければ……………いいえ。部屋にいるのは私1人。我慢する必要なんてない。



「んっ、んんっ」

徐々に強く揉んでいく。すると乳首があつという間に自己主張してきた。自分でも驚くほどにビンビンで、少し抓っただけで、乳房を揉むよりもずっと強い快感が電流のように走る。

「ん、あ、はあ……、今日は、んっ、どうしたのかしら？」

気持ち良くて手が止まらない。いつしか両乳房を弄り始め、乳首をグニグニと抓って虐めてしまう。乳首イキなんてした事なのに、イッてしまう。何回でもイけてしまう。気持ち良くて何度も弄って抓ってイッて、足りなくて何度もしてしまう。

気づけば、右手で股座を弄り始めていた。

いつの間にか濡れ濡れになっていた肉壺に指を入れてクチャクチャと弄り、一本じや足りなくて二本入れて、卑猥な音を立てて弄り、快楽に腰がカクカクと動いてしまう。でも足りない。電流のような快感を感じているのに、体が満足していない。だからクリトリスをギュツとつまんで、もつと強い快感で自身の体を虐めてしまう。ビクツと一際強く腰が震えて、全身に快楽が走る。イッてしまった。だがイけばイクほど、子宮の奥が疼く。指では届かないもつと奥に、刺激が欲しい。そう思ったところで、ワインボトルが目に入った。

(「これなら……」)

殆ど無意識の内に手に取り、高級なワインが残っているのも構わず、注ぎ口を淫具に押し当て捻じ込み始める。それだけでこれまでとは比べ物にならない快感が走った。まだ入り口付近なのに。立っていられなくて、近くのソファに腰掛けてM字開脚。傾けられたボトルからワインが零れ、肉壺に注がれていく。それすらも快感に感じながら更に捻じ込んでいくと、注ぎ口が子宮の入り口に届く。瞬間、シルヴィの目の前に電流が走り、一瞬でイッてしまった。潮を吹き、両脚から力が抜けて動けない程に深く。

「あ、あへえ」

変な声が出てしまった。普段であれば絶対に出さないような、快楽に負けたような声。それが、自然に出てしまった。でも此処にいるのは私一人。誰に聞かれる訳でもない。だから、大丈夫。内心のそんな言い訳を後押しするように、手が動いてしまう。ボトルをパイプのようにズゴズコと動かし、自身の子宮の入り口を虐めていく。自虐的に何度も何度も突いて、余りの気持ち良さにもっともっとと思ってしまう。

そんな思いが自然と空いている片手を操り、乳房を弄り、乳首を抓り、クリトリスを虐めて、自身を女と認識させていく。亡国機業の最高幹部ではなく、今この瞬間だけは只の女。どうせ誰もいないのだから、今はどれだけ乱れても大丈夫。今はちよつと感じちやつてるけど、明日になれば大丈夫——そう思いながら、シルヴィのオナニーは朝方まで続いたのだった。



「うんうん。良いねえ。元々雌奴隷の素養があつたのかな？」

深層心理を覗いていた束は満足そうに笑つていた。肉体改造が良い感じで精神に影響を及ぼしている。だがこれは始まりに過ぎない。これから、どんどん墮としてやろう。なにせこいつは亡国機業の「元」最高幹部。これまでやってきた事を考えれば、何をされても文句は言えない悪党だ。むしろ雌奴隷になるだけで許してやるというのだ。喜んでなるのが当然だろう。

そんな事を思いながら調教内容を追加し、再び深層心理を覗き始めたのだった。



日に日に、シルヴィの欲求不満は強くなつていった。ワインボトルでオナニーした次の日も、その次の日も、更にその次の日も、何度オナニーしても、胸や子宮の奥が疼くのだ。日中もふとした拍子に、手が乳房に伸びそうになる事がある。いや、事があるではない。我慢できなくて、トイレで弄つてしまう事があつた。何度も揉み、乳首を抓つ

て軽くイかないと何も考えられないのだ。

だから今も、こんな玩具を使っている。

アダルトショップで買ったニップルローターをブラの下に着けて、いつでも刺激できるようにしていた。お陰で乳首はいつもピンピンで敏感になってしまい、ブラに擦れただけでも感じてしまうようになっていたが、いつもニップルローターで覆っていれば問題無い。しいて言えば自分でギュツと抓りたい事があるが、それは仕事を終えた後のお楽しみだ。一日の最後に誰もいない部屋で、感じるままにするオナニーはとても気持ちが良い。なんで今までしなかつたのだろうか？ 最近はそんな思いすらある。

なので一仕事終えてホテルに戻ったら、まずはシャワーを浴びながらのオナニーだ。

「ん、あ、んう、イイ」

弄つて欲しいと自己主張する乳首を何度も抓り、快楽に身悶えしていると、乳房の奥がどんどん熱くなってきた。何かが出そうだ。気持ち良い。突き動かされるように乳房を揉み、乳首を抓り、愛撫を続けていくと、先端からミルクが出てきた。勢い良く射乳され、ミルクが壁を汚す。

「え？」

驚く。だがどうでも良い。大事なものは、今のがとても気持ち良かったということだ。弄れば弄る程にミルクが出て、快楽の波が理性を押し流して、夢中になって弄ってしまった

う。でもオナニーは胸を弄るだけじゃない。煮えたぎるように熱い子宮の疼きを収めないといけない。弄らなくても濡れ濡れになつて指を突っ込んで、掻き回す。毎日弄つてすっかり敏感になつたマンコは素直で、弄れば弄る程に気持ち良い。下に腰がカクついてしまうが、今は一人だ。関係無い。

指を引き抜き、愛液でドロドロになつた手を見て思う。

(ああ。洗わないと)

極自然にそう思い、シャワーヘッドを手取る。だが向けられた先はドロドロに汚れた手ではなく、愛液を垂れ流す淫貝だ。押し当て、洗い流す。程よい温度の流水がクリトリスも刺激して、腰がビクビクと震える。気持ち良い。もつと味わいたいとばかりにシャワーヘッドをクリトリスに押し当て、快感を貪る。何をしても気持ち良くて止まらない。

(そうだ。こんなに濡れてるなら、蓋をしないと……)

余りの快樂でボンヤリした思考が、おかしな事を考え始める。体を拭くのもそこそこにはバスルームから出たシルヴィは、ベッドサイドで目的の物を見つけた。デイルドだ。それを己の濡れ濡れマンコに突っ込み、男の欲情を誘うような黒いハイレグレースのショーツを履いて落ちないようにする。これで愛液が流れて出てくる事も無いだろう。

普段なら有り得ない思考だが、今の彼女はそれに気づけない。むしろ快樂に犯された

精神は、それを当然のものと思っていた。

(んっ、イイ、わね。奥が、適度に圧迫されて)

そのまま体を拭き、濡れている髪を乾かし、乳首にニップルローターを張り、ショーツとお揃いデザインのシースルーブラを着け、バスローブを羽織ってワインを飲もうと椅子に座る。瞬間、電流のような快感が体を突き抜けた。座った拍子にデイルドが下から押されて、子宮を小突いたのだ。しかもお尻の位置をちよつとずらせば、デイルドが膈壁の色々なところを擦ってとても気持ち良い。クセになりそうな快感に身悶えしてしまふ。いや、なりそうな、ではない。シルヴィの体はアツサリと快楽に負け、ワインもそこそこに、再びオナニーに耽り始めてしまった。態々大きな鏡の前に移動して、M字開脚で大きく足を開き、突っ込まれたデイルドで押し開かれた淫具を見ながら、自身の痴態をおかずに何度もイッてしまふ。

そして最後には肉壺にデイルドを突っ込んだまま、意識を手放してしまったのだった。



「はは。最高幹部なんて言いながら、中身は雌犬じゃない」

東は映し出される深層心理を見ながら呟いた。でもまだだ。こんなんじや足りない。深層心理の奥深くに、どうしようもない雌奴隷の人格を刻んであげよう。自身が誰の有物なのかを理解して、奉仕するのが当然と思うようにしてあげよう。

そんな事を思いながら調教内容を追加し、再び深層心理を覗き始めたのだった。

◇

あの日以降、シルヴィは日中もデイルドを突っ込んだまま過ごすようになっていた。勿論、乳首にはニツプルローターも着けている。お陰で上から下から常に性感帯が刺激され、とても気持ちが良い。もう外して過ごすなんて考えられない。むしろ外せない。ニツプルローターを常用しているお陰で乳首が更に開発されてしまって、もしニツプルローターを外してブラを着けようものなら、擦れただけで胸イキして歩けないだろう。でも一日何回かは外さなければいけなかった。ミルクで胸が張って苦しいのだ。だから何回かはニツプルローターを外して、どこか人目のないところで乳首オナニーしてミルクを出さないといけない。仕事の合間合間で人目を忍んで乳首オナニーだ。その背徳感が、また気持ち良い。

だがデイルドの方はもつと気持ち良かった。歩いているだけで不規則にデイルドが

動いて堪らなく気持ち良い。椅子に座るだけで子宮が下から突き上げられ気持ち良い。お尻の位置を直しただけで膣壁がゴリゴリと擦られて気持ち良い。何をしても気持ち良いのだ。難点はデイルドで蓋をして愛液は漏れ出ていないはずなのに、シヨーツがぐっしより濡れてしまうことだろうか。お陰で最近は変えのシヨーツを何着も持ち歩かないといけない。でも良いのだ。どうせ乳首オナニーする為に人目の無いところに行くのだから、その時に変えれば良い。

そう割り切ったせいにか、シルヴィのオナニーはもつと大胆になっていった。デイルドをクリトリスも同時に刺激できる二股タイプに変え、人混みの中でもバイブ機能をONにして、誰に気づかされるかもしれないスリルを楽しんでしまう。

下着も男が興奮するような性的なものばかりを選んでいった。シースルー、Tフロント、Tバック、秘部を辛うじて覆うだけの極小下着 e t c e t c。服装もそうだ。股下数センチのミニスカート、腰まである深いスリットの入ったスカート、ブラウスの生地は薄く下着のラインが見えるもの、深い胸の谷間は当然見せるようにしている。

誰もが雄の視線で見えてくるが、抱かれてなんてやらない。

私は最強。男なんて女を見てシコるしか脳の無い猿。

そんな事を思いながら日々を過ごしていると、定期的にやっている格闘訓練の日になった。いつもは側近を相手にやっているのだが、今日は都合がつかなかったようで、



適当な男が見繕われた。中肉中背で黒眼黒髪。年の頃は二十歳前程度。顔立ちは悪くないし、中々引き締まった良い体をしている。これが終わったら別の意味で可愛がってあげよう。

場所は借り切ったホテルのジム。互いにリングに上がり向かい合う。この時、シルヴィはいつもの服装だった。男を誘うような深い胸の谷間が見える薄手のブラウスに、僅かに屈んだだけでショーツが見えてしまいそうな黒い超ミニスカート。ヴヴヴヴという機械音が響き、上と下から絶え間ない快感がシルヴィを襲っている。だが彼女は機械を止めなかった。男なんてシコるしか脳の無い猿だ。こんなのハンデにもならない。少し激しく動いただけで腰が砕けて足から力が抜けそうになるが、何も問題はない。一撃で終わらせれば済む話だ。

根拠の無い思考。根拠の無い自信。快楽に犯された彼女の精神は気づかない。気づかぬ内に擦り込まれていた雌奴隷の精神が、犯される事を望んでいると。

始まった格闘訓練は、シルヴィの思いとは真逆にすぐには終わらなかつた。男はのりくらしりと攻撃を躲し、手練のコーチが選手を指導するように、軽く打ち込んでくるのみ。そうして長引けば長引くほど、ニップルローターとデイルドがシルヴィを責め立てる。しかもそろそろ、いつもなら乳首オナニーをしている時間だ。胸が疼く。思いつきり弄りたい。ミルクを出したい。子宮も疼く。デイルドを思いつきり弄って奥を突き

たい。

でも今は訓練中。そこで彼女は思った。この男にやらせればいい。後で変な事を言わないように、しっかりと口止めしておけば大丈夫だろう。

だから——我慢の限界だった彼女は、最後の理性を振り絞って男に言った。

「今日はもう終わりにして、別の事をしましょう」

「どんな」

「こういう事よ。貴方中々イイ体しているから、ちよつと欲しくなつちやつたわ」

シルヴィは男に近づき、ハーフパンツの上から男根を愛撫し始めた。思っていた以上にデカイ。もしかしたら、今入れているデイルド以上に。

「ふうくん。じゃあ、ちよつとしゃぶってくれないか」

男は興味無さそうな相槌を打った後に言い、女は普段であれば有り得ない程、従順に従った。男の前に跪いて、ハーフパンツを下ろす。そうして出てきたチンポに、視線を奪われる。釘付けになる。

カリ高の亀頭、血管の浮き出た竿、間違いなく女の奥まで届きそうな長さ、肉壺を隅々まで埋め尽くすだろう太さ、全てが今入れているデイルドとは比べ物にならない。

(す、凄い……………)

女は殆ど無意識に、極上のチンポに口づけしていた。これに逆らうなんて有り得な

い。亀頭に数回キス。続いて竿全体を丁寧に舐めていく。  
すると男は言った。

「そのデカイ胸でしごいてくれないか」

「はい」

言われるがままにブラウスをはだけ、フロントホックのブラを外すと、ニップルローターが男の目に晒された。

「なんだそれ？」

「二、ニップルローター、です」

普段から使っているとは言え、異性の目に晒されると猛烈な羞恥心がこみ上げてくる。だがもう遅い。男の目にシルヴィは、ドスケベな女と映っただろう。だから、それ相応の扱いになる。

男はシルヴィを押し倒し、馬乗りになった。そしてニップルローターを剥ぎ取り、ピンにはしたなく勃起している乳首を乱暴に抓る。

「あ、ダ、ンンツツツツツ」

言葉とは裏腹に、シルヴィは抵抗していなかった。乳首を抓られる快感を知っているから。しかし、次の瞬間に感じたものは違っていた。自分でやるのとは全く違う。声にならない快感が全身を貫き、胸イキして、ミルクを噴いて、体から力が抜けてしまう。す

ると男は女が無抵抗なのを良い事に、シルヴィの巨乳を弄び始めた。ガチガチのチンポを胸で挟んでパイズリして、顔射して、戯れに乳首を掴ってミルクを噴かせ、またパイズリする。

そうして暫くすると、男は女の肉壺に入っているデイルドに手を伸ばした。馬乗りされてる女は何も出来ない。只々一方的にデイルドをズゴズコされ、押し上げられる。が、男は途中でデイルドを引き抜き、愛液で濡れたそれを見ながら言った。

「小さいな。なあ、もっと大きいのを入れたくはないか」

パイズリしていたチンポが鼻先に突き出される。逞しい雄の象徴。これをブチ込まれたら、どれだけ気持ち良いだろう。目が離せない。

「ほ、欲しくなんて……」

顔を背けて、心にも無い言葉を言ってしまふ。すると男の反応は冷淡だった。

「そうか。じゃあこれまでだな。後は自分で慰める」

立ち上がり、何も未練は無いとばかりに離れようとする。

女は、気づけば懇願していた。

「ま、まって。入れて。欲しいの。疼くの。奥が疼くの。そのおっきいモノで、突いて」「ふうくん。人に頼むなら、相応の態度つてものがあるんじゃないか?」

女を見下ろす男の視線は冷淡だった。自分がゴミ虫共に向けてきたのと同じ視線。

気に入らなければ、去って行くだろう。

だから、必死に懇願する。M字開脚で股を開き、デイルドで耕され濡れ濡れになったマンコを両手の指で広げて、男に媚びるように。

「わ、私の卑しいマンコに、貴方の強いチンポを入れて下さい。突っ込んで下さい。奥まで突いて、ズゴズゴして下さい」

すると男はニヤリと笑って、シルヴィの両足の間に入ってきた。膝立ちになって女の腰を掴み、引き寄せる。だが入れてくれない。その前に反り返った逞しいチンポが女の腹に乗せられ、どこまで届くのかを見せつけてくる。

それだけで、子宮がキュツと疼いてしまった。アレで奥を蹂躪される。考えただけでいきそうになる。しかし男は意地悪だった。大きさを、逞しさを見せつけ、快楽を想像させておきながら、ゆっくりとしか入れてくれない。いや、乱暴にされたら壊れてしまう。淫貝はミチミチに押し開かれ、肉壺は余すところなく極太の竿で擦り上げられ、子宮の入り口が小突かれる。極僅かな小さいピストンですら、漏れ出る声を押さえられない。声を押さえようと両手で口を押さえる。

だが男はそれを許さない。女の両手を掴み、退け、押さえ付け、奥をチンポでトントんと小突きながら言う。

「さて入れてやったぞ。後は、どうして欲しいんだ？ もう一回言ってくれないか」

一度懇願した女の精神は、一秒と持たなかった。

「その遅いおチンポで、私のおマンコを耕して下さい。壊れるくらいに、強く。中でも、中出しでも良いですから」

男はズンツと腰を打ち付け、女に訂正させた。

「中出しでも良いから？ 中に出して下さい、だろ」

「は、はい。中に出して下さい。貴方のザーメンで、私の子宮を満たして下さい」

「本当にそう思ってるか？」

男は腰をグリグリと動かしながら、女を責める。

「ほ、んとう、ンンツ、アンツ、ハア、ですう」

力強い雄の熱を子宮に感じ、意識が溶けていく。

「ならお前は、このドスケベな体を何時でも何処でも俺に差し出して、性処理する雌奴隷だ。そして俺の意向を最優先して、これから先ずっと、俺に誠心誠意仕えるんだ。いいな」

「はい。そう、ですう。私は、貴方の雌奴隷ですう」

女の宣言と同時に、子宮の真上に紋様が刻まれた。エロファンタジーが好きな者なら淫紋と言っただろう。これは現実世界の肉体に刻まれたモノではなく、彼女の精神に刻まれた枷だった。これがある限り、彼女はもう逆らえない。逆らおうという気すら起き

ない。表層意識がどれだけ反抗的な態度を取ろうとも、深層心理が適当な理由をこじ付け、最終的には従ってしまう。

女を本当の意味で雌奴隷に墮とす悪魔のような枷だ。しかし束に良心の呵責など無かった。こいつがやってきた事を考えれば、相当に温い温情的な処置だろう。

こうして亡国機業の「元」最高幹部の一人、シルヴィ・ラーシアは深層心理に強烈な擦り込みをされ、忠実な雌奴隷へと墮ちていったのだった。



そして調教は、淫紋を刻んで終わりでは無かった。むしろここからが本番だ。より完璧に定着させる為に、彼女は電脳世界で繰り返し犯され続けた。男の姿はいつしか晶の姿になり、何時でも、何処でも、晶に奉仕するのが当然と認識するように、深層心理が作り替えられていく。しかし表層意識の反抗心は残されていた。理由？ その方が面白そうだからだ。

だからシルヴィは、今日も電脳世界で奉仕させられている。イヤイヤだ。仕方なくだ。相手は強者だから仕方がない。世界最強の単体戦力に挑んだところで勝てる訳がない。だから今はチャンスを窺う為に従ってるだけ。

フェラチオするのも、パイズリするのも、隙を窺う為だ。でも中々隙を見せないから、仕方なくセックスもする。騎乗位で極太チンポを受け入れたり、種付けプレスで肉壺を耕されたり、バックから獣のように犯されたり、それも全部仕方がないこと。

決して気持ち良いからじゃない。

だから今日は、別のシチュエーションを試してみよう。

「あ、あの……………。ご主人様。どうか、搾って下さい」

とあるホテルのロイヤルスイート。大事なご報告の為にお越しいただき、必要な報告を終えたところで、ブラのラインが見えるほど薄いブラウスの胸元をはだける。そのままフロントホックのブラも外し、ニップルローターも外す。下から覗くのは、勃起しきつたいやらしい乳首だ。

「自分でやれば良いんじゃないか?」

相変わらず素っ気ない。隙も無い。

「ご主人様にしてもらうのが、良いんです」

隙を窺うため強引に、ソファに座るご主人様の膝の上に座る。その際、突っ込んだまままだたいたデイルドが下から押されてイッてしまう。潮まで噴いてご主人様の膝を汚してしまった。

「あ、……………これは、そのご主人様に、何時でも使って頂きたくて」



苦しい言い訳だと思いつつ誤魔化す為に立ち上がり、僅かに屈んだだけでシヨーツが見えそうな超ミニスカートをめくり、お尻を突き出す。肉壺に突き刺さったデイルドが男の前に晒される。シヨーツは愛液を吸って既にぐっしよりだ。

この後、シルヴィ・ラーシアは一日中ご主人様に犯され続けた。明日も、明後日も、場を変え、時を変え、下着を変え、衣類を変え、小道具を変え、ありとあらゆるシチュエーションで犯され続けた。

そして彼女の実験結果は他の最高幹部と最側近達にも応用され、誠心誠意仕える忠実な雌奴隷達が誕生したのだった。

## 第23話 薙原晶の性活 その2 (第192話以降)

とある週の土曜日。

言わずと知れたハーレムの主、薙原晶の朝はセックスから始まる。

ガチガチに勃起している朝立ちチンポを、束がフェラチオしながらオナニーして、濡れ濡れになった肉壺で目覚まし代わりに扱いてくれるのだ。そうして目覚めたら、自分の女が巨乳を揺らして自分の上で腰を振っている。これでいきり立たない男はいないだろう。束の腰をしつかりと掴んで、「おはよう」と目覚めの挨拶をしながら腰を突き上げて、奥に目覚めの一発を放つてやる。何も我慢なんてしなくて良い。むしろ外出しながらしたら不機嫌になってしまう。だからチンポを奥に突っ込んで、好き放題に突き上げて中出しだ。

1発、2発、まだ足りない。束みたいな良い女が求めてくれるなら、応えるのが男だろう。チンポを肉壺にブツ刺したまま体を起こして正常位でピストンしていく。ここでも腰をガツチリ掴んで、奥までしつかり耕してやる。艶やかな表情がとてつもなくそる。目の前で揺れる巨乳が堪らない。だから突っ込んだまま彼女に抱きつき、デー

プキスで唇を貪りながら乳房を揉んで乳首を抓って弄ぶ。

艶っぽい声が耳に心地良い。もつともつと聞いていたい。幸い今日は休日仕事は休み。何度でも、幾らでも束を貪って、イかせて、味わう事ができる。ピストンしながら射精して、女の大事な部分を汚してマーキングして、それでも足りないと言わんとチンポで肉壺を執拗に擦り上げ、奥を責め続ける。

「も、う。晶。朝から激しい」

「お前を抱くのには、大人しくなんて出来る訳ないだろ」

「んっ、嬉しい」

束が正常位でチンポをブツ刺されたまま、両手両脚を使って晶に抱きつく。そして耳元で囁かれる。

「もつと、奥に出して。私は晶のものなんだから、好きだけ出して、ね」

外出しなんてさせないとばかりに、両脚が晶の腰に絡められ、チンポを奥へと迎え入れていく。そして亀頭が奥に届くと、束の腰がピクンと撥ねて、小さな艶声が漏れた。何もかも色が色っぽくて、堪らない。チンポに力が入る。腰を押し付け、ネットリとグリグリ動かし奥を虐めてやる。途中で潮を吹いてイッたみたいだが、止めてなんてやらない。今度は繋がったまま持ち上げて駆弁スタイルだ。女は一方的に責められるしかないスタイルで、束は晶に抱きつく事しかできない。抱きついて、胸を押し付け、キス

しながら下から突き上げられる。

巷では聖母とすら言われている束が、男に成す術も無く責められ、イカされ、蕩け顔を晒している。晶だけが見れる雌の顔だ。その事実が、どこまでも晶を昂らせる。希望通りに中出しして、突いて、中出しして、執拗にマーキングして肉壺を耕して、晶の女だと体に刻んでいく。

でも、まだ終わらない。晶は大好きな種付けプレスの体位で、更に犯していく。上からチンポを肉壺に捻じ込み、グリグリして、ピストンして、射精して、そうして何度も何度も犯してイかせた後、ようやくチンポが引き抜かれた。

しかし、これで終わりではない。晶は何度射精しても衰えないガチガチのチンポを、横たわる束の眼前に突き出した。

すると束は、何も言わず愛液と精液でドロドロになったチンポを舐め始めた。自身の舌で丹念に舐めて、綺麗にしていく。それが作法だと言わんばかりに、聖母とすら言われている女がチンポに奉仕している。そして束の奉仕は、綺麗にしただけで終わりではなかった。起き上がり、晶の前に四つん這いになってフェラチオを続け、晶の精液を搾り取ろうとしてくる。口全体を使って奉仕しながら、束が言う。

「ねえ。飲ませて。晶の精液」

上目遣いの媚びた表情。晶だけが知る雌の顔。返答は行動だった。チンポを口の中

に突っ込み頭を押さえて、望み通りに射精してやる。束は大量のザーメンを、何も言わずに飲み干していく。そして束はまたチンポを舐め始め、膝立ちになつて鈴口にキスして、今度はパイズリフェラで晶への奉仕を続けていく。

エロボディを使った濃厚な奉仕に、またブチ込みたくなつた晶は、束を四つん這いにしてバツクから責め始めた。でかい尻を驚掴みにして、またピストンしていく。途中で後ろから乳房を揉み、乳首をグリグリと弄つて、束という極上の女を存分に堪能していく。

そうしてモーニングセックスを終えた晶は、この後朝食を用意している裸エプロンの束をもう一回食つて、一緒に浴びたシャワーで更に食つた後、外出していったのだった。



次に訪れたのは、地下上層階にある更識家の新本邸だ。

更識家の当主でもある晶が行くと、楯無と簪、そして使用人が揃つて出迎えてくれた。

「お帰りなさい」

「晶さん。お帰りなさい」

楯無と簪の言葉に続いて、使用人達が一斉に頭を下げる。

晶は楽にするように言ってから告げた。

「昼はこちらで食べるから、準備しといてくれ」

「分かったわ。皆、お願いね」

楯無の言葉に使用人達が肯く。

そして晶は当主専用の執務室で仕事を片付けた後、楯無と簪を呼んだ。

理由？ 勿論美味しく頂く為だ。更識家の全ては晶のものなのだ。更識姉妹も、使用

人も例外ではない。何より本人達が望んでいる事でもある。だから遠慮なく、だ。

艶やかな着物姿で訪れた2人を両手に抱き、まずは着物上から胸を揉み、するりと胸元から手を入れる。

すると――。

「嬉しいな。準備してくれていたのか？」

肯いた2人が着物の下に身に着けていたブラは、乳首の部分が開いている所謂エロ下着だった。遠慮なくコリコリ弄ってやると、すぐに自己主張してきたので、もつと弄ってやる。気持ち良さそうにしている表情が良い。そんな2人に、晶は言った。

「下は、どんなのなんだ？」

すると姉妹は揃って着物の裾を捲って見せてくれた。女性器丸見えのオーブン下着で、色は2人の髪と同じ薄い水色だ。

晶は2人の淫貝に指を沿わせた後、肉壺を愛撫し始めた。初めは浅く、徐々に深く。指を一本二本と増やしていくと、すぐに愛液が流れ出てきた。手がベトベトになつていく。2人に交互にキスしながら、晶は思う。今日はどうやって犯してやろうか？　すると2人が晶のズボンのチャックを降ろして、チンポを出して指で愛撫してきた。早くというサインだ。

ここで晶は考えるのをやめた。2人とも晶のもので、どう犯すにせよノックダウンするまで犯し尽くすのだ。だから気の向くままに犯していこう。まずは着衣プレイで、着物を着たままだ。

立ったまま楯無の片足を上げさせて、まずは体面立位だ。女性器の部分が開いている下着だから、ズラす手間も無い。反り返ったチンポで肉壺を掻き分け、鈴口で奥にキスして、そのままグリグリと押し付けてネットリと虐めながら、ディープキスで唇も犯していく。空いている片手で簪の肉壺をジュポジュポしてやるのも忘れない。

楯無の腰に手を回して後ろから押さえながら、強めにズンツと突っ込んでやる。そうしてピストンを始めると、片足を上げられている楯無は倒れないように両手で晶に抱きつき、晶の唇を独占し始めた。同じ男を愛した妹がいるのに、分けてやらないとばかりに独占してディープキスだ。だが簪も、もうかつてのように姉の顔色を窺う妹ではない。ズルイとばかりに反撃に出た。姉妹丼セックスは暗黙の了解でイッたら交代なの

だ。だからさっさと姉にイッてもらおうと、姉の後ろに回って乳首とクリトリスを強めに弄び始める。女同士だから分かる絶妙な手管で姉を翻弄し、アツというまにイかせてしまう。

すると晶はチンポを抜いて、今度は簪にバツクから突っ込んだ。当主専用のデスクに両手をつかせ、綺麗なラインをした尻を掴み、獣のように激しく後ろから責め立てる。すると妹にイカされた姉が、反撃とばかりに簪の乳房とクリトリスを弄び始めた。同じ仕返しに、簪は瞬間に押し上げられ、晶に中出ししてもらおう前にイッてしまう。また交代だ。

すると晶が口を開いた。

「まったくお前らときたら。どっちも可愛がつてやるから。ちよつと待つてろ」

すると晶は楯無をまんぐり返しにして、上からチンポを捻じ込んでピストンを始めた。姉妹井でかわるがわる犯すのも良いが、男としてはしっかり肉壺を耕して、中を精液で汚してマーケティングしてやりたいのだ。だから好きなように犯す。次はお前の番だと簪に見せつけるかのように、楯無をしっかりと犯していく。極太のチンポで淫貝がピツチリと押し広げられ、肉壺が隅々まで擦り上げられ、楯無の艶やかな声が室内に響いていく。そうして楯無の子宮を白濁で汚した晶はチンポを引き抜き、簪の手を掴んで引き寄せ、軽々と持ち上げて対面駅弁スタイルで犯し始めた。無造作にチンポを濡れ濡



れの肉壺に突っ込み、好き放題に女の園を蹂躪していく。簪がイッている最中もピストンをつけて連続でイかせ、潮を吹いてもやめてやらない。そうして姉と同じように子宮を白濁で汚した晶はチンポを引き抜いて彼女を姉の近くに降ろした後、2人の眼前にガチガチに勃起したままの力強い雄のチンポを突きつけた。

「2人で綺麗にするんだ」

晶はセックスした後、ドロドロに汚れたチンポをフェラさせるのが好きだった。そして2人もそれを知っているのです、何も逆らう事無く、むしろ率先して舌を這わせ始める。美人姉妹丼のフェラだ。この光景だけでも、チンポがいきりたつて仕方がない。

2人も血管の浮き出た力強い雄の象徴を前に、股間からは新たな愛液が流れ出ていた。

「良いぞ」

愛おしそうにチンポを舐める2人の頭を撫でた後、晶は楯無を四つん這いにさせた。妹と同じように、後ろから犯したくなつたからだ。綺麗になつたチンポを突っ込み、肉付きの良い尻を掴んでピストンしていく。外出しなんて考える必要はない。どこまでも自分本位に中出して、何度でも何回でも繰り返して汚して舐めていく。子宮と言う女にとつて一番大切な部分に、誰がご主人様かを教え込んでいく。簪も同じだ。姉と同じように白濁で汚して汚し尽くして舐めていく。雄の本能を刺激してやまない艶やかな

声と表情、エロイ体をした姉妹にチンポが何度でもいきり立つ。

そうして姉妹を犯し尽くした後も、更識家でのセックスは終わらなかつた。

当主に奉仕したいという使用人がいるからだ。ぶっちゃけて言えば全員なのだが、流石に全員を相手にしていたら日が暮れてしまう。強化人間なので体力的には全く問題無いが、他にも行く所があるので日替わり当番制なのだ。

そして今日の当番は布仏家の姉妹、姉の虚と妹の本音という姉妹丼だった。

因みに原作だと姉の虚は一夏の親友と恋仲になつていたようだが、この世界では晶が色々引つ掻き回したお陰で出会っていかないようである。

カツプリング自体が成立してないので、寝取りではない。

風呂に入っていると、全裸の布仏姉妹が入ってきた。

妹の本音はIS学園在学中から何度も抱いている。学園の制服姿でも、ISスーツ姿でも、ブルマ姿でも、教室で全裸にひん剥いた事もあった。カレード社内でも犯している。だが姉の虚は、妹に比べて少なかつた。とは行っても10回や20回ではない。更識家の使用人に手を出した頃から抱えているので、本音に比べれば少ないというだけだ。しかし回数が少ないイコール経験不足という訳ではない。むしろ根が真面目な虚

は、当主とのセックスにドハマリしていた。典型的な昼は淑女、夜は娼婦な女になっていたのだ。

そして繰り返しになるが根が真面目な虚は、セックスも真面目だった。誠心誠意体の全てを使って、当主を気持ち良くしようとしてくれるのだ。更に付け加えるなら、妹の本音にもそれを求める程に真面目だった。

本音が早速と晶を横にして、騎乗位で晶のチンポを扱っている時の事だ。

「ダメよ本音。さつきから自分の気持ち良いところにはっかかり押し当ててない？ ちゃんと当主様のオチンポを、肉壺全体で扱って差し上げないと」

そう言つて虚は本音の両肩に手をかけた。

「え？ お、おねえちゃ——」

晶のチンポは普通に挿入しただけで、肉壺をピッチリ隅々まで押し広げ奥に届く程にデカイのだ。

なのに、上から押されたりしたら——。

「つつつつつつつ！！！！」

女を雌にする衝撃が子宮から脳天までを突き抜け、声にならない艶声が風呂場に響く。だが真面目な姉は、妹の肩から手を退けない。それどころか更に押し込み、耳元で囁く。

「ダメよ本音。当主様のご学友という事で自分が気持ち良いセックスをしていたのかも  
しれないけど、私達は当主様に仕えているの。だから、ね。ちゃんと全身を使ってご奉  
仕しないと」

上から押し込まれ晶のチンポが本音の奥にゴリゴリと押し付けられ、逃げ場の無い快  
楽が強制的に送り込まれる。そんな中で姉は、妹に奉仕を命じていた。

「ほら、腰を動かさなさい。お腹全体で当主様のオチンポを感じながら扱くの。できる  
でしょ」

出来る訳がない。極太のチンポが肉壺全体を満遍なくピッチリ押し広げていて、更に  
奥をゴリゴリされているのだ。ちよつとでも動いたら奉仕する前にイッてしまう。だ  
が真面目な姉は容赦なかった。

「出来ないの？ さっきまであんなに腰振ってたじゃない」

両手が本音の肩から離れる。しかし姉の指導が終わった訳ではなかった。妹に背後  
から抱きつき、肩に顎を乗せて体重を掛け、空いた両手で乳首とクリトリスを弄び始め  
る。

美人姉妹の百合百合な光景に、晶の方が我慢できなくなってきた。チンポに力が入  
り、本音を下から突き上げ始める。

「しよーちん。だめ、だめえ」

涙目でイヤイヤする姿なんて、男を誘うスパイスでしかない。

当主らしい傲慢さで騎乗位セックスを続け、下から何度も遠慮なく突き上げていく。腰をガツチリ掴んでピストンし、最奥に突っ込んだところで中出した。勿論、この男が一回の射精で終わる訳もない。精液と愛液をかき混ぜるかのようにピストンを続けながら揺れる巨乳に手を伸ばし、弄ぶ。抱き寄せて乳首を舐めて吸って甘噛みして、本音の全身を味わう。

そうして本音をノックダウンさせた晶は、真面目な虚の手をとって抱き寄せた。

「妹を虐めて、イケナイ姉だな」

「更識に連なる女として、当主様へのご奉仕を忘れてはいけません」

「されるのも良いが、今日は食い散らかしたい気分なんだ」

「では貪って下さい。この身は当主様のものです」

「そうさせてもらおう」

真面目な虚は、誘い方も真面目だった。M字開脚で淫貝を晒し、指をジユポジユポさせてオナニーして男を迎える準備をして、指で中を見せながら言うのだ。

「当主様。どうぞ。その逞しいオチンポで、私を食い散らかして下さい」

晶は遠慮なく、正常位でチンポを突っ込んだ。ついでに、少し虐めてやる。腰をガツチリ掴んでピストンして、いきそうになったところで奥に突っ込んだままで動きを止め

てやる。そして言うのだ。

「さつき本音に、お腹全体でチンポを感じながら扱くつて言つてたな。やつて見せてくれ」

「わかり、んあ、まし、た。アンツ」

チンポがピクンと動いただけで、虚の艶声が風呂に響く。いく直前なのは明らかだ。しかし真面目な虚はいきながら賢明に腰をくねらせ、更に迎え腰でチンポを啜え込み、どこまでも当主優先で奉仕しようとしてくれる。そんな姿を見せられて、晶が燃えない訳がない。虚という雌を蹂躪したくなつて、まんぐり返しにして大好きな種付けプレス。上からチンポを捻じ込み、肉壺を耕して、何度出しても濃いままの精液でマーキングしていく。何度も何度もマーキングして、まだ終わらない。駅弁スタイル、寝バック、側位、もう一回正常位、気分の赴くままに何度でも犯して、ノックダウンしたところで本音が復活したのでまた犯す。

こうして2人を犯し尽くした晶は、更に数人の使用人達を使用人用の更衣室や鍛錬用の道場で犯した後、昼食を食べて外出していったのだった。



午後はセシリアが住んでいるペントハウスにお邪魔していた。

欧州三人娘——セシリア、シャルロット、ラウラ——が集まって4Pだ。

3人を四つん這いに並べて後ろからチンポを突っ込んで肉壺比べなんて、男として辛せ過ぎるだろう。初めに突っ込んだのはセシリアだ。お上品な貴族様の仮面を剥がしてやるのが最高に興奮する。突っ込んでピストンして、いく直前で止めておねだりさせる。ゲスイ所業だが、蕩け切ったセシリアの顔を見れば止められない。中出しすると更に蕩け、普段の凛々しい貴族様の表情なんて何処にもない。一匹の雌だ。

愛液と精液でドロドロになったチンポを、今度はシャルロットにブチ込む。するとシャルロットは尻を突き出し、より深くチンポを啜え込もうとしてきた。淫靡な腰振りに思わず両手で尻を掴んでピストン。チンポを思いっきり捻じ込んで精液を吐き出し、肉壺に擦り込むかのようにチンポで擦り付けていく。

次はラウラだ。出会った時とは違い、成長した今の姿は誰もが振り返る程に美しい。整った容姿と人並な身長、豊かな胸にくびれた腰、臀部から脚部へと続くラインは異性の目を引き付けてやまない。そんな女が極太のチンポを受け入れるために自ら弄り準備していた肉壺に、遠慮なくチンポをぶち込む。それだけで、彼女は四肢から力が抜けて突っ伏してしまった。弱過ぎる。だがそれも仕方無いことだった。何故ならラウラは悪意ある遺伝子調整で乳首も乳房も淫核も淫貝も肉壺も子宮も、凡そ男が責めたが

る全ての場所がとても敏感なのだ。特に男を受け入れる女の園周辺は顕著で、セックスで抑え込まれたらもう抵抗は不可能だろう。男がちよっとピストンしただけで、今みたいに力が抜けてしまうくらいだ。こんな弱々の雌が生きていけるのか？ 不安だ。不安しかない。だからお前は俺のものとして生きろ。そんな独占欲をぶつけるかのように、ラウラの中に白濁を吐き出してピストンして擦り付けてマーキングして誰のものを分からせていく。

そして3人を一通り汚したら、また初めからだ。

セシリアに対面座位でチンポをぶち込んでマーキングして、シャルロットは恋人手繋ぎ正常位でねつとりと責めてマーキングして、ラウラは種付けプレスで責めてマーキングして、美女3人を思いのままに犯してまだ足りない。

こんなに良い女達を自由にできて昂らないなんて男じゃないだろう。

3人を更に数回犯して、ようやく晶は落ち着いたとばかりにベッドに横になった。キングサイズのベッド中央で大の字になっていると、右腕にセシリア、左腕にシャルロットが抱きつき、ラウラが抱きつくように上から押し掛かってくる。

「私達の社長はケダモノですわね」

「本当。ケダモノだね」

「全くだ」



セシリア、シャルロット、ラウラが順に言ってくる。否定はしない。ケダモノと言われるくらいに犯しまくってる自覚はある。というか美女3人にこんな風に抱きつかれたら、またチンポが元気になってしまう。いや、もう元気になりかけてる。一番先に氣付いたのは上に乗っているラウラだ。

「ハ、ハ、ハ。お前本当に底なしだな。ちよつとは自重しろ」

「いや無理。お前らにこんな風に抱きつかれて反応しないとか男じやないだろ」

「3人合わせてもう十なんか……ここ、こちら、ばかあ。入れようとすんな」

全く自重しない晶は、ムクムク大きくなってきたチンポを、上になっているラウラの淫具に擦り付けていた。両腕に抱きつかれているので手は使えないが、ラウラの腰が丁度良い位置にあるので、ちよつと腰を動かせば入るだろう。

腰の位置を微妙に動かして、チンポで淫具を擦り、徐々に位置を整え、

ここかな？ 両膝を立てて腰をグツと上にあげる。すると亀頭がムニツツと淫具を押し広げ、続いて竿全体が肉壁を擦り、鈴口が最奥にコツンぶつかった。奥にまで入ったらしい。

「ハ、ハのお。ケダ、ものお」

言葉では拒否しているが、表情は蕩け切っている。何より腰を浮かせてチンポを抜かないってというのは、そういう事だろう。晶はラウラがどれだけ弱々雑魚マンコなのかを

知っていないながら、そう都合よく解釈した。同時に、散々犯した後なので労わろうという嗜虐的な考えからピストンはしない。

結果としてラウラは、散々犯し抜かれて敏感になっっている元々敏感な弱々マンコに、極太のチンプを突っ込まれたまま動いてもらえないという生殺し状態にされてしまった。

もつと言つてしまえばチンプケース状態だ。

「なあラウラ。暫くこのままでいいか？」

「ば、ばかあ。どうせなら、うご、けえ。いつもみたいにズンズン動いて、イかせて。これは、んあ、辛いんだあ」

男に嬲られる一匹の雌。こんな表情見せられたら、誰だつてそう思うだろう。だから、こいつは俺のものにする。もう一度そう思っていると、セシリアとシャルロットが晶の腕を離して言った。

「イかせてあげて下さいまし。同じ女として、ラウラさんの気持ちは良く分かりますわ。私だつて晶さんのものでこんな事をされたら、懇願してしまいますもの」

「そうだよ晶。虐めちゃダメ。ちゃんと奥をズンズン突いて可愛がつてあげないと。勿論、私とセシリアにも同じ事してよね。ラウラだけ可愛がるなんて、ダメなんだからね」  
「当たり前だろう。3人一緒に抱いたなら、3人とも体力の限界まで可愛がるさ。お前

達は俺のものなんだ。イヤだって言っても手放さないし犯す」

そうして晶は再び3人と乱交を始めたのだった——で、終わりではない。こ  
こはセシリアの自宅なのだ。つまりセシリアに仕えるメイドが2人——チエルシー・  
ブランケットとエクシア・ブランケット——いるということ。これまで主従共々何回  
も抱いていたため、晶は3人をノックダウンさせた後、当然のように2人も犯してマー  
キングしていたのだった。



セシリア宅で一夜を明かした次の日。とある週の日曜日。

晶はとある場所で、2人の女性を抱いていた。

織斑千冬と山田真耶。IS学園で晶を3年間導き、その後晶がカロードに引き抜いた  
元IS学園教師だ。

連戦を終えた晶がキングサイズのベッドで大の字になっていると、左隣にいる全裸の  
真耶が口を開いた。

「今更ですけど、晶くんがこんなケダモノだなんて思ってもいませんでした。学園にい  
る時は理性的で絵にかいたような紳士だと思っていたのに」

すると右隣にいた全裸の千冬が口を開いた。

「私は知っていたがな」

真耶が聞き返した。

「誰からの情報ですか？ 織斑先生」

「もう先生ではないが、まあそれはいいか。東だ。あいつから耳が腐るくらい惚気話を聞かされていたからな。バレない限りは大目に見てやろうと思っていたよ。卒業までに誰かにバレると思ってていたが、最後まで隠し通したな」

晶が答えた。

「それはもう。情報の隠蔽には気を使いましたから。あと東も協力してくれましたし」

真耶が驚いたように尋ねる。

「博士はなんとも思っていないんですか？」

「むしろハーレム推進派筆頭です」

理由は一般人には受け入れ難いものなので、ここで言う必要は無いだろう。

晶はサラッと話題を変えた。

「でも、俺も意外でした。真耶が千冬とレスだったなんて」

「ISパイロットとか、IS学園の教師をしていたら、色々と幻滅する事もあるんです。だから女同士って珍しくないんですよ」

真耶の返答に、晶は背景を理解した。確かにすり寄ってくる男が多くて、色々と幻滅もしただろう。で、女同士に走ると。非常に分かり易い話だ。

「あれ？　なら俺は？」

「本気で言ってるんですか？　晶くん以上の優良物件なんていないでしょう。正直、教師じゃなければと何度思ったか分かりません」

「でも最後まで教師であつてくれた。本当に感謝してます」

「その恩師に、晶くんは手を出したんですよ。ケダモノです。ねえ、織斑先生」

「全くだ。今度からお前の事はケダモノと呼んでやろう。で、ついでだから聞くが、お前結局何人のクラスメイトに手を出したんだ？」

織斑千冬は精々4〜5人程度だと思つていたが……………。

「あく、そうですよね。驚かないで下さいね」

素直に答えようと思つて人数を思い浮かべ、30を超えた辺りで今更ながらにヤバイと思つた。晶の中で、2人は真つ当な教師なのだ。流石に引かれるだろう。だが抱いた相手である以上、こんな事で秘密は作りたくない。なので答えられる限りだが、素直に答える。

「クラスメイトは、殆ど手を出しました。ぶっちゃけ言えば、箒と鈴と一夏以外全員。あと詳細は言えませんが、色々協力してくれているところがあるのでそこも沢山。会社で

もまあ、それなりに………」

千冬のグーが飛んできて、晶の脳天を打つ。

勿論本気じゃないが、痛い。

「束から色々聞いてはいたが、盛ってたんじゃなくて本当だったのか。お前、ちゃんと責任取れるんだろうな？」

「最初から最後まで取る気ですよ。抱いた女が生活に困る様なんてみたくない」

「お前みたいなのが悪女に引つ掛かったら大変な事になるな」

「俺、その辺りはハッキリしてますよ。筆取り取ろうとしてくる相手には、それなりの対処をしますから」

この返答に千冬は安心するが、同時に実行される事は無いだろうな、と思った。束の惚気話を聞いているだけに、もし害虫な悪女がいたら、あいつが先に動くだろうという確信があつたからだ。

「なるほどな。———で、お前この手は何なんだ？」

晶の手が、これ以上ないくらい堂々と千冬と真耶の胸を揉んでいた。時折乳首をコリコリしているあたり、完全にエロモードである。

「揉み心地が良いので、ついつい手が伸びちゃうんです」

「ふん。まあいい。先程は少々後れをとつたが、今度はそうはいかない。真耶と一緒に

責めて干物にしてやる」

「できるなら、どうぞで」

こうして晶は教師井を堪能したのだった。

因みに結果は、後日束が千冬の肩を叩きながら、「残念だったね、ちーちゃん。今度また挑めば良いと思うよ」、と泥沼に突き落としていた辺りから紳士諸君は分かるだろう。

## 第24話 悪の女幹部を躡けちやおう!! その2

非合法のISパイロット、シルヴィ・ラーシア元ネタは「コミックアンリアル vol. 2 Cover GAL サキュバス・シルヴィア designed by モグダン」は亡国機業の「元」最高幹部の1人だ。

美人系の整った容姿に切れ長な瞳、腰まである甘栗色の髪、大きいながらも形の整った胸と尻に均整の取れた四肢という、男なら誰しも欲望を抱かずにはいられない容姿とスタイルの持ち主だ。

そして最高幹部だった頃は、ISという絶対的な暴力と亡国機業という組織力を背景に、この世の春を謳歌していた。しかし、たった1回の敗北で全てを奪われてしまった。

ISという絶対的な暴力は自身を監視する絶対の首輪となり、亡国機業という組織力からは切り離されてしまった。囚われの身になってしまった人間を、最高幹部会が受け入れる事は無いだろう。戻ったところで足元を見られるのが関の山だ。

だがそれよりも問題なのは――

「んっ、はあ……………あんっ」



薙原晶から仕事を命じられて放り出されて以降、体が不自然なまでに疼いて仕方がないのだ。気を失っている最中に何か処置をされたに違いない。何か対策を考えなくては……。そう思うが、手は欲望に正直だった。ジンジンと疼く両乳首を指でコリコリと弄り、抓り、ギユツと虐めてしまう。ダメと思いつつも、気持ち良くて止められない。(声、声を抑えないと)

コリコリグニグニ、以前よりも明らかに感じている。気持ち良くて仕方がない。今日はまだもう2回目なのに。此処はとある都市の公衆便所。声を出したら見知らぬ誰かに聞かれてしまう。だけど手が止められない。ダメと思う程にギユツと抓って虐めてしまう。

(ダメなのがいい)

公衆便所の中なのに、彼女の薄手の白いブラウスをはだけられていた。形の良い胸と勃起した乳首が、個室とはいえ公共の空間で露出されている。普通ならこんな事は絶対にしていない。しないのだが、疼きはそんな理性を押し流す程に強かった。ジンジンと疼いて、胸が張ってしまう。

「ん、ンンッ、ンンンンンンッ!!」

絶頂して出そうになる大きな声を、辛うじて呑み込む。

だが同時に、ぶしやああああと妊娠もしていないのに、母乳が勢いよく噴き出してし

まった。

(あああ、ダメエ。気持ち良いの……………)

次いで、手が自然と女の園へと伸びていく。胸の疼きは収まったが、今度は淫核が、肉壺が疼いているのだ。

(ダメ。こんなところで。でも、ちよつとだけ。ちよつとだけ。こんなに昂っていたら、外なんて歩けないもの)

弱々しい言い訳と共に、股下数センチという黒い超ミニスカートの裾をめくり、ハイレグパンティの股布を除け、肉壺に指を突っ込む。既にヌレヌレのそこは難なく一本目の指を受け入れてしまう。指を「く」の字に曲げ、中を刺激していく。自分自身だからこそ良く分かるGスポットを的確に擦れば、もう立っていられなかった。便器に座り、もつと愛撫し易いように大股開きになってしまう。気づけば二本目の指を入れて肉壺を掻き回していた。誰がどう見ても完全に本気オナニーだ。クチャクチャとした音が響き、二度三度と潮を噴き出してしまう。

そうしてはしたなく性欲を処理して、ようやく彼女の疼きは収まった。だが、注意しなくてはならない。乳首も胸も淫核も肉壺も、後始末でちよつと擦れただけでも疼きが再燃してしまう程に敏感なのだ。

(ゆっくり、ゆっくり、そう慎重に……………)

ハンカチでゆつくりと嘔き出した母乳で濡れている乳房を拭いていく。  
「んっ」

乳首がちよつと強く擦れただけで声が漏れてしまった。だが疼きを何とか抑え込んで、今度は潮で濡れた股間を拭いていく。

「んっ、はあ、アーンッ」

艶のある吐息を漏らしながら、どうにか疼きが強くなる前に拭き終える。最近はずつとこうなのだ。一日に何回もオナニーしないと疼いて疼いて仕方がない。男娼を買う事も考えたが、これほど敏感な体にチンポを突っ込まれて抗える自信は無かった。多分奥をゴリゴリされながら命令されたら、何でも言う事を聞く都合の良い雌犬に堕ちてしまふ。そんな予感があつたからだ。



後日、シルヴィはニップルローターを買ってしまった。余りにも乳首が疼いて乳首オナニーの回数が増えてしまったので、思い切つて使つてみる事にしたのだ。張り付けるタイプなのでブラの下にも着ける事ができる。

(ん、これ、いいわ)

ヴヴヴヴヴという小さな機械音と共に、はたなく勃起した乳首を延々となぶつてくれる。それがたまらなく気持ち良い。しかも最近の物は多機能で、振動するだけじゃない。弱く抓る、強く抓る、そんな事もリモコンで自由自在だった。だから一々胸をはだけて弄らなくも良い。なんて便利なのだろうか。お陰で乳首はいつもピンピンで敏感になってしまい、ブラに擦れただけでも感じてしまう弱々乳首になっていたが、いつもニツプルローターで覆っていけば問題無い。なんで今まで使うのを躊躇していたのだろうか？ そんな思いまである。

——本人は気付いていなかった。

———— 電脳世界で調教された時と同じ思考をしている事に。

でも胸が張るのは変わらないので、一日何回かは母乳を絞らないといけない。面倒と言えば面倒だが、その時はニツプルローターを外して思いつき弄って気持ち良くなれると思えば、そう面倒な事でもなかった。自分で乳房を揉んで感じて、乳首でイッて、母乳を出してイッて、エロくてはしたない真似をしているという自覚はあるが、気持ち良くて止められないのだ。

そして、今日も。

「ンンッ、アンッ。もうう。外出前に、シテきたのにい」

外出時間が、予定より長引いてしまった。そうしたら、もうダメだ。乳房が、乳首が

疼いて仕方がない。だから家代わりに使っているホテルに戻る前に、人目につかない公衆便所に入ってしまった。なけなしの理性を振り絞って専用機のセンサー系を限定起動。盗聴器や盗撮器の類がないかをチェック。問題無し。

結果が出ると同時に、手が動いていた。ブラウスの前を開けフロントホックのブラを外し、ニップルローターを剥がしてセルフ調教で弱々になってしまった勃起乳首をギョツと強く抓る。

「ンンンンンンッ!!」

たったそれだけでイッてしまった。母乳がぶしやああと吹き出て、公衆便所という狭い個室の壁を汚す。そして気持ち良すぎる快楽は、手を自然と動かした。何度も何度も乳首を抓り、虐め、より強い快楽を貪ろうとしてしまう。

なけなしの理性が公共空間にいるという警告を発したお陰で、大きな声は出していない。だが手洗いに来た者がいたなら、女性特有の甘い声に気付いただろう。しかし幸いな事に、手洗いに来た者はいなかった。お陰でシルヴィは公衆便所という狭い個室で、今日もまた本気オナニーをしてしまったのだった。細く長く綺麗な指で乳首を弄り、便座に座った大股開きで肉壺をジユポジユポしてGスポットを弄り、潮を吹き、何度も何度も快楽の波に吞まれてしまう。

そんなポーズとした頭で、彼女は思った。

(乳首だけじゃダメ。奥に、ズンツて欲しい。指じゃ届かない奥に、ズンツて。でも、男娼はダメ。組み伏せられたら——)

抗える自信がない。女の部分を苛め抜かれて屈服させられてしまう。何でも言う事を聞く都合の良い雌犬に堕ちてしまう。一瞬、そんな未来を甘美なものに感じてしまった。

(わ、私ったら、何を考えて)

彼女はそんな妄想を、頭を振って振り払う。

だが女の園は疼いたままだ。だから——。



シルヴィはデイルドを買ってしまった。しかも数種類。

男に困った事の無い彼女には今まで無用の長物だったが、疼きを止めるには必要。そう言い聞かせて。

ホテルの自室。シャワールームで早速と使ってみる。

一つ目はノーマルな電動デイルドだ。ローションを付けて、ゆつくりと肉壺へと挿入していく。

「あ、ソソツ、はあ。中々、大きいわね」

サイズはノーマルとあったが、シルヴィの肉壺にとつては少し大きめだった。そしてこれは本人の知らない事だが、気を失っている最中に行われた処置のせいだった。締りが良い上に極めて感じやすいという、雌奴隷に相応しい弱々な雑魚マンコに改造されていたのだ。だからノーマルサイズなデイルドでも、肉壁の隅々までゴリゴリと擦られていくように感じてしまう。

(これで、スイツチなんて入れたら……)

恐る恐るスイツチON。

ヴヴヴヴヴヴという弱い振動が、弱々な雑魚マンコに襲いかかる。だが耐えられない程じゃない。もう少し奥に入れてみよう。そうして振動するデイルドが、もう少し、もう少しと奥へと入れられ、ついに最奥に触れた。瞬間、彼女の意識は飛びそうになった。潮を拭き、膝から力が抜けそうになってしまう。

「あ、あへえ」

変な言葉が漏れた。気持ち良い。気持ち良すぎる。ダメだ。これ以上は拙い。強過ぎる快樂への恐怖から、理性がそんな警告を発する。が、無駄だった。体が自然と動いてしまう。座つて、鑑の前で大腿開き。振動するデイルドをゆつくりと出し入れし、恐る恐るだが確実に、奥をコンコンと叩く。言い表せない程の快感が脳天まで突き抜けて

いく。

「あ、ん、ああん。イイ、いいのお、ンンッ、あん」

どんどん大胆に、リズムカルに。ジュポジュポ自らの肉壺を虐め、奥を小突き、何度も潮を拭き、快樂の波に吞まれながら乳首も弄り、母乳を垂れ流しながら更にイッて、艶やかな声が浴室に響いていく。

もう止められなかった。子宮に響く衝撃が堪らなく気持ち良い。だから、次のデイルドを試してみる。床に固定するタイプで、天井に向かってそそり立つ一物だ。勿論電動タイプで、ブブブブツツといやらしく振動している。そんなデイルドに跨り、腰を下ろして自らの肉壺に導いていく。がに股でデイルドを啜え込む姿は卑猥な雌そのものだ。

「アンツ、イイ、いいのお。これも、いいのお」

気づけば夢中で腰を振っていた。先程のデイルドとは違うところが擦れて、刺激されて、振動で虐められて、とても気持ち良い。肉壺がゴリゴリ擦られ、疑似騎乗位みたいで気持ち良い。堪らない。固定した電動デイルドは、逞しく力強い。Gスポットに当たるように何度も何度も腰を振り、疑似セックスの感覚で快樂を貪っていく。

「ダメ、ダメなのに。こんなあ、アンツ」

鑑に映る自らの浅ましい姿が、とてつもなく淫靡だ。肉壺に突き刺さるデイルドが、腰を振る姿が、垂れ流される愛液が、勃起した乳首と淫核が、感じて悦んでいる顔が、全



てが犯されたがっている雌犬だと訴えていた。

(違う。違う。これは、気持ち良いだけ。そう、気持ち良いからよ。終わったら、いつも  
の私)

そう思っても、浅ましく振る腰は止まらない。固定されているデイルドを奥まで啜え込むために深く腰を降ろしてグリグリと動かし、快楽を貪る姿が雌犬でなくて何だと言  
うのだ。

止めようと思っても止められない。そんなジレンマも、すぐに快楽に流されていっ  
た。どうせ誰も見ていないのだ。浅ましく快楽を貪ったところで、自分以外は誰も知ら  
ない。なら良いではないか。

彼女は知らない。首輪がどれほど絶対的な監視装置なのかを。

そうしてそそり立つデイルドで気持ち良くされてしまったシルヴィは、「もう一回だ  
け」「もう一回だけ」と自分に言い訳しながら何度も快楽を貪り、気付いた時には遅かつ  
た。余りに感じ過ぎて、足に力が入らないのだ。そうなれば、当然――。

――ズポッ

腰がそそり立つデイルドの上に落ちて、無慈悲に振動するデイルドが肉壺の奥の奥ま  
で入ってしまう。男に責められたら一発で屈服確定の弱々雑魚マンコの、奥の奥にだ。

「あ、んんんんああああ」

!!!!!!

彼女にとって幸運だったのは、腰が落ちた衝撃でデイルドの固定が外れて倒れられた事だろう。でなければ無様な恰好で、延々とデイルドに廻られ続けたに違いない。

(ああ、すごい……………)

シャワールームの床に倒れたまま、彼女はそんな事を思っていた。肉壺に突き刺さったままのデイルドが気持ち良い。抜きたくない。でも、買って来たものはもう一つあるのだ。

快樂漬けになっっている彼女に、最後の1つを試さないという考えは無かった。だから今突き刺さっているデイルドは抜かないといけない。

四つん這いになり、片手を股間へ伸ばして、ズボツと引き抜く。肉壺の喪失感が酷い。早く突っ込みたい。でもまだだ。最後のは装着型。パンティで蓋をして落ちないようにするタイプだ。そしてこれは、今までの物よりも凶悪だった。二股のタイプで男根を挿した方は勿論肉壺に、分岐した小さい方は丁度淫核に当たるようになっていて。敏感過ぎる女の弱点を二点同時に、だ。そしてパンティで押さえているから、動いても落ちない。着けている限り、ずっと、いつでも、延々と廻られ続ける。

(どう、なつちやうのかしら?)

敏感過ぎる体にこんな物をつけたら……………理性が警告を鳴らす。しかしその警告は、賤けられた深層心理の壁に阻まれ意味を成さなかつた。

(でも……………でもお……………)

デイルドを引き抜いた肉壺の喪失感が酷い。何かを突っ込んでいたい。その思いの方が強かった。だけど焦ってはいけない。二股デイルドは装着型で、パンティで蓋をして落ちないようにしないとイケないのだ。だから先にシャワーで汗と愛液を流して、バスルームから出る。

バスタオルで体を拭いて黒いシースルーのハイレグパンティを膝上まで履く。その状態で、シルヴィは二股デイルドを己の肉壺に挿入し始めた。ゆっくり、ゆっくりと。二つのデイルドで苛め抜かれた肉壺は、それだけで悦んでいた。自然と愛液が流れ出て太ももを伝わり、床へと流れ落ちていく。

本人が意識した訳ではないが、彼女は鑑の前に立っていた。美女が己の肉壺にデイルドを入れていく様は、この上なく淫靡であった。

(も、もうちよつとで……………んっ)

丁度奥に届いたところで、デイルドが根本まで入った。同時に、二股の小さい方が丁度淫核に当たる。

そうして彼女は、黒いシースルーのハイレグパンティを上まで上げてデイルドに蓋をした。これで多少動いた程度では、もう落ちてこない。

一歩歩く。

「ンンッ」

それだけで肉壺の色々な所が擦れて、膝から力が抜けそうになった。

二歩歩く。

「アーンッ」

奥が自然と小突かれ、甘い声が出てしまう。

(これで、スイッチを入れたら……)

想像して、リモコンのスイッチを入れてしまう。

「ア、アアアアアン、これ、すごい。イイ、んんあ、ンッ、いいのお」

ヴヴヴヴヴヴという静かな機械音と共に、弱過ぎる淫核がなぶられ瞬く間に勃起していく。そしてデイルドで蓋をしている淫貝からは、愛液が徐々に滲み出てきていた。

あつという間にパンティに染みが出ていく。

(あん、んああ、ほんとうに、いい)

弱振動であるにも関わらず鑑に映る表情が瞬く間に蕩け、膝から力が抜けて四つん這いになってしまう。だが不思議と、抜こうとは思わなかった。いざとなればISの基本機能である感覚制御を使えば良い。何事も無いなら、この快感を楽しんでも良いだろう。

快楽に犯された彼女に、普段の疼きを「ISの基本機能である感覚制御で抑えればい

い」という考えは無かった。尤もあつたとしても、首輪であるISの制御は飼い主が握っているので、実行は不可能だつただろう。逆らう方法も抵抗する方法も、あらゆる可能性は初めから潰されているのだ。今の彼女に許されているのは、飼い主の役に立つ事と雌奴隷として己の全てを差し出して奉仕すること、これだけなのだ。

(コレで、もつと強くしたら……)

リモコンのスイッチを操作。振動を弱から中へ。

——耐えるなんて無理だつた。

一瞬で押し上げられ、潮を拭いてハイレグパンティがびしょ濡れだ。そしてディルドで蓋をされているはずの淫貝からは、愛液が溢れて止まらない。

(無理、こんなのむりい)

着けていられない、ではない。気持ち良すぎて外せないだ。外したくない。

いつでもどこでもずつとエッチな部分を虐めて蹴つて感じさせてくれる。どうして今までしていないかつたのだろうか？

こうしてシルヴィは、自己調教という泥沼に嵌っていったのだった。



それからシルヴィは、装着型の二股デイルドも愛用するようになっていた。

何をしていても、どう動いても、いつでも女の弱点を躡り飛ばしてくれるのがいい。

椅子に座っただけで、デイルドの底が押されて奥が小突かれる。歩くだけで肉壺の至る所が刺激される。Gスポットに当たるとものなら膝が震え、連続で当たるとものなら甘い声が漏れて達してしまふ。しかもスイッチを入れて振動させれば、いつまでもいやらしく肉壺と淫核を躡り飛ばしてくれる。気持ち良いところをずうずうつと躡り飛ばれるのだ。それが堪らなく気持ち良い。

勿論、ニップルローターも使い続けている。

そしてニップルローターを使い続けた乳首はいつもピンピンで、普通にブラを着けられなくなっていた。ちよつと擦れただけで簡単に感じて疼いてイッてしまふ。だから乳首をガードしないとイケない。でもニップレスは論外だった。外出している時に疼いてきたら、服の前を開けて自分の手で弄らないとイケない。でもニップルローターのリモコンを使えば、そのまま弄れる。だからニップルローターじゃないとダメなのだ。アレなら好きな時に好きなように乳首を虐められる。

加えて、最近は乳房も大分敏感になつてきていた。単純に揉んでいるだけでも気持ち良いのに、胸が張つて母乳出す時に揉むと、物凄く気持ち良いのだ。お陰で乳首と胸のオナニーでいく回数が増えてしまった。乳首でイッて、乳房でイッて、また乳首でいく。

兎に角気持ち良い。

——そんなある日のこと。

深い胸の谷間を強調する白いブラウスと黒い超ミニなスカートといういやらしい姿で、自宅代わりのホテルに帰って来たシルヴィは、またオナニーを始めていた。

鑑の前でM字開脚の大股開きになり、胸を揉みながらティルドを自らの肉壺に突っ込む。

亡国機業の“元”最高幹部の1人とは思えない淫らな姿だが、今の本人には関係無い。どうせ誰も見ていないのだ。好きなように快楽を食れる。

そう思った時に、声をかけられた。

「ふうくん。ここまで堕ちたんだ。いいざまね」

現れたのは“元”亡国機業のISパイロットでありながら、表の世界で活躍する有名な1人。

世界最強の単体戦力の忠実なる獵犬の1人。

彼女の名はネージュ・フリーウェイ。背中を艶やかに流れるストレートブロンドを持ち、蒼い瞳に清楚とも言える顔立ちの女性。気品ある令嬢とも言える雰囲気を持つが、亡国機業の“元”最高幹部であるシルヴィは知っていた。

こいつの外見に騙されてはいけない。

——ネージュ・フリーウェイの私服イラスト——

以前Artificial Line様より頂いたものです。

ネージュが登場したので再び使わせて頂きました。

ありがとうございます!!

因みに今話での服装は脳内補完でお願いします。

なおpixiv側にもありますので、アドレスは←

https://www.pixiv.net/artworks/7901952

5

——ネージュ・フリーウェイの私服イラスト——

しかし女として、痴態を見られたという羞恥心はどうしようもなかった。

顔面が瞬く間に紅潮していく。だがどうしようもない。

セルフ調教でビンビンになった乳首を自ら虐め、母乳を垂れ流し、M字開脚という大

股開きでデイルドを肉壺に突っ込んでいるという卑猥な姿だ。

シルヴィイが何かを言う前に、ネージュが言った。

「あら、続けても良いのよ。〃元〃最高幹部様のそんな姿なんて、中々見れないもの」

視線が雄弁に物語っていた。この場において、どちらが強者でどちらが弱者か。しか



シルヴィは認められなかった。薙原晶からは駒扱いされているが、認めたくはない。かつては自分が絶対的な強者で、こいつはちよつと使える程度の末端だったのだ。こんな生意気な態度は断じて認められない。

無造作に近づいて来るネージュを、シルヴィはISの緊急展開によつて生じる衝撃で弾き飛ばしてやろうと思つた。

——間合いに入つた。

——今!!

思考トリガーで専用機を起動………が、何も起きない。

「え?」

事態が呑み込めないシルヴィに、近づいたネージュはつま先でディルドを肉壺にグリグリと押し込みながら言つてやつた。

「馬鹿ねえ。私のご主人様が、そんな事を許すと思うの? 今日此処に行きたいって言つたら、貴女のISへのアクセス権をくれたわ無論限定的なものだが、彼女の目的には十分であつた。」

この時のシルヴィの絶望はどれほどのものだつただろうか? 自身もISパイロットであるからこそ、絶対に逆転の目は無いと分かる。だからだろうか? 彼女はネージュの精神を僅かばかりでも傷つけてやりたいと口を開いていた。

つま先でディルドをグリグリ突っ込まれているという卑猥な格好のまま。

「んっ、あ、はあ、ふ、ふん。あの男を、ンンッ、ご主人様なんて言っているの？ あんなの、アンツ、暴力しか取り柄の、んあ、無い、只の猿じゃない。どうせ、ンンッ、んあ、貴女も使い捨て、アンツ、られて終わりよ」

するとネージュはニヤリと笑った。

「何を言っているの？ 使い捨てる？ 当たり前じゃない。私はご主人様の猟犬であり、愛犬であり、奴隷なの。この首輪がその証。私があの方にとつて使えない犬になった時、あの方の足を引っ張るような事態になった時は、初めから殺して下さいと言っているわ」

「この、狂人」

「そうかしら？ あの方に直接声をかけてもらえて、直接仕事をもらえて、最強の装備を与えてもらえて、直接愛してもらえるのよ。こんなに素晴らしい事は無いわ。沢山の人が望むであろう全てを手に入れたの。でも、貴女はどうかしら？ 亡国機業の“元”最高幹部さん」

駒として与えられた仕事をこなし、ホテル代わりの自宅に帰ればオナニーばかり。かつて悪の栄華を極めた女とは思えない程に無様な今だった。

そうして本人に現実を叩きつけたところで、ネージュは動いた。

M字開脚の大股開きでデイルドを突っ込んでいる無様な女の背後に回り、後ろからデイルドを掴みズゴズコと乱暴にピストンし、ついでに敏感で弱々な乳首も虐めながら耳元で囁いてやる。

「まあ、私の事はどうでも良いわ。でも、ご主人様をあの男呼ばわり？　只の猿？　ちよつと許せないわねえ」

スイッチON。振動するデイルドを奥まで突っ込み、押し当てたままグリグリと虐めてやる。出来上がっているシルヴィの体は、僅かばかりも耐えられなかった。ぶしやああと潮を噴いてしまう。だがネージュの責めは続く。腰がビクビク震えても、何回潮を噴いても、押し当てるのを止めない。その途中で胸も弄られていた。空いている片手が牛の乳を絞るかのように乳房を弄び、次いで乳首を乱暴に抓り上げる。だがそんな痛みすら、セルフ調教された乳首は快感として受け取ってしまった。母乳が吹き出て、目の前の鑑を汚していく。

「あは、敏感ねえ。セックスしたら気持ち良いでしょうね。——あ、でも、貴女はもう無理ね。だつて普通の男にこんなエッチで弱々な女だつてバレたら、屈服させられるまで嬲られて、その後は泡風呂に沈められて金づるよね。ああ、可哀相。もう貴女、男とセックスできないんだ」

シルヴィが必死に目を背けていた事だった。この体で男に抱かれてしまえば、抵抗な

んでできない。乳首でイカされ、乳房でイカされ、淫核でイカされ、肉壺でイカされ、子宮でイカされ、チンポを突っ込まれたら跳ね返せないだろう。

だからこれから先はずっとオナニーだけ。惨めな未来だった。

——そこに、毒が盛られる。

肉壺がデイルドでズコズコされ、快楽で思考が朦朧とする中、ネージユの声が染み渡っていく。

「ご主人様の、雌奴隷になりなさいよ。駒じゃなくて、貴女の持つ全てを差し出して奉仕するの」

「すべ、て?」

「そう。全て。亡国機業の『元』最高幹部なら、亡国機業が作り上げた利権構造にも精通しているでしょ。それを壊して弱体化させて貴女のものにして、ご主人様が新しい世界を作り易いように地ならしするの。ああ、でも勘違いしちやダメよ。貴女はご主人様の仲間でも部下でもない。只の雌奴隷。卑しい雌奴隷。全てを差し出して、奉仕して、地ならしして、そうしたらこのエッチな体の疼きを鎮めてくれるかもしれないわね。――

——そしてね、ご主人様の夜って凄いのよ。夜に抱かれたら、本当に朝までノンストップで可愛がってくれるの。おっきいオチンポが中全体を擦って、奥をガンガン突かれて、グリグリされて、子宮が濡れちやうくらい中出しされて、ダメって言っても止

めてくれないの。何度でも、何回でも、逞しい雄が蹂躪してくれるのよ」

デイルドをもう一度奥まで突っ込み、グリグリと押し付けながらネージュは言った。「こんな玩具じゃ味わえない天上の快楽よ」

束によつて深層心理という精神の根幹を調教された上で、セルフ調教で快楽漬けになつてしまつたシルヴィに抗う術は無かつた。

心の奥底ではもう認めてしまつていたのだ。こんなエッチな体では、もう誰かに飼われないと生きていけない。だから彼女は肯いていた。

「なります。雌奴隷に、なります」

「誰の雌奴隷になるの?」

「薙原、晶です」

「減点。様をつけなさい」

シルヴィの乳首が強く抓られる。だがそれすら気持ち良く、指を噛んで甘い声を抑える。

「ほら、早く言いなさい。それとも、もっと虐めてほしくて言わないの?」

デイルドが乱暴にズコズコされ、淫靡な衝撃が子宮から脳天へと突き抜けていく。言う、言うから。でも強制的に送り込まれる快楽が言わせてくれない。出てくるのは甘い声ばかり。挙句腰が自然と迎え腰になつて、デイルドをより深く啜え込もうとしてしま

う。

「ふうくん。『元』最高幹部様には、先に指導が必要なようね」

こうしてシルヴィ・ラーシアは、雌奴隷としての心得を先輩奴隷に叩き込まれていったのだった。

◇

そうして、幾つかの季節が巡った頃。

シルヴィ・ラーシアは身も心も立派な雌奴隷になっていた。ご主人様の命令をこなしつつ、更に貢ぐために持てる全て知り得る全てを使って、亡国機業の資産を壊して奪って乗っ取っていったのだ。いや、乗っ取っただけではない。ご主人様が、その手足のカードが動き易いように状況を先読みして地ならしして、ご主人様の面倒事が1つでも減るように動いていく。

詳細な指示など必要無い。最高幹部であった時と同じように、どんな選択が一番良いかを考えるだけ。ただ優先順位が違う。昔は自分の利益が最優先だったが、今はご主人様の利益が最優先というだけ。ただし、お金を貢ぐのはダメなのだ。何故ならカードとは無関係という扱いだから。下手にお金を貢いだらお金の流れから、噂話が大好きな

俗物共に気取られてしまう。なので貢ぐのは「状況」だ。時々で世の中に介入して、カロードが動き易い「状況」を作っていく。世論誘導だったり未来の見えていない俗物政治家の失脚だったり色々あるが、そういうことだ。勿論、損失が出る事だつてある。しかしそれが何だと言うのだ。ご主人様の役に立てるなら、資産が吹き飛んでも問題無い。カロードとは無関係なのだから、どれだけ損失が出てもご主人様の懐は痛まない。最悪無一文になったとしても、私は不要物を排除するゴミ処理係として使ってもらえれば良いのだから。

—— 閑話休題。

シルヴィ・ラーシアとはあるホテルのロイヤルスイートで、ソファに座る晶の前に跪いていた。

ご主人様の立場を傷つけないように、ある程度の外聞を考慮しなければいけない外とは違って、この場にいるのは2人だけなのだ。ならばご主人様の前で立ったままなど有り得ない。跪いて頭を垂れるのが、雌奴隷として正しい姿だろう。

(このドレスで、大丈夫かしら?)

来る前に何度もチェックしたが、どうしても思ってしまう。

今日の服装は、深い胸の谷間が強調される黒いナイトドレスだ。スカートにも深いスリットが入っていて、歩けば足の付け根付近まで見えてしまうデザインだ。

「ご主人様にすぐ弄ってもらえるように、突っ込んでもらえるように選んだものだ。」

勿論、ニップルローターも二股デイルドも着けたままだ。いつでも何処でも犯して欲しいし、ご奉仕したい。

「ご主人様が声をかけてくれた。」

「最近、介入地域で煩わしい事が減ってきた。ちゃんと働いているようだ。後はアメリカ方面でも色々動いているようじゃないか。そこまでは命令していないが、良いのか? かつての仲間もいただろう」

「ご主人様の命令をこなすのは当然のことです。あとかつての仲間ですが、利益だけで繋がっていた者達です。邪魔なら消すだけ。そんな関係です」

「なるほど。ならこれまで通り、俺の役に立て。それだけだ」

「はい。ご主人様。——あの、1つ、宜しいでしょうか」

「どうした?」

「ご褒美を、頂きたく思います」

このご主人様は酷いのだ。ニップルローターも二股デイルドも着けていると分かっているのに、おねだりしないとシテくれない。先程からずつといやらしい機械音が聞こえているはずなのに。もう胸が張って苦しくて、デイルドで蓋をされている肉壺からは、愛液が流れてパンティが濡れているのが分かる。



「どんな？」

「この、いやらしいおっぱいを絞って下さい」

ナイトドレスの前を引き下げ、ニップルローターで延々と嬲られていた巨乳が男の前に露出される。

「自分でやれば良いだろう」

「お願い、します」

ご主人様が揉みやすいように、近づいて胸を突き出す。セルフ調教された、いやらしい胸。感度が良くて、男に嬲られたら抵抗できない分かりやす過ぎる弱点となった巨乳だ。

「仕方ない」

ニヤリと笑ったご主人様は、シルヴィの後ろに回り込んでから揉み始めた。乳房をグニグニと、牛の乳を絞るかのように乱暴に。

「んっ、んあ!!」

それだけで感じてしまう。気持ち良い。いつの間にかニップルローターが剥がされ、乳首も抓られる。弱く、強く、シルヴィは抵抗しない。できない。ご主人様の与えてくれる快楽が堪らない。だから感じるままに、母乳を噴き出していた。1回じゃない。何度も弄ばれ、嬲られ、その度に噴き出してイッてしまう。

するとご主人様の片手が下へと伸びて、二股デイルドを引き抜く。引き抜かれた喪失感が酷い。だがそれも一時の事だった。

いつの間にかスカートがめくられ、立ったまま後ろからブチ込んでくれたのだ。

「入れるぞ」等と言う言葉はない。雌奴隷はご主人様に、好きな時に好きな場所で好きなように犯される存在なのだ。だからこれは当然のこと。むしろ犯してくれただ事に感謝して、しっかりと女の部分で奉仕しないとイケない。でも、上手くできない。玩具とは比べ物にならない圧倒的な圧迫感と熱量を持つ硬くて太くて逞しいオチンポ様が、淫貝を押し広げて肉壺の隅々までを擦り、奥に届く。気持ち良すぎて、嬲られるままになつてしまう。

「どうした？ 俺のは気持ち良くしてくれないのか？」

分かっているクセに、奥を無造作に遠慮なく突き上げるご主人様。酷い。でも気持ち良い。だから頑張つて腰を突き出し、少しでも深く啜え込んで、満足してもらえよう。肉壺をキュツと締めてご奉仕する。

尻を突き出した分だけ奥が強く小突かれ、キュツと締めた分だけ肉壺がオチンポ様で強く擦られて感じてしまう。愛液が足を伝って床に落ち、腰はビクビク震えて膝には力が入らない。でもご奉仕しないとイケない。ご主人様に、少しでも長く嬲つてほしい。

その一心でシルヴィはデカくてエロイ尻を突き出し、束に改造された上にセルフ調教

で弱々の雑魚雑魚になった敏感マンコをご主人様に突き出す。

——ズンツ。

打ち込まれる毎に意識が飛びそうになる。いつの間にか壁に押し付けられて、逃げ場のない体勢で奥をグリグリと責められていた。

「中々具合の良い肉壺だな」

ご主人様が褒めてくれる。

「は、はい。どうぞ、もっと、アンツ、使って、くださいい」

「ああ。そうしよう」

背後から両脚を抱えられ、背面駆弁スタイルにされてしまった。オチンポ様が子宮の入り口をグリグリして、こじ開けて、子宮の中にまで突っ込まれてしまう。女の一番大事な部分を蹂躪されている。その感覚がまたいやらしい。全てを差し出せたという思いで一杯になる。

そしてご主人様は、女に自身の痴態を見せるのも大好きなのだ。背面駆弁スタイルのまま鏡の前に立ち、女の弱点に極太のオチンポ様がズツポリ奥まで突っ込まれている様を見せつけてくる。誰に犯されているのかという事を、これでもかと思わせてる。

ご主人様が聞いてきた。

「シルヴィ、どうして欲しい？」

「ご主人様に、抱きつきたいです」

この体勢も良いが、抱きついて大きな胸を押し付けて、唇も舐められながら犯されたい。ご主人様は叶えてくれた。今度は対面駆弁スタイルになり、また子宮までブチ込んでくれた。舐られる奥が気持ち良い。貪られる唇が気持ち良い。ご主人様が歩くたびにオチンポ様が色々なところにこすれて、イッてしまう。潮を噴いてご主人様を汚してしまふ。でも止められない。一歩歩く度に一回イカされ、連続絶頂で堪らない。もうしがみついている事しかできない。

いつの間にか、ベッドに運ばれていた。今度は四つん這いのバツクからだ。しかも敏感な胸を鷲掴みにされ、半身を起こされ、バツクからズゴズコされてしまう。上と下の弱点を同時に責められた雌奴隷にできる事なんてない。母乳を吹き出し潮を吹き出し、それでもご主人様のセックスは止まらない。徹底的に舐られる。

そうして意識が朦朧としてきた頃、ご主人様の言葉が聞こえてきた。

「そろそろ、マーケティングしてやる」

まんぐり返しにされ、上からオチンポ様が挿入される。種付けプレスだ。また遠慮のないピストンでズゴズコされ、子宮の中まで犯され、多量の白濁が放たれる。しかしご主人様のピストンは終わらない。肉壺に、子宮に、精液を擦り付けるかのように執拗にピストンされ、誰のものを分からされていく。それがまた気持ち良い。何度も何度も

連続でイカされ、その途中でまた中出しされて、子宮が濡れそうなほど注いでもらって、繰り返しマーキングされていく。自分はこの人の雌奴隷なのだと思わせてくれる。

こうして亡国機業の“元”最高幹部であったシルヴィ・ラーシアは、ご主人様にとつて何処までも都合の良い雌奴隷に堕ちていったのだった。